

# 人間悟性論

ジョン・ロツク著

加藤卯一郎訳

## 凡例

- ・底本における旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。
- ・いくつかの語で送り仮名を現代的に統一をした。更に、底本に対し次の変換をした。「又は」↓「または」、「若し」↓「もし」、「呉れ」↓「くれ」、「為め」↓「ため」、現代では「着」をつかうところを底本では「著」が使われていたが全て変えた。「アリストートル」は「アリストテレス」に。
- ・明らかな印刷上のミスと見えるモノは注記なしに訂正した。
- ・本訳書中に挿入した英単語で、○付きは底本にあったものであるが、他はすべて本 PDF 作成者による挿入である。
- ・底本での脚注は「\*」で記され左ページ末に記されてあったが、節末に移した。
- ・【】で挿入した注記および頁末の脚注は、すべて本 PDF 作成者による挿入である。
- ・ルビは、底本でもいくつかあるが、他はすべて作成者によるものである。区別はしていない。特に「<sup>イデア</sup>観念」にイデアとルビを振ったのは、作成者である。
- ・対照に使用した原著は、編者は不明だが 2<sup>nd</sup> edition with the author's last additions and corrections. London 1825 とあり、ノートからの注記が詳しい。底本で省略された節の要約はこの書から引用した。

本 PDF は加藤卯一郎訳『人間悟性論』（岩波文庫）から抜粋したものである。底本そのものも訳者序にあるように抄訳で、章ごと、節ごとだけではなく節も全文ではなく抜粋である箇所もある。底本では略された節があるか不明であるので【節番号 略】と記した。本 PDF の省略は底本の章ごとである。

## 目次

### 訳者序

#### 凡例（底本凡例）

#### 目次

#### 読者に贈る書

#### 第一卷 原理も観念も生得的ではない

#### 第二卷 観念に就いて

#### 第三卷 言葉に就いて

#### 第四卷 知識と蓋然性に就いて

訳者加藤卯一郎…公開に当たって、幾つか調べたところでは、生没は不明であつた。大槻春彦氏（1903-94）が回顧して、壮年にして世を去つた亡友を忍ぶと1972年に記しているところと、帝國秘密探偵社刊『昭和人名辞典』第一巻東京編第14版1942.10.5には、1926年東大哲学科卒、日本医科大学予科教授とある。以上から推測するぐらいしかない、1965年以前には亡くなられてゐるだろう、と。

## 訳者序

ジョン・ロック (John Locke) は一六三二年八月二十九日、イングランドのブリストルの南方七、八哩の折にあるリントン (Wington) という小さな町に生れ、一七〇四年十月二十八日、ロンドンの北方約二十哩の所にあるオーツ (Oates) で死んだ。

彼の生存してゐた時期は英国史上最も問題の多かつた時代の一つで所謂内乱、革命の時代にはじまる。彼の経験した主な政治上の事件を拾つて見れば、チャールス一世と議会の争い、長老派教会信徒及び独立党の勃興、チャールスの処刑、クロムウェルの支配、王政復古とチャールス二世及びジェームス二世の治世、一六八八年の名譽革命及びウィリアムとアンの治世による憲政の發展等を挙げることが出来る。ロックの父親が革命の戦に直接關係してゐたこと及び父の死後の周囲の事情殊にシャフツベリー卿 (Earl of Shaftesbury) の知遇を得たことが大きな原因となつて、ロックは多くの他の哲學者達とは異つて様々な政治的社会的生活の現実に触れたのである。これ等の点に就いてはロックの伝記その他紹介書に就いて詳細に知ることが出来るのでここには述べないが、彼の思想が英国史上の最も創造的な時代の社会生活の現実に触れてゐることが、今日尚彼の著書に生きた価値を与えてゐる所以であると思う。(ロックの伝記に就いては大島正徳著「ロック」〔大教育家文庫〕の中の記述を参照せられたい。)

ロック生誕の年は哲学史上に於てはスピノザの誕生と同年であり、デカルトの「方法論」の出版五

年前である。一六五二年彼はオックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジ (Christ Church College) に入学を許可された。その後三十年以上初めは学生として後には校友《フェロー》として彼は同大学に関係したのであるが、当時オックスフォードでは未だスコラ的なアリストテレス主義の亜流が残つて居り、その研究態度は徒らに無用の問題を混乱した不明な言葉で論争するという有様であつたので、ロックはこれに対して頗る不満を感じた。かような空虚な論争は真理を発見するのには何の役に立つものでもなく徒らに学問の進歩を阻害するものであつて、これに対する反対は「悟性論」の諸所に見出されるのである。殊に第一巻の生得的原理に対する反対の如きはこれを対象としてゐるものと思われる。

ロックがオックスフォード時代に受けた影響で彼の思想の発展に積極的な力を与えたものが二つある。一つはクライスト・チャーチの学長であつたジョン・オウエン (John Owen) に親しく接触したことである。オウエンは熱烈な清教徒であつたけれども又頗る寛容的な性質の人であつて、この寛容的態度こそロック自身の持前でもあつたので、オウエンとの接触はロックのこの態度を一層助長したのである。もう一つの重要な影響はデカルト哲学の影響である。ロックの哲学はベーコン、ホッブス、スピノザの三哲学者の学説とは殆んど内面的な聯関がないのであるが、これに反してデカルトの哲学とは密接な關係がある。ロック自ら彼の友人に対して、自分に哲学上の読書の興味を与えた最初の書物はデカルトの本であるということを述べてゐる。然し乍らロックは決してデカルトの説を祖述するという態度を取つたのでないことは勿論である。彼は屢々デカルトの説を批判することによつて彼自

身の結論を導き出してゐる。デカルト哲学の形而上学的体系は、人間の能力に対して遙かにより謙遜な評価をなしたロックにとつては受け容れ難きものであつたし、マールブランシ等に於て見られるデカルト学派のやや神秘的なる發展は、實際的な非思索的なロックの考え方では殆んど理解することが出来なかつたのである。それにも拘らずデカルトの影響はロック自身が意識的に認めたよりも遙かにより深くより広く彼の哲学に行きわたつてゐるのである。ロックの所謂心の直接の対象としての「觀念」(idea)はデカルトの所謂「我思う」(cogito)と同一のものであると言ひ得ると思う。この觀念を出発点としてロックは彼の哲学を拵えたのであるが、哲学の仕事が何であるかに就いてはデカルトとロックは著しく考が違つてゐたので両者の哲学が斯くも相異なる形となつたのである。デカルトは人間の理性はあらゆる事柄を取り扱うことが出来ると考えたのに反して、ロックは理性を認めはしたがそれを批判することを似て哲学の任務となしたのである。彼自身「悟性論」で言つてゐるように、彼の目的は、「我々自身の能力を吟味して、我々の悟性は如何なる対象を取り扱うに適し又は適しないかを知ること」(読者に贈る書)であり、彼の研究の主題は、「人間の知識の確實性、明証、及び範圍」(第一卷、第一章、第二節)であつたのである。これによつてロックはヒューム及びカントに先立つて認識論を哲学に導入したものと云うことが出来るのである。知られ得ることと知られ得ないことを厳密に区別し、哲学を以て人間の理性の限界を研究するものとなしたのはロックとカントに共通の態度である。

ロックの哲学上の立場を定めるために重要な二つの論点がある。その第一は彼の説が經驗論

(empiricism) であるか合理論 (rationalism) であるか、ということである。即ち我々の知識の起原に關する問題である。第二は實在論 (realism) であるか觀念論 (idealism) であるかということ、即ち外界に關する我々の知識の性質に關する問題である。これ等二つの点に關してロックの説は特有の位置を占めてゐるのであるが、批評家の多くはロック以後の哲学の發展を通じて彼の説を見るがために屢々これを誤解してゐる。「悟性論」第二卷の初めに於て、ロックはすべての我々の知識が経験に基くことを明かに述べてゐる。この点から言えば彼の説は確かに經驗論ではあるが、さればと言つてロックの哲学をそれから發展したものであるヒュームの懷疑論やコンディヤックの感覺論の不徹底なものとのみ見ることは不当である。ロックが我々の知識の成立するための与件であると考へた「觀念」は非常に多くのものを含んで居るのであつて、それを分析することは彼にとつては緊急の問題ではなかつたのである。彼にとつては「觀念」は個々の獨立の事實ではなく、それは本来、永遠なる自我の對象であつて、その自我の存在は直覺的に即ち直接に知られ、又自我はそれ自身に固有の内的な力 (power) を持つて居り、従つてその觀念に關していろいろの作用をなすことが出来る。その作用の結果は、ロックにとつては、我々が受け取る感覺与件と同様に具體的な知識の組織の正当な要素なのである。それ故にロックは或る意味に於いて經驗に於ける理性の働きを認めてゐると言うことが出来るのであるが、その作用の結果（例えば比較とか抽象の如き）は具體的な經驗の中に融け込んでゐるので、ロックは理性の作用の意義を明確に認めることが出来なかつたし、單なる感覺与件そのものにそれが既に含まれてゐるということを暗示することさえもしなかつたのである。しかもこのために「悟性論」の

諸所に於いて見られるが如く彼の用語は頗る曖昧になつてゐるのである。要するにロックが「悟性論」の第二巻に於いて我々の觀念の起原を尋ねた場合の眞の興味はカント以後の先驗的な問題にあつたのではなく、遙かにより單純にすべての我々の知識は感覺的經驗にはじまり、それに基づくということ、又かような經驗なしには何等の知識もあり得ないということ、を証明することにあつたのである。然し乍ら彼は決して經驗を受動的に受け容れられる感覺と同一の物と考えたものではなかつたので、聯想の原理（これがヒュームの場合にはばらばらの感覺的印象を結び付ける力と考えられた）は「悟性論」に於いては第四版ではじめて一つの短い章を与えられ、しかもヒュームに於けるとは別の意味を与えられてゐるのである。

「悟性論」に於けるもう一つの重要な論点は知識の対象の性質特に感覺的知覚に於ける知識の対象の性質に関するものである。この問題はロックの「觀念」という語の用法及び彼がデカルトから受け継いだ物心二元論と關係してゐる。彼は一方に於いては諸々の獨立に存在する物質的実体の体系を認め、他方に於いては思考力を有する非物質的実体と考えられる多くの別々の心のあることを仮定したのであるが、彼は又内的なものとの外的なもの、即ち觀念と物とが完全に分離したものと考へた訳では決してなかつたのである。即ちロックの用語法では「觀念」と「物」とは相關的な名辭であつて、その各々はこの相互關係なしでは無意味となるのである。彼にとつては觀念は本来「意味」であり「符号」であつて、それはこの対象との關係なしには知識に於いて何等の機能をも持たない、觀念を單に自己充足的な心の状態としてのみ取り扱うことは、觀念から認識上の価値を全く奪うことである。か



くの如くロックは実在への關係が觀念そのものに本来具わつてゐるものと考へたがために、觀念と実在との一致を我々は如何にして決定することが出来るかという難問は彼を殆んど悩まざなかつたのである。彼の「觀念」という語の用法は現代の「現象」という語の用法と似て居り、従つて曖昧である。ロックにとつては或る物の「觀念」は單にその物が我々に現れる現れ方であつたのであり、物が意識に現れるということ、は知識にとつて本来必須の事として彼はこれを予想してゐたのである。

かくの如くしてロックの説は嚴密な意味では後の時代の所謂經驗論であるとも合理論であるとも断定することが出来ず、又實在論であるとも觀念論であるとも言ひ切ることの出来ないものであつて、これは一つにはロックが單なる学者でなく政治にも關係した實際家であつたがために生じた結果であり、これが思想家としての彼の弱点の一つを成してゐることは確かではあるが、同時に又人生の広い立場から人智を眺め事實を事實として有りの儘に捕えて無用の細論に煩わされなかつたことは彼の思想に長い生命を与えてゐる所以であると思われるのである。ロック以後の歐洲哲學の發展は主として彼の曖昧なる用語法に説明を与え、彼の假定によつて彼に与えられた難問を征服せんとする努力の連鎖であつたということが出来る。而してロックの提出した問題の中の幾つかが今日の学界に於いても尚完全なる解決を得てゐないように思われることからして、我々は人間の悟性に対するロックの謙讓なる評価に永遠の真理を認めることが出来るのである。

\* \* \*

ロックの「悟性論」は一六七〇年に書きはじめられその初版は一六九〇年に出版されたのであるか

ら其の間に二十年を要してゐる。しかも彼自ら認めてゐるように、時々思い出して長い間中断して書かれたものであり、従つて多くの重複した箇所があるのである。これはもつと短くすることが出来るということも彼も認めてゐるのであるが、自分の怠惰と多忙のためにそれが出来ないと言つてゐる。ロックの時代に既にかような言訳を必要とした「悟性論」がその原《もと》のままの形では現代の読者に不適當であることは言を俟たない。しかもロックの著作は哲学史の中の簡単な記述によつて味わうには余りにも重要にして含蓄の多い古典であるし、バークレー、ヒュームは勿論カントを理解するためにも「悟性論」を直接に読むことが必要である。こういう見方からしてセス・プリングル・パティスン氏は「悟性論」の縮刷版を出してゐる。この版は主として英国の大学の演習用として拵えたもので、重要な章だけを所々抜き出すというような簡単な抜萃ではなく、一方に於いては「悟性論」の原型を出来るだけ留め、他方原著の各章内だけでも屢々見出される重複をも避けるという方法を以て、全体の長さを原著の略々半分位に減じて読者をしてこの貴重なる古典の神髄を味わうための努力を著しく少からしめ、同時に「悟性論」の各所に現れてゐる重要な思想のロックの思想全体に対する関聯をも見失ふことのないように充分な注意が払われてゐる。この縮刷版の中にも未だ多くの重複が見出されるが、かような重複なしにはロックの重要な考え方の方向を知ることが不可能である。

文献学的な意味からは「悟性論」の全訳も必要であらうが、哲学を学ばんとする日本人々にロックの思想を出来るだけ多く知らしめるためには右に述べた縮刷版の体裁を用いることが最も妥當であるし、ロックの精神にも従ふこととなると考えたので訳者は本訳書の台本として右の "An Essay

concerning Human Understanding by John Locke: Abridged and Edited by Andrew Seth Pringle-Pattison, 1924"を用いたが、この編者も認めてゐるやうに何処を保留し何処を取除くべきかということに就いては、細目に互つては如何なる人も全く一致するということは出来ないのが当然であるから、訳者は同時にフレーザー氏の出版による原著 "An Essay concerning Human Understanding by John Locke: Collated and Annotated, with Prolegomena, Biographical, Critical, and Historical by Alexander Campbell Fraser, 1894" 及びジョン氏の出版によるロックの哲学的著作中の原著 "The Philosophical Works of John Locke edited by J. A. St. John" (Bohn's Standard Library) を参照して、プリングル・パティスン氏の版の中から二箇所を捨て、又これに二十五箇所を補足した。これを以て「悟性論」を略々完全に紹介し得ることを訳者は信ずる。注はプリングル・パティスン氏の版の注の中から重要なもののみを取り更に評者の考で若干を新たに加えた。序文を書くに就いては諸家の論を参照したが就中プリングル・パティスン氏の序説に負う所が大である。前掲の「悟性論」の権威ある版に精細妥当なる注と序論とを添えて出版したエディンバラ大学のフレーザー氏並びにその後任者であつたプリングル・パティスン氏の業績に対して訳者は深甚なる敬意と感謝とを捧げる。

本章の訳出に際しては「悟性論」のレクラム版の独訳 (Th. Schulze 氏訳) を参照して大いに得る所があつた。訳文は出来るだけ平明にすることを心掛けたが未熟な訳者の学識と筆を以てしたのであるからまだまだ生硬な所や誤解した点が多々あることであろう。到らざる所は一に訳者の罪であつて原著書に対しては誠に申訳ない次第である。足らざる所は将来の研究によつて補いたい考えである。行

文は出来るだけ平易にすることを努めたが既成の哲学上の述語は成るだけそのままに用いることとした。新語を作るということは、たとえその時解り易いと思われるものであつても、将来に於いて却つて読者を煩わす恐れがあることを念頭に置いたからである。例えばロックが到る処で用いてゐる *insight* という語は今日普通に用いられてゐる「観念」という訳語よりも遙かに広く又含蓄のある語であるが普通の訳語に従つて「観念」と訳した。また *perception* という語の如きも今日心理学上に言う「知覚」のみならずただ「知ること」という位の意味に用いてある場合も多いが、特に不自然と思われる場合を除いては「知覚」と訳するというような方針を取つた。この翻訳をはじめてから約三年半の日月を要した。かように長い時を費したのは訳者の愚鈍によること勿論でありその間幾度か中途でこの仕事を投げ捨てようとしたこともあるが、その度毎に謙虚にして率直なロックの態度の美しさが訳者をして再び仕事を続ける熱情を取り戻してくれて、ここに曲りなりにも拙訳を公にすることを得るのは大なる喜びである。

最後に御多忙の中にも拘らず翻訳中幾度かの激励と諸種の助言与えられまた脱稿後校閲の勞を取られた恩師大島正徳先生に対し深き感謝の意を捧げる。またラテン、ギリシヤ文に関して御教示を得た友人文学士松本厚及び同木村彰一両君に対しても謝意を表する次第である。

昭和十三年十一月二十一日

## 凡例

各節の標題はゴシック体となし原書の通りに保存するのを原則としたが、節の内容の単なる繰り返しに過ぎない場合は標題の文句は省略し、番号のみを保留した。また或る節の内容で本訳書に留めた部分が、その節の表題によつて適当に表現されていないものも同じく番号のみを附けて置いた。

節の番号が行を改めずに前節に続いているのは不要の部分を省いて、前節と内容の上で一と続きであることを示している。この場合には、例えば「七」の如く、節の番号に括弧を附けてある。

原文中のイタリック書体及び大文字を以てはじまっている字には訳文では傍点を附けてある。

原文中の「…」は訳文では「……」を以て表してある。但しこれ以外にも意味を明瞭ならしめるために「」を用いた所がある。

…（日本文）…この括弧は原文にもあるものである。

…〔日本文〕…注に断りのない場合は、前後を省略したために補うことを必要とするに到つた言葉、プリングル・パティスン Andrew Seth Pringle-Pattison 氏の版にはあるが原典にはないものである。

点線……は文の中途から省略した箇所を示す。【「文」のであって、文そのものの省略などは示されていない】

本文中に入れた訳者の注が極めて少数あるがこれは（訳者注）の形式を取った。

句読点はピリオドは大体に於て。となしたが、コンマ及びセミコロ等は原文にとらわれることなく日本文の文脈に従つて適当に変えた箇所が多い。

印刷上の体裁等に就いては岩波書店編輯部の長谷川覚氏の御配慮を煩わした点が多い、ここに記して感謝の意を表す。

## 目次

【以下、\*は本PDFで省いた章で、□は底本において省略されている章である。】

読者に贈る書

第一卷 原理も觀念イデアも生得的ではない

\*第一章 序論

第二章 心には何等の生得的な原理もない

第三章 何等の生得的な実践的原理もない

第四章 思索的及び実践的兩方面の生得的原理に対する他の考察

第二卷 觀念イデアに就いて

第一章 觀念イデア一般及びその起原に就いて

第二章 單純觀念イデアに就いて

第三章 一つの感官の觀念イデアに就いて

\*第四章 固體性に就いて

第五章 数箇の感官による單純觀念イデアに就いて

第六章 反省による單純觀念イデアに就いて

\*第七章 感覚及び反省の両者による単純觀念イデアに就いて

\*第八章 我々の単純觀念イデアに関する若干の更に進んだ考察

第九章 知覚に就いて

第十章 把持に就いて

\*第十一章 判別、及びその他の心の作用に就いて

\*第十二章 複雑觀念イデアに就いて

第十三章 単純様態に就いて、そして第一に空間の単純様態に就いて

第十四章 持続及びその単純様態に就いて

第十五章 一緒に考察された持続及び広がりイデアに就いて

第十六章 数に就いて

\*第十七章 無限に就いて

〔第十八章 その他の単純様態に就いて〕

\*第十九章 思考の様態に就いて

〔第二十章 快樂及び苦痛の様態に就いて〕

第二十一章 力に就いて

第二十二章 混合様態に就いて

第二十三章 実体に関する我々の複雑觀念イデアに就いて

\*第二十四章 実体の集合的觀念イデアに就いて

\*第二十五章 關係に就いて

\*第二十六章 原因と結果及びその他の關係に就いて

\*第二十七章 同一性及び差異性に就いて

第二十八章 その他の關係に就いて

第二十九章 明晰なる及び不明なる觀念、判明なる及び混亂せる觀念に就いて

第三十章 實在的及び空想的觀念に就いて

第三十一章 適當なる及び不適當なる觀念に就いて

第三十二章 真なる及び誤れる觀念に就いて

第三十三章 觀念の聯合に就いて

### 第三卷 言葉に就いて

第一章 言葉または言語一般に就いて

第二章 言葉の意義に就いて

第三章 一般的名辭に就いて

第四章 單純觀念の名前に就いて

第五章 混合樣態及び關係の名前に就いて

第六章 実体の名前に就いて

〔第七章 無變化語に就いて〕



第八章 抽象的及び具体的名辭に就いて

〔第九章 言葉の欠点に就いて〕

〔第十章 言葉の濫用に就いて〕

〔第十一章 前述の欠点及び濫用の矯正法に就いて〕

## 第四卷 知識と蓋然性に就いて

第一章 知識一般に就いて

\*第二章 我々の知識の程度に就いて

\*第三章 人間の知識の範圍に就いて

第四章 我々の知識の實在性に就いて

第五章 真理一般に就いて

第六章 普遍的命題とその真理及び確實性に就いて

第七章 公理に就いて

第八章 内容のない命題に就いて

第九章 存在に関する我々の知識に就いて

\*第十章 神の存在に関する我々の知識に就いて

\*第十一章 その他の物の存在に関する我々の知識に就いて

第十二章 我々の知識の進歩に就いて

〔第十三章 我々の知識に関する一層進んだ考察〕

第十四章 判断に就いて

第十五章 蓋然性に就いて

第十六章 同意の程度に就いて

第十七章 理性に就いて

第十八章 信仰と理性、及びそれらの別々の領域に就いて

第十九章 熱狂に就いて

第二十章 不正の同意、即ち誤謬に就いて

第二十一章 科学の分類に就いて

## 読者に贈る書

読者よ、

私はここに、私がぼんやりと憂鬱に過ごしていた時、折々気晴しとなってくれたものをあなたの手もとに差し上げる。もし幸にもこれが、何時かあなたの退屈な時にとつても同じように気晴しになり、またあなたがこれを読んで、私が書いた時に味った楽しみの半分でも感ずるならば、私が自分の努力が無駄でなかったと考えると同じようにあなたは自分の金銭を浪費したとは思わぬであろう。この言葉を私の著作の推薦と誤解してはいけない。また私がこの仕事を喜んでしていたからと言って、それが今出来上ったので私が愚かにもそのために有頂天になっているものと決めてしまつてもいけない。雲雀や雀を追う人には、たとえこれ等が遙かにつまらぬ獲物であつても更に立派な獲物を求める人に劣らぬ楽しみがある。悟性というものは精神の最高の能力であるから他の如何なる能力よりもより大きな、より不變な喜びを以て使用されるのであるということを知らぬ人は、この論文の題目、即ち悟性\* (understanding) を殆ど知っていないのである。悟性が真理を探索するのは一種の狩猟であり、その場合その追求そのものが快樂の大部分をなすのである。心が知識に向つて進む一步毎に或る発見がなされる、この発見は、少なくともその当座は、ただに新しいのみならず、また最上のものである。

\* ロックはこの言葉を人間の知性の全範囲を含む意味に用いている。平たく言えば理解力とか知力という意味である。

何故なれば悟性は眼と同じように、自分自身の視力を似て対象を判断するのであるから自分が発見するものを樂しむ他はない。そして悟性を逃れたものは、それが未知であるから悟性はそれに対して大して遺憾を感じないのである。故に人に施し物を請う必要が既になく、人から寄せ集めた意見に頼つてのらくらと生きることに満足せず、自分自身の考えを働かせて真理を発見し、追求しようとする者は（彼が何処へ達しようとも）獵者の満足を失わない。追求の一瞬間毎に彼の努力は或る喜びを以て報いられるし、また何か大きなものを獲たとあまり誇ることが出来ない時ですら、彼には自分の時間を無益に使わなかつたと考える理由がある。

読者よ、これが自分自身の考えを解放してそれに従つてものを書く人々の樂しみである。あなたは彼等を妬<sup>ねた</sup>んではならない、何故というに、もしあなたが読む時に自分自身の考えを用いようとするならば、彼等はあなたに同様な氣晴しの機会を与えるからである。もしあなたの用いる考えがあなた自身のものであるならば、それに私は身を委ねるのであるが、もしそれが他の言うがままに信じた考えであるならば、それは真理を求めるものでなく何かもつと下等な考察に従うものであるから何であろうと大した問題ではない。また、他人に導かれるままにのみ言い、また考える人が何を言ようと考えようとそれは問題にするに値しない。もしあなたが自分自身で判断するなら、私はあなたが公平に判断するだろうということを知っている。その場合あなたの非難が何であろうとも私は傷けられたり、氣を悪くしたりすることはないであろう。何となればこの論文の中には、私が真理であると充分信じていない様な事一つもないことは確かではあるが、しかも私はあなたと同様に私自身を間違ひ易いものと考え、また、

この書は、私がそれに就いて持つてゐる意見に依つてではなく、あなた自身の意見に依つて、あなたと共に立ちもすれば倒れもするに違ひないということを知つてゐるからである。もしあなたがこの書の中にあなたにとつて新しい事やためになる事を殆ど見出さなくとも、あなたはそのために私を咎めるべきではない。この論文は既にこの問題に精通し自分の悟性のことを充分知つてゐる人々を目あてとしたのではなく、私自身の知識のためであり、未だ充分にこの事を考察してゐないと自ら認める少数の友達の満足のために書かれたのである。

もしこの論文の来歴を以てあなたを煩わすことが適當であるとするならば、五、六人の友達が私の部屋に集つて、この問題とは非常にかけ離れた或る問題を論議してゐたところが、あらゆる方面に起る難問のために彼等自身忽ちにして行き詰つてしまふことを知つたということを、あなたに告げねばならぬ\*。我々を悩ましたこれ等の疑問の解決に少しも近づくことが出来ないでしばらく困惑した後、我々は間違つた道を取つてゐたのだ、ということ、また我々がそういう性質の探究にはいる前に我々自身の能力を吟味して、我々の悟性は如何なる対象を取扱うに適してゐるか、または適してゐないかという事を知ることが必要であつたのだということが私の頭に浮かんで来た\*\*。このことを私は仲間申し出たところいづれもたやすく納得した。そこでこれが我々の最初の研究であるべきだということに一致した。私がいづれの次の会合のために書いたところの、そのときまでに未だ私が考察したことのない或る問題に關するいくつかの軽率で未熟な考えがこの論文の最初の緒口を与えた。かくの如く偶然にはじめられたこの論文は懇願によつて続けられ、少しづつ聯絡なしに書かれた。そして長い間等閑にして中断された

後に、また私の気分や機会のゆるすままにつづけられ、終に隠居して健康に意を用いたため閑暇が出来たので、この論文は今あなたが見る様な様式を与えられたのである。

\* この集りに出席していたロックの友人の一人である James Tyrell の持っていた悟性論に書き込まれた注によれば、この難問は道徳と天啓宗教を論ずることから生じたものである。

\* \* 第一巻、第一章【諸論を指す。本 PDF では略】、四節及び七節参照。

このきれぎれの書き方がその他の欠点の他に二つの反対の欠点、即ちこの論文中にあまりに少しとそしてあまりに多くの事が言われているかも知れぬという欠点を生じたかも知れぬ。もしあなたが何か足りない所を見出すならば、自分の書いたものがあなたに私をもっと進むべきであったのだという願望を与えることを私は喜ぶ。もしあなたにあまりに多すぎると思われるならば、あなたは此の問題を責めねばならない。というのは私が最初に筆を下したときは、この問題に就いて私の言わねばならぬすべての事は一枚の紙に収められてしまうであろうと考えたのであるが、先へ行けば行く程前途により大きなものが見えて来た。新しい諸発見が常に私を導きつづけ、そして知らないうちに今見る様な大いさとなつたのである。私はこれが恐らく現在のものより狭い範囲に限られ得たであろうしまたその或る部分は縮めることが出来たであろうということを否定しまい。それはたまに思い出した様に書いたり、幾度も長い間中絶したその書き方が重複をひき起し勝ちであつたからである。然し実を言えば、私は今、これを短くするにはあまりに怠惰でありまたあまりに忙しいのである。

最も賢明な人を非常に厭がらせ勝ちな欠点をもつこの論文を故意に世に出すとき、これによつて私が

どんなに自分自身の評判を念頭に置かぬことになるかを私は知らぬのではない。しかし私にこの論文を該博な思想と敏速な理解力を持った人々を教えるために公にしようとするような顔はしない。かくの如き知識の先生達に対しては自分は生徒であることを認める、そしてそれ故に、私自身の粗雑な思考から織り出されたために私と同じ大いさの人に適する様なもの以外にはここでは何物も期待しないようにあらかじめ彼等に警告する。この私と同じ大いさの人々にとっては、既定の偏見のためまたは観念そのものが抽象的であるために難しくなるような真理を平明な親しみ易いものとするために私がいくらか努力を払ったということは恐らく認められぬことではなからう。若干の対象はあらゆる方面に向けて見る必要があつた。これ等の対象の或るものは私にとつて新しいものであることを認めるが、或る考えが新しいとき、或いはまた他の人々にとつてはそう思われるのではないかと思うが、その考えが普通の考え方を外れているときには、その考えをすべての人に理解せしめ、人の悟性に明晰な持続的な印象を以て植ゑ附けるものはその考えに關する一個の單純な見解ではない。或る方法で提言されると非常に曖昧なことを他の表現は之を非常に明瞭に理解し易くするということを、自分自身または他人に於て気づいたことのない人は殆どあるまいと私は思う。けれども後になつて見れば心は言いまわしに殆ど相違を認めず、何故一方が他方よりも理解し難かつたかをいぶかるのである。しかしすべてのものが一樣にすべての人の心像を作る働きに適合するのではない。我々は味覚と同様に夫々相異なつた悟性を持つてゐる。私はこれを印刷にするというような生意氣な気持はまるでなかつたので、この論文は、私にとつてためになつたと思われる如く、他人に対してはいくらか役に立つであらうという過分な賞讃を受けなかつたなら、

私はこれを、それが出来る最初の機会を与えた二三の友人だけに見せたであらう。それ故に私が印刷して出したのは出来るだけ役に立つたためなのであるから、私の言わねばならぬことを、すべての種類の読者に対して出来るだけやさしく解り易くすることが必要であると思う。私にとつては思索的な目ざとい人が私の論が或る部分に於て退屈であることをこぼすことの方が抽象的な思索に慣れて居らず、また別な考えが先入主となつていないような人が私の意味を誤まり或は理解しないよりは遙かにましである。

この我々の博識な時代を大胆にも教えよう to pretend to instruct this our knowing age とすることは私の非常な自惚または無礼として恐らく非難されるであらう。そして他の人々に役立つであらうという希望をもつて私がこの論文を公にすることを認めるとき、この不遜【を】敢えてすると殆ど同じことになるのである。もし私が不幸にして人を喜ばせないとしても誰も私に対して怒るべきではない。私は六人を除いたすべての読者に、この論文は最初彼等のために目論んだのではないことを明らかに告げる。それ故に彼等は態々この六人の仲間にはいろうとする必要はないのである。しかし尚、もしこれに対して怒り悪口を言うのが至当であると思う人があるなら、その人は安心してそうするがよい。何となれば私はそんな種類の談話よりは時間を費すためにもつとよい方法を見出すであらうから。一つの最もつまらぬ方法に依つてではあるが、真面目に真理と有用を目あてとしたのだという満足は私は常に感ずるであらう。現今の時代に於ては学界は、科学を進歩せしめる偉大な設計を以て子孫の嘆称する永久の記念碑を遺すような棟梁たちを持たぬのではない。然しあらゆる人がボイルやサイドウナムのような人になることを望んではならぬ。偉大なるヒュイゲンスや類い稀なニュートン氏の如き巨匠\*及び他の幾人かのこの



種の人々を生む時代に於て、下働きとして少しばかり地面を清掃し、知識への道程に横たわるがらくたを少々取り除くことに従事するのは誠に大望である。この知識は、確かにもしも発明の才ある勤勉な人々の努力が奇態な気障きざな或いは理解し難い術語の学者らしくはあるが下らない使用によつて甚しく妨害されることがなかつたなら、世界に於て更にはるかに進歩したのである。かくの如き術語が諸科学に導入され、そこで一つの技術となされ、事物の真の知識に他ならぬ哲学は上品な社会や礼儀正しい会話に持ち込むことは不適當であるか或いは不可能であると考えられる様な状態にまで立到つたのである。曖昧で無意味な言葉の形式と、言語の濫用が非常に長い間科学の神秘として通用して来た。また殆どまたは全く意味のない難しい語或いは適用を誤つた語が、多年の慣例によつて深い学識及び高い思索と誤られる非常な権利を持つていたので、かくの如き語は無智を掩い隠し真の知識を妨害するものに他ならぬということをそれを話す人々にもまたそれを聴く人々にも納得させることは容易でないのである。この虚栄と無智の殿堂に闖入ちんにゅうすることは人間の悟性にいくらかの奉仕をすることになるであらうと思う。しかも言葉の用法によつて人を欺きまたは人に欺かれると考へたり、或いは自分の属する学派の言語が吟味訂正されるべき誤謬【を】持つていると考へるような人は極めて稀であるから、私が第三巻に於てこの問題を絮説し、この害悪の根強さも、また流行の支配も、自分自身の言葉の意味に氣を附けずまた自分の表現の意義が研究されることを許さないような人々にとつて何等の言訳にもならないということは大いに明らかにしようとする努力したことを許してもらえらると思ふのである。

一六六八年に印刷されたこの論文の梗概は、生得的觀念イデアがその中で否定されて居るがために若干の

人々に依つて読むことなしに非難されたということである。彼等はあまりにも性急に、もし生得的觀念イデアが否定されたなら靈体の觀念または証明については殆ど何も残されていないだろうと論断したのである。もし誰かがこの論文のはじめに於て同様に立腹するなら、私はその人にこの論文を通読することを希望する。そうすれば彼は、誤つた基礎を取り除くことは真理にとつて損害を掛けるものでなく有利であり、また真理は誤謬と混同されまたは誤謬の上に建てられる時程甚しく害されまた危くされることはないということを確信するであらうと思うのである。<sup>\*\*\*</sup>

\* ここに引用された諸学者の名前によつて、ロックが彼の時代の科学界の活動に非常な関心をよせていたことを知る事が出来る。Boyle, 1626-1691. 英国の有名な物理科学者。Sydenham, 1624-1689. 英国の医学者。Huygenius, 1625-1695. オランダの物理、数学、天文学者。

\*\* 悟性論の第二版は一六九四年に出版され「同一性と差異性」に関する一章（第二巻、第二十七章）が附加され、力に関する章（第二巻、第二十一章）の中の自由と意思の論に可なりの変更がある。第三版は第二版の再版に過ぎず一六九五年に出た。ロック存命中の最後の版である第四版は一六九九年の終に出版され日附は一七〇〇年になっている、これは二つの新しい章、即ち觀念の聯合に関するもの（第二巻、第三十三章）及び熱狂に関するもの（第四巻、第十九章）を含んでいる。

## 第一 卷 原理も觀念も生得的ではない【OF INNATE NOTIONS. 生得的觀念について】

【第一章 序論 本 PDF では省略：この章は第一巻の首章ではなく全体に対しての序になっている。】

### 第二章 心には何等の生得的な原理もない

一 我々が或る知識を獲得する方法の証明がその知識が生得的でないことを証明するに充分である――若干の人々の間では、悟性には一定の生得的原理、*innate principles* があるということ、即ち若干の始めからの概念、即ち共通概念 (*convi' evovat*)、謂わば人間の心に刻みつけられた極印があつて、精神ははじめて存在界に入るときにこれを受け取つて、この世界に伴つて来るものである、ということが確立した意見となつてゐる。この仮定の誤りであることを公平な読者に悟らせるためには、如何にして人々は単に彼等の自然の能力を用いることによつて、何等の生得的な印象 *any innate impressions* の助もなしに彼等の持つてゐるすべての知識に到達することが出来、また何等のかような始めからの概念 *notions* または原理 *principles* なしに確實性に到達し得るかを、私が示しさえすれば、(この論文の以下の部分で私はこれを示そうと望んでゐるのであるが) 充分であらう。神が視覚を与え、眼によつて外物から色を受け取る能力を与えた人間に於て、色の觀念が生得的であると考えるのは無用の事であるということ、また我々が幾つかの真理を恰もこれ等がもとと心に刻み付けられていたかの如く容易く確實に知るに適

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

した能力を自らの内に認め得るのに、これ等の真理を生れ付きの印象と生得的な極印に歸するのと同様に不合理であるということ、は誰しも容易く認めることであろうと思う。

然し乍ら真理を求めるのに自分自身の考えに従おうとする人は、その考えがたとえほんの少しでもその人を普通の道から外れさせるときには必ず人の非難を受けるものであるから、私は自分がもし間違ひに陥っているならば、その間違ひの申訳として、前述の意見の真理を疑うようになった理由を述べよう。私が間違っているか否かは、私と共に何処でも真理を見出す所で真理を了得しようと覺悟して居るような人々の考察に任せる。

二 一般的同意を大なる論拠となす——すべての人類が普遍的に一致同意する思、索、的並びに實、踐、的の（彼等はこの両方について語るから）確定した原理がある、という事程人々が一般に当然の事と考えていることはない。それ故に、人々の論ずるところによれば、これ等の原理は人々の精神が始めて存在するようになるときに受け取る不変の印象であるに違いなく、また精神はその固有の諸能力のどれとも同様に、必然的にまた事実上この原理をこの世界に伴つて来るのである。

三 普遍的承認は何等生得的なものを証明しない——普遍的承認から引き出されるこの議論には次の如き不幸がある。即ちたとえすべての人類が一致する様な確定した真理があるということが事実上真であつたとしても、この事は、もしも人々が彼等の認める事柄の普遍的承認に到達し得る何等かの他の方法が示され得るならば、これ等の真理が生得的であることを証明しないであろう。而してここに言う他の方法を示すことは可能であると私は思う。

四 「在るものは在る」ということ及び「同一のものにとっては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である *it is impossible for the same thing to be, and not to be*」ということは普遍的には承認されない——然し更に悪いことには、この普遍的承認の議論は、生得的原理を証明するために利用されるが、私にとつてはかような原理は一つもないということの証明のように思われる。何故なればすべての人類が普遍的承認を与えるような原理は一つもないからである。私は思索的な原理からはじめて、人々の尊重する証明の原理の中から「如何なるものも在るものは、在る」及び「同一のものにとつては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」ということを例として挙げよう。これ等は思うに他のすべての原理の中で生得的であると要求する権利を最も多く認められているものである。これ等の原理は普遍的に承認される公理であるという非常に確乎たる評判を持つているので、もし誰かが之を疑うように思われるならばこれは不思議なことと思われるであろう。然しなお私は失礼乍ら、これ等の命題は決して普遍的に承認せられて居らず、また人類の大部分はこれ等を知つてさえもないということを言う。

五 子供や白痴等には知られていないのであるから、生れながらに心に刻み付けられているのではない——何となれば、第一に、すべての子供や白痴はこれ等の命題の最小の理解または考えをも欠いてゐる。そしてこの欠乏はすべての生得的真理に必然的に伴わねばならぬ所の普遍的承認を破壊するに充分である。何となれば、精神に刻み付けられている真理で、精神がこれを知覚または理解しないようなものがあると言うことは、私にとつては矛盾に近いように思われるし、また刻み付けるといふことは、もしこれが何事かを意味するとすれば、一定の真理を知覚せられるようにすることに他ならぬからである。

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

如何なる命題も心が未だ知ったことがなく、また意識したことのないようなものは心の中にあるとは言われ得ない\*。何となれば、もしも心が未だ意識したことのない或一つの命題が心の中に在り得るとすれば、同じ理由によつて、真であり、心が何時かは同意することの出来るすべての命題は心の中にあり、刻み付けられていと言われ得る。何故なればもしも心が未だ嘗て知ったことのない或一つの命題が心の中にあると言われ得るならば、それはただ心がその命題を知ることが出来るという理由のみによるに違ひない。そしてこの事は心が何時かは知るであらう所のすべての真理について言われ得る。否、かくの如くすれば心が過去に知ったこともなく将来に知ることもないような真理が心に刻み付けられ得ることとなる。というのはたとえ或る人が長生しても、その人は彼の心を知ることが出来る、しかも確實に知ることが可能であつたような多くの真理を知らずに死ぬことがあり得るからである。そこでもしも知るといふ能力がこの論争の的である生れ付きの印象 *natural impression* であるならば、人がいつかは知ることが出来るすべての真理は、この理由によつて、その一つ一つが生得的なものであることとなる。そしてこの大切な点は結局ただ非常に不適当なものの言い方をするだけのことになるのである。さて然らば一定の生得的公理に対するかような論争は何のためであろうか。もしも真理が知覚されることなしに *without being perceived* 悟性に刻み付けられ得るならば、心の知り得る如何なる真理の間にもその起原に關して何等の相違があり得ることを認めることが出来ない。それ等の真理はすべて先天的であるかまたはすべて後天的であるかでなければならぬ。ここに区別を求めようとすることは無益である。それ故に悟性の中にある生得的概念について語る人は（もし彼がこれによつて何等か明白な真理を語る積りな

らば)、悟性が決して知覚したことがなくまた、まだ全く知らないような真理が悟性の中にあるということの意味することは出来ない。何故なればもし「悟性の中にある」(to be in the understanding)という言葉が妥当性をもつものならばこれは「理解せられる」(to be understood)ということの意味するからである。それ故にもしも「如何なるものも在るものは、在る」及び「同一のものにとつては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」という二つの命題が生れつき刻み付けられているものならば子供がこれを知らぬ筈はない。嬰兒及び精神をもつすべてのものは必ず彼等の悟性の中にこれを持ち、その真理を知り、これを承認するに違いない。

\* 第一巻全体のロッキの論はこの考えを基としている。

六 人はこれ等の原理を理性を用いるようになるときに知る、という答が与えられる——この推定を避けるために、すべての人々は彼等が理性を用いるようになるとき、これ等の原理を知りこれに同意するようになる、そしてこの事がこれ等の原理が生得的であることを証明するに充分である、と通常答えられる。

〔七〕この答を我々の目下の目的に取つて恕すべき意味を以て適用するためにはそれは次の二つの事の一つの意味しなければならぬ。即ち、人間が理性を使用するようになるや否やこれ等の生れつき刻み付けられていると想像されている原理が知られまた認められるようになるということ、或いはそうでなければ人間の理性を用い働かせることが彼等がこれ等の原理を発見するのを助け、また確かに彼等をしてこれ等の原理を知らしめるということ、のいずれか一つを意味しなければならぬ。

## 【七略】

八 もし理性がこれ等の原理を発見するとしても、それはこれ等の原理の生得的であることを証明しないであろう——もし彼等が理性の使用によつて人間はこれ等の原理を発見することが出来、そしてこの事がその生得的であることを証明するに充分であるということの意味するならば彼等の議論の筋はこういうことになる。即ち、理性が我々に対して発見することが出来、また我々をして確實に同意せしめるような如何なる真理もすべて生れつきに刻み付けられているのである。そしてこの事に依つて、数学者の公理と彼等がそれから演繹する定理との間には何の相違もなくなる。すべては等しく生得的と認められねばならぬ。というのはそれ等のものはすべて理性の使用によつてなされる発見であり、人間がその方向に正当に思考を用いれば必ず知るようになり得る真理であるからである。

九 理性がこれ等の原理を発見するというのは誤謬である——然し乍ら理性は（これ等の人々の言う所を信ずるならば）既知の原理または命題から未知の真理を演繹する能力に他ならないのに、如何にしてこれ等の人々に、生得的であると想像されている原理を発見するのに理性の使用が必要であると考えることが出来るのであろうか。私が言つたように、理性がいつか我々に教えるすべての確実な真理が生得的であると考える限りは、我々が発見するのに理性を必要とするようなものは決して生得的とは考えられ得ない。もともと悟性に刻み付けられているものを悟性に知らしめるために理性または理性の行使が必要であるなど考えるのは、見えるものを我々の眼に見出さしめるために理性の使用が必要であると考えるのと同じことである。



「(一〇) そして思うにこの答を与える人々は、「同一のものにとつては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」という公理の知識は理性<sup>\*</sup> reason の演繹であるということをするので肯定しないであろう。何となればこの事は彼等が非常に居ると思われる自然の恩恵を破壊することになるであろうから。然し一方彼等はこれ等の原理の知識を我々の思考の労作に依らしめるのである。というのはすべての推理<sup>\*</sup> reasoning は探求、搜索であり、骨折と勤勉とを要するからである。そして我々の理性の基礎及び手引として生れ付き刻み付けられたものが、これを発見するのに理性の使用を必要とするというようなことは、どうしたら何等かの恕すべき意味を以て仮定され得るであろうか。

\* ここでは「理性」は「推理」と同じ意味に用いられている。即ち演繹的能力の意味である。

## 【二〇略】

一一 悟性の働きを少し注意して考えて見ようと骨折する人は、心がこのように若干の真理に容易く同意することは、生れ付きの刻印によるのでもなくまた理性の使用によるのでもなくて、我々が後に知る如く、この両者とは全く別な心<sup>\*</sup> faculty によるものであることを知るであろう。

\* 直覺的知識を指しているのである。(第四卷、第二章、第一節参照)

一二 理性を使用するようになる時は、我々がこれ等の公理を知るようになる時ではない——「我々が理性を使用するようになる時」これ等の公理を知りこれに同意するようになるということによつて、子供等が理性を用いるようになるや否や彼等も亦これ等の公理を知りこれに同意するようになるということが意味されるならば、これも亦誤謬であり馬鹿々々しいことである。子供等が「同一のものにとつ

ては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」というこの公理について何の知識をも持たぬずっと前に、我々は子供等が理性を使用する如何に多くの例を認め得ることか。また大部分の無学文盲の人及び野蕃人は彼等の理性の働く年齢の間でさえも長年の間、これ及びこれと同様な一般的命題について一度も考えることなしに過ぐすのである。人が理性を使用するようになるまでは、生得的と考えられているこれ等の一般的に、より抽象的な真理の知識に到達しないということを私は認める。そして私はそうなった時も尚、人はこの知識に到達しないと附け加える。何となれば人が理性を使用するようになる後迄はこれ等の一般的公理の関する一般的な抽象的觀念が心の中に形成されないからである。

## 【二三 略】

## 【二四 略】

一五 心が幾つかの真理を獲得する段階——感官が最初に個々の觀念を取り入れこれを以て未だ空虚な心の室を設備する。心は徐々にこれ等の觀念の幾つかになじんで、これ等が記憶に留められ、名前を附けられるのである。その後心は更に進んでこれ等の觀念を抽象し、徐々に一般的名辞の使用を学ぶのである。この様にして心はその推理の能力を働かせる材料である觀念及び言語を備え付けられるようになる。そして理性に仕事を与えるこれ等の材料が増すにつれて理性の使用は日々により顯著となるのである。然し乍ら一般的觀念を持つことと一般的な言語及び理性を用いることは通常一緒に進んで行くのではあるが、しかも私はこの事はどう見てもこれ等の觀念が生得的であることを証明するとは思わぬ。若干の真理の知識は非常に早くから心の中にあることを私は認めるが、それはこれ等の真理が生得的で

ないことを示すような仕方で存在するのである。というのは我々がこれを吟味するならば、この知識は矢張り生得的ではなく獲得された観念イデアに関するものであることを知るからである。即ちこの知識は外物によって刻み付けられる最初の観念イデアに関するものであり、この観念は幼児が最も早く関係し、彼等の感官に最も屢々印象を与えるものである。恐らく心が幾らかでも記憶力を持つようになり、別々の観念イデアを把持し受取ることが出来るようになるや否や、心はかようにして得られた観念イデアの中で或ものは一致し他のものは相違するということを見出すのである。兎に角とかこの事がこの時期に行われようとそうでなかつと、心は言語を使用し或いは我々が通常「理性の使用」と呼ぶところへ到達するずっと以前にこの事を成すことは確かである。何となれば子供は、話すことが出来る以前に甘いという観念イデアと苦いという観念イデアの間の相違（即ち甘いは苦いでないということ）をよく知って居り、これは後になつて（子供が話すようになつて）ニガヨモギとボンボンとは同じものではないということを知ると同様に確実に知つて居るからである。

一六 子供は七まで数えることが出来るようになりまた等しいという名辞と観念イデアを持つようになるまでは三と四は七に等しいということを知らない。そしてそうなつたとき、これ等の語を説明すると彼は直ちにこの命題の真理に同意する、というよりは寧ろこれを知覚するのである。然し乍らこれが生得的真理であるがためにこのとき彼は容易く之を承認するのでもなく、また彼は理性の使用を欠いて居るがためにその時まで之を承認しなかつたのでもなくて、この命題の真理は、彼が心中にこれ等の名辞の表す明晰、判明な観念イデアを定着せしめるや否や、彼に分るのである。そしてそのとき彼は、前に彼が棒と

桜実とは同一の物ではないということを知った場合と同じ根拠、同じ手段によつて、この命題を知るのである。またこれは後になつて彼が「同一のものにとつては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」ということを知る場合ともまた同一の根拠である。この事は先へ行つてもつとよく示すであらう。そこで或人がこれ等の公理が關係する一般的觀念イデアを持つようになり、またこれ等の觀念を表す一般的名辭の意義を知るようになり、または彼の心中にこれ等の名辭が表す觀念を結合するようになることがおそれればおそい程、それだけまた彼がこれ等の公理に同意するのはおそくなるであらう。これ等の公理の名辭はその表す觀念イデアと共に、猫とか鼬いたちとかいふ名と同じように生得的ではないのであるから、彼は時と觀察が彼にこれ等のことを知らしめるまでは待たねばならぬのである。

一七 提出され理解されるや否や同意されるといふことはこれ等の公理の生得的でないことを証明する——人が理性を使用するようになるとこれ等の公理が一般に同意されるようになるといふこの言ひ拔けは、我々が今見たように失敗であり、生得的と思われるような真理と、後になつて習得される他の真理との間に何等の相違を残さないで、人々は、彼等が公理と呼ぶような真理はこれが提出され、これを提出するときの言葉が理解されるや否や一般に同意されるのであると言ふことによつて、これ等の真理に対する普遍的同意を保証しようと努めた。

〔一八〕然しもしかような同意が生得的であることのしるしであるとすれば、彼等は聞かれるや否や一般に同意されるようなすべての命題が生得的であることを認めねばならない。これによつて彼等は自ら非常に多くの生得的原理を保有して居ることを知るであらう。「一と二は三に等しい」といふこと、「二

と二は四に等しい」ということ、そして他のこれと同様な多数の数に関する命題であらゆる人がはじめに聞きその名辞を理解すれば同意するようなものはこれ等の生得的公理の中に加えられるべきでない。これはまた数のみの特権でもない。「二つの物体は同一の場所に在り得ない」ということ、「白は黒ではない」ということ、「四角は円ではない」ということ、「黄色さは甘さではない」ということ、これ等及び無数の他のかような命題に対して、少なくとも我々がそれぞれ別個の觀念<sup>イデア</sup>を持つだけの数は、あらゆる人は、これをはじめに聞き、その名辞が何を表すかを知れば、その知力を以て必ず同意せざるを得ない。然し乍ら如何なる命題も、それが關係する觀念が生得的でない限りは生得的ではあり得ないから、この事は、色、音、味、形等のすべての我々の觀念<sup>イデア</sup>が生得的であると考えることになるであろう。しかもこれ程理性と經驗に反對することはあり得ない。命題を聞きその言葉を理解するとき誰でもすぐに同意することは自明であるというしるしであることを私は認める。然し自明ということとは生得的印象にではなく、何か他のもの（我々が先へ行つて示すであろうように）に由るのであるから、これは幾つかの命題に属するのであつて、それ等の命題が生得的だと主張する程途方もないことを言う人はこれまでになかったのである。

一九 かようなより一般的でない命題はこれ等の普遍的公理より前に知られる——またこれ等の「一と二は三に等しい」とか、「緑は赤ではない」などというような、はじめて聞いて同意されるような、より個別的の自明な命題は、生得的原理と見做されるような、より普遍的な命題の結果として承認されるのだとも云う勿<sup>な</sup>れ。何故なれば誰でも悟性の中で何事が起るかを觀察する努力をしさえすれば必ず、

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

これ等及びこれに似たより一般的でない命題は、かの、より一般的な公理を全く知らないような人々によつて確實に知られ、断乎として同意され、そしてまたこれ等の命題はそれ等の第一原理（と呼ばれるのであるが）よりも早くから心中にあるのであるから、これ等がはじめて聞いて承認されるということはそれ等の原理に依るものではあり得ないということを知るであらう。

〔二〇〕そしてこれ等の尊重されている公理の有用性について言えば、それは恐らく、その然るべき場所でもっと充分に考察される場合に、一般に考えられている程有用ではないということが分るであらう。\*

\* 第四卷、第七章「公理に就いて」参照。

二一 人はこれ等の自明的真理の多くのものを、それ等が提出されるとはじめて知るようになるということは否定することが出来ない。そしてそういう経験をする人は誰でも、そのとき彼は前には知らなかった命題を知りはじめめるのだということを自ら認めるということは明らかである。それ以来彼はこの命題を決して疑わない。それは生得的であるがためではなくて、この命題の言葉の含む事柄の性質を考察することが、たとえ彼がどんな風にまたは何時如何なるときにこれを反省するようにされようと他の考え方をすることを彼に許さないからである。

二二 提出する前に暗に知られていることは心がこれ等の命題を理解し得るといふことを意味する、そうでなければ無意味である——もし「悟性はこれ等の原理に関して、このように始めて聞く前に暗黙の知識を持っているが判然たる知識は持っていない」といわれるならば、（これ等の原理は知られる前

に悟性の中にあると言う人々はそう言うに違いないが、暗に悟性に刻み付けられている原理というのは、もしこれが、心はかような命題を理解し、確實に之に同意することが出来るということの意味するのでなければ何を意味するのか知ることは困難であろう。そしてかようにしてすべての数学的証明は最高の諸原理と同様に心に生れつき刻み付けられたものと認められるに違いない。

【二三 略 The argument of assenting on first hearing, is upon a false supposition of no precedent teaching.】

【二四 略 Not innate, became not universally assented to Recapitulation.】

二五 これ等の公理 *maxims* が始めて知られるものではない——我々に未知である幼児の思考によつて議論を立て、また幼児の表現する前に彼等の悟性の中にかかる事柄をもとにして結論を下しているではないかという非難を受けないように、私は次に、これ等の二つの一般的命題は最初に子供の心を占める真理でもなければまたすべての後天的に得た概念 *notions* に先だつものでもないということを言う。この事もしこれ等の命題が生得的であつたなら、どうしても私の言う所とは反対でなければならぬのである。我々がこの事を決定することが出来るか出来ないかは問題でないが、子供が考えることをはじめ、また彼等の言語や行為が實際そうだと我々に確信せしめる一つの時期が確かにある。そこで、子供が考え、知り、同意することが出来るようになった時に、もし自然が刻み付けた概念というようなものがあるならばこれ等の概念を彼等が知らぬということは合理的に考えられ得るであろうか。また彼等が外界の事物からの印象を知覚し *they perceive the impressions from things without*、そして同時に自然そのものが注意深く

i 先に挙げられた「ある物はある」と矛盾律を指すのだろう。

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

内界に刻み付けた極印に關して無智であると考え、それは多少でも道理になつてゐる様に思われ得るであらうか。また彼等は後天的な概念を受け取り、承認し、そして一方彼等の存在の最も深い根柢に織り込まれそこに消すことの出来ぬ極印として刻み付けられ、すべての彼等の獲得される知識及び将来の推理の基礎となり指導者となるような概念を知らないということが出来るであらうか。このことは自然をして徒らに骨折らせることになるか或いは少なくとも非常にまずく文字を書かせることになるであらう。何となれば他のものを大変よく見た眼が自然の文字を読むことが出来ないものであるから。そして、最初に知られることでなく、またそれなしでも幾つかの他の事柄の確實な知識が得られるようなことが真理の最も明瞭な部分でありすべての我々の知識の基礎であるというように非常に誤つて考えられてゐるのである。子供は確かに、自分を養つてくれる乳母は、遊び相手の猫でもなくまた恐い黒人でもないということ、また子供のいやがる虫下しや芥子からしはその泣いて欲しがる林檎や砂糖でないということを知つてゐる。この事に確かに疑いもなく保証されることである。然し乍ら、子供が彼の知識のこれ等の部分及びその他の部分に対してかくも断乎として同意するのは「同一のものにとつては存在し、そしてまた存在しないことは不可能である」という原理によるものであるとか、また子供は明らかに多くの他の真理をも知る或る年齢に達すると、この命題に關する何等かの概念または理解を持つのであるというような事を言う人があるであらうか。「子供はこれ等の一般的な抽象的思索を彼等の哺乳壺やガラガラと結び付けるのだ」と言う人は彼の意見に対してこの位の年の子供よりもより多くの情熱と熱心を持つてはいるが誠実と真理とはより少ししか持たぬと考えられるのが当然であらう。



二六 それ故に生得的ではない——それ故に、一人前になって、より一般的で抽象的な諸概念及びこれを表す名辞を用いることを覚えた人々に提示されるや否や常に容易く同意されるような幾つかの一般の命題はあるであろうが、これ等の命題は幼少な子供等に於ては見出されぬし、これ等の子供はそれにも拘らず他の事柄は知つて居るのであるから、これ等の命題は知力ある人々の普遍的同意を得るものと主張する事は出来ない、そしてそれ故に決して生得的とは考えられ得ないのである。というのは何等かの生得的真理（もしそんなものがありとすれば）が少なくとも何か他の事を知っている人に知られていないというような事は不可能だからである。何故なれば心が考えた事のないような真理は心中にないのであるから、もしこれ等が生得的真理であるならばそれはまた生得的思考であるに違いないからである。これによつてもし何等かの生得的真理があるならば、これ等の真理は必ず一番初に考えられるものであり、一番初に現れるものであるに違いない。

二七 これ等の真理は生得的ではない、何となれば生得的なものが最も明らかに現れる場合にこれ等のものは最も現れぬからである——更にこれ等の一般的公理が生得的であるということに反対する次の如き議論がある。即ちこれ等の極印はもし生れつきのもとの印象であるならば、これは我々が未だ印象の何等の痕跡をも見出さぬような人々に於て最も曇りなく明らかに表れるべきである。子供、白痴、野蕃人、無学文盲の人はすべての人々のうちで風習や人の意見の害を蒙ることの最も少ないものであるから、彼等の心中にこれ等の生得的概念が、子供の思想が確かにそうであるように、あらゆる人に明らかに見えるように開けつばなしになっていると考えるのは合理的であろう。然し悲しいかな、子供や白

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

痴や野蕃人や甚しく無学な人の間に如何なる一般的公理が見出され得るであろうか、知識の如何なる普遍的原理があるであろうか。子供は彼の乳母と搖籃を知りそして徐々にもう少し上の年齢になつてからの玩具を知る。また野蕃人の子供は恐らく、彼の種族の風習に従つて彼の頭を愛と狩獵を以て充たすであろう。然し教えを受けない子供や森の野蕃人からこれ等の抽象的原理や所謂科学の原理を期待する人は自分が間違つていることを見出すのではないかと思う。かような種類の一般的命題はインディアン的小屋で述べられることは減多にない。況んや子供の思考にあらわれることはないし、またかような命題の何等かの印象が生来の愚人の心に見出される筈もない。かような命題は議論が屢々出て来るような會話や學問に慣れている博識なる國民の學派や大學の言語と仕事である。そしてこれ等の公理は人為的な論議に適し人を説服するのに役立つが、真理の発見と知識の進歩にはあまり貢獻するところはないのである。然しこれ等のものが知識の改善に対してあまり役立たないということに就いては、私は第四卷第七章【公理について】に於てもつと十分に語る機會を得るであらう。<sup>\*</sup>

\* ロックが度々第四卷、第七章を参照すべきことを述べていることによつて、第一卷に於て彼の攻撃するのは恐らくアリストテレス派のスコラの哲學者の考えであると思われる。

## 【二八 略 Recapitulation.】

### 第三章 何等の生得的な実践的原理もない

一 如何なる道德的原理も前述の思索的公理程明らかにまた一般的に承認されない——もしも我々が前章に於て論じたような思索的公理が、其処で我々が証明したように、すべての人類から現実的普遍的同意を受けないならば、実践的原理に就いてはこれ等が普遍的に承認せられるに到らないということは遙かにより明らかである。

二 誠実 *Faith* と正義 *justice* とはすべての人によつて原理として認められない——すべての人の意見が一致するような道德的原理があるかどうかということに就いては私は、幾らかでも人類の歴史に通曉して居り、自分の家の籠の煙より外を見たことのある人にその決定を訴える。真理はもしもそれが生得的であるならば、疑いも問題もなしに普遍的に承認せられねばならぬのであるが、そういうような実践的真理が何処にあるであろうか。正義と契約を守ることとは大抵の人がこれに就いて意見を同じうすることであると思われる。これは盜賊の巢窟や大惡漢の徒党に迄も及ぶと考えられる原理である。そして極惡非道に陥つた人々さえお互いの間では信義を守り正義の法則に従うのである。私は法律の保護を奪われた惡人共もお互いにこの事を行うことを認めるが、この場合彼等はこれ等の事を自然の生得的法則として認めて居るのではない。彼等はこれを彼等自身の社会内に於ける便宜の法則として実行するのである。然し乍ら仲間の剽盜ひよつちうに対しては公正な行いをするが同時に次に出会であひに会す正直な人を掠奪したり殺したりするような人が実践的原理として正義を奉じていると考えることは不可能である。

三「人は實踐上に於てはこれ等の原理を否定するが思想上に於てはこれを認める」という反対、及びこれ等に対する答——恐らく、人々は、彼等の實踐と矛盾している事に対して彼等の心は暗に同意を与える、と主張するであろう。これに対する答として第一に、私は常に人々の行為は彼等の思想の最もよい通訳者であると考えている。第二に、黙つて考えているだけで終わつてしまうような生得的な實踐的原理を假想することは非常に奇妙で不合理である。自然から生じた實踐的原理は働くためにあるのであつて、単にその真理に対して思索的に同意せしめるのみならず、行為をこれに一致せしめるものでなければならぬ。さもなければこれ等の實踐的原理は徒らに思策的公理と區別されることになる。自然が人間に幸福の欲求と苦痛の嫌惡を与えたことを私は認める。これ等は成る程、常に止むことなしにすべての我々の行為を操りこれに影響を与えつづける（實踐的原理はそうなければならぬのだが）生得的な實踐的原理である。これ等の原理はすべての人に於てすべての年齢に於て一様に普遍的に認められ得るが、これは福利に対する欲求の傾向であつて、悟性に刻み付けられた真理の印象ではないのである。

四 道德上の法則は証明を要する、それ故に生得的ではない——私をして生得的な實踐的原理の存在を疑わしめるもう一つの理由は、人が正當な權利を以てその理由を要求することの出来ないような道德的法則は、一つも提示され得ないと私は考える、ということである。この事はもしこれ等の原理が生得的であるか、または自明的であつてさえも、全く滑稽な馬鹿々々しいことである。ところがあらゆる生得的原理は必ず自明でなければならぬのである。同一のものにとつて存在しまた同時に存在しないということは何故不可能であるかという理由を彼方へ聞き此方へ聞きたずねまわるようなことをする人があれ

ば常識を欠いていると思われるであろう。この命題は自ら明らかに証明されて居つて、他の何等の証明を要しないのである。その語句を理解する人はこの命題そのもののためにこれに同意する。さもなくば何物も彼がこれを承認するように説服することは出来ないであろう。然し乍ら道德の最も確乎不動の法則であり、すべての社会道德の基礎である「己の欲する所之を人に施せ」という事が、今迄に未だこれを聞いたことはないがその意味を理解する能力は持つて居るような人に提示されたならば、その人は何の不合理もなしにその理由を問わずに済むであろうか。そしてこれを提示した人は彼に対してその真理と合理性とを証明する義務があるのではなからうか。

五 約束を守るといふ場合の例——人は約束を守らねばならぬということは確に道德上の偉大な否定すべからざる法則である。然しなお、来世に於ける幸福と不幸という考えを持つて居るクリスチャンが何故人は約束を守らねばならぬかと問われるならば、「永遠の生と死とを掌握している神が我々にこれを要求するからである」といふことをその理由として与えるであろう。然しもし或るホッブス主義者\*が何故と問われるならば、彼は「公衆がこれを要求し、また、もしそうしなければリヴァリアサン (Leviathan) が罰するであろうから」と答えるであろう。またもし昔の異教の哲学者の一人が問われたならば、彼は「そうしないといふことは不正直であり、人間の威厳を下げ、人性の最高の完成である道德に反することだからである」と答えたであろう。

\* この論文で明らかにホッブスのことを述べているのは比喩だけである。リヴァリアサンは聖書にある一種の巨大な怪物でホッブスは彼の同名の著書で国家をこれにたとえた。

六 徳は一般に生得的だから認されるのではなく有益だから認されるのである——かくの如くしてひとりで、人々の望みまたは企てる幸福の種類がいろいろ違ふに従つて彼等の道德的法則に関する意見も非常に異なることになるのである。私は、非常に多くの方面に於て神の存在が明らかであり、我々が神に対してなさねばならぬ服従が非常によく理性の光に一致するので、人類の大部分が自然の法則に証明を与えること *give testimony* を認める。然しなお私は、幾つかの道德的法則は、道德の眞の根拠を知りもせずまた認めもせずに、人類から非常に一般的に是認を受け得るものであるということとは認められねばならぬと思う。この道德の根拠はただ神の意志と法則であり得るのみであり、神は人間を暗黒の中に見、その手に賞罰及び最も高慢な違反者を咎める充分な力を持っているのである。というのは神は不可分の結合によつて道德と公衆の幸福とを結び付け、社会の保全によつて道德の實踐を必要ならしめ、また有徳なる人の關係するすべての人々にとつて道德の實踐を明らかに有利ならしめたのであるから、あらゆる人がこれ等の法則を認めるばかりでなく、またこれを他の人々に推薦し称揚するのは不思議ではない。他人がこれ等の法則を守ることによつてそれを推薦した人が必ず自分自身に利益を得るのである。

七 恐らく、良心が我々が「道德を」破ることを阻止し、そして内的な義務感と法則の確立が保持されるのだと主張されるだろう。

〔八〕之に対して私は、多くの人々は他の事物を彼等が知るようになると同じ方法によつて、彼等の心情に書き付けられることなしに幾つかの道德的法則を承認するようになりまたそれ等の法則に対する

義務を確信するようになるのであるということ疑わない、と答える。他の人々はまた彼等の教育や仲間、及び国の習慣によつて同様な気持を持つようになる。とにかくこのような確信が得られるとそれが良心を働かせるに役立つであろう。この良心は我々自身の行為が道徳的に正しいかまたは正しくないかということに関する我々自身の意見 *opinion* または判断 *judgment*<sup>i</sup> に他ならぬのである。そしてもし良心が生得的原理の証拠であるならばこれに反することも亦生得的原理であり得る。何故なれば良心の同一の傾向を持った若干の人々は他の人々が避ける事を遂行するからである。

〔九〕最も文化の進んだ civilized 国民に属するもので、誰でも彼等の子供等を野に曝し欠乏によつてまたは野獣のために死ぬにまかせるといふ行いを子供を生むことと同様に少しも非難し、または躊躇しないような国民があつたではないか。また或る国に於ては人々は、もし子供が分娩のとき死ねば、これをその母親と同じ墓に葬るではないか。またもし勿体ぶつた占者が子供の運勢が不幸であるとの御託宣を下すとこれを雑作なく殺して仕舞うではないか。また自分等の親を或る年齢に達すると殺したり棄てたりして少しの悔恨も感じないというような処があるではないか。アジアの或る地方では病人は、その病症がもはや望みがないと思われようになると、未だ死ぬ前に外へ運ばれて地上に横たえられ、風雨に曝されて助けるものも憫れむものもなく死ぬのである……Tonoupinabos<sup>\*</sup> がこれを行えば極楽へ行くに値すると信じた徳は復讐と敵を沢山喰うことであつた。トルコ人が聖徒として崇める人々はその話をするだけでも失礼になるような生活を送るのである。

i *opinion*・*judgment* 共に後に位置づけられるように確実度の低いものである。*opinion* を大槻訳は「臆見」としている。

第一卷 原理も觀念も生得的ではない

\* 野蕃人種の名。【ブラジルの先住民、第二卷16章「数に就いて」でも引かれる Jean de Léry, *"L'Histoire d'un voyage fait en la terre du Brésil, autrement dite Amérique"*, 1578】

【一〇 略 Men have contrary practical principles.】

【一一 略 Whole nations reject several moral rules.】

一二 もし何等かの法則が生れつき刻み付けられているものと考えられ得るならば、思うに如何なる命題も「子供を保護することは両親の義務である」という法則程正當に生得的であることを要求する權利を持つことの出来るものはない。然し乍ら義務とは何であるかということは法則なしには理解せられない、また法則は立法者なしに或いは報酬及び刑罰なしには知ることも考えることも出来ない。それ故に、神、法則、義務、刑罰、来世等の觀念を生得的である<sup>イデア</sup>と考えることなしには、この原理及びその他の如何なる実践的原理も生得的である（というのは義務として心に刻み付けられている）ことは不可能である。

〔一二〕 このような知識なしには、人は決して何事かが彼の義務であるということを確信することは出来ない。法則を知らなかったりまたは疑ったりすること、立法者の知識や力を逃れたいと望むことなどが人々をして現在の慾望に負けしめることはあり得る、然し或る人をして、過失とこれによる微罰、また罪とともにこれを罰するために用意された火、また誘惑する快樂と明らかにさしあげられ天罰を下さんと用意されている万能の神の手を見させて（何となれば何かの義務が心に刻み付けられている場合にはこうなるに違いないのであるから）然る後に、このような先見とこのような確実な知識を持った人々



にとつて、ぬぐうべからざる極印として彼等が持ち廻り、また彼等がこれを破りつつある間彼等を見つめる所の法則を濫りに躊躇なく犯すということが可能であるかどうかを私に告げよ。私は自分が生得的法則を否定するからといって、人の制定した法則以外に法則はないと考えているかの如く誤解され度くない。生得的な法則と自然の法則との間には非常な相違がある。即ち我々の心の一番初めの起原に於て刻み付けられた或るものと、我々は知らないけれども我々の自然の能力を用いこれを適当に応用することによつてそれを知ることが出来るような或るものとの間には大なる相違がある。そして思うに、両極端に走つて、生得的な法則を肯定する人、或いはまた自然の光によつて即ち絶対的な天啓の助なしに知ることの出来る法則があるということを否定する人はともに真理を捨てるものである。

一四 生得的な実践的原理を主張する人々はそれが何であるかを我々に告げない——かような生得的原理の想定は勝手に取り上げられた意見に過ぎぬのではないかと人をして疑わしむるに充分である。何となれば非常に断乎としてこれ等の原理のことを語る人々が、どれがこれ等の原理であるかを我々に語るには非常に控え目であるからである。私の知る如何なる人もこれまでに未だ敢えてこれ等の原理の目錄を与えようとしなかつたのであるから、彼等はこれ等の生得的原理を疑う人々を非難することは出来ない……。

一五 ハーバート卿の生得的原理の吟味——私が上の事を書いたとき、ハーバート卿が彼の「真理に就いて\*」という書物に於いて、これ等の諸々の生得的原理を挙示したということを知つたので、私は直ちに、彼のような非常に才幹のある人に於いて、この点で私を満足させ、私の研究に結末を与える或る

ものを見出そうという希望を以て、彼の助言を求めたのである。彼の「自然の本能に就いて」という章（二六五六年版、七六頁）に於て私は彼の共通概念（*Notitia* [Notice] *Communes*）の次の六つの特徴を見出す、「一、先天性 *Prioritas*、二、独立性 *Independentia*、三、普遍性 *Universalitas*、四、確實性 *Certitudo*、五、必然性 *Necessitas*、」というのは彼の説明によれば、「人間の保存のために役立つ、六、適合の様式、というのは何等の躊躇をもさしはさまない同意。」また彼の「俗人の宗教に就いて」という小論文の終の方で彼はこれ等の生得的原理に就いて次のことを述べている。「到る処に於て真理が明らかにする事が如何なる宗教の限界によつても決して締めつけられることがないように。何となれば心そのものの中には、書かれたものにせよ書かれていないものにせよ如何なる伝統にも従わない天来の書き付けられたものがあるから。」三頁。また「我々の普遍的真理、それは恰も疑なき神の言葉の如くに内なる審問所によりて人間の心に刻み付けられていることを断定してから、彼は進んでそれ等を設定する、そしてそれは次の如くである、「一、或る至高の神がある。二、その神が祭られねばならぬ。三、敬虔と結ばれた徳が神を祭ることの最善の仕方である。四、罪から目覚めねばならぬ。五、この世の生を終れる後は褒美または罰が与えられる。」私はこれ等が明晰な真理であつて、正しく説明されれば、理性的存在は殆ど同意せざるを得ないような真理であるということを確認のけれども、彼はそれ等が「内なる審問所に書き付けられている」生得的印象であるということを決して証明してはいない、と私は思うのである。何となれば私は次の如く述べることを許してもらわねばならない。

\* 詩人ジョージ・ハーバートの兄 Lord Herbert Chetbury(1581-1648) は一六二四年に“*De Veritate. Prou distinguitur a Raveltione, a Verisimili, a Possibili, & a Falso.*”を出版し、その第三版に“*De Religione Laici*”という小論文が附加された。彼は彼が「自然の本能」と呼ぶものから、知性そのものの性質に属する若干の「共通概念」を引き出している。彼は十八世紀の英国理神論の基礎を築いた人である。この引用を本書に於て省略しなかつたのは歴史的興味のためであつて、これは前後の論議の進行にとつては別に重要なものではない。

一六 第一に、これ等の五つの命題は、すべてかように我々の心に書かれた共通の概念ではないか、或いはもしもそれ等の何れかが神の指によつて我々の心に書かれたものであると信ずるのが合理的であるならば、これ等のすべてより多くのものがかような共通概念であるか、いずれかである。何故なれば彼自身の規則によつてさえも、少なくとも彼の数え挙げるこれ等の五つの中の或るものと同様に、かような起原を主張することが出来、同様に充分に生得的原理として認められ得る他の命題がある、例えば「汝の欲する所これを人に施せ」、及び良く考察するときは恐らくこの他数百の命題がそうである。

一七 第二に、彼の挙げているすべての特徴は彼の五つの命題の各々の中に見出されない、即ち、彼の第一、第二、及び第三の特徴は、それ等の命題の何れにも完全には適合しない、また第一、第二、第三、第四、及び第六の特徴は、彼の第三、第四、及び第五の命題に殆ど適合しない。何となれば我々が歴史によつて多くの人々、否諸々の民族全体がこれ等の命題の或るものまたはすべてを疑ひ或いは信じないということを確信する他に、私は第三の命題、即ち、「敬虔と結び付いた徳が神の最善の礼拝である」ということが、徳という名辞、或いは音が非常に理解し難く、その意義が非常に不確実になり易く、ま

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

たその表示する事柄が非常な論争的となり、また知られることが困難であるとき、如何にして生得的原理であり得るかを知らなければならないのである。

〔一八〕もしも徳が、最も普通に考えられるが如く様々な国々の色々な意見に従つて称讃すべきであると考えられる諸々の行為であるとなされるならば、この命題は決して確實ではない命題となるであろうから、それは真ではないであろう。もしも徳が神の意志に一致する諸々の行為と考えられるならば、或いは徳という語がそれ自身の性質に於いて正しく善であるものを表示するのに用いられる場合は、徳の真にして唯一の標準であるところの神によつて規定せられた法則に一致する諸々の行為と考えられるならば、「徳は神の最善の礼拝である」というこの命題は全く真で確實であろうが、人間生活には殆ど役に立たないであろう、何故なればそれは「神は人間が神の命じた事を行うのを喜ぶ」ということにならぬのであつて、これは人間が、神の命ずるのは何であるかを知ることなしに、真であることを確實に知ることの出来る命題であり、人間はそれを知る前と同じように彼の行為の如何なる法則或いは原理から隔たつてゐるであろう。

〔一九〕第四の命題（即ち、「人々は彼等の罪を悔いねばならぬ」も亦、罪ということによつて意味せられる行為が何であるかが定められる迄は、前者と同様たにならぬ。それ故思うに、相異なる人々の間では相異なる事柄を表示する徳、*virtues*とか罪、*sins*というような不確実な意義を持つ言葉で、神が人々の心に諸々の原理を刻み付けるなどということは殆ど可能とは思われぬであろう。

二一 世界には相背反する諸原理がある——国や教育や氣質の異なつた人々が、第一の疑うべからざる原理として承認し抱懷して居る多数の意見がある、ということをお私は容易く認めるが、それ等の中の多くのものは馬鹿々々しいことであつたり、お互いに相反することであつたりするために真理であるといふことは不可能である。然しなおすべてのこれ等の命題は、たとえ理性から遙かに遠ざかつていふとも、何処か或る場所では非常に神聖なのであるから、他の事柄に於ては充分な理解力を持つた人々さえも、その真理を自分等が疑ひまたは他人が疑ふことを忍ぶよりは、寧ろ彼等の命及び何でも彼等にとつて最も貴重なものを捨てようとするのである。

二二 人々は通常如何にして彼等の原理に到達するか——こういへば不思議に思われるかも知れないが、この事は日々の経験が確証することである。そして恐らくこれは、もし我々が、乳母の迷信や老婆の言う事をもとにしたという様なことに過ぎない起原から出た教訓が、時の長さと隣人の承認によつて、宗教または道德の原理の權威を持つまでに成長するということが、どんな方法と段階を経て惹き起されるか、またどんな風にして實際そんなことが行われ得るかということをお察すれば、そんなに驚くべきこととは思われないであらう。というのは子供等によい原理を教えることに意を用いる（彼等はそう言うのであるが）ような人々は、用心深くはないがしかもなお偏見にとらわれていない悟性に、（というのは白紙<sup>\*</sup>は如何なる文字をも受け取るから）彼等が、保持しまた公然と信ずることを子供等に望むような教訓を注ぎ込むのである。そしてこれ等の教えは彼等が少しでも理解力を持つようになるや否や教えられ、なお彼等が生長するに従つて彼等の關係するすべての人々の公然の信奉または暗黙の承認によつ

## 第一卷 原理も觀念も生得的ではない

て、彼等に確証される。或いはまた少なくともその叡智、知識、及び敬虔という点で彼等が尊敬して居る人々が、決してこれ等の命題を彼等の宗教または風習の根柢として以外に述べることを許さぬということによつて確認される。かくしてこれ等の方法によつてこれ等の教訓は疑うべからざる自明の生得的真理たるの榮譽を持つようになるのである。

## \* 第二卷、第一章、第一節参照

## 【二三 略】

二四 この事は、我々が人類の性質と人間の業務の成り立ちとを考察すると、非常にありそうなことで殆ど不可避免的に起ることであるのが明白に分るであらう。即ち大抵の人々は彼等の職業上の日々の仕事に時間を用いることなしに生きることは出来ないしまた、彼等の思想の根柢となるある土台または原理なしには落着いた心持でいることが出来ない。自分の推理の基礎となし、これによつて真偽、正邪を判断する若干の崇高な命題を持つていない程ふらふとした浅薄な悟性を持った人は殆どない。或る者はこれ等の命題を吟味する手練と閑暇を持たず、他の者は吟味しようという意向を欠いて居り、また或る者は吟味すべきではないと教えられている。そして、無智、怠惰、教育或いは無思慮のためにこれ等の命題を人の言いが俚に信ずるという危険に曝されていない者は稀にしか見出し得ないのである。

二五 この事は明らかにすべての子供や若い人々の場合にそうである。そして天性よりも大きな力である習慣が人々の心情を曲げ悟性を屈服するように慣らした事柄が神聖な事として尊敬せられ得ないということは稀であるから、生長した人々が生活ののつぴきならない業務に巻き込まれたり、または快樂

の追求に夢中になつたりして、真面目に落着いて彼等自身の持説を吟味しようとしなひのは少しも不思議ではない。殊に彼等の原理の一つが、原理は疑わるべきものでない、ということである場合はそうである。そして余暇と才能と意志とを持つていたとしても、あらゆる自分の過去の思想と行為の根柢を敢えて揺り動かし、長い間全く誤謬と過失に陥つていたという恥を自らに帰することを忍ぶ人がまず世間にあるであろうか。自分の国や党派の一般に承認する意見に向つて敢えて異議を唱える人々に対して到る処で用意されている非難と闘うに充分剛毅な人があるであろうか。またほんの少しでも普通の意見を疑う人が必ず出会すところの気まぐれ者、懷疑論者、或いは無神論者という名を受けることに對して辛抱強く腹を据ゑていることの出来る人は何処に見出すことが出来るであろうか。そして人はこれ等の原理を、大概の人はそう考へるのであるが、神によつて彼の心の中にすべての他の意見の法則及び試金石となるために立てられたものと考えるとき、これ等の原理を疑うことをなお恐れるのであらう。

#### 【二六 略】

#### 【二七 略 Principles must be examined】

第一卷 原理も觀念も生得的ではない

## 第四章 思索的及び実践的兩方面の生得的原理に対する他の考察

一 原理はその觀念<sup>イデア</sup>が生得的でない限りは生得的ではない——もしも、生得的原理があるということ将我々に説得しようとする人々がこれ等の原理を總体的に考えないでこれ等の命題を作りあげている部分を別々に考察したならば、恐らく彼等はこれ等の原理が生得的であると信ずる程輕率なこととはしなかつたであろう。何となればもしもこれ等の真理を作りあげている觀念<sup>イデア</sup>が生得的でなかつたなら、それ等の觀念<sup>イデア</sup>から出来ている命題が生得的であるというようなことは不可能だからである。

二 觀念<sup>イデア</sup>、特に原理に属する觀念<sup>イデア</sup>は子供と共に生れるものではない——もし我々が生れたての子供等を注意深く考察して見るならば、彼等がこの世界に多くの觀念<sup>イデア</sup>を携えて来ると考えるべき理由は殆どないであろう。というのは恐らく若干の飢や渴や温かさのかすかな觀念<sup>イデア</sup>と胎内に於て彼等が感じたであろういくらかの苦痛とを除いては、彼等に於ては何等の定着した觀念<sup>イデア</sup>も少しも現れていない、特に生得的原理と見做されているような普遍的命題を作りあげている名辞に應ずるような觀念<sup>イデア</sup>は少しも表れていないからである。

### 【三略】

四 同一ということは生得的でない觀念<sup>イデア</sup>である——もし同一 identity (これだけを例として取るならば) ということが生れつきの印象 native impression であり、従つて我々にとつて非常に明瞭な分り易いことであつて、搖藍の中にいる時分から我々はこれを必ず知っているに違いないのであるならば、私はよろこ



んで、靈魂と肉体から出来ている生物である或る人がその肉体が變つたとき同一の人であるかどうかということを七歳の人または七十歳の人に決定してもらおう。またユウフォルボスとピタゴラスは同一の靈魂を持つていたのであるから、たとえ彼等が數年離れて生きて居つても同一の人であつたのであるか否か。否、同一の靈魂を持つていた雄鶏はこの両者と同一のものではなかつたのかどうか。これによつて恐らく、我々の同じという觀念は我々の中に生得的なものと考えられる程定着した明瞭なものではないということが分るであらう。<sup>イデア</sup><sub>○\*</sub>

\* Euphorbus — ギリシャ神話にある勇敢なトロイ人、ピタゴラスは彼の靈によつて生氣を得たと稱した。

\*\* そこでロックは彼の第二版に於てこの問題に関する一つの章を附け加えた。第二卷、第二十七章【同一性及び差異性に就いて】がそれである。

五 また私がここに提出した人間の同一 the identity of man に関する問いを全く空虚な思索と考へていけない。少しの注意を以て復活について考へ、神の裁判が最後の日に、この世でよい行いをなし、または悪い行いをなしたその同一の人 the very same persons があの世で幸福でありまたは不幸であるように審判を下すということを考へる人は、恐らく何が同一の人 the same man を作つてゐるか、また何処に同一ということがあるか、ということを手から決定することは容易くないということを知るのであらう。そしてこの人は輕率にも、彼も、またあらゆる人も子供等でさえも、生れつきこれに就いて明らかな觀念を持つてゐるなどと考へることはないであらう。

【六 略 Whole and part, not innate ideas】

## 【七 略 Ideas of worship not innate.】

八 神の觀念は生得的ではない——もし何等かの觀念を生得的であると考えることが出来るならば、神の觀念は就中、多くの理由によつてそう考えることが出来るであろう。何故なれば如何にして生得的な道德的原理があるべきであるかということは生得的な神の觀念なしには考えることが困難であり、立法者の觀念なしには法則の觀念及びこれを守る義務の觀念を持つことは不可能だからである。古代人の間に注目され歴史上の記録に於て烙印を捺されている無神論者等の他に、近代の航海がソルダニア湾やブラジルやボランディやカリビー島などに於て全民族の間に神の觀念や宗教を全く見出すことが出来ないようなものを発見しなかつたであろうか。そして恐らくもし我々がそんなに離れていない民族の生活や談論をよく注意して見るならば、我々は、より開化した国に於て多くの人々が彼等の心に非常に強い明らかな神の印象を少しも持つていないのではないか、そしてまた説教壇から叫ばれる無神論に対する不平は無理もないことではないかと考えるべきあまりにも充分な理由を持つてであろう。

\* Bay of Soudania—アフリカ南部西岸の漁港。Boranday 地名（不詳【ノルウェー北部海岸のどっか】）。Caribee Islands—西印度諸島中の島。

九 然しもしすべての人類が到る処に於て神の觀念を持つていたとしても（これに就いてしかも歴史はこの反対を我々に教える）、この事によつて神の觀念が生得的であるということにはならない。特に、神の觀念は事実そうなのであるが、この觀念が普通の理性の光に対して快適なもので我々の知識のあらゆる部分から自然に引き出し得るものであるならば、そうである。というのは驚くべき叡智と力の明ら

かなしるしは創造のあらゆる作品の中に非常に明らかに表れているのであるから、理性的創造物たる人間はこれ等の作品を真面目に省察しさえすれば神を発見し損うことはあり得ない。そしてかような存在者の発見が唯の一度でもこれを聞き及んだことのあるすべての者の心に必ず及ぼすに違いない影響は非常に大きく、またこの影響によってこれを考え話し伝える際に非常な重みを伴うものであるから、私にとっては神の觀念を<sup>イデア</sup>欠く程禽獸に類する一つの全民族が見出されるということは、彼等が数とか火の觀念を<sup>イデア</sup>少しも持たぬということよりも不思議に思われるのである。

\* 「普通の理性の光 common light of reason」は第三章、第十三節に於て述べられている「自然の光」と同じである。

## 【二〇 略】

## 【二一 略】

一二 「すべての人が神の觀念<sup>イデア</sup>を持つべきであるということが神の仁徳にふさわしい、それ故にこれは神によって生れつき刻み付けられている」ということに対する答——この議論は、もし何等かの力があるものならば、この場合にこれを用いる人がそれから期待するより遙かに多くのことを証明するであろう。というのもし我々が、神が人間のために人間が彼等にとつて最もよいと判断するすべてのことをなしたのであり、これはそうするのが神の仁徳に對してふさわしいからであると断定することが出来るならば、この事は、神が人間の心に神自身の觀念<sup>イデア</sup>を刻み付けたということのみならず、神はそこに人間が神に就いて知りまたは信すべきすべての事、人間が神の意志に従つてなすべきすべての事を明瞭な極印を以て明らかに刻み付けたということ、及び神は人間に神の意志に一致するような意志と性向とを

与えたのであるということを証明するであろう。疑いもなくすべての人はこの事が人間にとつては、聖パウロがすべての人民が神を探し求めたと言う（使徒行伝十七章二十七）が如くに、暗黒の中に知識を探し求めるということよりも、また彼等の意志が彼等の悟性と衝突し、彼等の慾望が彼等の義務を妨害するということよりも、よりよいと考えるであろう。私は「無限に賢い神がそういう風にしたのである、それ故にそれが一番よい」と言うのは大變結構な議論であると思うが、「私はそれが一番よいと思う、それ故に神がそうしたのである」と言うのは我々自身の叡智を少しく信じすぎるものの如くに思われる。そして目下の問題に於て、確實な経験が神がそうしたのでないということを我々に示すとき、かような、論旨によつて神がそうしたのでと論ずることは無益であろう。然しかような知識の本来の印象即ち心に刻み付けられた觀念<sup>イデア</sup>なしにも、神の仁徳は人間に対して欠けてはいなかつた。何となれば神は人間に、かような存在者の目的に対して必要なすべてのものを充分發見するに役立つような能力を与えたからである。そして私は、人間は彼の自然の能力を正当に使用することによつて、何等の生得的原理なしに神及び他の我々に関係のある事物の知識を得ることが出来るということを示すことが出来ると思う。神は人間に彼の持つて居るような知る能力を賦与したのであるから、その仁徳によつてこれ等の生得的觀念<sup>イデア</sup>を人間の心に刻み付ける義務がないということは、神は人間に理性と手と材料とを与えたのであるから、人間に橋や家を造つてやる必要がないのと同様である。

【二三 Ideas of God various in different men.】

【二四 略】

## 【二五 略】

【二六 略—第五版まで一五番が重複していたので、版によって扱いが異なり、以下の番号が異なる。25Ed.では一九節は18節】

## 【二七 略】

【二八 If the idea of God be not innate, no other can be supposed innate—25Ed.では17節】

一九 実体の観念<sup>イデア</sup>は生得的ではない——いま一つの観念<sup>イデア</sup>で、人々が恰もそれを持つて居るかのよう一般に語るから、それを持つことは人類にとつて一般に役立つのであらうと思われる観念<sup>イデア</sup>があることを私は認める。そしてこれは我々が感覚或いは反省によつて持つのでなくまた持つことも出来ない実体<sup>イデア</sup>の観念<sup>イデア</sup>である\*。もし自然が氣を付けて我々に若干の観念<sup>イデア</sup>を供給したものとすれば、我々はこの観念<sup>イデア</sup>を我々自身の能力では手に入れることの出来ないようなものであると期待してもよいであらう。ところがそれどころか、この観念<sup>イデア</sup>は他の観念<sup>イデア</sup>を我々の心に導入するような方法を以てはもたらされないのであるから、我々は実体というような明晰な観念<sup>イデア</sup>は全く持つて居らず、それ故に我々は実体<sup>イデア</sup>という語によつては、ただ何か知らぬが我々はそれに就いて何等〔特殊な、判明な、実証的な\* particular distinct positive〕観念<sup>イデア</sup>を持たないけれども、我々が実際に知つてゐる諸観念<sup>イデア</sup>の基礎<sup>イデア</sup>体 (substatum) または支柱と考えるようなものの不確実な仮定を意味するに過ぎないということを知るのである。

\* 実体の観念<sup>イデア</sup>に就いては、第二巻の第十三章（十七—二十節）、及び第二十三章参照。ロックは感覚と反省がすべての我々の観念<sup>イデア</sup>の起原であるとなすのであるから、ここで実体の観念<sup>イデア</sup>はこの二つから生じないということを明らかに述べてゐるのは注意すべきことである。

\* \* これ等の語は第四版に於て附け加えられたのである。

第一卷 原理も觀念も生得的ではない

【一〇 略 No propositions can be innate, since no ideas are innate.】

【一一 略 No innate ideas in the memory.】

【一二 略 Principles not innate, because of little use, or little certainty.】

【一三 略 Difference of men's discoveries depends upon the different application of their faculties.】

二四 人間は自分自身で考えまた知らねばならない——かように生得的原理を疑うことは、この事を「知識と確實性の古い基礎を根こそぎに破壊するものである」と考え勝ちな人々から如何なる非難を受けるに値するか、を私は言うことは出来ない。然し私は少なくとも、私の辿つてきた道は、真理に一致するものであるから、この基礎をより確實にするものであることを確信する。私は自分が以下の論説に於て、或る權威から離れまたはこれに従うことを私の仕事としなかつたということを確信する。真理が私の唯一の目標であつた。そして真理が導くと思われた場合にはいつでも、誰か他の人の足跡がその道にあるうとなかろうとそんなことは気にかけずに、私の思想は公平に真理に従つたのである。私が他の人々の意見に対して然るべき尊敬を欠くというのではなくて、要するに最大の敬意を真理に払うのである。そして我々が合理的な思索的な知識を発見するにあたつて、その源即ち事物そのものの考察に於て、この知識を求め、これを見出すのに他人の思想よりはむしろ我々自身の思想を用いたならば、恐らく我々はより大なる進歩をなすであらうと言っても、人がこれを尊大であると考えないことを私は望むのである。というのは、思うに我々が他人の悟性によつて知らうと望むことは、他人の眼によつて見ようと望むと同様に不合理だからである。真理と理性に就いて我々自身多くを考察し理解すればそれだけ多く

我々は真実の知識を得るのである。他の人々の意見が我々の頭の中にふらついているということは、偶々たまにそれ等の意見が真であることはあつても、少しでも我々をより賢くするものではない。我々が我々の同意を、尊敬すべき名前にのみ捧げてそういう名前を持つ人々がなしたように、我々自身の理性を、彼等に名声を与えたような真理を理解するのに用いない限りは、彼等に於て学問であつたものは、我々に於ては彼等の意見に執拗に執着することに過ぎない。アリストテレスは確かに物識りな人であつたが、彼が他の人の意見を盲目的に採用しこれを大胆に公言したために彼のことをそう考えた人は誰もない。そしてもし他人の意見を吟味することなしに取り上げることが彼を哲学者にしなかつたならば、この事は他の如何なる人をも哲学者にすることはまずあるまいと私は思う。諸科学に於てはあらゆる人は彼が真に知り理解するだけのことを知るのであつて、彼が人の言うが俚に信ずるだけのことは切れ屑にすぎない。この切れ屑は全体としてあつた場合には結構なものであつたにしても、これを集める人の貯えを決して著しく増加するものではない。かような借り物の富は御伽話の金銭のように、彼がそれを受つた人の手の中では金であつても、さてこれを使う段になると木の葉や塵に他ならぬこととなるであらう。

\* この節及び次の節に於て、ロックが生得的觀念イデア及び原理に対して頑強に反対していることの本当の道德的な目的、主旨を知ることが出来る。彼の議論は伝統的な假定と空虚な言葉の圧制に反対してなされているのである。この事はフレーザー教授の指摘していることである。

二五 生得的原理の説はどこから来るか——人々が、理解するや否や疑うことの出来ぬような若干の一般的命題を見出したとき、これ等を生得的であると断定することは簡単な容易い方法であつたという

第一卷 原理も觀念も生得的ではない

ことを私は知っている。この断定が一度承認されると、それは一度生得的と称せられたすべての事に関して、怠けものを探索の苦勞から免れしめ、また疑念を有する人の研究を止めるのである。そして大家または先生を氣取る人々にとっては、原理は疑われてはならぬということを原理の原理とすることは決して少なからぬ便益であつた。というのは生得的原理があるというこの主張を一度確立するとこの説はそれを奉ずる人々に若干の説をそういう物としてどうしても承認せねばならぬようにしたのである。この事はこれ等の説を彼等自身の理性と判断から取り上げてしまつて、更に吟味することなくこれを信じ、人の言うが俚に仮定せしめることであつた。この盲目的信用の立場に於ては彼等は彼等に原理を与え、彼等を指導する手腕と仕事を持つた或る種の人々によつて、より容易く支配され、またそういう人々に役立つようにされたであらう。これに反してもし彼等が、人間が多くの普遍的真理の知識に到達した方法を吟味して居つたならば、これ等の真理は人間の心中に事物そのものの本質が適當に考察されたときに生ずるのだ、ということとを彼等は見出したであらう。そしてまたこれ等の真理は、本来これを認め、また判断するに適している能力がこれ等の真理に関して適當に用いられたとき発見されるのだ、ということを知つたであらう。

二六 この場合悟性が如何にして進んで行くかということを示すことが次の論説の目的である。【I shall say for the principles I proceed on is, that I can only appeal to men's own unprejudiced experience and observation whether they be true or not; 人々の先入觀のない經驗と觀察に訴へることが出来るだけである。】

\* 本書に於て第十九、二十四、二十五、二十六節となつてゐる諸節は大抵の版では第十八、二十三、二十四、二十五節とな



っているが、これは、明らかにロックの不注意によって、二つの節が第十五節として数えられているがためである。【二つの第十五節を一つにするか、二つに分けるかで後の番号の振り方が異なっている、ということ。】

#### 第四章 思索的及び実践的両方面の生得的原理に対する他の考察

## 第二卷 觀念に就いて

## 第一章 觀念一般及びその起原 original に就いて

一 觀念は思考 *thinking* の対象である——あらゆる人は彼が考えているということを自ら意識しているのであるから、そしてまた考えている間に、彼の心が向けられるのは、そこに在る觀念なのであるから、人間が彼等の心中に「白さ、堅さ、甘さ、思考、運動、人間、象、軍隊、醗酵」その他の言葉で表されるような幾つかの觀念を持つているということは疑う余地のないことである。そこで先ず第一に、如何にして人間はこれ等の觀念を得るかということが研究さるべきである。人間は生得的觀念を持つて居り、彼等の心にその存在の一番初めから本来の極印を刻み付けられて stamped upon いるのだということが一般に承認されている説であることを私は知っている。この説を私は既に十分吟味した。そして思うに、私が前巻に於て言つた事は、悟性はその持つて居るすべての觀念を何処から得るのであるうか、またこれ等の觀念は如何なる方法と段階を以て心に這入つて来るのであるうか、ということを示した時、はるかに容易く認められるであらう。この事に対して私はあらゆる人自らの觀察と經驗に訴えよう。

二 すべての觀念は感覺または反省から来る——さてそこで心を謂わばすべての文字の書いてない、何の觀念をも持たない without any ideas 白紙であると仮定しよう。この心は如何にして觀念を具えるよう

to be furnished になるのであるか。多忙な限りない人間の空想力が殆ど無限の変化を以て心に描いたかの莫大なる貯蔵を、心は何処から得るのであるか。心は何処から推理 *reason* と知識のすべての材料を得るのであるか。これに対して私は一語を以て経験からと答える。この経験にすべての我々の知識は基づくのであり、結局知識は経験に由来するのである。外界の感覚的対象に対して、または我々自身によって知覚され反省される内界の我々の心の作用 *operations* に対して向けられる我々の観察 *observation* が、我々の悟性に思考のすべての材料を供給する所のものである。これ等の二つが知識の起原であり、我々の持ちまたは自然に持ち得るすべての観念は、これによって生ずるのである。

\* ここに述べられていることによってロックは英国経験論の父と言われるのであるが、彼の用いている「経験」という語の意味は曖昧であつて、彼はヒュームやコンディヤックの如き徹底した経験論者ではないことを注意すべきである。

三 感覚の対象が観念の一つの起原 *source* である——先ず第一に個々の感覚的対象に關係する *conversant about particular sensible objects* 我々の感官 *senses* が、これ等の対象が感官に影響するいろいろな方法に従つて事物のいろいろな別個の知覚 *distinct perceptions* を心に運び入れる。かようにして我々は黄色い、白い、熱い、冷い、軟い、堅い、苦い、甘い及びすべて我々が感覺的性質 *sensible qualities* と呼ぶようなものに就いて我々の持つている観念を得るのである。私がこれに就いて感官が心に運び入れるという時、私は感官が外界の対象から心の中にこれ等の知覚を其処に生ずる所のものを選び入れるということを意味するのである。我々の持つ大抵の観念のこの偉大なる起原は全く我々の感官に依つて居り、感官によ

つて悟性に齎されるのであるから、私はこれを感覺 sensation と呼ぶ。

四 我々の心の作用が觀念のいま一つの起原である——第二に經驗がそれによつて悟性に觀念を与え、いま一つの起原は、悟性がその得た觀念に關して働く場合の我々の内に於ける我々自身の心の作用の知覚 the perception of the operations of our own mind である。この作用は精神 soul がこれを反省し考察するようになる、外界の事物からは得られなかつたような他の一揃の觀念を悟性に与えるのである。それは即ち知覚、考えること、疑うこと、信ずること、推理する reasoning こと、知る knowing こと、意志する willing こと及び我々の心のすべての異つた働きであつて、我々は、これ等を意識 conscious of し、我々自身の内にこれ等を認めるのであるから、我々が我々の感官に影響を与える物体 bodies から受け取ると全く同様に判明な觀念 distinct ideas をこれ等の作用から悟性に受け取る receive into のである。觀念の起原 source をあらゆる人は全く自分自身の内に持つていたのであつて、これは外界の事物とは何の關係もないのであるから感覺的ではないが、しかもそれに非常に似て居り、内感 (internal sense) と呼ぶのが誠に適當であると思う。然しこの起原の与える觀念は心が自らの内に於けるそれ自身の作用を反省することによつて得るような觀念のみなのであるから、他方の起原を感覺と呼んだ如くに、私はこれを反省 reflection と呼ぶ。そこでこの反省ということによつて、この論文の次の部分に於て、私は心がそれ自身の作用とこの作用の仕方 manner についてなす注意 notice を意味するものであることを理解していただき度い。この注意をすることによつて悟性の中にこれ等の作用の觀念が起るようになるのである。今も言う通りこれ等の二つ即ち感覺 sensation の対象としての外界の物質的事物と反省の対象としての内部

に於ける我々自身の心の作用とが私にとつては、すべての我々の観念<sup>イデア</sup>がそのはじめを受け取る take their beginnings 唯一の起原 originals である。こゝで私は作用<sup>イデア</sup> operations という語を広い意味に用いて、単に心のその観念<sup>イデア</sup>に関する働きのみならず、またそれ等の働きから時々起る或る種の感情、例えばある考から起る満足 satisfaction とか不安 uneasiness というようなものをも含むこととする\*。

\* かようにしてロックは「快楽」及び「苦痛」をも単純観念<sup>イデア</sup>の中に含めるのである。第七章参照。

五 すべての我々の観念<sup>イデア</sup>はこれ等の二つの起原の中の一方向または他方から生ずる——悟性はそれがこれ等二つの起原の中の一つから受取らぬような如何なる観念<sup>イデア</sup>の片影をも持たないと私には思われる。外的対象 external objects は心に感覺的性質の観念<sup>イデア</sup>を与える furnish the mind with the ideas of sensible qualities、そしてこれ等の観念<sup>イデア</sup>は、これ等の対象が我々の中に生ずる所 produce in us のすべてのいろいろな知覚である。また心は悟性にそれ自身の作用の観念<sup>イデア</sup>を与える furnishes のである\*。これ等の両者は、我々がこれを充分に吟味し、またその様態 modes、結合 combinations、及び関係 relations を充分に検分するときは、我々の蓄えている観念<sup>イデア</sup>全部を含んでいるということが分るであろうし、また我々は我々の心中に、これ等の二つの方法の一つによつて這入つて来ないような何物をも持つていないことを知るであろう。誰でもよい或る人をしてその人自身の思考を吟味し、また充分に彼の悟性を研究せしめ、それからその人をして、彼がそこに持つてゐるすべての本来の original 観念<sup>イデア</sup>が彼の感覺の対象の観念<sup>イデア</sup>、または彼の反省の対象として考察された彼の心の作用の観念<sup>イデア</sup>以外の何か他の観念<sup>イデア</sup>であるかどうかを私に告げしめよ。そして如何に多量の知識が彼の悟性に宿つて居ると考えようとも、厳密な見解を取るならば、彼は彼の心

中にこれ等の二種の対象の中の一つが刻み付けたもの以外の如何なる觀念をも持たぬということを知るのであろう。尤も恐らくこれ等の觀念は我々が先へ行つて見るように、悟性によつて無限の多様性を以て複合されまた拡大されるのである。

\* ロックが觀念の獨立の起原として反省を認めたことは、時には、彼が心そのものによつて与えられる必然的或いは生得的な原理、即ち構成的な原理を認めるものと考えられた。然しこれは正當な解釈ではない。彼は確かに心の実在性と心が觀念を結合したりその他の仕方では觀念に作用する活動とを予想して居り、これは彼の感覺論者風の後継者等が心を聯想の法則に従う感覺の集りと考えたのとは違ふ立場であるが、しかも彼の反省の觀念、即ち「心そのものの中に於ける心自らの作用」は「外的対象」から受け入れられる感覺的性質の觀念と同じように、經驗的に觀察される事實なのである。

六 この事は子供に於ても認められる——子供が初めてこの世界に這入つて来るときの状態を注意深く考察する人は、子供が彼の将来の知識の素材となるべき多くの觀念を具えて居ると考えるべき理由を殆ど見ないであらう。子供は徐々にこれ等の觀念を具えるようになるのである。そして明瞭で、ありふれた性質の觀念は、記憶が時間と順序の記録を保持しはじめるより前に刻み付けられるのであるが、しかも若干の異常な性質が這入つて来るのは屢々非常に遅くなつてからであるから、自分がこれ等の性質を最初に知るようになった始めを思い起すことの出来ない人は殆どない。そしてそうする事が価値のあることであるならば、疑いもなく子供は一人前の人に成長する迄は、普通の觀念でさえもほんの少数しか持たないように教育されることが出来るであらう。然し乍らこの世に生れて来るすべての者は間斷な

くまた様々な影響を彼等に与える諸物体に取り囲まれているのであるから、人が注意を払おうと否と、色々な觀念が子供等の心に刻み付けられるのである。光や色は眼が開いてさえいれば到る処に始終間近に現存している。音と若干の触知せられる性質はそれぞれ相応する感官を刺戟して心に這入ることを強要せずにはいない。然しなお私は、もしある子供が大人になる迄、黒と白以外には何も見ないような場所に入れて置かれたとするならば、その子供は、丁度幼時から一度も牡蠣またはパイナップルを口にしたことのない者が、これ等の特殊な味わいの觀念を持たぬと同様に、深紅または緑の觀念を持たぬであろうということは容易く認められるであろうと思う。

七 人々は彼等が異なつた対象に接するに従つて異なつた觀念を附与される——それ故に人々は彼等の接する対象が多様性をより多く与えるか、またはより少なく与えるかに依つて外部からのより多くのまたはより少しの單純 simple 觀念を附与されるようになる。また内部の彼等の心の作用から、彼等がそれをより多くまたはより少なく反省するに従つてより多くのまたはより少しの觀念を附与されるようになる。というのは、自分の心の作用を考察する人はこれ等の作用の明白な觀念を持たざるを得ないが、しかも彼がその方面に彼の思考を向け、これ等の作用を注意深く考察しない限り、彼の心のすべての作用及びそこに認められ得るすべての事の明晰、判明な觀念を持ち得ないということは、或る景色について、或いはまた時計の部分や運動については、これに眼を向け、そのすべての部分を気を付けて注意しない人がすべての特殊な觀念を持ち得ないと同様である。絵だの時計は毎日この人が出会すように置くことが出来るが、しかも彼が注意深くこの各々を詳細に考察する努力を払う迄は、彼はこれ等のものが

成り立つて居るすべての部分の混亂した觀念を持つに過ぎないであろう。

八 「反省の觀念はより後になって獲得される、何となればこれに対して注意 *attention* が必要であるから——そこで我々は大概の子供が彼等自身の心の作用の觀念を得るのは何故かなり遅くなつてからであるかという理由を見る。そして若干の人々は一生涯これ等の作用の大部分に関して何等の非常に明瞭なまたは完全な觀念をも持たないのである。何となれば、これ等の作用は絶えず心に起るけれども、しかも悟性が内的にそれ自身に向い、それ自身の作用を反省し、それを自らの考察の対象とする迄は、これ等の作用は浮かんではいる幻の如く、心に明晰、判明な持続的觀念を遺すに充分な深い印象を与えないからである。子供等は、はじめてこの世界に這入つてくるときは、新しい事物の世界で囲まれている。この世界が絶えず彼等の感官を刺戟することによつて心を絶えずこれ等の事物に引きつけ、新しいものに注意し、対象がいろいろに変化することを喜ぶ傾向となるように促すのである。かようにして最初の年月は通常外を見ることに用いられ向けられるのである。この時期に於ける人々の仕事は外界に見出されるものを学び覚えることである。そしてかように外界の感覚に絶えず注意して成長するので、彼等がやや成熟期に達するまでは彼等の内面に起る事柄に関して何等かの相当の反省をなすことは稀である。そして或る人々は殆ど全くそういう反省をしない。

九 精神 *soul* は知覚しはじめるときに觀念を持ちはじめ——何時人ははじめて何等かの觀念を持つかと問うことは、何時彼が知覚しはじめるかと問うことである、觀念を持つということと知覚とは同一の事であるから。精神は常に考えているということ\*、そして精神はそれが存在する限りは常にそれ自身



の中にいろいろな觀念<sup>イデア</sup>の現実の知覚を持つて居るということ、また現実の延長が物体と不可分離であるが如く、現実の思考は精神と不可分離であるということが一つの説をなしていることを私は知つて居る。この説がもしも真であるならば、人の觀念<sup>イデア</sup>の起原を尋ねることは、人の精神の起原を尋ねることと同一である。何となればこの説に依れば精神とその觀念<sup>イデア</sup>は、物体とその延長の如く、両方とも同時に存在しはじめることとなるであらうから。

\* 心は考えるということのみを本性としている実体であるというデカルトの定義を指している。

一〇 精神は常に考えはしない、何となればこの事に対する証明がないから——然し乍ら精神が肉体の組織の最初の萌芽または肉体に於ける生命の初に先立つて、或いはこれと同時に、またはこれよりいくらか後になつて存在すると考えられるか、ということはこの事柄をもつとよく考えている人々の論ずるに委せよう。私は自分が、常に觀念<sup>イデア</sup>を考察して居ると自ら知覚しないような魯鈍な精神を持つて居る者の一人である、ということを確認する。また私は、物体にとつて常に動くことが必要であると考えられないと同様に精神にとつて常に考えることが必要であると考えることも出来ない。何故なれば、私の考えるところでは、觀念<sup>イデア</sup>の知覚は精神に対して the perception of ideas being to the soul、運動が物体に対するようなものであり、精神の本質 essence ではなくその作用の一つだからである。それ故に考えることは確かに精神の固有の作用と考えられるけれども、しかもなお精神は常に考えている、即ち常に働いていると仮定する必要はない。この事は恐らくすべての事物の無限の創造者であり守護者であり、まどろむことも眠ることもない神の特権であらうが、如何なる有限の存在者にも、許容されぬことであり、少なく

も人間の精神には許されぬことである。我々は経験によつて、我々が時々考えるということを確かに知つてゐる。そしてこのことから次のような間違ひのない結論を引き出す——即ち我々の中には考える力を持つた或るものがある。然しこの実体が常に考えるか否かは我々は経験が我々に教える以上には確かにすることが出来ない。何となれば現実的思考が精神にとつて本質的でありまたこれと不可分離であると言ふのは、問題となつてゐる事を論拠として仮定することであり、それを理由を以て証明することではない。しかももしこれが自明的な命題でないならばこの事はなすべき必要のあることである。然しこの「精神は常に考える」ということが自明的な命題であるかどうか、即ちあらゆる人がこれをはじめて聞いて承認するかどうかは私は各人に訴える。「私が昨夜一晩中考えていたかどうかは疑わしい。この問題は事實に関する問題であるから、これに對する証明として丁度今問題となつてゐる仮定を持つて來ることは先決問題を論拠として仮定することである。この証明の仕方は結局かういうことになる——即ち私はどうしても昨夜一晩中考えていたに違ひない、何故なれば私自身は自分がいつでも考えているということを知覚することは出来ないが、他の人が私は常に考えていると仮定するからである。然し乍ら自分の意見を好んでゐる人々は問題になつてゐることを仮定するのみならず、また間違つた事實を主張する。然らずんば、どうして或る人が、我々は眠つて居る間にはある物を感じないが故にその物はないということを私のなす推理とすることが出来るか。私は、人は眠つて居る間には精神の存在を感じないが故に人には精神はないと言われないが、私は人は覺めていても眠つていても如何なる時にも、精神の存在を感じることなしに考えることは出来ないと言ふ。我々がこれを感じずということは、我々の思

考以外の如何なるものにとつても必要ではない。そして我々の思考にとつては、この事は必要であり、また我々がこれを意識することなしに考えることが出来るまでは常に必要であらう。\*」

\* 〔中の部分は第二版に於て加えられたものである。〕

【一 略 It is not always conscious of it.】

【二 略 If a sleeping Man thinks without knowing it, the sleeping and waking Man are two Persons.】

一三 思うに、あらゆる仮睡<sup>うたたね</sup>が精神は常に考えていると教える人々の説を揺がすのである。少なくとも何時か夢見ることなしに眠るような人々は、彼等の思考が時には四時間も彼等が知らずに働くということを決して確信することは出来ない。そしてもし彼等が丁度眠つて居るところをとらえられて、眠りつつ考えて居る真ただ中に起されるならば、それについてどんな風な説明をも与えることは出来ない。

一四 人々は夢を見てもこれを思い出さないのであることは主張しても無益である——恐らく、精神は最も健全な睡眠中にも考えるが、記憶がこれを把持しないのだと言う人があるであらう。眠っている人の精神がある瞬間はしきりに考えて居り、次の降間にその人が目覚めた時の精神はすべてのこれ等の思考をほんの少しも覚えていないし、また思い起すことが出来ぬということは頗る解し難いことであり、これを信ぜしめるには単なる主張より以上の何かもつと有力な証明を要するであらう。何となれば、いきなり有無を言わず、ただそう言われただけで、誰が、非常に大部分の人々が彼等の一生の間に毎日数時間何事かを考える、そしてこの事はこのように彼等が考えて居る真最中に彼等が問われたとしても、彼等はこれに就いて何事もおぼえていることが出来ないというようなことを想像することが出来

76  
るであらうか。

【一五 略 Upon this Hypothesis, the Thoughts of a sleeping Man ought to be most rational】

【一六 略 On this Hypothesis, the Soul must have Ideas not derived from Sensation or Reflection, of which there is no Appearance】

一七 もし私が自分で知らずに考えて居るならば、他の如何なる人もこれを知ることとは出来ない——非常な自信を以て精神は何時でも現実に考えていると我々に教える人々に対して、私は彼等が、子供の精神が身体と結合する前または丁度結合するとき、即ち子供の精神が感覚によって何等の観念<sup>イデア</sup>をも受け取らないうちに、彼等の精神に存在するのは如何なる観念<sup>イデア</sup>であるかをも亦我々に教えてくれることを望む。私の考えでは眠っている人の夢は、大抵奇妙な組合わせになつてはいるが、すべて目覚めている人の観念<sup>イデア</sup>から出来上つている。もし精神が感覚または反省から引出したのでないそれ自身の観念<sup>イデア</sup>を持つてゐるならば、（もし精神が身体から何等かの印象を受け取る前に考えたのであるならば、精神はかような観念<sup>イデア</sup>を持つてゐるに違ひないのであるが）精神が内々で考えていて（非常に内々なのでその人自身もこれを知らない）、これ等の観念<sup>イデア</sup>から目覚める瞬間にそのうちのどの観念<sup>イデア</sup>をも決して把持することなく、そしてそこで新しい発見を以てその人を喜ばせるということとは不思議である。人の一生の間に精神が、その純粋な生れ付きの思想、即ち精神が身体から何物かを借りて来る前に持つて居つたような観念<sup>イデア</sup>の一つをも想い起さないと、また精神は目覚めている人の眼前に、樽<sup>\*</sup>の強い香りがして、明らかに身体との結合をもとするものの他には如何なる観念<sup>イデア</sup>をも齎さぬということとは不思議である。

\* 人間の身体を樽に喩えたのであろう。

一八 精神は常に考えるということをどんな人でもどうして知るか、何となればもしこれが自明的な命題でなければ証明を必要とするから——また私は、人間の精神、または全く同じことであるが、人間は常に考えるということを非常な自信を以て言明する人々から、如何にして彼等がこの事を知るようになるかを学ぶことを喜ぶ。

〔一九〕意識とは人の自分の心中に起る *passes in a man's own mind* 事の知覚である。私自身がそれを知覚しないのに他の人が、私が何事かを意識しているということを知覚することが出来るであらうか。この場合如何なる人の知識も彼の経験を超えることは出来ない。ある人を熟睡から呼び醒して、その瞬間彼が何を考えていたかを問うて見よ。もし彼が自分でその時考えていたことを何も意識しなければ、彼は考えていたのだということに彼に保証することの出来る人は著しい思考の推量者であるに違いない。この人はより以上の理由を以て彼は眠つてはいなかったのだと彼に保証することは出来ないであらうか。これは哲学を越える事であり、私が自分の心中に何も見出すことが出来ない場合に、私の心中の思想を他人に対して発見する天啓に他ならない。そして私が自分で考えていると知覚することが出来ず、また自分は考えていないと明言して居る時に、私が考えているということを確実に知ることが出来、そしてしかも犬や象が彼等が考えているということを我々に語らないだけで、その事の想像され得るあらゆる表示を我々になす場合に彼等は考えていないということを知り得るような人々は必ず鋭敏な洞察力を持つてゐるに違いない。然しこれは、精神は常に考える実体であると定義するに過ぎず、これで仕事は終

つて仕舞うのである。もしかような定義が何等かの權威のあるものであるならば、私はこれが多くの人々をして、自分は全く精神を持たぬのではないかと思わしめる以外何の役に立ち得るかを知らぬ。何となれば彼等は自分等の生涯のかんりの部分が考えることなしに過ぎ去ることを見出すからである。というのは私の知っている如何なる定義も、また如何なる学派の仮定も不斷の經驗を打ち破る程有力ではない、そして世間にか程多くの無益な論争と喧騒を起すものは恐らく、我々が知覚すること以上に知つたかぶることである。

二〇 それ故に私は、感覺が精神にその考察の対象となる觀念イデアを供給する前に精神が考えると思ふべき何等の理由を見ない。そしてこれ等の觀念イデアが増し、保持されるに従つて、精神は練習によつてそのいろいろの部分に於ける思考の能力を改善するようになる。またこれと同様に後になつて精神はこれ等の觀念イデアを複合し自らの作用を反省することによつて、記憶したり、想像したり、推理したり、その他の仕方であることがより容易くなると同様にその貯えを増すのである。

### 【二一 略】

### 【二二 略】

【二三】 それでも、何時人、は何等かの觀念イデアを持ちはじめると問われるならば、私は、彼がはじめて何等かの感覺を持つ時、というのが眞の答えであると思う。何となれば感官が何等かの觀念イデアを運び入れるまでは、心の中には何等の觀念イデアもないように思われるから、悟性の中の觀念イデアは感覺と時を同じうするものであると私は思う。この感覺は悟性の中に或る知覚を生ずるような、身体の或る部分に起される

印象または運動である。心が最初に、我々が知覚、記憶、考察、推量などと呼ぶような作用を以てその働きをなすと思われるのは、外界の対象によつて我々の感官に与えられるこれ等の印象に關してである。

二四 すべての我々の知識の起原 *Original*——そのうちに心は感覺によつて得られた觀念<sup>イデア</sup>に關するそれ自身の作用を反省するようになり、これによつて自ら新しい一揃の觀念<sup>イデア</sup>を貯えるようになる、これを私は反省の觀念と呼ぶ。この二つ即ち、心の外にある外的対象によつて我々の感官に与えられる印象と心そのものに内在的で固有力から生ずるそれ自身の作用——これも亦心自身によつて反省されると心の考察の対象となるのである——とが、私が前に言つたように、すべての知識の起原である。そこで人智の最初的能力 *the first capacity of human intellect* は、外的 *outward* 対象によつて感官を通じて与えられるものでも、または心がそれ自身の作用を反省することによつて与えられるものでも、とにかくそこに与えられる印象<sup>\*</sup>を受け取るに心 *the mind* が適して *fitted* いるという事、である。これが人間が如何なるものの発見に向つて進む場合にも最初の第一歩であり、その上に人間がこの世に於て自然に持つようになるすべての思考 *notions* を築き上げるべき土台である。雲の上に聳え天迄も届くようなすべての崇高な思想もここにはじまりここに基づくのである。心が遠くかけ離れた思索をして非常な広い領域をさまよつて高尚になつていように思われるときも、心は感覺、または反省<sup>イデア</sup>が考察するように提供した觀念<sup>イデア</sup>以外には一歩も動いていないのである。

\* ここでロックは心を単に受動的なもののように語っているが、それによつて彼は觀念を受け取ることに於てさへも或る能動性があることを否定しようとしているのではない。感官に對する印象は、注意が他に向けられているときは

## 第二卷 觀念に就いて

「悟性に於て気付かれない」ことが屢々あるから、これだけでは充分ではない。彼の言わんとする所は「単なる有り  
の俚の知覚」の不随意性であつて、これは後に論ぜられるが如き單純觀念から複雑觀念を「形成」する場合の自発的  
な能動性と對比されるものである。

二五 單純 simple 觀念を受け入れるとき悟性は *大抵受動的 passive* である——この部分に於ては悟性は  
單に受動的である。そして悟性がこれ等の端緒 *beginnings*、謂わば知識の材料 *materials*、を持つか持たぬ  
かは悟性の力の及ばぬことである。何となれば、我々の感官の對象は多くはその固有の觀念を、我々が  
欲しようと欲しまいと我々の心に押し付ける、そして我々の心の作用は我々をして少なくもこれ等を漠  
然と知らしめずには置かないからである。如何なる人も彼が考えるとき彼は何を為すかを良く知らずには  
いられない。これ等の單純觀念が心に提供されるとき、悟性はこれを持つことを拒むことが出来ず、  
また刻み付けられるとき、これを変えることが出来ず、またこれを拭い去つて悟性自身で新たなもの  
を作ることが出来ないのは、丁度鏡がその前に置かれた對象が鏡の中に生ずる映像または表象を拒絶し  
たり、変更したり、また抹殺したりすることが出来ないのと同様である。我々を囲む物体が我々の器官  
を色々に感ぜしめるに従つて、心は印象を受けることを強いられ、これ等の印象に結び付いている觀念  
those ideas that are annexed to them を知覚することを避けることが出来ないのである。



## 第二章 單純觀念に就いて simple ideas

一 複合的な現象ではない Uncompounded appearances——我々の知識の性質 nature、様式 manner 及び範圍 skien をよりよく理解するためには、我々の持つてゐる觀念に關して一つの事が注意深く觀察さるべきである。そしてそれは、これ等の觀念のうち或るものは單純で、また或るものは複雑 complex だということである。

我々の感官を感じしめる affected 諸性質 qualities は事物そのものの中では相互の間に少しの分離も距離もない程よく結合し混合して居るのであるが、しかもこれ等の性質が心中に生ずる produce 觀念は感官を通じて單純に混り氣なく這入つてくることは明らかである。というのは視覚と觸覚はしばしば同一の對象から同時に異なつた觀念を取り入れる、例えば人は同時に運動と色とを見るしまた手は同一の蠟の片に於て柔かさと温かさとを感じる、然し乍ら同一物体中にかように結合されている單純觀念は、異つた感官によつて這入つて来るものと同様に、全く別々のものである。即ち人が一片の水に於て感ずる冷たさと堅さとは百合の香と白さ、または砂糖の味と薔薇の香との如く心の中の別々の觀念である。そして人にとっては彼がこれ等の單純觀念に關して持つてゐる明晰、判明な知覚程明らかなものではなく、これ等の知覚は各々それ自身複合的なものでないからその中には心中の一つの様な現象或いは概念以外の何物をも含まず、また異なつた諸觀念に分析され得ないのである。

二 心はこれ等の觀念を作ることにも亡くすることにも出来ない——我々のすべての知識の素材 materials

であるこれ等の單純觀念は上述の二つの方法即ち感覺及び反省によつてのみ心に浮べられ *are suggested* また与えられる *furnished* のである。悟性は、一度これ等の單純觀念を貯えるようになると、殆ど限りなく多様にこれ等の觀念を繰り返し、比較し、結合する能力を持つ、そしてそれ故に新たな複雑な觀念を任意に作る事が出来る。然し乍ら最も高い才智や広い悟性の力も、どんなに早い *quickness* または多様な思考によつても、心中に前述の方法によつて取り入れられない一つの新しい單純觀念をも作り出し *invent* または形作る *frame* ことは出来ないし、また悟性の如何なる力も既に心中に存在する觀念を亡くすることは出来ない。何となれば自分自身の悟性というこの小さな世界に於ける人間の支配權は、目に見える諸々の事物の大きな世界に於けると殆ど同じであり、この大世界に於ては彼の力はたとえ技術と熟練とを以て運用されようと彼の手もとに拵えられている材料を複合し、分離すること以上には達するものでなく、新しい物質の最小の微粒子を作つたり、または既に存在するものの一つの微分子を亡くするということに向つては何事をも為すことを得ないのである。これと同様に、*自個*【自己】の悟性の中に、感官によつて外的 *external* 対象から受け入れられ、または反省によつて感覺による觀念に関する彼自身の心の作用から受け入れられないような單純觀念を形作ろうと企てる人は誰でも、かような事の不可能であることを自ら知るであらう。私は誰か或る人に彼の口蓋を決して感ぜしめたことのない或る味を想像して見たり、または彼が決して嗅いだことのない香の觀念を形成して見るように試みてもらい度い。この人がこの事をなし得る時は、私も亦盲人は色の觀念を持ち、聾の人は眞の明らかな音の表象を持つということゝを断定しよう。

三 我々の持つてゐる以外の器官を持ち、有形の物体の知識 *the notice of corporeal things* を悟性に運び入れるための方法を神が人間に与えた五箇——普通の数え方に従えば——よりも多く持つような創造物を作ることが、神にとつて不可能であると考えすることは出来ないのであるが、しかも今述べた理由によつて私は、如何なる人にとつても、音、味、香、見得る性質、及び触れ得る性質以外に物体を認知し得るための如何なる他の性質をも、物体に於て、たとえ如何様に構成された物体であつても、想像すること、は可能でないと思うのである。そしてもし人類が四つの感官しか持たぬように造られていたならば、第五感の対象をなす性質が我々の認知、想像及び概念から隔たつてゐるのは、丁度今第六、第七または第八感に属する性質が恐らくこれ等の作用から離れてゐるのと同様である。然し乍らこれ等の感覚は、この広漠とした巨大な宇宙のどこか他の部分の或る他の創造物がこれ等を持ち得るといふことを否定するのは甚しい妄断である。高慢にも万物の最高位に自らを置くことなく、この宇宙という建物の無限なること、及び自分の關係するこの小さな取るに足らぬ宇宙の一部分の中に見出される非常な多様性を考える人は、宇宙の他の棲家には他の異なつた知的存在者があるかも知れず、この者の能力については、丁度用筆筒の一つの抽出しに閉じ込められてゐる虫が人間の感覚や悟性について何も知らぬように、自分は殆ど何の知識も理解も持たないのだという考えに傾くであろう。何故なればかように多様で優れてゐることが造物主の叡智と力に適してゐるからである。私は此処では人間は五感しか持つてゐないという普通の意見に従つた。然し怒らくもつと多くの感覚が正當に数えられるであろう。けれどもこれ等の想定の間、何れも私の目下の目的にとつては同様に役立つのである。

## 第二卷 觀念に就いて

## 第三章 一つの感官の觀念に就いて

一 單純觀念イデアの分類——我々が感覺によつて受け入れる觀念イデアをよりよく知るためには、これ等の觀念イデアが我々の心に近づき、我々によつて知覚し得るようになる色々な方法に關して、これを考察することは、我々にとつて間違ひではないであらう。そこで

第一に、唯一つの感官によつて我々の心 *our minds* に這入つてくる若干の觀念イデアがある。

第二に、一つより多くの感官によつて心 *mind* に運び入れられる他の諸觀念イデアがある。

第三に、反省のみによつて得られる他の諸觀念イデアがある。

第四に、感覺及び反省のすべての方法によつて進行し、心に浮べられる若干の觀念イデアがある。

我々はこれ等の觀念イデアをこの數項目のもとに別々に考察しよう。

第一に、若干の觀念イデアはこれ等を受け取るに特に適している一つの感官によつてのみ這入つて来る。かようにして光及び色即ち白、赤、黄、青及びこれ等の色のいろいろな度合即ち色合及び混合色である緑、深紅、紫、紺青その他はただ眼によつてのみ這入つて来る。色々な味と香は口蓋と鼻によつて這入つて来る。もしもこれ等の器官またはこれ等の印象を外から脳髓即ち心の接見室 *presence-room* (そう呼んでもよいと思うが) の引見に迄運ぶ導管である諸々の神経が、その何れでもその機能を成し遂げない程調子が狂っているならば、これ等の印象は、這入ることの出来る如何なる裏口をも持たず、悟性の面前に進み、悟性によつて知覚せられるための他の如何なる道をも持たないのである。

触覚に属するもののうち最も重要なのは熱、冷、及び固体性である。他のすべては滑かとか粗いというような、殆ど全く感知し得べき外形であり、または堅いと柔い、及び折れ難いと脆いというような、部分がより強く附着しているか、より弱く附着しているかということであり、これは充分よく分つてゐる。

二 単純觀念<sup>イデア</sup>で名前を持つてゐるものは僅かである——私は各々の感官に属するすべての特有な単純觀念<sup>イデア</sup>を数え上げることには不必要であると思う。またこの事は我々がそうしようとしても不可能である、何故なれば大抵の感官に属するこれ等の觀念<sup>イデア</sup>は我々がこれに対して持つてゐる名前より遙かに多数あるからである。香の種類は、世界中の物体の種類より多くないとしても、殆どこれと同じ位沢山あるが、それ等の多くは名前を持つてゐない。香がよいというのと臭いというので普通これ等の觀念<sup>イデア</sup>を表すには我々の間に合うが、これは結局これ等の香を愉快または不愉快であると呼ぶのと大差ない。然るに薔薇と堇菜<sup>すみれ</sup>の香はともによい香であるが、確かに、明らかに判別せられる觀念<sup>イデア</sup>である。また我々が口蓋によつてその觀念<sup>イデア</sup>を受け取るいろいろな味も殆どこれと同様に多くの名前を与えられてゐない。甘い、苦い、酸い、渋い、及び辛いというのが、殆どすべての種類の創造物に於てのみならず、同一の植物、果実または動物の違つた部分に於て判然と認められる無数の多種の味わいを名付けるための形容詞の殆どすべてである。同じ事が色及び音に就いても言われ得る。それ故に、私は此処に与えつつある単純觀念<sup>イデア</sup>の説明に於ては、我々の目下の目的に対して最も重要なもの、或いはそれ自身では注意され易くないが、しかも非常に屢々我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>の要素となるようなものを述べることを以て満足しよう。これ等の中

86  
に私はたしかに固体性を数えてもよいであろうと思う、故に次章に於てはこれを取り扱おう。

【第四章 固体性に就いて — 本 PDF では略】

## 第五章 数箇の感官による單純觀念イデアに就いて

一つ以上の感官 sense によつて我々の得る觀念イデアは、空間、或は延長、形態、静止及び運動の觀念である。というのはこれ等のものは眼及び觸覺の両者に感知し得る印象 perceptible impressions を与え、我々は物体の延長、形態、運動、及び静止の觀念イデアを、見ることに及び触れることの両方によつて受け取り我々の心に運び入れることが出来るのである。然し乍らこれ等については別の場所でもつと詳細に語る機会があるから、ここでは唯これ等を枚挙するに止める。

\* 本巻、第十三—第十五章参照。

## 第二卷 観念に就いて

## 第六章 反省による単純観念に就いて

一 これは心の他の諸観念<sup>イデア</sup>に関する心の作用の観念<sup>イデア</sup>である——心は、前の数章に於て述べた諸観念<sup>イデア</sup>を外部から受け取るが、その観察を内部に向けてそれ自身の上に転じ、その持っている観念<sup>イデア</sup>に関する心自身の働きを観察するときは、心はそこから他の観念<sup>イデア</sup>を得、これ等の観念<sup>イデア</sup>は外物から受け取ったどの観念<sup>イデア</sup>と同様に、心の考察の対象となることが出来るのである。

二 知覚の観念<sup>イデア</sup>及び意志の観念<sup>イデア</sup>を我々は反省から得る——最も屢々考察され、また非常に屢々起るの  
で注意しようとする人は誰でも自分自身の中に気の付く大きな主要な心の働きは次の二つである、即ち知覚、<sup>\*</sup>perception 又は思考、<sup>\*</sup>thinking、及び意思(volition)、又は意志(willing)である。思考の力は悟性(understanding)と呼ばれ、意思の力は意志(will)と呼ばれる、そして心に於けるこれ等二つの力 powers、又は才 abilities は、能力、faculties と名付けられる。反省によるこれ等の単純観念の様態の幾つか、例えば想起、remembrance、判別、discerning、推理、reasoning、判断、judging、知識、knowledge、信仰、faith、等に就いては後に語る機会があるであらう。<sup>\*</sup>

\* 知覚を思考と同じものとなすのは知覚という語の異常な使い方である。ロックは普通の意味の知覚は本巻第九章で論じている。彼はまた言葉の意味を知ること或は観念の一致または不一致を知ることをも知覚と言っている(第四巻、第二章)。

\*\* 第二巻、第十、第十一章、及び第四巻の後の方の諸章参照。



【第七章 感覚及び反省の両者による単純観念イデアに就いて — 本 PDF では略】

【第八章 我々の単純観念イデアに関する若干の更に進んだ考察 — 本 PDF では略】

## 第九章\* 知覺に就いて

一 これが反省による最初の單純觀念である *It is the first simple idea of reflection.*——知覺 *perception* は、我々の觀念に關して行使される心の最初の能力である如く、それは我々が反省によつて得る最初の最も單純な觀念 *simplest idea* であり、若干の人々は一般にこれを思考 *thinking* と呼ぶ。然し思考とは、英語の本来の語法では、心のその觀念に關する作用で、その場合心が能動的であるような種類のものを意味する、この際心は或る程度の自発的な注意を以て何ものかを考察するのである。というのは單なる有りの俚の知覺に於ては心は大部分單に受動的であり、その知覺するものを知覺することを避け得ないのである。

\* この章及び次の二つの章は全く心理學的問題を論じている。

二 心が印象 *impression* を受けるときのみある——知覺とは何であるかということ、あらゆる人は私の如何なる論說によるよりも、彼が見たり、聞いたり、感じたりなどし、或いは考えるとき自分自身何をするかを反省することによつてよりよく知るであろう。誰でも自らの心の中に何が起るかを反省する人は知覺を見逃すことは出来ない、そしてもし彼が反省しなければ、世界中のすべての言葉もそれに就いての何等の概念をも彼に持たしめることは出来ない。

(三) たとえ如何なる變化が肉体に起ろうとも、もしそれが心に到達しないならば、即ち如何なる印象が外部に与えられようとも、もしそれが内部に於て氣付かれないならば、何等の知覺も無いということとは確かである。火は我々の肉体を焼くが、その運動が腦髓迄繼續され、其處で熱の感じまたは苦痛の

觀念<sup>イデア</sup>が心の中に生ぜられない限りは、火は木片に及ばず結果以外の何等の結果をも伴わないのである。現実の actual 知覚とはかような感じ the sense of heat または觀念<sup>イデア</sup> idea of pain を生ずることである。

〔四〕人は、彼の心が熱心に或る対象の考察に従い、其処に在る或る觀念<sup>イデア</sup>を注意して吟味して居る間は、彼の心は、通常音の觀念<sup>イデア</sup>を生ずる場合と同一の変化によつて聴覚器官に与えられる発音物体の印象に少しも気付かないということを如何に屢々彼自身の中に認めるであらうか。この場合に於ける感覚の欠如は器官の何等かの欠陥によるのではなく、またその人の耳が實際彼が聞く他の場合よりもより少ししか影響を受けないということによるのでもなく、通常その觀念<sup>イデア</sup>を生ずる所のものが、普通の器官によつて運び入れられるのではあるが、悟性の中に於て気付かれずそれ故に心に何等の觀念<sup>イデア</sup>をも刻み付けない imprinting no idea から、従つてそこに何等の感覚をも生ぜぬのである。

五 子供は胎内に於て觀念<sup>イデア</sup>を持つかも知れぬが、彼等は何等の生得的な觀念<sup>イデア</sup>をも持たない——それ故に私は、子供は胎内に於て彼等に影響する対象に関して彼等の感官を使用することによつて、彼等を囲む物体かまたは彼等の蒙る欠乏或いは病気の不可避的な結果として、或る二三の觀念<sup>イデア</sup>を彼等の生れる前に受けるということを疑わない。これ等の觀念<sup>イデア</sup>の中で（もし余りよく吟味され得ないものに関して推測することが許されるならば）、私は飢餓及び温かさの觀念<sup>イデア</sup>は、恐らく子供の持つ最初のものに属し、彼等が減多に再び手離すことのない二つの觀念<sup>イデア</sup>であると思う。

〔六〕しかもこれ等の単純觀念<sup>イデア</sup>は若干の人々が主張し、我々が先に拒けた生得的原理 innate principles とは遙かに異なるものである。何故なればこれ等の觀念<sup>イデア</sup>は感覚の結果であつて、その生ぜられる方法に於

て感覺によつて生ずるその他の觀念イデアと唯時間的に先行するといふ点に於てのみ異なるからである。

〔七〕それ故に子供が生れて後にこれ等の觀念イデアは最も早く刻み付けられているもので、これが偶々彼等に対して最初に示される感覺的性質 *sensible qualities* となるのである。これ等の中で光は相當に著しいものでありまた最も弱い効果を持つものでもない。そして心が何等の苦痛を伴わないようすすべての觀念イデアを持つことを如何に切望しているかは、初生児に於て觀察し得ることによつて幾らか推量せられる、この初生児はどんな風にでも人の好きなように寝かしても、常に光の来る所の方へ彼等の眼を向けるのである。

八 感覺による觀念イデアは屢々判断によつて変えられる——我々は更に、我々が感覺によつて受ける觀念イデアは屢々成人に於ては、我々がこれに気付くことなしに、判断 *judgment* によつて変えられるものだということ、知覺に関して考察すべきである。我々が眼の前に或る一様な色、例えば金色、雪白色或いは黒玉色の円い球を置くとき、これによつて我々の心に刻み付けられる *imprinted* 觀念イデアは、色々に影のついた平面の円 *flat circle* で我々の眼に達する色々な度合の光と輝とを伴うものであるということは確かである。然し我々は習慣によつて、突面体が如何なる種類の現象を我々の中に生ずる習わしであるか、物体の感覺的形態の相違によつて光の反射の中に如何なる変化が起されるか、を知覺するに慣れているので、判断力 *judgment* が直ちに、深く染み込んだ習慣によつて、現象をその原因 *the appearances into their causes* に作り変える、かくして実は形態をなす所の色々な影や色である所のものを、判断力は形態の徴しるしとして

通用せしめ、我々がそこから受ける観念<sup>イデア</sup>は、絵に於て明らかであるが如く、色々な色の付いた平面に過ぎない場合に、突面の形態及び一様な色という知覚を自ら作り上げるのである。<sup>1</sup>「この目的に対して私はここに一つの問題を挿入しよう。それは非常に発明の才あり篤学なる真の知識の助成者である、博学な尊敬すべきモリニュー氏が、数ヶ月前手紙に書いて私に送つて下さつた問題\*で、こういう事である。「生れながらにして盲の人が今や成人して、彼の触覚によつて同一の金属で出来て居りそして殆ど同一の大きさの立方体と球とを区別することを覚えて、その両者に触れた時は、何れが立方体で何れが球であるかを告げることが出来るようになってゐる場合を仮定せよ。そこでその立方体と球がテーブルの上に置かれその盲人がこれを見せしめられると仮定せよ。敢えて問う。盲人は今や、これに触れないうちに、彼の視覚によつて何れが球であり何れが立方体であるかを区別し告げることが出来るかどうか。」これに対して鋭敏にして賢明なるこの問題の提出者は答える。「否。何となれば彼は球及び立方体が如何に彼の視覚に影響するかという経験を得たけれども、彼は未だ、彼の触覚にしかじかの影響を与えるものは、彼の視覚にしかじかの影響を与えるに違ひないとか、または不平等に彼の手を押した立方体の突出した角が、普通我々が立方体に於て見るように彼の眼にも見えるというような経験を得ていないからである。」私は自分が友人と呼ぶことを誇るこの思慮ある紳士とこの問題に対する答に於て一致している。そして私は、この盲人は彼の触覚によつて球及び立方体を間違ひなく名指し、触知せられるこれ等のものの形態の相違によつて確実にこの両者を区別することは出来ても、彼がこれ等のものを唯見ているだ

i 「立体視」が知られていない時代の見解であろう。次の後年視力を得た人の件と同一には論じられない。

けでは一目にして何れが球であり、何れが立方体であるかということを確認に言うことは出来ないであろうという意見である。読者が経験、教訓、及び修得した觀念イデアを少しも用いず、また少しもそれ等の助けを借りていないと考えている場合に実はこれ等のものに如何に多くを負うているかを考察する機会を与えるために、私は上の事を述べてこれを読者に委ねるのである。この注意深い紳士が更に次の如く附け加えているから私は殊更そうし度いのである、即ち私の書物を契機としてこの事を色々な非常に惻怛な人々に提議したが、彼の理由を聞いて説服される前に彼が真理であると考える答えをすぐはじめからこの問題に与える人は殆ど一人も無かつたというのである。」

\* ダブリンのトウリニイティー・カレッツの William Moynaux(1656-98) という人の手紙で、ロックを熱烈に称讃した人である。この手紙は一六九三年三月二日の日附になって居り、この箇所は一六九四年の第三版に於て挿入されたものである。

九 然しこの事は視覚によつて受ける觀念イデアに於てのみ普通のことであると思う。何となればすべての我々の感覚の中で最も包括的なものである視覚は、この感覚にのみ特有なものである光及び色の觀念イデアを我々の心にもたらすのみでなく、またこれ等とは遙かに異なる空間、形態、及び運動の觀念イデアをもたらす、そしてこれ等の觀念イデアの色々な変化は視覚の本来の対象即ち光及び色の現れ方を変えるのである。それ故に我々は習慣によつて、一方を以て他方を判断するようになるのである。この事は多くの場合に、固定した習慣によつて、屢々我々の経験にあらわれる物のうちに非常に堅実にまた急速に行われるので、我々は我々の判断によつて形成される觀念イデアであるものを我々の感覚の知覚と考える、それ故にこれ等の中の

一方即ち感覺による觀念は、ただ他方のものを惹き起すにのみ役立ち、それ自身には殆ど注意されない。例えば注意と理解とを以て読んだり聞いたりしている人は、文字や音には殆ど注意を払わずして、これ等のものによつて彼の中に呼び起される觀念イデアにのみ注意するが如くである。

一〇 また、もし我々が心の働きが如何に急速に行われるかを考察するならば、我々は上の事がかくも殆ど気付かれずに為されるということを訝かる必要はない。というのは心そのものが何等の空間をも占めず何等の延長をも持たないと考えられるように、その働きはまた何等の時間をも要しないように思われ、多くの働きの一瞬間の中に寄せ集められているように思われるからである。私はこの事を肉体の働きの比較して言うのである。誰でも自分自身の思考を反省するという骨折りをする人ならばこの事を容易く彼自身の思考の中に認めるであろう。言葉に表して一步一步他人に示すに要する時間と考えると誠に長い証明であると言われ得るような或る証明のすべての部分を如何にして我々の心は謂わば一瞬間のうちに、一瞥を以て見るのであろうか。更にもし我々が、習慣によつて物事を容易く為し得るようになってゐる事が、どんなにこれ等の物事を屢々我々がそれに気付かぬのに我々の中に起らしめるかを考えるならば、我々は上の事が我々の中に於てかくも殆ど気付かれずに為されるということに対してそれ程驚くに当たらないであろう。習慣、殊に非常に早くから始められるような習慣は、終には我々の中に屢々我々の觀察を免れるような作用を生ずるようになる。我々は一日の中に如何に屢々眼瞼まぶたを以て我々の眼を蓋いしかも我々が全く暗黒の中にいるということを知覚せずにいるであらうか。習慣によつて或る附加語の使用を覚えた人々は、殆どあらゆる文章の中に、他人は気が付くが彼等自身は聞きもせず気

## 第二卷 觀念に就いて

が付きもしないような音を発する。そしてそれ故に、我々の心が屢々その感覺による觀念イデアをその判断による觀念イデアに変え、そして一方をして唯他方を惹き起すに役立たしめ、我々はこの事に氣付かないということはそんなに不思議ではないのである。

一 知覚は動物とより下等な生物との間の相違 *difference* のもとをなす——私にはこの知覚の能力は動物界と自然界のより下等な部分の間の区別 *distinction* をなすものであると思われる。何となれば多くの植物は或る程度の運動をなし、また色々な仕方であつてこれに他の物体を当てると非常に活潑にその形態及び運動を変え、そのために動物に於て感覺に従つて起る運動と幾らか似ている運動によつて感動性植物 *sensitive plants* という名を得ているのであるが、しかも思うにこれはすべて單なる機械的運動であり、水蒸氣の分子の注入による野生の麦の芒刺ぼうし【麦のひげ】の廻転、或いは水を注ぐことによる纖維の短縮より以外の如何なる方法によつても生ぜられないのである。これ等すべての事はその主体に於ける何等の感覺をも伴わずに行われた、何等かの觀念イデアを持つたり受けたりすることもないのである。

一二 知覚は或る程度に於てはすべての種類の動物に在ると私は信ずる、然し或るものに於ては恐らく自然によつて感覺を受けるために備えられている通路が非常に少数で、これによつて受ける知覚が非常に不明瞭で鈍いので、他の動物に見られるような感覺の敏速と多様という点で著しく欠けているものもある。

〔一二〕 思うに我々は牡蠣またはトリ貝の作りから、この貝は人間または若干の他の動物程多数のまた敏速な感官を持つていないしました、もし持つていたとしても、一つの場合から他の場所へ移動するこ



との出来ないその状態に於ては、これ等の感官によつてより良くはならないであろうという事を合理的に論斷することが出来る。遠方から利益または害悪がその中にあるということが分るような物体の所へ移動しまたはそれから離れることの出来ない生物に取つては視覚及び聴覚は如何なる利益を与えるであろうか。そして偶然に置かれた場所にじつとしていて偶然其処に到達するより冷い水或いはより温い水、奇麗な水或いは汚い水の流れを受けねばならぬ或る動物にとつては、感覚が敏速であるということとは都合ではなからうか。

〔一四〕然しなお私は其処には或る弱い鈍い知覚があり、これによつてこれ等の動物は完全なる無感覺と區別されるのであると考えざるを得ないのである。

一五 知覚は知識の入口である——そこで知覚は知識への第一歩であり、第一段階であり、また知識のすべての材料 materials の入口であるから、或る人またはその他の或る生物が持つ感官が少ければ少ない程、またこれ等の感官によつて作られる印象がより少なくより鈍い程、またこれ等の感官に關して用いられる能力がより鈍い程、それ丈彼等は若干の人々に見出される知識に、より遠ざかつているのである。然しこの事には非常に色々な程度があるのであるから（人々の間に於て認められるが如く）、動物の様々な種に於ては確実に見出すことは出来ないし、況んや動物の個々の個体に於ては尚更のことである。私にとつてはただ知覚はすべての我々の知的能力の最初の作用であり、すべての知識の心へ這入る入口であるということを此処に言つただけで充分である。そして私はまた動物と動物よりも下等な階級の生物との間の限界をなすものは最も低い程度の知覚であるという考えに傾いている。然しこの事を私

は因みに唯私の推測として述べるのである、何となればこれに就いて学者が如何なる方向に決定しようとも、それは私の目下の問題にとつては無関係だからである。

## 第十章 把持に就いて

一 考察 *Contemplation*——心を知識に向つて更に進歩せしめる次の能力は、私が把持、*retention*と呼ぶ所のもの、即ち心が感覺または反省から受けた單純觀念の保持 *keeping of* である。これは二つの方法によつてなされる。第一に、心に運び入れられる觀念をしばらくの間現実的に見ている *actually in view* ことによつてなされる、これは考察と呼ばれる。

二 記憶 *Memory*——把持のもう一つの方法は、はじめに刻み付けられた *imprinting* 後で消えた、即ち謂わば視野の外に捨てられた觀念を心の中に再生する *revive again* 力である。我々が、対象が取り除かれてから、熱や光、黄色や甘さを思い浮べる場合にはこの力によるのである。これが記憶であり、これは謂わば觀念の貯蔵所である。というのは人間の限られた心は多くの觀念を一時に見たり考えたりすることが出来ないで、何時か別の時に用いるかも知れないような觀念を蓄えて置く貯蔵所を持つ必要があった。<sup>\*</sup>（然し乍ら我々の諸觀念は、心の中の現実の知覚に他ならぬのであり、これ等の觀念はその知覚が何も無ければ何物でもなくなるのであるから、このように記憶という貯蔵所に我々の觀念を蓄えて置くということは次の事を意味するだけである。即ち心は多くの場合に於て、それが前に一度持っていた知覚を、これと結び付いている所の、心は以前にそれを持っていたのだという知覚を附け加えて、再生する力を持つている、ということの意味するに過ぎない。我々の觀念が実際には何処にも無くて、た

i by keeping the idea which is brought into it, for some time actually in view, and then of the idea in view 検討中 idea をキープする。

だ心の中には一つの能力があつて、心がそうしようと思えば、これ等の観念を再生し、或るものはより多くの困難を以て、或るものはより容易く、また或るものはより生々と、他のものはより不明にはあるが、謂わば心自身の上にこれ等の観念を再び描くことが出来る場合に、我々の観念は我々の記憶の中にあるのだと言われるのは、上に述べた意味に於てである。」そしてかようにしてこの能力の助によつて我々は、我々が現実には考察していない諸概念で、しかも我々が最初にこれ等の観念を悟性に刻み付けた感覺的性質の助なしに、それを眼前に浮べ、再現せしめ、そして我々の思考の対象とすることの出来るようなすべての観念を悟性の中に持つていられるのである。

\* 「」の中の文は第二版に於て附け加えられたもので、John Norris の *Cursory Reflections upon a book called an Essay concerning Human Understanding*(1690) という書物に於ける抗議に対して書かれたものである。ノリスの非難は、この論の初めの方の説明は、現実の知覚でない諸観念が心の中に潜在的に存在している、という意味になるから、生得的観念に反対するロックの所論と矛盾する、というのである。

三 注意、反復、快楽、及び苦痛は観念を固定する——注意と反復 repetition は或る観念を記憶の中に固定するのに非常な助となる。然し自然に最初に最も深い最も持続的な印象を与える観念は、快楽または苦痛の伴うものである。感官の大きな仕事は何が肉体を害しましたは利するかを我々に気付かしめることであるから、(既に示したように) 多くの観念を受けるときには苦痛がこれに伴うように、賢くも自然によつて定められている。これが子供に於ては考察と推理の代りとなり、成人に於ては考察よりも早く働くので、子供も大人ともに彼等の自己保有に必要な早さを以て、苦痛を生ずる対象を避けるよう

にさせ、両者に於て記憶の中に将来に對する注意を植ゑ付けるのである。

四 觀念<sup>イデア</sup>は記憶から徐々に消えてゆく——諸觀念<sup>イデア</sup>が記憶に刻み付けられる場合の様々な持続の程度に關しては、それ等の觀念<sup>イデア</sup>の或るものは、感官に一度だけ影響を与え、一度以上は影響を与えないような或る対象によつて悟性の中に生ぜられるが、他のものは一度以上感官に提示せられ、しかも殆ど氣付かれない、それは心が、子供に於けるが如く不注意であるか、または大人に於けるが如く他の方面に働いていて、心に深い印象を与えないような一つの事にのみ專念しているがためであるということを我々は認めることが出来る。そしてまた觀念<sup>イデア</sup>が注意深く、反復する印象を以て提示される或る場合にも、記憶は身体の氣分または何か他の欠乏によつて非常に弱いのである。すべてのこれ等の場合に於て、心の中の觀念<sup>イデア</sup>は急速にうすらいで行き、屢々全く悟性の中から消失してしまつて、麦畠の上を通り過ぎて行く影の如くに、その足跡または極印を少しも残さない、そして心は、恰もこれ等の觀念<sup>イデア</sup>が其処に全く無かつたかの如くに、それを欠いて居るのである。

五 かようにして子供の心の中に彼等の感覺の初期に於て生ぜられた觀念<sup>イデア</sup>の多くのものは（これ等の中の或るもの例えば或る快樂及び苦痛の觀念<sup>イデア</sup>の如きは彼等の生れる前に生ぜられ、他のものは彼等の幼少時代に生ぜられる）、其の後の彼等の生活の道程に於て再び繰り返されないならば、全く失われて何等の痕跡をも留めないのである。この事は何かの災難のために非常に幼少の時に視覚を失つた人々に於て認められ得る。このような人々に於ては色の觀念<sup>イデア</sup>は極めて淺薄に分つて居るだけで繰り返されなくなるので、全く消失してしまふ、それ故に数年後には生れながらにして盲目の人に於けると全く同様に、

## 第二卷 観念に就いて

彼等の心の中には色に関する何等の表象も記憶もないのである。或る人々の記憶は、實際、非常に鞏固で、奇蹟的でさえある、しかも尚すべての我々の観念は、最も深い印象を与えたものでもまた最も把持力の強い心に於ても、絶えず減退するものの如くである。それ故にもしもこれ等の観念が、最初にそれを生じたような種類の対象に対して繰り返し返して感覺または反省を働かせることによつて時々新たにせられないならば、その痕跡は磨滅して、終には其処に何も見えなくなつてしまふのである。かようにして我々の若い時の観念は、若い時の子供と同じように、屢々我々より前に死ぬ、そして我々の心は我々に、我々の近づきつつある墓を示す、その墓には真鍮や大理石は残っているが、碑文は時のために消え、像は崩壊しているのである。我々の心の中に描かれる絵は褪せる色で書かれているので、時々新たにされないと消えてなくなる。我々の肉体の構造及び我々の生氣 *animal spirit* の性質がどれだけこの事に関係しているか、また脳髓の工合が、或るものに於ては描かれた極印を大理石の如くに留め、他のものは砂石の如く、また他のものは砂と殆ど同じである、というような相違を来すものかどうかということは、私はここでは研究しない。然し肉体の構造が時々記憶に影響するということは有り得ることを思われる、何となれば我々は屢々病氣が心からそのすべての観念を奪ひ、また高熱の焰が二、三日の中に大理石に刻み付けられているように永続的と思われたすべての像を焼いて粉々にかき乱してしまうのを見出すからである。

六 絶えず反復される観念は殆ど失われない——然し乍ら観念そのものに就いては次の如く言うことは容易い。即ち観念を生ずる対象または働きが屢々廻り歸つて来ることによつて最も屢々新にせられる

ような諸觀念（これ等のうちには一つ以上の方法によつて心に運び入れられるものがある）は記憶の中に最もよく固着して其処に最も明らかに最も長く留る、そしてそれ故に物体の根源的性質即ち、固体的性、延長、形態、運動、及び静止に関する觀念、また熱及び冷の如く殆ど絶えず我々の肉体を感じせしむるもの、また存在、持続、及び数の如くすべての種類のものの性質であり、我々の感官を感じせしめる殆どあらゆる対象、我々の心を働かせるあらゆる思考が伴う所の觀念、これ等の觀念及びこれに似た觀念は、今も云う通り、心が何等かの觀念を留めている間は全く失われてしまうことは減多にない。

七 想い起す場合には心は屢々能動的である——この第二の知覚（私はそう呼んでもよいであろうが）、即ち記憶に宿っている觀念を再び見る場合に於ては、心は屢々単に受動的なる以上に働く、これ等の眠つて居る像 *domant pictures* が現れて来るのは時々意志に依るからである。心は非常に屢々或る隠れた觀念を探し求めて働き、謂わば心眼 *the eye of the soul* をこの觀念に向ける、然し時にはまたこれ等の觀念は我々の心の中にひとりでに浮び上つて自ら悟性に提示せられ、また非常に屢々或る騒々しく荒々しい激情によつて呼び起されその暗い部屋の中から白日の光の中に投げ出される、それは我々の感情がそんなことがなければちつと氣付かれずにあつたであろうような觀念を記憶の中に呼び起すからである。「更に次の事を、記憶の中に宿つて居つて、時々心によつて蘇らせられる諸觀念に就いて、觀察すべきである、即ちこれ等の觀念は（蘇らせるといふ言葉が示すように）どの一つも新しいものでないばかりでなく、また心は前の印象を知るが如くにこれ等の觀念を知り、心が前に知っていた觀念に關すると同様にこれ等の觀念に關する知識を新たにするのである。それ故に前に刻み付けられた觀念がすべて

## 第二卷 觀念に就いて

眼前にあるのではないが、しかも想い起す場合にはこれ等の觀念は常に、前に刻み付けられたもの、即ち、眼前にあつたものであり、悟性が前に知つて居つたものであると認められるのである。\*

\* 「」内は第二版に於て附け加えられたものである。

八 記憶の二つの欠陥、忘却 *oblivion* 及び緩慢 *slowness* —— 記憶は、知的存在に於ては知覺に次いで必要なものである。これは非常に重要なものであるから、これが欠けて居る場合には他のすべての我々の能力は大部分役立たない、そして我々是我々の思考、推理、及び知識に於て、我々の記憶の助によらなかつたならば現在の対象以上に進むことは出来ないであらう、その記憶に二つの欠陥があり得る。

第一は、記憶が觀念を全く失つてしまつて、それ迄のところでは完全なる無智を生ずることである。というのは我々は何事もそれに就いて觀念を持つてゐる以上のことは何も知ることは出来ないのであるから、この觀念がなくなつてしまえば、我々は全く何も知らなくなるからである。

第二は、記憶が徐々に動き、それが持ち蓄えている觀念を、適當の時機に心に役立つだけ充分早く想い起さないということである。この事はもし非常に高い程度に及べば魯鈍である。そして記憶のこの欠陥のために、必要と機会が要求するときは、何時でも間に合うようにすぐそこに實際保存されている諸觀念を持つていないような人は、全くこれ等の觀念を持たなくても殆ど同じことであらう、何故なればこれ等の觀念は彼にとつて殆ど何の役にも立たないからである。愚鈍であつて、心の中に自分の役に立つべき觀念を探している間に機会を失う人は、彼の知識に於て全く無智な人に較べて大して幸福ではない。それ故に心が現在必要とする眠つて居る觀念を心に与えることが記憶の任務である、そして我々



が発明の才、空想力、また才能の明敏と呼ぶのは、すべての場合にこれ等の観念イデアを手もとに用意して持つてゐることである。

九\* これ等の事は一人の人の記憶を他の人と比較した場合に我々の観察し得る欠陥である。もう一つ、一般に人間の記憶を或る更に優秀なる知的創造物と比較した場合に、我々の認め得る欠陥がある、この創造物はこの能力に於て非常に人間より優れているので、彼等は常にすべての彼等の以前の行為の感覚を全部眼前に浮べることが出来、其処では彼等のかつて持った思考のどの一つでも彼等の眼界から逃れ去ることは出来ない。神の全智ということ、その神はすべての過去、現在、及び未来の事を知つて居り、神にとつては人間の内心の思いが常に露われているということが、この事が可能であるということに就いて我々を納得せしめる。というのは神が彼に直接に仕える光榮ある諸々の靈体 spirits に、彼の完全な資質のうちの何れでも彼の好むだけを有限なる創造物が伝えられ得るだけ伝えることが出来るということとを、誰が疑うであらうか。かの驚くべき才能を持った人である、パスカル氏に就いて、彼の健康が衰えて記憶力を損うまでは、彼の判断力の確かな時代の間の何時彼が行い、読み、または考えたことに就いても何も忘れなかつたということが報告されている。この事は大抵の人々にとつては殆ど全く知られていない特権であるから、普通のやり方ですべての他の人々を自分自身によつて測るような人々にとつては、殆ど信ずべからざることと思われる。しかもなおこの事を考察すると、我々が我々の思考を、より優秀なる階級の靈体に於ける記憶の完成に向つて高める助となるであろう。というのはパスカル氏の記憶もやはり人間の心がここに限られている狭さを伴つてゐる——即ち非常に多様な観念イデアを相續いて持

## 第二卷 觀念に就いて

つだけで同時には持たないという狭さがある。これに対して色々な階級の天使は恐らくもつと広い限界を持つていて、彼等の中の或るものは、すべての彼等の過去の知識と一緒に把持し、常に一つの絵の中に於けるが如くに一度に眼前に浮べる能力を賦与されて居るのである。

\* 第九節は第二版に於て附け加えられたものである。

一〇 動物は記憶を持つている——心に運び入れられる觀念イデアを蓄え把持するこの能力は、若干の他の動物も人間と同様に大なる程度に於てこれを持つていると思われる。というのは他の例は看過することとして、鳥が節ふしを覚えること、また我々が鳥が為すのを認めることの出来る、調子を正しく真似ようとする努力は、彼等が知覚を持つて居り、彼等の記憶の中に觀念イデアを把持し、それを原型となすのであるということは、疑のないことであると私には思われる。何となれば鳥が何の觀念イデアをも持つていないような調子に彼等の声を一致せしめようと努力する（彼等は明らかにこの事をなすが）というが如きことは不可能である、と私には思われるからである。何となればその節ふしが実際に演奏されて居る間に、音が機械的にこれ等の鳥の脳髓の中に生氣の或る一定の運動をひき起すかも知れない、そしてその運動が翼の筋肉にまで続けられ、そしてそれ故に鳥の身の保全に役立つがために、鳥は或る音によって機械的に追いたてられるかも知れないということを私は認めはするが、しかもこの事は、その節ふしが演奏されている間に、況んやそれが止んだ後に、何故鳥の発声器官の中に、外から来る音でこれを真似ても鳥の身の保全に何の役にも立ち得ないような音調とその声とを一致せしめようとするが如き運動を機械的に生ずるか、という理由とは決して考えることは出来ない。然し更にそれ以上に、感覚も記憶も持たない鳥が、

彼等の調子を、昨日演奏された節に徐々に近づけることが出来るということは、決して合理的には想像せられ得ない（況んや証明され得ない）。この節は、もし鳥がその觀念を彼等の記憶の中に持つていなければ、今は何処にも無いし、また彼等の真似るための原型でもあり得ないし、また如何に繰り返し繰り返してみても彼等はこれに近づくことは出来ないのである。

【第一章 判別、及びその他の心の作用に就いて 本 PDF では略】

【第二章 複雑觀念に就いて 本 PDF では略】

## 第二卷 觀念に就いて

## 第十三章 單純様態に就いて、そして第一に空間の單純様態に就いて

一 單純様態 *Simple modes*——【前章では、知識の材料である *Simple ideas* を心に這入ってくる仕方に注目して述べてきたが、以下では *compounded* したものの識別する視点から、*idea* の変容 *modifications* を考察する。という前振りが底本では略されている。】或る一つの單純觀念のいろいろな変形（これを、前述の如く、私は單純様態と呼ぶ）は最も相隔たつたまたは一番相反する觀念と同様に、心の中に於ける全く相異なつた別々の觀念である。何となれば二つという觀念が一つという觀念と相異なるのは、青が熱と異なり或いはまたこれ等の何れもが或る数と異なるのと同様である。しかもこの觀念はただ一単位という單純觀念の繰り返しに依つて出来て居る、そしてこの種の反復が結合せられて一ダース、一グロース（訳者注——十二ダース）、一百万というような單純様態をなすのである。

二 空間の觀念——私は先ず空間の單純觀念からはじめよう。私は前に（第四章<sup>i</sup>）、我々は空間の觀念を視覚及び觸覺の両者によつて得るということを示した、この事は非常に明らかであると思うので、人々が彼等の視覚によつて、違ふ色の物体の間の距離または同一物体の部分の間の距離を知覺するといふことを証明しようとするのは、彼等が色そのものを視覚によつて見るということを証明する必要のないと同様に、不要のことであろう、彼等が暗黒の中で感じと手觸りによつてかように知覺することが出来るということも同様に明らかである。

i 正しくは第五章と大槻氏は指摘する、五章でも述べているが、四章では固性に絡めて触れている。四章は本 *pt* で略。

三 空間と延長——或る二つのものの間の長さのみを考察して、それ等のものの間のその他の如何なるものをも考察に入れないとき、この空間は距離、distanceと呼ばれる。もし長さ、幅、及び厚さが考察されるならば、私はこれを容積、capacityと呼ぶことが出来ると思う。「如何様の考察に於ても、これに對して通常延長、extensionという語が適用される。」\*

\* 「―」は第四版に於て見出される語句である。

四 広大無辺——各々の相異なる距離は空間の一つの異なる変形であり、任意の異なる距離または空間の各々の觀念はこの觀念の一つの單純様態である。實用のためと測定上の習慣によつて、人々は、或る一定の長さ、例えば吋、呎、碼、尋、哩、地球の直径というような觀念を彼等の心の中に固定せしめる、これ等のものは空間のみから出来ているそれだけの数の別々な觀念である。どれでもよいから空間のかような一定の長さまたは尺度が人々の思考にとつてありふれたものになるときは、人々は物体または何か他のものの觀念をこれと混えまたは結び付けることなしに、彼等の心の中で幾度でも好きなだけこれを繰り返すことが出来る、そして幾呎、碼、または尋の長さ、平方、または立方という觀念をこの宇宙の物体の間に或いは更にすべての物体の最大の限界を越えて、彼等自ら形成し、そしてまた、更にこれ等のものを一つ一つ相加えることによつて、彼等の空間の觀念を彼等の好むだけ大きく拡げることを得るのである。我々が或る距離に関して持つてゐる或る觀念を反復し倍加し、そしてこれを幾度でも好きなだけ前のものに附加し、決して止つたり限度に到達するということがあり得ないで、我々をして我々の欲するだけそれを拡大せしむるこの能力が、我々に広大無辺 (immensity) の觀念を与えるもの

である。

五 形態——この觀念の<sup>イデア</sup>もう一つの変形がある、それは延長または仕切られた空間の限界の諸部分の間にある關係に他ならぬ。これは、その端が我々の到達し得る所にある感覺的物体に於ては觸覚がこれを發見し、眼は、その限界が視野の中に在る物体及び色の両者からこれを受けるのである。この場合、限界がどのようにに終るか、即ち識別し得る角をなして出会う直線を以て終るか、または如何なる角も認められない曲りくねった線で終るかを觀察し、またこれ等の線が任意の物体または空間の限界のすべての部分に於て相互に關係するが俛にこれを考察することによつて、眼は我々が形態<sup>イデア</sup>（figure）と呼ぶ觀念を得る、そしてこの觀念は心に無限の多樣性を提示する。何となれば、物質の凝聚しているかたまりの中に實際に存在している非常に多數の相異なる形態の他に、心が、空間の觀念<sup>イデア</sup>を変え、それによつて更に新しい構成を作り、またそれ自身の觀念<sup>イデア</sup>を繰り返しそしてそれ等の觀念<sup>イデア</sup>を任意に結合することに依つて、処理することの出来る蓄えは全く無尽蔵である、そして心はかようにして形態を無限に多樣にすることが出来るのである。

### 【六 略】

七 場所——この標題のもとに入れられ、この種類に属するもう一つの觀念<sup>イデア</sup>は、我々が場所と呼ぶものである。單純なる空間に於て我々が或る二物体または二点の間の距離の關係を考察するが如く、我々の場所の觀念<sup>イデア</sup>に於ては我々は或るものと、相互に同一の距離を保つていると考えられ、それ故に静止していると考えられる所の二つまたはそれ以上の点との間の距離の關係を考察する、何となれば我々が、

或るものが今或る二つまたはそれ以上の点から昨日と同一の距離にあることを見出し、これ等の点が昨日以来相互の距離を変えず、そのときこれ等とこの或るものを比較したのであるならば、我々はこのものは同一の場所を保っていたと言うのである。

八 それ故に我々が置き去りにして行つたのと同一の将棋盤の目に立っている一組の将棋の駒を、我々は皆同じ場所にあるとか、または動かずにいるとか言う、——恐らく将棋盤はその間に一つの部屋から他の部屋へ運び出されたのであろうが、——何となれば我々はそれ等の駒を将棋盤の相互に同一の距離を保つ部分に対してのみ比較したからである。また我々は、もしも将棋盤が船室の同一の部分に留っているならば、たとえ恐らくその船室の在る船がその間ずっと走つて居つても、将棋盤は前に在つたと同一の場所に在ると言う、そして船が近所の土地の部分と同一の距離を保つていたと考えられれば、たとえ恐らく地球が廻転し、それ故に駒も盤も船も何れも、更に遠くにあつて相互に同一の距離を保つていた諸物体に対しては場所を変えたにしても、船は同一の場所に在るものと言われる。

九 然し乍ら我々が場所と呼ぶこの距離の変形は人々によつて彼等の日常の使用のために造られるのであるから、人々はこの場所を、彼等のその時の目的に最もよく役立つような、近くにある物に対する関係によつて考察し規定するのであつて、同じ物の場所を別の目的に対しては更によく規定するであろう。そのような他の物を考察することはしないのである。そこでもしも或る人が、ナイサスとユーリアス<sup>\*</sup>の物語を伝える詩の節はどの場所に在るか、と問うたならば、それ等の節は地球のしかじかの部分に在るか、またオックスフォード大学のボドレー<sup>\*\*</sup>図書館に在るとか言つてこの場所を決定するのは非常に不

## 第二卷 觀念に就いて

当であろう、寧ろ正当にその場所を指定するのはヴァーギルの作の部分によるのであろうし、適當な答は、これ等の節は彼のイーニードの第九卷の略々中程にあるということであり、またこれ等の節はヴァーギルが印刷されて以來ずっといつも變らずに同一の場所にあつたのだということであらう。

\* Nisus and Euryalus - Aeneid の中の二人の友達

\*\* Bodley's library - オックスフォードの有名な図書館。一五九八年ボドレーによつて設計され一六〇二年開館。多

くの貴重な文献を有す。

\*\*\* Aeneid - ローマの詩人 Virgil の作、Aeneas の標泊を詠じたる敘事詩。

一〇 我々の場所の觀念は前述の如く或るもののかような相対的な位置に他ならないということは、我々が次の事を考察するとき明らかであり、また容易く認められるであらうと思う。即ち我々は宇宙のすべての部分に関しては、場所の觀念を持つことが出来るが、宇宙の場所に関しては何等の觀念を持つことが出来ない、何故なれば宇宙を越えては、我々は、宇宙が何等かの距離の關係をそれに対して持っていると考えられるような如何なる固定した、明確な、個物の觀念をも持つては居らず、宇宙を越えたすべては一つの一様な空間または拡がりであり、その中に心は何の変化も標識も見出さないからである。というのは世界は何処かに在ると言うことは、世界が存在するということの意味するだけである、これは場所から借りた表現の仕方ではあるが、ただその存在を示すだけで位置する場所を示さないののである。そして誰か或る人が彼の心中に明晰、判明に宇宙の場所を見出し描くことが出来るとき、彼は、宇宙が無限の空間という無差別の空虚の中で動いているかまたはじつと止つてゐるかを我々に語ることが出来



るであらう。

一 延長と物体とは同一ではない——或る人々は我々をして物体と延長とは同一であると信ぜしめようとする、\*これによつてかような人々はまた言葉の意義を変え、しかし私は、そんな事を彼等がするとは考えようと思わない、何となれば彼等とは他の人々の哲学が疑わしいまたは無意味な語の不確実な意味や欺き易い不明瞭さの中にあまりにも甚しく置かれてゐるからといつてこれを非常に酷しく非難したからである。それ故にもし彼等が物体及び延長によつて他の人々が意味すると同一の事、即ち物体によつて、固形的で拡つて居り、その部分が引離されることが出来、異なつた方向に動かされ得るような或るものを、そして延長によつて、これ等の固く凝聚してゐる部分の端の間に横たわりこれ等の部分によつて占められてゐる空間のみを意味するのであるならば、彼等は非常に異なつた觀念を相混同してゐるのである。何となれば空間の觀念は深紅色の觀念イデアと異なると同様に固体性の觀念イデアと異なるものでないであらうかどうかということを、私はあらゆる人自らの思考に訴える。成る程、固体性は延長なしでは存在することが出来ないし、また深紅色も延長なしでは存在することが出来ない、然しこの事は両者が別個の觀念イデアであるということを妨げない。多くの觀念はその存在または理解のために必要なものとして他の觀念イデアを要する、しかもこれは甚しく異なつた觀念イデアである。運動は空間なしでは存在することも出来ないし、また理解することも出来ない。しかも運動は空間ではないし、また空間は運動ではない、空間は運動なしで存在することが出来、この両者は甚しく異なつた觀念イデアである。空間の觀念イデアと固体性の觀念イデアも亦同様であると私は思う。固体性は物体とは非常に不可分離の觀念イデアであつて、物体が空間を充たすこ

## 第二卷 觀念に就いて

と、その接觸、衝擊、及び衝擊による運動の傳達はこの觀念に依るのである。そしてもしも思考が延長の觀念<sup>イデア</sup>を含まないからといって、それが精神が物体と異なるということを証明する理由になるならば、思うに、同一の理由が空間が物体でないということを証明するのにも妥当であらう、何故なれば空間は固体性の觀念<sup>イデア</sup>を含まないからである、それは空間と固体性は、思考と延長との如く別個の觀念<sup>イデア</sup>であり、心の中で相互に全く分離せられ得るからである。そこで物体と延長とは明らかに二つの別個の觀念<sup>イデア</sup>である。何となれば、

\* デカルト学派のことを言っているものである。本章の以下の部分は彼等が物体と延長とを同一視することに対する反駁である。

一二 第一に、延長は、物体とは違って、何等の固体性もまた物体の運動に対する何等の抵抗をも含まないからである。

一三 第二に、純粹 pure 空間の部分は相互に分離することが出来ない、それ故に連続は、實際上にも really また心の中でも mentally 引き離すことが出来ない。というのは私は或る人に空間の或る部分をこれと続いている他の部分から遠ざけることを、また同じことをただその人の思考の中でなすように要求する。實際上に actually 分ち引き離すというのは、私の考えるところでは、部分を相互に遠ざけることによって、前には続いて居った所に二つの表面を作ることである。そして心的に分つというのは、心の中で前には続いて居った所に二つの表面を作り、そしてこれ等を相互に遠ざかっているものと考えることである、この事は、心によって引き離され得るものと考えられる物に於てのみ、為され得るのである。

成る程、人はかような空間の一呎に当りまたは等しいだけのものを、その他を考えずに考えることが出来る、これは、實際、部分的考察であるが、心的な分離または分割でさえもない、何となれば人は二つの表面を相互に引き離すことなしには、實際に分割することが出来ないと同様に、二つの表面が相互に離れていると考えることなしには、心の中で分割することは出来ないのである、然るに部分的考察は分離ではない。

一四 第三に、純粹空間の諸部分は動かすことが出来ない、この事はこれ等の部分が引き離され得ないということから生ずるのである、何となれば運動は或る二つの物の間の距離の変化に他ならず、しかもこの変化は、引離され得ず、それ故に相互に永遠に静止しているに相違ないような諸部分の間には在り得ないからである。

かようにして單純 simple 空間の明確なる觀念<sup>イデア</sup>は明らかにまた充分に物体から區別される、何となればその部分は引き離すことも動かすことも出来ず、また物体の運動に対して何等抵抗を為さないからである。

## 【一五 略 The Definition of Extension explains it not】

一六 存在を物体と精神に分つことは、空間と物体とが同一であることを証明しない——空間と物体が同一であると論ずる人々は次の如き両刀論法 dilemma を持つて来る、即ち、この空間は或る物であるかまたは無である、もし無が二つの物体の間にあるならば、これ等の物体はどうしても触れねばならない、もしそれが或る物であることが許されるならば、それは物体であるか、または精神であるか、と彼

等は問う。これに対して私はまた別の問いを以てこう答える、即ち、思考の能力のない固体的存在と延長を持たない思考的存在の他には何物もなく、また在り得ないということを誰が彼等に告げたか、而してこの事は彼等が物体及び精神という言葉によつて意味するすべてである。

一七 我々の知らない実体は、物体のない空間に反対する何等の証明を与えない——もしこの物体を欠いている空間が実体であるか、または属性であるか、と問われるならば（通常問われるが如くに）、直ちに私は、自分は知らないと答えるであろうし、またかように問う人々が実体の明晰、判明な觀念を私に示す迄は、私は自分の無智を認めることを恥じないであろう。

〔一八〕勝手に作られた名前は物の性質を変えないし、またそれ等の名前が明確な觀念のしるしでありそれを代表するものである限りに於てのみ、これ等は我々に理解せられるのである。そして私は stance という二つの音節の音を非常に重んずる人々に対して、この音を、彼等のなすが如く、無限の捕捉し難き神に、有限の精神 spirits に、また物体 body に適用するとき、それは同一の意味を持つていかどうか、またこれ等三つの非常に異なつたものの各々が実体と呼ばれるとき、それは同一の觀念を表示するのであるかどうかを考察することを望む。もしこれが肯定されるならば、従つて神、精神、及び物体は、実体の同一の共通の性質に於て一致しているのであるから、その実体の単なる異なつた變形に於てのみ異なるということになるのではなからうか、それは丁度木と小石は、同一の意味に於て物体であり、そして物体の共通の性質に於て一致しているのであるから、その共通の物質の単なる變形に於て

のみ異なるのと同様である、かような事は頗る受け容れ難き説であらう。もし彼等が、それを神、有限なる精神、及び物質 matter に対して、三つの異なつた意義を以て適用するのである、そしてそれは神が実体であると言われるときには一つの觀念を表し、靈魂の三が実体と呼ばれるときは他の觀念を表し、物体がそう呼ばれるときはまた別の觀念を表すのであると言うならば、即ち、もし実体という名前が三つの夫々異なつた觀念を表すのであるならば、彼等は、かように重要な概念に於て、三つの別な意味を持つと考えられるどころでなく普通の用法に於ては殆ど一つの明晰、判明な意味をも持たないような非常に疑わしい言葉を乱雑に用いることによつてひとりでに生ずる混乱と誤謬とを防ぐために、これ等の別々の觀念を明らかにするか或いは少なくともこれ等に三つの別々の名前を与えた方がよいであらう。そしてもし彼等がかようにして実体の三つの別々の觀念を作ることが出来るとしても、誰か他の人がもう一つ第四番目のものを作ること何が妨げるであらうか。

一九 実体及び属性は哲学に於ては殆ど無用である——何物かに附属する必要のある一種の實在的なものとしての属性という概念に最初思い当つた人々は、これを支持するための実体という語を見出すことを余儀なくされた。(地球も亦何かこれを支えるものを必要とすると考えた) あわれな印度の哲学者がこの実体という語を考えさえしたならば、彼は地球を支えるための象を、またその象を支えるための亀を見出すの労を取る必要はなかつたのである、実体という語がそれを見事にやつてのけたであらう。そしてこの事を尋ねた人は、実体が何であるかは知らずに、実体とは地球を支えるところのものである

i 第二十三章第二節に進むと意味が通る。

ということを充分な答として印度の哲學者から受け取つたであらう、この事は我々が、實體が何であるかは知らずに、實體とは属性を支えるところのものであるということを充分な答と善い教として我々の歐羅巴の哲學者から受け取るのと同様である。それ故に實體については我々はそれが何であるかに關しては如何なる觀念をも持つて居らず、ただそれが何を為すかに關して混亂した曖昧な觀念を持つてゐるに過ぎないのである。

二〇 たとえ博識なる人が如何なることを此の國に於てなそうとも、事物の性質を研究した或る聰明なるアメリカ人 an intelligent American は、もし彼が我々の建築を學ぼうとして、柱は土台によつて支えられるものであり、土台は柱を支える或るものであると教えられたとするならば、彼はこれを以て満足な説明として受け取るようなことは先ずないであらう。もしも *inherentia* 及び *substantia* というラテン語が、これに相當する平易な英語に訳されて、く、つ、つ、く、こと (*sticking on*) 及び *支えること* (*under-propping*) と言われたならば、これ等の語は、實體及び属性の説が非常に明らかであることを我々にもつとよく認めしめ、これ等の言い表しが哲學上の問題を解決するに如何なる役に立つかを示すであらう。

二一 物体の限界の涯を越えた真空——然し我々の空間の觀念に歸ろう。もし物体が無限であると考えられなければ——私はそんな事を主張する人はないと思うが——もしも神が或る人を物的存在の涯に置いたならば、その人は彼の手を彼の胴体より先に延ばすことは出来ないであらうかどうか、と私は尋ねよう。もし彼がそうすることが出来るならば、その時彼は彼の手を以前には物体を伴わない空間の

i 「知性あるアメリカ先住民」という意味で言っているらしい。大槻氏の解説による。

在った所に置くことになるであろう。そしてもし其処に彼が彼の指を拡げるならば、これ等の指の間には矢張り物体を伴わない空間が在ることになるであろう。眞実はこういう事になるのである、即ち私の反対者等は、そういう風に言い出すのを嫌つて居るけれども、彼等が物体を無限であると考えていることを認めねばならないか、或いはさもなければ、空間は物体ではないと認めねばならないのである。というのは、私は、思慮ある人で、時間に限界を置くことが出来るより以上に、空間に限界を置くことが出来ると考え、また彼の思考によつてこの両者何れでも其の終りに到達しようと望むような人があるなら喜んで会い度いと思うのである、そしてそれ故にもしもこの人の永遠という觀念が無限であるならば、広大無辺という觀念も亦無限である、これ等は二つとも同様に有限であるかまたは無限である。

二二 壊滅 *annihilation* の力が真空を証明する——更に、空間が物質なしに存在することの不可能を主張する人々は、物体を無限であるとせねばならぬのみならず、また物質の如何なる部分でもこれを壊滅する力を神が持つているということをも拒否せねばならぬ。思うに、如何なる人も、神が物質の中にあるすべての運動を終止せしめ、宇宙のすべての物体を完全なる静止の状態に固定し、これ等の物体を彼の欲する期間かような状態に続けて置くことが出来るということを否定しないであろう。そこでかような一般的静止の間に、神がこの本またはそれを讀む人の体を壊滅することが出来るということを認める人は誰でも、必然的に眞空が在り得るということを認めねばならぬ、何となれば、壊滅された物体の部分によつて満たされて居った空間は依然として残り、物体のない空間となるであろうということは明らかであるからである。何故なれば、これを取囲む物体は完全に静止しているのであるから金剛石の壁の

ようなものであつて、その状態に於ては如何なる他の物体にとつてもその空間に這入り込むことを全く不可能にするからである。そして實際、物質の或一つの分子が、物質の他の分子が取り除けられたその場所へ必然的に運動するということは、空間が常に充滿して居るという仮定の結果に他ならない、それ故にこの事は、實驗が決して証明することの出来ないような假定上の事実よりも何かもつとよい証明を必要とするであらう、というのは我々自身の明晰、判明な觀念が、空間と固体性の間には何等の必然的結合がないということを我々に明らかに立証する、何故なれば我々はその一方を他方なしに思い浮べることが出来るからである。そして真空に賛成しまたは反対して議論をする人々は、そのことによつて彼等が真空及び充実空間 (plenum) という別々の觀念<sup>イデア</sup>を持つていることを自白しているのである。

二三 運動は真空を証明する——然し乍ら、真空を見出すために宇宙の物体の限界の涯を越えるところ迄行かずとも、または神の可能に訴えずとも、我々に見える手近の所にある物体の運動が私にはこの事を明らかに証明するように思われる。というのは私は如何なる人に対しても、彼の好きなだけの大きさの固体を、もしその中に彼がこの固体を分割した最小の部分と同じ位大きい空虚な空間が残っていないならば、その固体の諸部分がその表面の範囲内であらゆる方向に自由にあちこち運動することが出来るような具合に分割することを望む。そしてもし、分割された物体の最小の分子が芥子の種位の大きさである場合には、芥子の種の大きさに等しい空虚な空間が、分割された物体の諸部分がその表面の範囲内で自由に運動する余地を作るために必要であるならば、物質の分子が芥子の種の一億分の一も小さい場合には、やはり芥子の種の一億分の一の大きさの固体的物質を欠く空間が在らねばならぬ。何となれ



ばこれ等の一方の場合に通ずることはまた他の場合にも通じ、かくの如くして無限に進むのである。そしてこの空虚な空間を小さくなるだけ、小さくして見ればそれが充実空間の仮定を打ち破るのである。何となればもしも現に自然界に存在している物質の最小の分離した分子に等しい物体を欠く空間が在り得るならば、それはやはり物体を伴わない空間である。

二四 空間の觀念<sup>イデア</sup>と物体の觀念<sup>イデア</sup>とは別個のものである——然し問題は此処では、空間または延長の觀念<sup>イデア</sup>が物体の觀念<sup>イデア</sup>と同一であるかどうか、ということなのであるから、真空が実際に存在するということを証明する必要はないのであつて、その觀念<sup>イデア</sup>の存在を証明することが必要なのである。この觀念<sup>イデア</sup>は人々が真空<sup>イデア</sup>が在るか否かを研究し論議するときに、彼等がこれを持つことは明らかである。何となればもし彼等が物体を伴わない空間という觀念<sup>イデア</sup>を持つていなかつたならば、彼等はいかなうな空間の存在に関して問いを提起することは出来ないであらう、そしてもし彼等の物体の觀念<sup>イデア</sup>がその中に単なる空間の觀念<sup>イデア</sup>より以上の何物かを含んでいなかつたならば、彼等は世界が充実しているということに関して何等の疑いを持ち得ないであらう、そして物体を伴わない空間が在るか否かと問うことは、空間を伴わない空間、または物体を伴わない物体が在るか否かと問うと同様に馬鹿らしいこととなるであらう、何となればこれ等は同じ觀念<sup>イデア</sup>の違った名前に過ぎないこととなるであらうから。

二五 延長が物体と不可分離であるということは両者の同一であることを証明しない——成る程延長の觀念<sup>イデア</sup>はすべての見ることの出来る性質及び大抵の触れることの出来る性質と非常に不可分離に結合しているのです、この觀念<sup>イデア</sup>は我々をして延長の印象をも受け取ることなしには、如何なる外的対象をも見る

## 第二卷 觀念に就いて

ことを許さないし、また極少數の外的対象しか感ずることを許さない。このように容易く延長がいつでも他の觀念イデアと一緒にみとめられるということが、思うに、或る人々が物体の全ての本質は延長にあるとしたことの原因であつたのである。この事はさして驚くべきことではない、何となれば或る人々は彼等の眼及び触覚（すべての彼等の感覺の中で最も繁忙なもの）によつて、彼等の心を延長の觀念イデアを以て非常に一杯にし、謂わばこれによつて全く占められるようにしてしまつたので、彼等は延長を持たない如何なるものに対しても何等の存在をも許さなかつたのである。然し私は次の事を考察するように望まう、即ち、もし彼等が彼等の視覚及び触覚の觀念イデアを考えると同じだけ彼等の味覚及び嗅覚の觀念イデアを見て見たならば、否、もし彼等が彼等の餓及び渴かわきの觀念イデア及び幾つかの他の苦痛を吟味したならば、彼等は、これ等のものの中には、全く何等の延長の觀念イデアも含まれていないということを見出したであらう、この延長の觀念イデアは我々の感覺によつて発見し得るその他の觀念イデアと同様に、物体の一屬性に過ぎない、しかも我々の感覺はめつたに事物の本質を洞察する程鋭敏ではないのである。

二六 もしすべての他の觀念イデアと常に結び付いているような觀念イデアが、そのために常にこれと結び付いて居りまたこれと不可分離であるようなものの本質であると断定されねばならぬとするならば、單一といふことが、疑いもなく、あらゆるものの本質である、何となれば感覺または反省の対象で一という觀念イデアを伴わないようなものは一つもないからである。然しこの種の議論の弱点を我々は既に充分示した。

二七 空間の觀念イデアと固体性の觀念イデアは別個のものである——結論として、人々が真空真空の存在に關して何事を考えようと、次のことは私にとつては明らかである——即ち我々が固体性に就いて運動とは別な、

また運動に就いて空間とは別な明晰な觀念イデアを持つてゐるが如く、我々は空間に就いても固体性とは別な觀念イデアを持つてゐる。我々はこれ以上明らかに區別せられる二つの觀念イデアを持つてゐない、そして物体も運動も空間なしには存在し得ないということは非常に確実なことではあるが、我々は運動なしに物体または空間を考へることが出来る、これと同様に容易く我々は固体性なしに空間を考へることが出来るのである。然し誰か或る人が、空間を、相互に或る距離を隔ててものが存在することの結果である或る關係に他ならぬ、と考へるであらうかどうか、また最も賢いソロモン王の言葉である「天も最高の天も汝を容るる能わず」ということ、或いは靈感を享けた哲學者聖パウロの更に強い言葉である「彼の中に我々は住み、動き、そして我々の存在を持つ」ということが文字通りの意味に理解さるべきであると人々が考へるかどうか、ということとは、私はあらゆる人の考察にまかせる。ただ我々の空間の觀念イデアは、思うに私の述べてきたようなものであり、物体の觀念イデアとは別個のものである。「然しこの問題に關する論説の混乱を避けるためには、延長 (extension) という名辭を物質、または個々の物体の末端の距離にのみ適用し、広がり (expansion) という語をそれを占める固形物質を伴ひまたは伴わぬ空間一般に適用し、従つて空間は広がつて居り、物体は延長して居ると言うことが恐らく望ましいことであつたらう。然しこの事は各人の自由である。私はただより明晰、判明な言い方のためにこの事を提言するだけである。」\*

\* 「〔〕内の部分は第四版に於て附け加えられたものであつて、ロックはいつでもここに推稱してゐるような區別をなしてゐるわけではない。

## 第二卷 觀念に就いて

## 第十四章 持続及びその單純様態に就いて

一 持続は推移する延長である——いま一つの種類の距離または長さがあり、その觀念を我々は空間の恒久的な諸部分から得るのではなく、推移し絶えず壊滅する連続の諸部分から得るのである。これを我々は持続(duration)と呼び、その諸々の單純様態は、任意の相異なる持続の長さであつて、それ等に就いて我々は、時間、日、年等、時、及び永遠の如き判明な諸觀念を持つて居るのである。

二 その觀念は我々の諸觀念の系列を反省することによつて生ずる——時とは何であるかと尋ねた人に対する或る偉人の答、*si non rogas intelligo* (それはこういうことになる、「それに就いて考えることに専心すればする程私はそれが分らない」)、は恐らく我々をして、すべての他のものを頭わすところの時そのものは発見せられない、ということを信ぜしめるであらう。持続、時、及び永遠は、尤もなことではあるが、それ等の性質に何か非常に深遠なものを含んでいると考えられている。然したとえこれ等のものが我々の理解力の遠く及ばぬものと思われようとも、しかももし我々がこれ等のものもその起原 *originals* にまで正当にたどつて行くならば、疑いもなく、すべての我々の知識の起原 *sources* 即ち感覺及び反省の中の一つが、これ等の觀念を、遙かにより曖昧でないと考えられている多くの他の觀念と同様に、明晰、判明に我々に与えることが出来るであらう、そして我々は永遠の觀念そのものもその他の我々の觀念と同一の共通の起原 *originals* から派生するということを見出すであらう。

\* 聖オーガスティン [Aurelius Augustinus, 354-430] のことである。ラテン文の直訳的な意味は「あなたが問わなけれ

ば私は分っている」ということである。

三 時及び永遠を正当に理解するためには、我々が持続に就いて持つ觀念は何であるか、また我々がそれを如何にして得るかを注意深く考察すべきである。誰でもただ自分自身の心の中を通る *passes* ものを觀察しようとする人にとつては、彼が目覚めている限りは絶えず彼の悟性の中に相互に相續く一列の觀念が在るということは明白である。かように我々の心の中に幾つかの觀念が相次いで現れること *appearances* に対する反省が、我々に連続の觀念を与えるものである、そしてその連続の任意の部分の間、即ち我々の心の中の任意の二つの觀念の現れる間のへだたりが我々の持続と呼ぶところのものである。というのは我々が考えている間、即ち我々が心の中に相次いで幾つかの觀念を受ける *recieve* 間は、我々が實際存在しているということを知っている、それ故に我々の心の中の任意の觀念の連続と比較して量ることの出来る我々自身またはその他の或るものの存在或いはその存在の繼續を、我々は、我々自身または我々の思考と共に存在するかような或る他のものの持続と呼ぶのである。

四 我々が連続及び持続に就いての我々の觀念をこの起原 *original* から得るということは、我々是我々の悟性の中に順番に現れる觀念の系列を考察することによる他には何等の持続の知覺を持たない、ということによつて、私には明らかであると思われる。この觀念の連続が止むときには、我々の持続の知覺もそれと共に止む、この事はあらゆる人が、一時間でも、一日でも、一ヶ月でも、または一年でも熟睡する間に、彼自身の中に明らかに実験する、この彼が眠つて居りまたは考えていない間の事物の持続に就いては彼は全く知覺を持つて居らず、それは彼にとつては全く失われてしまう、そして彼が考えるの

## 第二卷 觀念に就いて

を止める瞬間から再び考えはじめの瞬間までの間は、彼にとつては何のへだたりも無いように思われる。そして疑いもなく、目覚めている人にとつても、もしその人が一つの觀念<sup>イデア</sup>を、少しの変化もなくまた他の觀念<sup>イデア</sup>がこれに連続することもなく、彼の心の中に保持することが出来るならば、やはり同様であらう、そして非常に熱心に一つのことに考えを留めて、この熱心な熟考で一杯になっている間に彼の心の中を通る觀念<sup>イデア</sup>の連続に殆ど氣付かぬような人は、その持続の充分の部分を彼の勘定から見逃して、その時を實際よりも短いと思うということを我々は知っている。然しもしも睡眠が通常持続の相へだたつた部分を結合するのであるとしても、それはその時の間我々は心の中に何等の觀念<sup>イデア</sup>の連続をも持っていないからなのである。何となればもし或る人が眠っている間に夢を見て色々な觀念<sup>イデア</sup>が彼の心の中で次から次へと知覚せられるならば、そのとき彼は、かような夢を見ている間に、持続の感じとその長さの感じを持つからである。この事によつて人々は彼等の持続の觀念を、彼等自身の悟性の中に相互に相連続することが認められるところの觀念の系列を反省することによつて、引き出すのであるということが私にとつては非常に明らかである。

五 持続の觀念<sup>イデア</sup>は我々が眠っている間の事物にも適用され得る——たしかに或る人が彼自身の思考の連続と数を反省することによつて持続の觀念または觀念<sup>イデア</sup>を得たならば、彼はその觀念を彼が考えていない間に存在する事物に適用することが出来る、この事は視覚または触覚によつて延長の觀念<sup>イデア</sup>を得た人が、これを何等の物体も見えずまたは感ぜられない距離に適用することが出来るのと同様である。そしてそれ故にたとえ或る人が眠っていたりまたは考えていなかった間に経過した持続の長さに就いて何の知覚

をも持っていないとしても、しかも日と夜の循環を観察し、それ等の持続の長さが外見上規則的で一定であることを見出したのであるから、彼は、自分が眠っていた間の持続の長さを想像し酌量することが出来るのである。しかしもしアダムとイヴが（彼等だけがこの世に居たとき）彼等の普通の一晚の眠りのかわりに全二十四時間を一眠りに眠りつづけて過したならば、その二十四時間の持続は彼等にとつては取返しのかかぬように失われて、彼等の時の勘定から永久に残されたであろう。

六 連続の觀念は運動からは出て来ない——かようにして、色々な觀念が次々に我々の悟性の中に表れることを反省することによつて、我々は連続 succession という觀念を得る、もし誰か或る人が、我々は寧ろこの觀念【which で notion を指している】を我々の感覚によつて運動を観察することによつて得たのであると考えたとしても、その人が、運動でさえも心の中に連続の觀念を生ずるのは、それが其処に區別せられ得る諸觀念の連続した系列を生ずる場合の仕方以外の如何なる仕方によるのでもないということを考察する時は、彼は恐らく私と同意見となるであろう。何となれば実際に動いている物体を見ている人も、その運動が連続した觀念の不断の系列を生じない限りは、何等の運動をも全く知覚しない、例えば、陸地の見えない海で天氣のよい日に風ぎに出逢つた人は、太陽や、海や、船をまる一時間も眺めつづけていて、それ等の中の二つまたは恐らくすべてがその間に非常な距離を運動したことが確かであるにも拘らず、それ等の何れにも全く何の運動をも認めないということがあり得る、然し彼がそれ等の何れかが或る他の物体に対する距離を変化したということを気付くや否や、この運動が彼の中に何等かの新しい觀念を生ずるや否や、そのとき彼は其処に運動があつたということを知覚するのである。

〔七〕そして思うにこの事が、非常にのろい運動は、たとえ連続的でも我々によつて知覚せられないことの理由である、何故なれば、これ等の運動が感知せられ得る一つの部分から他の部分へ移る際に、その距離の変化が非常にのろいので、かなり長い期間を置いてはじめて次々に我々に新しい觀念を生ずるのみだからである。そしてかように我々の心の中に新しい觀念の連続的な系列が相次いで起るようにすることがないので、我々は運動に関する何等の知覚をも持たないのである。

〔八〕他面に於て、非常に速かに動くのでその運動の幾つかの区別せられ得る距離によつて明らかに感覺到影響を与えることのないようなもの、そしてそれ故に心の中に何等の觀念の系列をも惹き起さないようなものも亦動くことが知覚されない。というのは我々の觀念が我々の心の中で連続くのを慣わしとする時間よりもより短い時間の中に円をなしてぐるぐる動き廻る如何なるものも、動くということが気付かれないで、その物質または色の全く完全な円であり、運動している円の一部分ではないと思われるのである。

九 觀念の系列は一定の速度を持つてゐる——そこで私は、我々の觀念は、我々が目覚めてゐる間に、心の中で一定の間隔を以て相續くのであつて、それは蠟燭の熱によつて廻轉する堤燈の内部の影像と大差ないということがありそうもない事であるかどうかは他の人々の判断にまかせる。この様に觀念が系列をなして現れるのは恐らく或る時はより速くまた或る時はよりのろいではあるうが、しかも私は目覚めてゐる人に於てはその違いはそんなに大きくはないと思う、これ等の觀念が我々の心の中で相次いで起る連続の速さとのろさには一定の限界があり、それ以上にはのろくも速くも起り得ないものと思われ



るのである。

一〇 私がこの奇妙な推測をなす理由は、我々のどの感官に与えられる印象に於ても、我々は如何なる連続をも一定の程度迄しか知覚することが出来ないということ、もしこれが余りに速すぎると、実際の連続が在ることが明らかであるような場合でさえも、連続の感じが失われるということを認めることに依るのである。一個の砲弾が一つの部屋を通過して、その途中で或る人の或る肢または肉体の部分を持つて行くとなれば、その砲弾が連続的にその部屋の両側を打つに違いないということは何の証明がなくとも明らかである、またそれは最初に肉の一つの部分に触れ、次に他の部分に触れ、かように相連続して行くに違いないということも明らかである、そしてしかもかような射撃の痛みをかつて感じ、または二つの相隔たつた壁にあたる打撃を聞いた人で、そんなに速い衝撃の苦痛に於てもまたは音に於ても何等かの連続を感じた人は誰もあるまいと私は信ずるのである。この様なその中に我々が何等の連続をも知覚しないような持続の部分は、我々が一瞬間と呼んでもよいものであり、我々の心の中で他の觀念が連続することのないただ一つの觀念の時間を占める *takes up the time of only one idea* ものである、それ故にその中には我々は何等の連続をも全くみとめないものである。

一一 この事はまた運動が非常にのろいので、心が新しい觀念を受け入れることの出来るだけの速さで、感官に対して新しい觀念の<sup>イデア</sup>の不断の系列を供給しないような場合にも起る、そしてこの場合には我々自身の思考に関する他の諸觀念が、動いている物体によつて我々の感官に提供せられる諸觀念の間に割り込んで我々の心の中に入り込む余地を持つので、そこに運動の感じが失われるのである。そしてその

物体は、実際に動いているものではあるが、しかも我々自身の心の觀念が自然に系列をなして相續くのと  
 同じだけの速さで何か他の物体に対して認知せられ得る距離の変化をしないので、その物は静止してい  
 るように見える、これは柱時計の針や日時計の陰、その他の絶えることはないがのろい運動に於て明ら  
 かなるが如くである。この場合、一定の期間の後に距離の変化によつて我々はその物が動いたといふこ  
 とを知覚するが、しかも運動そのものは我々はこれを知覚しないのである。

一二 この系列が他の連続の尺度となる——それ故に私にとつては、目覚めて居る人に於ける觀念の  
 不断 constant の規則的 regular な連続は、謂わば、すべての他の連続の尺度 measure と標準 standard であると  
 思われる。

一三 心は一つの不変な觀念に永く固定していることは出来ない——もしも、我々が心の中に觀念を  
 持つている間は、これ等の觀念は絶えず変化し継続的な連続をなして取り換わるものであるとするなら  
 ば、これは誰でも言い得ることであるが、或る人にとつて何か一つの事を永く考えることは不可能の事  
 であろう。これに依つて、或る人が自同的な単一な觀念 one self-same single idea を、全く何の変化もなしに、  
 ただそれだけを永い間彼の心の中に持ち得るといふことが意味されるのであるならば、事實上私はそれ  
 は可能ではないと思う。これに対しては私は経験以外の如何なる理由をも与えることは出来ない（我々  
 の心の諸觀念が如何にして生ずるか、如何なる材料によつてそれ等は作られるか、何処からそれ等はそ  
 の光を得るか、また如何にしてそれ等は現れるようになるか、を私は知らないから）。そして私は誰か  
 或る人に、彼が一つの不変な、単一な觀念を彼の心の中に、他の觀念を伴ふことなく、或る相当に永い

時間保持することが出来るかどうかを試みてもらい度いのである。

一四 試みにその人をして任意の形態、任意の程度の光または白さ、或いは他の何でも彼の好きなものを取らしめよ、そうすれば彼は、思うに、すべての他の観念<sup>イデア</sup>を彼の心の外に置いておくことは keep all other ideas out of his mind が困難であるのを見出すであろう、むしろ、他の種類のものにしても、或いはまたその観念<sup>イデア</sup>のいろいろな考察にしても、(その考察の各々は一つの新しい観念<sup>イデア</sup>である) 幾つかの観念<sup>イデア</sup>が、彼をして出来るだけ注意深くせしむれば、絶えず彼の思考の中に相次いで連続するであろう。

〔一五〕この場合人のなし得るすべての事は、思うに、ただ彼の悟性の中に順番に現れる諸観念<sup>イデア</sup>は何であるかということに注意しまた観察することだけである、或いはさもなければ観念<sup>イデア</sup>の種類を指導して、彼が望みまたは必要とするようなものと呼び入れるということである。然し乍ら私の考えでは彼は新しい観念<sup>イデア</sup>の不断の連続を妨げることは出来ない、尤も彼は通常それ等の観念<sup>イデア</sup>を注意深く観察し考察しようとするか否かの選択をなすことは出来るのではあるが。

一六 これ等の諸観念<sup>イデア</sup>は、作られはするが、何等運動の感じ sense of motion を含まない——人の心の中のこれ等の幾つかの観念<sup>イデア</sup>が或る運動によつて作られるかどうかは、私はここでは論じまい。然し私はこれ等の運動はそれが現れる場合に何等の運動の観念<sup>イデア</sup>をも含まないということを確認する。我々に持続の観念<sup>イデア</sup>を与えるものは、運動ではなくて、我々が目覚めている間の我々の心の中の不断の観念<sup>イデア</sup>の系列である、この持続の観念<sup>イデア</sup>に就いて運動は、私が前に示したが如く、ただそれが我々の心の中に観念<sup>イデア</sup>の不断の連続を引き起す場合の如き仕方<sup>イデア</sup>に於てのみ、何等かの知覚を我々に与えるのである。そして我々は、

## 第二卷 觀念に就いて

何等かの運動という觀念<sup>イデア</sup>を伴うことなしに我々の心の中に次々に相續く觀念<sup>イデア</sup>の系列に依つて、運動によつて我々が感ずることの出来る二物体間の距離の不斷の変化によつて惹き起される觀念<sup>イデア</sup>の系列に依ると同様に、明晰なる連續及び持続の觀念<sup>イデア</sup>を持つのである。そしてそれ故に全く運動の感じが何もなくても、我々は同様に持続の觀念<sup>イデア</sup>を持つのである。

一七 時間は度量 *Measures* によつて区切られた持続である——かようにして持続の觀念<sup>イデア</sup>を得た後に、次に心が自然に為すべき事は、心が持続の相異なる長さを判断し、幾つかの事物が存在する明確な順序を考察することが出来るためのこのすべてに共通な持続の或る度量<sup>イデア</sup>を得ることである。これ無くしては我々の知識の大部分は混亂したものとなるであらうし、また歴史の大部分はまことに無用のものとなるであらう。一定の期間によつて区切られ、そして一定の度量または時期によつて区分せられるものとしてこの様に持続を考察することが、思うに、本来の意味で我々が時間と呼ぶところのものである。

〔一八〕かような期間によつて区別せられないまたは区別され測量されるものと考えられないような持続の部分は本来時間の觀念<sup>イデア</sup>の中には含まれない、このことは例えば「すべての時の前に」また「時がもはやないであらうときに」というような句によつて示されるが如くである。

一九 太陽及び月の廻転が最も適当な時間の度量である——太陽の日々及び年々の廻転は、自然の初めから不変で、規則的で、またすべての人類によつて普遍的に觀察され得るものであり、そして毎回相等しいものと仮定されているので、これが持続の度量として用いられて来たのは尤もなことである。然し乍ら日々及び年々の区別は太陽の運動に依っているので、この事は運動及び持続が相互の度量である

と考えられるという誤謬を伴った。然るに外見上相等しいへだたりの持続の間隔を以て觀念が不變に週期的に現れまたは変化する事ならば何でも、今まで用いられているものと同様に時間の間隔を區別したであろう。何となれば、或る人々が火であるとなした太陽が、それが毎日同一の子午線の所へ来ると同じ時間の間隔を以て点ぜられ、そしてそれから約十二時間の後にまた消えるようになって居り、また一年の廻転の時間の間にそれが明らかにその明るさと熱とを増すようになっていたと仮定すれば、かような規則的な現象は、これを觀察し得るすべての人にとつて運動を伴わなくても伴うと同様に持続の間隔を測定するのに役立たなかつたであろうか。何となればそれ等の現象が不變で、普遍的に觀察され得て、また等しい間隔の週期をもっているならば、それは運動が欠如していても同様に時間を測定するために人々に役立つであろう。

〔二〇〕というのは地球のすべての部分に於て等しい間隔の週期を以て廻つて来る水の氷結、または植物の開花は、太陽の運行と同様に人々が彼等の年齢を数えるのに役立つであろう。そして實際我々は、アメリカの或る種族の人々は、或る鳥が一定の季節に彼等の処へ来て他の季節に彼等の処を去ることによつて、彼等の年齢を数えたことを知っているのである。

二一 持続の如何なる二つの部分も相等しいことが確實には知られ得ない——然し乍ら恐らく「太陽または何か他のものの運動のように規則的な運動なしに、如何にして一体かような期間が相等しいということが知られ得るであろうか」と言われるであろう。これに対して私は次の如く答える、即ち如何なる他の廻り起る現象の相等しいということも、日々の相等しいことが知られまたは初めに相等しいと推

定されたと同一の方法によつて知られ得るであらう。この日々の相等しいことを知るのは、唯その期間の間に人々の心の中に経過した觀念イデアの系列によつて日々を判断することにのみ依つたのである。それ故に我々は持続そのものとその長さを判断するために我々が用いる度量とを注意深く區別せねばならぬ。持続そのものは一つの不変な、むらのない、一樣な過程を以て進行しつつあるものと考えらるべきである。然し我々が用いる如何なる持続の度量もかように進行するとは知られ得ないし、また我々はそれ等の度量の割り当られた部分または期間が相互に相等しい持続を持つということを確信することも出来ない、何となれば持続の二つの相つづく部分は測定することは出来るが、決して相等しいということを証明することが出来ないからである。太陽の運動は、持続の一つの正確な度量として世界が非常に長い間また非常に信頼して用いたものであるが、その幾つかの部分が相等しくないことが見出されている、そして人々は近頃太陽或いは（より真実を以て言えば）地球の運動より更にむらのない規則的な運動として振子を用いるようにはなつたが、しかももし或る人が、如何にしてあなたは、振子の相つづく二つの振動が等しいということを確実に知るかと問われたならば、これ等の振動が確かにそうであると自ら納得することは非常に困難であらう、何故なれば、我々は、その運動の我々に知られていない原因が常に均等に働くであらうということを確実に知ることは出来ないし、また振子が其の中で動くところの媒質は常に同一ではないということも確かである、この二つのことの何れが変化してもかような振動期間の相等性を変え、それによつて運動に依る測定の間違ひのない確実性を破壊するのである。時間を測定するために我々のなし得るすべての事は、外見上相等しい間隔を持つた期間に継続的に相次いで現れるよ

うなものを取るということである、この外見上の相等性に就いては、我々の記憶の中に宿っている我々自身の觀念の系列、及びこれと共にその相等しいことを我々に信ぜしめる他の蓋然的な理由が在るというような事以外には我々は何の標準をも持たないのである。

二二 時間は運動の度量とはならない——一つの事が私には不思議に思われる、それは即ちすべての人々が世界の大きな見ることの出来る物体によつて明らかに時間を測定したのに、しかも時間が運動の度量であると定義されるということである。ところがこれに反して誰でもこの事についていつかほんの少しでも反省して見る人にとっては、運動を測定するためには、空間が時間と同様に必然的に考察さるべきであるということが明らかである。そして更に少く先まで考える人々は、動かされる物の大きさも亦、運動を正しく判断するように見積りまたは測定しようとする如何なる人によつても、必然的に計算に入れらるべきものであるということを見出すであらう。また實際、運動は持続の測定に対して、それが常に外見上相等しい間隔の期間を以て若干の感知せられ得る觀念を廻り来たらしめるというより以外の如何なる仕方を以ても、貢獻する所はないのである。

### 【二三 略 Minutes, hours, days, and years are, not necessary Measures of Duration】

二四 我々の時間に関する度量は時間以前の持続に対して適用され得る——心は一度太陽の年々の運行の如き時間に関する度量を得ると、この度量を、その度量がその中に存在しなかつたような持続に適用することが出来る。太陽の一年の運行と相等しい持続という觀念が、我々の思考の中に於て、太陽もまた運動も存在しなかつた持続に対して容易く適用され得ることは、此処で物体から取られた一呎また

は一碼という觀念が、我々の思考の中に於て、世界の限界を越えた、物体が何もないような遠方に対して容易く適用され得るのと全く同様である。

## 【二五 略】

## 【二六 略】

二七 永遠——それ故に我々が時間の觀念を持つようになるのと同一の方法によつて、また同一の起原 original から、我々は、我々が永遠と呼ぶ觀念をも得るのである。即ち、我々の目覚めている思考の中にひとりでに絶えず這入つて来るような觀念の自然的現出によつて我々の中に生ぜられ、或はさもなくば相續いて我々の感官に働きかける外的対象によつて惹き起されるところの我々自身の觀念の系列を反省することによつて連続及び持統の觀念を得、また太陽の運行によつて持統の一定の長さの觀念を得たので、我々は我々の思考の中に於てかような持統の長さを幾度でも我々の好きなだけ相加え、かくの如く相加えられた長さを過去または未來の持統に適用することが出来る。そして我々はこの事を限界または制限なしに為し続け、無限に進み、そしてかようにして太陽の年々の運動の長さを、太陽の運動またはその他の如何なる運動も存在しなかつた前に起つたものと想像されるところの持統に適用することが出来るのである。

## 【二八 略】

## 【二九 略】

## 【三〇 略】



三一　そしてかようにして私は、前述のすべての知識の二つの起原即ち、反省及び感覚によつて、持続及びその度量の觀念を得ることが明らかである、と思う。

何となれば、第一に、我々の心の中を通過するものを觀察し、如何にして我々の諸觀念が其処で絶えず系列をなして或るものは消え、そして他のものが現れはじめるかを觀察することによつて、我々は連続、*succession* の觀念を得る。

第二に、この連続の諸部分の隔りを觀察することによつて、我々は持続の觀念を得る。

第三に、一定の規則的で外見上相等しい隔りの期間をもつ若干の現象を感覚を以て觀察することによつて、分、時間、日、年、等の如き、持続の一定の長さの觀念即ち度量を得る。

第四に、これ等の時間の度量、即ち我々の心の中に於ける持続の一定した長さの觀念を幾度でも我々の好きなだけ繰り返すことが出来るので、我々は、實際には何物も持続しまたに存在しない所に持続を想像することが出来るようになる。そしてかようにして我々は明日、来年、または七年先を想像するのである。

第五に、一分、一年または一代というような任意の時の長さのかような觀念の如何なるものでもこれを我々自身の思考の中で幾度でも我々の好きなだけ繰り返し、そしてそれ等の觀念を一つづつ相加え、我々が数の終りに到達することはなく何時でも更に相加えることが出来るものと全く同様に、かような加算の終りに到達することがないということが可能であるから、我々は、必ず常に存在していたに違ひないかの無限の存在者の永遠の觀念と同様に、我々の靈魂 *souls* の未来永遠の持続というような永遠という

観念<sup>イデア</sup>に到達するのである。

第六に、無限の持続の任意の部分を、週期的な度量によつて区切られたものとして考察することに  
よつて、我々は、時間、一般と呼ぶものの観念<sup>イデア</sup>を得るのである。

## 第十五章 一緒に考察された持続及び広がりについて

一 両者ともより大きくなりまたより小さくなることが可能である——我々は前の諸章に於て空間及び持続の考察にかなり長く留つたが、しかもこれ等はその性質に非常に深遠なまた特異なる或るものを持つ一般的に重要な觀念<sup>イデア</sup>であるから、これ等を相互に比較することは恐らくその説明に役立つであろう。そして我々はこれ等を一緒に考えて見ることによつてこれ等に関する一層明晰、判明な概念 conception を持ち得るであろう。單純に抽象的に理解された、距離または空間を、混乱を避け、これを延長<sup>(extension)</sup>と區別するために、私は広がり<sup>(expansion)</sup>と呼ぶ。この延長という語は或る人々によつては、物質の固形的な部分の中にあるが俁のこの距離のみを言い現すのに用いられ、それ故に物体の觀念<sup>イデア</sup>を含みまたは少なくともこの觀念<sup>イデア</sup>を示す、これに対して純粹な距離の觀念<sup>イデア</sup>は何等かようなものを含まない。私はまた広がりという語を空間という語よりも好む、何故なれば空間は永久的な諸部分に対してと同様に、屢々決して同時に存在しない過ぎ去つて行く連續的な諸部分の隔りに対しても適用されるからである。これ等の両者（即ち、広がり及び持続）に於て心は、その量がより大きくもまたはより小さくもなり得る連續的な長さという共通の觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐる、何となれば人は、一時と一呎の相違の觀念<sup>イデア</sup>と同様に、一時間と一日の相違の觀念<sup>イデア</sup> an idea of the difference を持つてゐるからである。

二 広がり<sup>イデア</sup>は物質によつて限られない not bounded——心は、一とあたり（訳者注——拇指と小指を張つた間の長さ）、または一步【インチとフィートにあたる】、或いは何でも人の好きな長さでよいのだが、広

がりの或る部分の長さの觀念イデアを得たならば、前述の如く、その觀念イデアを繰り返すことが出来る、そしてかようにしてそれを前のものに加えて、心はその長さの觀念イデアを、それが太陽または最も遠い星の距離になるまで、拡大するのである。このような進行によつて心は、その在る場所、または或る他の場所から出発して、物体の中にもまた外にもその進行を留める何物をも見出すことなく、進行し、すべてのこれ等の長さを越えることが出来る。確かに我々は思考の中に於て容易く固形的延長の終りに到達することが出来る、我々がすべての物体の末端と限界に達するには何の困難もない、然し心が其処にある場合には、心はそれが果てしない広がりに入進して行くことを妨げる何物をも見出さない、心はこの広がりにおいては何等の終りをも見出すこともまた考えることも出来ない。また如何なる人も、彼が神を物質の限界の内に閉ぢ込めようとしめない限りは、物体の限界を越えては全く何物もないと言うことは出来ない。智慧によつて満ち拡がった理解力を持つていたソロモンは、彼が「天も最高の天国も汝を容るる能わず」と言う場合には、別の考えを持つていたように思われる。そして思うに、自ら自分の思考を神が存在するよりも遠くまで拡げることが出来ると確信し、または神の無い所に何等かの広がり想像するような人は、彼自身の悟性の能力を自らに對して著しく誇張しているのである。

三 持続も亦運動によつて限られない——持続に於ても全く同様である。心は、持続の任意の長さの觀念イデアを得ると、それを倍にし、増加し、拡大して、それ自身の長さを越えるのみならず、すべての有形的なものの存在及び世界の大きな諸物体とその運動から取られたすべての時間の度量以上にすることが出来る。しかしなお、事実確かにそうなのであるが、我々は持続を無限にすることは出来るが、しかも我々

はそれをすべての存在を越えて拡張することは出来ない、ということであらゆる人は容易く認める。神が永遠を満たしていることをあらゆる人は容易く認める、そして何故誰か或る人が、神は同様に無限を満たしているということを、疑うべきかという理由を見出すことは困難である。神の無限の存在は確かにこれ等の一方に於て他方に於けると同様に無際限である、そして物体の無い処には何物もないというのは物質に対して少しく多くを帰し過ぎると私には思われる。

四 何故に人々は無限の広がりよりも無限の持続をより容易く認めるか——そこで思うに我々は、何故あらゆる人が分り切ったこととして、また何の躊躇もなしに永遠を語りまた仮定し、持続に対して無限性を帰することに行き悩まないかという理由を知ることが出来る、然し乍も多くの人々が空間の無限性を認めまたは仮定することはより多くの疑いを以てまたより控え目に為される。この事理由は私には次のことであると思われる、即ち、持続と延長は他の物に属する性質の名前として用いられるので、我々は容易に神の中に無限の持続を考え、また我々はそうせざるを得ない、然し乍ら我々は延長を神ではなく、有限な物質にのみ帰するので、我々は物質を伴わない広がりイデアの存在をより疑い勝ちである、何故なれば我々は通常広がりイデアを物質の属性とのみ考えるからである。そしてそれ故に、人々は彼等の空間に関する思考を追究するとき、彼等は物体の限界で止り勝ちである、恰も空間も亦其処で終つて、それ以上に到達しないかの如くに。またたとえ彼等の觀念が、考察して見ると、彼等を更に先迄つれて行つても、しかも彼等は宇宙の限界を越えているものは、その中に何等の物体も存在していないが故に、これを、恰も無であるかの如くに、空想的空間と名づける。これに対してすべての物体及び物体を測量

する運動に先行するところの持続を、彼等は決して空想的とは名づけない、何故なれば持続は決して或る他の實在的存在 *Real existence* を欠くとは考えられないからである。そしてもしも物の名前が一体我々の思想を直接に人々の觀念<sup>イデア</sup>の起原の方に向けることが出来るならば（私はこれ等の名前がこの事を大いに為し得ると考える傾であるが）、人は、持続という名前によつて、如何なる破壊力に対しても一層の抵抗を伴う存在の継続と、固体性の継続（この固体性は堅さと混同され勝ちであり、またもし我々が物質の微細な原子的な部分を吟味するならば堅さと殆ど異らぬものである）とは或る類似を持つものと思われたと考えるべき理由、また *durare*（持続する）と *durum esse*（持続的である【ラテン語で「堅い」】）の如き非常に血縁の近い語の生ずる機会を与えたと考えるべき理由があるであらう。

五 時間の持続に対するのは、場所の広がりに対するが如くである——時間一般の持続に対するのは、場所の広がりに対するが如くである。これ等のものはかの永遠及び無限のはてしなき大洋の中の、謂わば境界標によつてその他の部分から区切られ区別されたそれだけのものである、そしてそれ故に、かの持続及び空間の一樣にして無限な大洋の中に於ける有限な實在的な諸物の相互關係上の位置を指摘するために用いられるのである。

〔八〕かように解された時間と場所は各々二通りの意義を持つてゐる。第一に、時間一般は通常、無限の持続の中の、我々が宇宙の大きな物体に就いて何事かを知る限りに於けるこれ等の物体の存在と運動によつて測られ、またこれと共に存在するだけの部分であると考えられる、そしてこの意味に於ては、時間は、前に述べた「すべての時の前に」、または「時がもはやないであろう時に」というような句に

於けるが如くこの感知せられ得る世界という構造と共に始まりまた終る。場所も亦同様に時々物質的世界によつて占められまたその中に含まれる無限の空間の部分であると考えられる、そしてこの事によつて広がりの中の他の部分と區別される、尤もこれは場所と言うよりは延長と呼んだ方がより適當ではあらうが。

〔七〕第二に、ときどき時間という語はより広い意味に用いられ、そして我々が偶々測定された時間の一定の長さに等しいと想像するようなかの無限の一樣な持続の諸部分にも適用される、そしてそのようにして我々はそれ等の部分を限られ規定されたものと考ええる。そして我々が世界の限界を越えた大きな空間に就いて、これが或る指定された大きな物体に等しいまたはこの物体を受け入れることが出来るものであるというだけのことを考察する時には、我々はこの大きな空間の中の場所、距離、または大きさに就いて時々同じように語っているのである。

八 これ等はすべてのものに属する——何処及び何時、というのはすべての有限な存在に属する問いであつて、我々は常にこれ等の問いを、この感知せられ得る世界の若干の知られている部分をもとにして、またこの世界の中に觀察せられ得る運動によつて次々に指定せられる若干の定つた時期をもとにして考える。若干のかくの如き固定した部分または時期なしには、事物の順序は持続と広がりとの限界も変化もない大洋の中に紛れて、我々の有限なる悟性には見えなくなるであらう、この大洋はその中にすべての有限なものを含み、その充分な大きさに於てはただ神にのみ属するものである。そしてそれ故に、我々がこれ等を抽象的にそれ自身に於て考察するかまたは何等かの方法で最高の捕捉し難いものに歸せられ

るものとして考察するとき、我々がこれ等を理解せず、また非常に屢々我々の思考が当惑するのを知ることゝを訝ることはないのである。

九 延長のすべての部分は延長であり、また持続のすべての部分は持続である——いま一つ空間と持続が非常な一致を示している点がある、そしてそれはこれ等のものは我々の單純觀念のうちに数えられるが、しかもこの兩者の何れについても我々の持つ判明な觀念のどの一つもすべての仕方の組成を伴わぬものはない、部分から成り立つということはまさしくこれ等の兩者の性質である、然しこれ等のものの部分は、すべて同一種類のもので、如何なる他の觀念もこれと混合していないのであるから、これ等のものが單純觀念の間に位置を占めることを妨げない。もしも心が、數に於けるが如く、延長または持続のそれ以上分割することの出来ぬ程小さな部分に到達し得るならば、それは、謂わば、不可分の單位または觀念である、これを繰り返すことによつて心は延長及び持続に関する更に拡大した觀念を作るであらう。然し心は部分のない如何なる空間の觀念をも作ることが出来ないから、その代りに心は普通の標準を用いる、これ等の標準はあらゆる國に於て日常用いられることによつて記憶に刻みつけられている。そしてこれ等の標準は、心がその熟知しているかような知られている長さを附加することによつて、折に触れて作るところのより大きな觀念を構成する部分である。他面に於て、この兩者（訳者注——延長及び持続）に就いて我々の持つ最も小さい量は、心が分割によつて兩者をより小さな断片に縮小しようとするときに、數の單位と見做される。両面に於て、空間または持続の附加及び分割の両方に於て、考察されている觀念が非常に大きくまたは非常に小さくなるとき、その精確な大いさは非常に漠然とし



て不明瞭なものとなる、そしていつまでも明晰判明であるのはただその繰り返される附加または分割の数のみである、この事は誰でも、広大なる空間の広がり、または物質の可分割性の中に彼の思考を解放する人には、容易に明らかになるであらう。持続のあらゆる部分はやはり持続である、また延長のあらゆる部分は延長である、これ等の両者は無限に附加しまたは分割することが可能である。<sup>\*</sup>然しこれ等の何れでも最小の部分で、それに関して我々が明晰判明な概念を持つものが、それから我々の空間、延長、及び持続の複雑な様態が作られ、またこれ等のものが再びそれに別々に分解せられ得るような種類の單純觀念として我々によつて考えられるのに恐らく最も適しているであらう。持続の中のかような一つの小さな部分は瞬間と呼ぶことが出来、そしてこれは我々の心の中の觀念の普通に連続する系列に於ける一つの觀念の占める時間である。いま一方のものは、適当な名前を欠いているので、私がこれを感じ、知れ、得る点 (sensible point) と呼ぶことを許されるかどうか知らないが、私はこれによつて我々の判別し得る物質または空間の最小の分子を意味する、それは普通は眼を中心とする円の約一分であり、また最も鋭い眼にとつても三十秒以下であることは稀である。

\* ロックはここで空間及び時間の連続性を強調しているので、それは一面に於ては両者の無限性を、他面に於てはそれ等の無限に分割し得ることを意味している。

一〇 これ等のものの部分は不可分離である——広がりと持続には更に次の如き一致点がある、即ちこれ等は両者とも我々によつて部分を持つものと考えられているが、しかも両者の諸部分は相互に分離

## 第二卷 觀念に就いて

することが出来ない、否、思考の中に於てさえも不可分離である。

〔一二〕けれども、両者の間には次の如き明らかな相違がある、即ち我々が広がりに関して持つところの長さの觀念はあらゆる方向にむけられ、そしてそれ故に形、幅、及び厚さをなす、然し特続は謂わば無限に延びている一直線の長さにすぎず、多種になり、変化し、または形をなすことは不可能であつて、すべてのあらゆる存在の一つの共通な量であり、すべてのものは、それ等が存在する限りは、等しくこれに与かるのである。何となればこの現在の瞬間は今存在しているすべてのものに共通であつて、それ等の存在がまさしくすべてただ一つのものであるかの如くに彼等の其の部分を同等に含む、そして我々は眞実、彼等はすべて時間の同一瞬間に存在する、と云うことが出来るのである。

一二 持続は決して二つの部分を同時に持つことなく、広がりはずべての部分を一緒に持つ——持続、及びその一部分である時間は、消滅して行く、間隔 *perishing distance* について我々の持つ觀念であり、この間隔のどの二つの部分も同時に存することはなく、相互に連続 *succession* をなしてつづく、一方広がりには存続している距離 *lasting distance* の觀念で、この距離のすべての部分は一緒に存在していて、連続 *succession* することは不可能である。そしてそれ故に、我々は連続のない如何なる持続をも考えることが出来ず、また或るものが今存在することと明日存在することが同時に起るということ、或いは或るものが同時に持続の現在の瞬間以上を占めるということを考えることも出来ない、然し我々は、人間または如何なる他の有限なもの持続とも遙かに異なる神の永遠の持続を考えることが出来る。何となれば

i つまり "succession" という言葉は、単なる「連続」ではなく、繼起という意味も含むのだろう。

人間は彼の知識または力の中にすべての過去及び未来のものを含むものではない、人間の思考は昨日のことに關するに過ぎず、人間は何を明日がもたらすかを知らないのである。一度過ぎ去つたものを彼は決して呼び戻すことは出来ない、また未だこれから来るべきものを彼は現存せしめることは出来ない。私が人間に就いて言うことを、私はすべての有限な存在に就いて言う、これ等の存在はたとえ知識と力に於て遙かに人間に優つていようと、しかも神そのものと較べれば最も下等な創造物と全く同等である。有限は、如何に大きくても、無限に対しては全く比べものにならない。神の無限の持続には無限の知識と無限の力が伴うから、神は過去及び未来のすべてのものを見る、これ等のものは現在と較べて、少しも彼の知識からより遠いものではなく、少しも彼の眼からより隔たつてゐるものではない、それ等のものはすべて同一の眼力のもとにある、そして何でも彼のすぎな各瞬間に彼が存在せしめることの出来ないようなものは何もない。何となればすべてのものの存在は神の御思召おんおほしめしによつてゐるのであるから、すべてのものは、神がそれ等のものを存在せしめるに適すると考えるあらゆる瞬間に、存在するのである。これを要するに、広がりと持続は相互に相抱き相含むものである、空間のあらゆる部分は持続のあらゆる部分の中にあり、また持続のあらゆる部分は広がりの中にあるのであるから。二つの別個の觀念イデアのかくの如き結合は、思うに、我々が實際考えまたは考え得るすべての非常な多様の中にも減多に見出さるべきものでない、そしてこれは更に考察すべき問題を与えるであらう。

## 第二卷 觀念に就いて

## 第十六章 數に就いて

一 數は最も單純なまた普遍的な觀念<sup>イデア</sup>である——我々の持つすべての觀念<sup>イデア</sup>の中で、單一<sup>イデア</sup> unity、または一<sup>イデア</sup> one の觀念<sup>イデア</sup>程多くの仕方<sup>イデア</sup>で心に思い浮べられるものはないが、またこれ以上單純な觀念<sup>イデア</sup>もない。この觀念<sup>イデア</sup>はその中に多様性または構成の何等の片影をも持たない、我々の感覺の働くあらゆる対象、我々の悟性の中<sup>イデア</sup>のあらゆる觀念<sup>イデア</sup>、我々の心<sup>イデア</sup>のあらゆる思考はこの觀念<sup>イデア</sup>を伴う。そしてそれ故にこの觀念<sup>イデア</sup>は、それがすべての他のものに適合するがために、我々の持つ最も普遍的な觀念<sup>イデア</sup>であるのみならず、また我々の思考にとつて最も親密なものである。何となれば數は人、天使、行為、思考、即ち實際に存在し或いはまた想像され得るあらゆるものに適用されるからである。

二 その様態は附加することによつて作られる——この觀念<sup>イデア</sup>を我々の心の中で繰り返し、この反復を相加えることによつて、我々はその様態、modes の複雑<sup>イデア</sup> complex 觀念<sup>イデア</sup>を得る。かようにして一を一に加えることによつて我々は一對という複雑<sup>イデア</sup>觀念<sup>イデア</sup>を得る、十二の單位を一緒にすることによつて我々は一ダースという複雑<sup>イデア</sup>觀念<sup>イデア</sup>を得る、二十 (a score)、または百万 (a million)、または如何なる他の數に就いても同様である。

三 各様態は明確である——數の單純様態はすべての他の單純様態の中で最も明確なものである、何となれば一つの單位であるあらゆる最小の変化が、各々の結合を、それに最も遠いものからと同様にそれに最も近いものから明らかに異なるようにする、即ち二は二百と同様に一と異なり、また二の觀念<sup>イデア</sup>が

三の觀念イデアと異なるのは、地球全体の大きさが蛆の大きさと異なるのと同様である。この事は他の諸単純様態に於てはそうではない、これ等のものに於ては、我々にとつては、二つの接近しているがしかも実は相異なる觀念イデアの間の區別をすることはそんなに容易くないし、また恐らく可能でもない。何となれば誰がこの紙の白色とこれに次ぐ程度の白色の間の相違を見出そうと企てるであらうか、或いは誰が延長の最小の超過毎に別々の觀念イデアを形成することが出来るであらうか。

四 それ故に数による証明は最も精確である——数の各々の様態がすべての他の様態から、最も接近しているものからさえも、明晰、判明に區別せられ得るということが、私をして、数による証明は、たとえ延長による証明より以上に明白で精密ではないとしても、しかもより一般的に使用せられ、またより明確に適用せられるものであると考え勝ちにする。何となれば我々の思考は、一つの単位程に、思考がそれ以上に越えることの出来ない或る確定した小ささに到達することは出来ない、そしてそれ故に如何なる最小の超過の量または割合も見出され得ない。

五 名前が数に必要である——前述の如く一単位の觀念イデアを繰り返し、これをいま一つの単位に付け加えることによって、我々はそれから二という名前によつて表示せられる一つの集合的な觀念イデアを作る。そして誰でもこの事をなし、また彼が任意の数に就いて得た最後の集合的な觀念イデアに更にもう一つを加え、これに名前を与えることによってこの事を続行することの出来る人は、彼が更に続く数に対する一続きの名前と、この一続きの数と色々な名前を把持する記憶とを持つ限りは、数えることが出来、また相互に區別せられる幾つかの単位の集合に対する觀念イデアを持つことが出来る。何となればすべての計算は、更

にもう一つの単位を加え、そして全体と一緒にしたもの、一つの觀念イデアに含まれるものとして、一つの新しい即ち別の名前または符号を与え、これによつてそれを前及び後のものから識別し、またそれを單位のあらゆるより小なるまたはより大なる集合から區別せられるようにすることに他ならないからである。というのは、数の幾つかの單純様態は我々の心の中に於ては、何等の多樣性もなくまたより多いとかより少ないという以外の何等の相違もあり得ないような單位のそれだけの数の結合にすぎないから、各々の別々の結合に対する名前または記号が如何なる他の種類の觀念イデアに於けるよりも必要であると思われる。何となればかような名前または記号なしには勘定をするのに我々は殆ど数をよく用いることが出来ない、殊に結合が非常に多くの單位から成り立つてゐる場合にそうである、これ等の單位は、その精確な集合を區別するための名前または記号なしに一緒にされるならば、混亂した累積とならずにいることは困難であらう。

六 この事が、私の話し合つたことのある（その他の点では充分機敏な分別のある才能を持っていた）若干のアメリカ・インディアン Americans が、何故我々の為すが如くには、決して一千まで数えることが出来なかつたり、また二十までは非常によく数えることが出来たがこの千という数に関する何等の明確な觀念をも持たなかつたかといふことの理由である、と私は思う。何となれば彼等の言語は貧弱であつて、売買も数字も知らない貧窮な、單純な生活の少數の必要物にのみ適應せしめられてゐるので、その中には一千を表す語が何もない、それ故に人が彼等にこれ等のより大なる数に就いて語る時には、彼等は自分等が数えることの出来ない非常な多数を表現するために、彼等の頭の毛髪を示すのが常であつ

た、この不能は、思うに、彼等が名辞を欠くことから生じたのである。Tonupinambos<sup>\*</sup>は五以上の数に對する名前を一つも持たなかった、それ以上の或る数を彼等は自分等の指、及び其処にいる他の人々の指を示すことによつて判別した。

\* 野蕃人種の名。(第一卷、第三章、第九節参照【ブラジルの先住民、名前が登場しただけだが、文献を注に記す。】)

七 何故子供等をもつと早くから数えないか——かくして子供等は、数の幾つかの行列を印し付ける名前を欠いているためか、或いはまたばらばらの觀念<sup>イデア</sup>を集めて複雑觀念<sup>イデア</sup>となし、これ等を一つの規則的な順序に配列し、そしてこれ等を、勘定するのに必要であるように、彼等の記憶の中に把握する能力を未だ持つていないためか、あまり早くからは数えることを始めないし、また彼等が他の諸觀念<sup>イデア</sup>の相當の貯えを充分持つようになつてから可なり経つ迄は、この点に於て非常に大いにまたは着々と進むことはないのである、そして人は屢々子供等が二十まで数えることが出来ないうちに、かなりよく話したるは推理し、そして幾つかの他のものに就いて非常に明瞭な概念を持つことを認めることが出来るであらう。何となれば二十まで数え、またはこの数の何等かの觀念<sup>イデア</sup>を持たうとする者は、その前に十九があつたということを知り、それ等の数がその順序の中で印し付けられている、それ等一つ毎の別々の名前または符号をも知らねばならぬ、何となればこれが旨く行かぬと必ず、間隙が出来、連続が切れて、数えることはそれ以上進行し得ないからである。それ故に正しく数えるには次の事が必要である、(一)心が、一つの単位を加えまたは減ずることによつてのみ相互に相異なる二つの觀念<sup>イデア</sup>を注意深く區別すること。(二)心が、一単位からその数までの幾つかの結合の名前または記号を記憶に把持し、しかもこの

## 第二卷 觀念に就いて

事を混乱していい加減ではなく、数が相続く場合の正確な順序に於てなすこと。

八 数はすべての計量し得るものを計量する——次の事が数に於て認められる、即ち数は、心が、主として延長及び持続である我々によつて計量せられ得るすべてのものを計量するに用いるところのものである、そして無限に関する我々の觀念はこれ等のものに適用される場合ですら数の無限に他ならないと思われる。何となれば永遠及び広大無辺に関する我々の觀念は、持続及び広がり of 想像された諸部分の一定の觀念を数の無限と結び付けて繰り返して附加し、この際我々は何処迄行つてもこの附加の終りに到達し得ないということ以外の何であらうか。何となれば、或る人をして彼の好きなだけの大きな数を集めて一つの和とせしめよ、この多数は、たとえ如何に大きくとも、更にそれに加える力を少しも減少しない、或いは彼を無尽蔵な数の貯えの終に少しも近づかしめない、其処にはなお恰も何も取り出されないかの如くに多くの附加さるべきものが残っているのである。そして心にとつて非常に明らかであるこの数の無限の附加または可附加性 (additivity) (もし誰かがこの語の方を好むならば) は、思うに、我々に無限に関する最も明晰、判明な觀念を与えるものである、これに就いては次章に於て更に述べるであらう。

【第十七章 無限に就いて 本 PDF では略】

【第一八章 その他の単純様態に就いて】 【底本で略】



【第十九章 思考の状態で就いて 本PDFでは略】

〔第二十章 快楽及び苦痛の状態で就いて〕【底本で略】

## 第二卷 觀念に就いて

## 第二十一章 力 POWER に就いて

\* 本章はこの「悟性論」中最も長い章であるが、その最初の四節と結末の諸章を除いては、それは本論の問題と殆ど無関係である。その他の部分は意志の自由の問題の長たらしい議論にあてられているのであつて、これは現代の讀者にとつては爲になるというよりは退屈なものである。かように長くなつたのはロックが第一版と第二版の間で、何が究極に於て我々の行為を決定するか、ということに就いて、彼の考えを変えたことにもよつてゐるのである。かくの如き事情であるから、ここではただ議論の動向を示すに充分だけを保留することとした。

一 この觀念は如何にして得られるか——心は、毎日感官によつて、それが外界の事物の中に認める單純觀念<sup>イデア</sup>の変化を知り、如何にして一つの觀念<sup>イデア</sup>が終つて無くなり、そして前には無かつた他の觀念<sup>イデア</sup>が存在し始めるかに心を留め、また心自身の中を通過するものを反省し、そして心の觀念<sup>イデア</sup>の不斷の変化を、或る時は外界の対象の感官に与える印象によつて、また或る時は心自身の勝手な決定によつて、認め、更にまた心が存在したと絶えず認めたところのものによつて、将来も同様な変化が同じ物に於ては同様な作用者によつて、また同様な仕方によつて起るであらうということを結論する。それで心は一つのものの中にその單純觀念<sup>イデア</sup>の或るものが変えられる可能性を考え、いま一つのものの中にこの変化を及ぼす可能性を考える。かようにして心は我々が力と呼ぶ觀念<sup>イデア</sup>を得るのである。そこで我々は、火は金を熔かす力、即ちその感知せられ得ない諸部分の結合、従つてその堅牢性を破壊し、それを流動体とする力を持つて居る、また金は熔かされる力を持つてゐる、と言う。また太陽は蟬を白くする力を持ち、蟬は太陽によつて白くされる力を持ち、これによつて黄色は取壊されその代りに白色が存在せしめられる、と

言うのである。この場合及びこれと同様な場合、我々の考察する力は知覚せられ得る観念<sup>イデア</sup>の変化に関係している。何となれば我々は、或るものの中に生ぜられる如何なる変化をも、または或るものに与えられる如何なる作用をも、そのものの感知せられ得る観念<sup>イデア</sup>の観察され得る変化によつてのみ認めることが出来、また生ぜられる如何なる変化をも、そのものの諸概念の或るものの変化を考えることによつてのみ、考え得るからである。

\*\* 本章のはじめの四節は第二十三章【実体に関する…】のはじめの数節と関聯して読むべきである。

二 能動的 *active* 及び受動的な *passive* 力——かように考察された力は二重のものである、即ち或る変化を生じ得るものまたは受け得るものである、一方は能動的な力と呼ばれ得るし、他方は受動的な力と呼ばれ得る。物質 *matter* は、その創造者である神が真にすべての受動的な力を超越しているが如くに、全く能動的な力を欠いていないかどうか、また創造された霊体 *souls* という中間の状態のみが能動的及び受動的の両方の力を持ち得るものではないかどうか、ということとは考察に値するであろう。私は今その研究には這入らないであろう、何故なれば私の目下の仕事は力の起原 *origines* を探求することではなくて、如何にして我々が其の観念<sup>イデア</sup>を得るかを研究することだからである。然し乍ら諸々の能動的な力（我々が後に見るであろうように）<sup>\*\*\*</sup> 諸々の自然の実体に関する我々の複雑観念<sup>イデア</sup>の非常に大なる部分をなすが故に、そしてしかもこれ等の力は、恐らく我々の軽率な思考がこれを能動的な力であると想像する程実は能動的な力ではないのであるから、この暗示によつて、能動的な力の最も明晰な観念<sup>イデア</sup>を得るために、我々の心を神及び霊体の考察に向けるのは間違つてはいないと私は判断する。<sup>\*\*\*</sup>

## 第二卷 観念に就いて

\* 受動的な力は屢々“capacity”といわれる。ロックも本巻、第二十三章、第七節に於て、「能動的な力と受動的な力 (capacities)」に就いて語っている。

\*\* 第二十三章 第七——第十三節参照。

\*\*\* この節及び第四節（第二十三章、第二十八節をも参照）は歴史的に重要である、何故なれば（我々の知覚する諸物）の「受動的で自動力のないこと」と唯一の實在的な「作用者」即ち活動原因としての精神の活動性との間の対照がバークレーの哲学の出発点をなしているからである。（Berkeley: Principles of Human Knowledge, sections 25, 27, 40.

“A treatise concerning the principles of human knowledge”参照）

三 力は関係を含む——私は「力はその中に或る種の関係（働きまたは変化に対する関係）を含むことを認める、何故なれば実際、たとえ如何なる種類のものでも、我々の観念の中の何れが、注意深く考察されたとき、関係を含まないであろうか。何となれば延長、持続、及び数に関する我々の観念はすべてそれ等の中に部分に関するかくれた関係を含まないであろうか。形態及び運動は遙かにより明らかにそれ等の中に関係的な或るものを持つている、そして色や香等の如き感覺的性質は我々の知覚に関係する色々な物体の力以外の何であろうか。またもし物そのものに就いて考察するならば、これ等の性質は諸部分の大きさ、形態、組織、及び運動によらないであろうか。すべてのこれ等のものはその中に或る種の関係を含んでいる。それ故に力に関する我々の観念は、思うに、充分他の諸々の單純観念の間に存在し得るものであり、それ等の一つとして考察され得る、何故なればこの観念は、我々がこの後観察する機会があるであろうように、<sup>\*</sup>我々の実体の観念の主な構成要素をなすものの一つであるからである。

\* 第二十三章及び第二十六章【原因と結果及びその他の関係に就いて・本PDFでは略】参照。

四 能動的な力の最も明晰な観念イデアは精神から得られる——受動的な力の観念イデアは、殆どすべての種類の感覚的な事物によつて、沢山に我々に供給せられる。これ等の事物の大抵のものに於て我々は、それ等の感覚的性質、否、それ等の本質そのものが連続的な流れをなしているということイデアを認めざるを得ない、それ故に我々がそれ等のものを常に同一の変化をなし勝ちなものと見做すのは尤もなことである。また我々は能動的な力（これが力という語のより本来の意義である）に就いてもこれに劣らず多くの例を持つてゐる。何となれば何でもよいから変化が認められれば、心は、その物自身の中に在るその変化を受ける可能性と同様に、何処かにその変化を生ずることの出来る力を推理せねばならぬ。しかも、もし我々が注意深く考察するならば、物体は我々の感官によつて、我々が心の作用を反省することによつて得るもの程、明晰、判明なる能動的な力イデアの観念を我々に与えない。というのはすべての力は働き action に關係して居り、また我々が何等かの明らかな観念イデアを持つ働きは二種類即ち思考 thinking と運動 motion だけしかないのであるから、我々がこれ等の働き action を生ずる力の最も明らかな観念イデアを何処から得るか、をこれから考察しよう。（一）思考に関しては、物体は我々に全く何等の観念イデアをも与えない、我々はこれを反省によつてのみ得るのである。（二）また我々は物体から運動の初め beginning に関する何等の観念イデアをも得ない、静止している或る物体は、我々に、動こうとする何等かの能動的な力の如何なる観念イデアをも与えない、そしてその物体がそれ自身運動せしめられるときは、その運動は、その物体に於て、能動よりは寧ろ受動である。何となれば球が玉突棒の打撃に従うとき、それは球の何等かの活動ではなくて、単なる受動である、また衝撃によつてその球がその途に横たわっているいま一つの球を運動せしめ

るとき、その球はただそれが他のものから受けた運動を伝え、それ自身から、いま一つの球が受けただけのを、失うだけのことである、この事は、我々に、物体に於ける能動的な動く力の極めて漠然たる觀念<sup>イデア</sup>しか与えない、我々は物体がただ運動を伝えるだけで、何等の運動をも生じないということを認めるからである。運動の初めの觀念<sup>イデア</sup>を我々は、我々自身の中に通過するものを反省することによつてのみ得る、この場合我々は、単にそう欲することによつて、また単に心の考えによつて、前には静止していた我々の体の部分を動かすことが出来るということ、を経験によつて見出すのである<sup>i</sup>。それ故に我々は、物体の作用を我々の感覚によつて觀察することによつて、能動的な力の極めて不完全な、漠然たる觀念<sup>イデア</sup>を得るのみである、と私には思われる、何故なれば物体はそれ自身の中にあるところの、運動にしろまたは思考にしろ或る働きを始める力の如何なる觀念<sup>イデア</sup>をも我々に与え *alone* ないからである。然しもし物体が相互に与えると認められる衝撃によつて、誰かが自分は力の明晰な觀念<sup>イデア</sup>を持つていると考えるならば、それも亦私の目的に役立つ、何となれば感覚は心がその觀念<sup>イデア</sup>を得る仕方の一つだからである、ただ私は、心は能動的な力に関するその觀念<sup>イデア</sup>を、何等かの外的感覚によるよりは、心自身の作用を反省することによつて、より明らかに受けるのではないかということは、此処で序でに考察する価値があると思つたのである。

五 意志<sup>iii</sup>と悟性は二つの力である——我々は、ただしかじかの或る特別な働きを為し或いは為さないように定め、または謂わば命令するところの心の思考或いは選択によつて、幾つかの我々の心

i "reflection on what passes in ourselves; where we find by experience" 〽<sup>〽</sup>より意志で動かした経験を反省すること、知る。

の働き及び体の運動を始めまたは抑え、続けまたは止める力を我々自身の中に見出す、ということは少なくとも明らかであると私は思う。この力は我々が意志 (will) と呼ぶものである。或る特別な働きを命じまたは抑えることによつて、この力を実際に行使用することが、我々が意思 (volition) または意志 (willing) と呼ぶところのことである。心がかように定めまたは命ずる結果として起るその働きの抑制は、隨意的 (voluntary) と言われる、そして如何なる働きでもかような心の思考なしに行われるものは、不隨意的 (involuntary) と言われる。知覚の力 power は我々が悟性 (the understanding) と呼ぶものである。我々が悟性の働きとなすところの知覚の力には三種がある、(一) 我々の心の中の觀念 (ideas) に関する知覚。(二) 符号の意義に関する知覚。(三) 我々の諸々の觀念 (ideas) の或るものの間の結合または背反、一致または不一致に関する知覚。これ等のすべては悟性に歸せられる、尤も習慣上我々が、我々は理解する (understand) と言うことも、許されるのは後の二つである。

六 能力 faculties——心のこれ等の力、即ち知覚 (perceiving) また選択 (preferring) する力は通常いま一つの名前で呼ばれる、そして普通の言い方は、悟性と意志 (will) は心の二つの能力 (faculties) である、というのである、この言葉は、もしそれが、すべての言葉がそうなければならぬが如く、悟性と意志 (volition) のこれ等の働きを、為すところの心 (mind) の中の或る實在的な存在をあらわすものと考えられる (私はそういうことがあつたのではないかと思うが) ことによつて、人々の思考の中に何等かの混乱を生ずることのないように用いられるならば、誠に適当な言葉である。というのは、意志は精神の命令的な高等の能力である、意志は自由であるまたは自由でない、意志は下等の諸能力を規定する、意志は悟性の指示に従う、等と

## 第二卷 觀念に就いて

我々が言うとき、自分自身の觀念に注意深く氣を付け、自分の思考を言葉のひびきによるよりも事物の証明によつて導くような人々によるこれ等及びこれに似た言い表しは明晰、判明な意味を以て理解せられるであろうが、しかも諸能力に關するこの語り方は、今も言う通り、多くの人々を我々の中にある非常に多くの別々の作用者という混乱した觀念の誤謬に陥らしめたのではないかと思う、これ等の作用者はそれぞれ別々の領域と權能を持ち、丁度それだけの数の別々の存在者として命令し、服従し、また色々な働きを行うものである、と考えられるのである。この事はこれ等の能力に關する問題に於ける爭論、不明、及び不確實の少なからぬ誘因であつた。

七 自由 liberty と必然の觀念は何處から来るか——あらゆる人は、思うに、彼自身の色々な行動を始め、または抑え、続けまたは終らしめる力を自らの中に見出す。あらゆる人が自らの中に見出すところの、人間の行動に対するこの心の力の範圍を考察することから、自由と必然の觀念が生ずる。

〔八〕自由 liberty の觀念は、心の決定または思考に従つて、或る特別 particular な行動を為しまたは抑えんとするところの或る作用者 agent に在る力の觀念である、これによつてこの両者の何れかが選ばれる。作用者が、この両者【為すか抑えるか】の何れかを、彼の意志 volition の働きに従つて生ずる力を持たぬ場合には、彼は自由 at liberty ではない。【以下は〔九〕そこで或る人が、意志または彼の心の指令によつて止め或いは抑えることの出来ないところの、彼の腕の痙攣的な運動によつて、彼自身或いは彼の友人を打つとき、誰も、彼がその場合自由である、と考えるものはない。【九節の末尾が入っていた。表題は

“Supposes the understanding and will.”]



## 【一〇 略 Belongs not to volition.】

## 【一 略 Voluntary opposed to involuntary, not to necessary.】

【一二】我々の心の思考に於ても事態は体の運動に於けるが如くである。目覚めている人は、必然的に絶えず或る觀念<sup>イデア</sup>を彼の心の中に持つて居るのであるから、考えたりまたは考えないでいたりする自由はない、然し彼が彼の考察を一つの觀念<sup>イデア</sup>から他の觀念<sup>イデア</sup>へ移すかどうかは多くの場合彼の勝手である。しかも若干の觀念<sup>イデア</sup>は心にとつては、若干の運動が体にとつての如く、或る事情に於ては避けることが出来ないし、また心のなし得る最上の努力によつても無くすることの出来ないようなものである。拷問台の上にいる人は自由に苦痛の觀念<sup>イデア</sup>を棄てて他の考察を楽しむことは出来ない、また時には騒々しい激情が、颶風が我々の体を吹き飛ばすが如くに、我々がどちらかと言えば好むところの他の事を考える自由を我々に残すことなしに、我々の思考を急ぎ立てるのである。

## 【二三 略 Necessity, what】

一四 自由は意志には属しない——もしこの通りであるならば（私はそうだと思うのであるが）、私は、この事が、かの長く世論に上り、私にはわけが分らぬから不合理だと思われる問題、即ち、人の意志は、自由なりや否や、という問題を終らせる助けとなるかどうかは、人の考察に任せよう。何となれば、もし私が誤っていないければ、私が述べた事から、その問題そのものが全く不当であり、人の意志が自由であるかどうかと問うのは、彼の眠りが速いか、または彼の徳が四角いかと問うのと同様に無意味だということになるからである。一つの力に他ならない自由は作用者にのみ属し、同じく一つの力に他ならない

意志の属性または様態ではあり得ない。

【二五 略 Volition】

【二六 略 Powers belonging to agents】

【二七 略】

【二八 略】

【二九 略】

【二〇】私は体と心の両者に諸々の能力があるということを否定しようというのではない。また私は、これ等の言葉及びそれに似た言葉が、これ等を流通せしめるようにした普通の言語の用法の中にその位置を占めることになっているということをも否定しない。これ等の語を全く棄ててしまうのはあまりに氣取り過ぎるように思われる、そして哲学そのものは華美な衣裳を好まないけれども、しかもそれが社会に現れるときには、それが真理及び明晰と両立し得る限りに於ては、その国の普通の流行と言語をまとうだけの篤実さを持たねばならぬ。然し諸々の能力が丁度それだけの別々の作用者として語られた表現されたことが誤であつた。というのは我々の胃の中で肉を消化したのは何であるかと問われると、それは消化の能力、digestive faculty であると言ふのが、容易な ready また非常に満足な答であつた。そして同様に心の中に於ては理解したのは、知的能力、intellectual faculty、即ち悟性であり、意志しまたは命令したのは、選択の能力、elective faculty、即ち意志である。これは要するに、消化する力が消化した、動く力が動いた、理解する力が理解した、と言ふことである。

二一 作用者即ち人間に属する——そこで自由に関する研究に帰るために、意志は自由であるかという問いは正当ではなく、人は自由であるかというのが正当な問いであると思う。そこで、私は次の如く考える。

(一) 或る人が、或る行動の存在することを存在しないことより好む彼の心或いはその逆の選択をなす彼の心の命令 *direction* または選択 *choice* によつて、その行動を存在せしめまたは存在せしめないようにすることを得る限り、彼は自由 *free* である。何となれば我々は如何にして或る人が彼の欲することをする力を持つよりもより自由 *free* であると考えてことが出来るであらうか。

(二) 然し詮索好きな人間の心はすべての罪という考えを出来るだけ自分自身から回避せしめようとして、これを以て満足しない、そして、人は、もし彼の欲することを意志すると同様に自由に行うことが出来なければ、決して自由ではない、ということが充分な抗弁として通用する。それ故に人の自由に関して更に、人は自由<sup>に</sup>に意志する<sup>か</sup>、という問いが提出される。これが、思うに、意志が自由なりや否やが論議されるときに、意味される事である。そしてこれに就いて私は次のように考える。

二三 (一) 意志する *willing* かつまたは意思 *volition* は一つの行動であり、自由は行動しまたは行動しない力であるから、人は、意志することまたは意思に関しては、彼の力の中にある或る行動が、直ちになさるべきものとして一度彼の思考に提出されるときは、自由ではあり得ない。何となれば一度かように思考に提出された人の為し得る行動を為すかまたは抑えるかの何れかを選ぶことがどうしても必要だからである、人は必然的にその何れかを意志せねばならぬ。この選択または意思に、行動またはその抑

制はたしかに従う、そしてそれは確かに随意的である。然しその意思、即ち二者の中の一つを選ぶことは彼の避けることの出来ないことであるから、人は、その意志する働きに關しては必然性に従い、それ故に自由ではあり得ない。

## 【二四略】

二五 そこで大抵の場合に於て人は意志するか否かの自由を持たないことは明らかなのであるから、次に問われることは、人は運動または静止の兩者の中彼の好むものを意志することが自由であるかどうか、ということである。この問はそれ自身のうちに非常に明らかな不合理性を持つてゐるから、人はこれによつて、自由は意志には關係しない、ということをも充分に確信することが出来るであらう。何となれば人は、運動または静止、話または沈黙の何れでも彼の好む方を意志する自由があるかどうかと問うことは、人は彼の意志するものを意志することが出来るかどうか、彼の好むものを好むことが出来るかどうか、と問うことである。これは、思うに、何の答もいらない問いである、そしてこういう問いを提出することの出来る人々は、一つの意志が他の意志の行動を規定し、更にいま一つの意志がこの前者の行動を規定し、かように無限にすすむものと仮定してゐるに違ひない。

二六 これ等及びこれと同様な不合理を避けるためには、いま考察されている事の明確な觀念を我々の心の中に設定すること程役立つことはあり得ない。

【二七】そこで先ず第一に、自由は、我々が、自分の選びまたは意志する所に従つて、行動しまたは行動しないことが出来ることである、ということに注意深く心に留めねばならぬ。

〔二八〕第二に、我々は、意思または意志することは、心が其の思考を或る行動を生ずることに向け、このことによつてその行動を生ずる心の力を働かせるところの心の働き *act of the mind* である、ということを中心留めねばならぬ。言葉が累積するのを避けるために、私は此処に行動という言葉によつて、提出された或る行動の抑制をも含むことを許していただきたい。

〔二九〕第三に、意志は、運動または静止が心の指令によつて居る限りに於て、人の作用的能力を運動または静止に向ける心の力に他ならないのであるから、意志を決定するものは何であるか、という問いに対して、真実にして適当な答は、それは心 *the mind* である、ということである。何となればこのまはあの特別な方向にむける一般的な力は、その特別な方向にそれが持つてゐる力を働かせるところの作用者 *the agent* そのものに他ならぬからである。もしこの答が満足でないならば、何が意志を決定するか、という問いの意味は明らかにこういうことである、即ち、あらゆる個々の場合に、このまはあの特別な運動或いは静止に向ける心の一般的な力を決定するために、何が心を動かすか、ということである。そしてこれに対して私は次の如く答える、同一の状態に止まりまたは同一の行動を続けようとする動機は、ただその事に在る現在の満足のみである、或る不安以外の何物も我々をして状態を変化し、または或る新しい行動を起すように促さない。これが、行動を起させるように心に働く——これを短く言うために我々は意志の決定と呼ぼう——大きな動機である。私はこの事をもつと精しく説明するであらう。

三〇 意志と欲望 *desire* は混同されてはならぬ——然しこの問題にうつる前に、次の事を前以て言つ

て置く必要があるであらう、即ち私は上に、その本来の名前は意志 willing または意思 volition であるところのかの心の働きを印し付ける他の言葉が欠けているがために、意思の働きを表すのに、これと同様に欲望をも意味する選ぶ choosing、好む preferring、そしてそれと同様な言葉を以てしようと努めたのではあるが、しかもこの心の働きは非常に単純なものであるから、それが何であるかを理解しようと欲するものは誰でも、如何なる明白なる音の変化によるよりも、彼自身の心を反省し、心が意志するとき何をなすかを觀察することによってよりよくこれを知るのであらう。この注意は、次の理由のため益々必要であると思う、即ち私は、意志が屢々幾つかの感情 affections、殊に欲望と混同され取違えられるのを見出す、しかもこの事は、事物の非常に明確な觀念<sup>イデア</sup>を持つてはいなかったと思われ、またそれ等の事物に就いて非常に明白に書きはしなかったと考えられることをよるこばないような人々によってなされるのである。この事は思うに、この事柄を不明にし誤らせる少なからぬ誘因であつた、そしてそれ故に出来るだけ避けられねばならぬ。何となれば自分の思考を内に向つて自分が意志するとき自分の心の中に起ることに向ける人は、意志 will 即ち意思の力 power of volition は我々自身の行動にしか関与せず、其処で終り、それより先には到達しないということ、また意思是、心がその力の中にあると考える或る行動を、単に思考によつて、起し、続け、または止めようと努めるところの、かの心の特別な決定に他ならないということを知るであらう。この事は、よく考察すると、意志は欲望とは全く別である、ということを示す、欲望は全く同一の行動に於ても、我々の意志が我々を導くのは全く反対の傾向を持ち得るのである。私が拒むことの出来ない或る人が、私にもう一人の人に説得を試みることを強いるかも

知れない、私は話をしていると同時にこの説得がその人に効果を持たないことを望むかも知れない。この場合意志と欲望が相反することは明らかである。

三一 不安 *Uneasiness* が意志を決定する——そこで「我々の行動に関して意志を決定するものは何であるか」という問題に立ち帰つて見るに、考え直して見ると私は、それは、一般に考えられているように目当てである、より大なる善 *greater good* ではなくして、人が現在感じている或る（そして大抵は最も切迫している）不安であると考える傾向となつた。これが相續いて我々の意志を決定して、我々の行動に我々を就かしめるものである。この不安を我々は其の俚欲望、*desire* と呼んでもよい、欲望は或る存在しない善の欠けているための心の不安である。我々は或る欠けている善を望めば望むだけそれだけ我々はそれを求めて苦しむのである。

\* 第二十八節から第六十節にわたつてこの章は第二版に於て書き直されたのである。【次の「一般に考えられている」“greater good in view”という考えが、初版に於けるロックの見解だつた、という意味。ただし加藤氏は“in view”を「目当てである」と取っているので意味が通じない。視界＝検討中の最大善という意味であろう。】

【三一】 略 *Desire is uneasiness.*】

【三三】 略 *The uneasiness of desire determines the will.*】

【三四】 略 *This is the spring of action.*】

三五 最大の実証的 *positive* な善が意志を決定するのではなく、不安がこれを決定するのである——善、より大なる善、が意志を決定するということは、すべての人類の一般的承認によつて、非常にしつ

かりと確定した格律 *maxim* であると思われるので、私がこの問題に関する私の考えを最初に公にしたとき、私がこの事を仮定したのを私は少しも不思議に思わない、そして思うに、非常に多くの人々によつて、その時そうしたことの方が、私が今かくも世界一般に承認されている意見を撤回するよりも、より恕す<sup>ゆる</sup>べきであると考えられるであらう。然し乍らより嚴密な研究によつて、私は善、より大なる善は、たとえかようなものであると理解されまた承認されても、それに相応して生ずる我々の欲望が、それを欠いているために我々を不安にするまでは、意志を決定しない、と断定することを強いられるのである。たとえ如何に或る人をして豊富が貧困に優ることを確信せしめ、彼をして生活の立派な便宜がきたならしい貧乏よりもよいということを知らしめ認めしめても、しかも彼がこの後者を以て満足し、其の中に何等の不安を見出さない限りは彼は動かない、彼の意志は決して、それから彼を抜け出させるような如何なる行動に向つても決定されない。徳はこの世に何か大きな目的を持ち或いは来世に希望を持つ人にとつては、食物が生命に対するが如く、必要であるという程に、或る人をして徳の便益をたとえ如何に充分確信せしめても、しかも彼が正義を求めて飢ゑ渴くまで、彼がそれが欠けているがために不安を感じるまでは、彼の意志は、この明白な、より大なる善を追求する或る行動に向つて決定されることなく、彼が自らの中に感ずる或る他の不安が起り彼の意志を他の行動に導くであらう。他面に於て大酒飲をして彼の健康が衰え、彼の財産が浪費されることを知らしめ、そういう生活をして居れば不評判や病氣が起り、すべての物を、彼の愛する酒をさえも欠くようになるということを知らしめても、しかも彼の伴侶を失つた不安の再来、いつも起る、彼の酒杯に対する習慣的な渴望が彼を酒場に驅る、しかも彼は健



康と富の喪失、及び恐らくは別な生活の諸々の喜びをも考えてはいるのである、これ等の喜びの最小のものも決してつまらない善ではなく、一杯の酒で彼の味覚をくすぐることまたは痛飲家仲間のつまらぬおしやべりよりも遙かに大なる善と彼が認めるようなものである。それはより大なる善を視ることが欠けているがためではない、何となれば彼はそれを知り認める、そして彼が飲んでゐる時のあいまいなままには彼はより大なる善を追求しようとする決心をなすのである、しかし彼の習慣的な喜びを失つた不安が帰つてくると、より大なる認められた善はその勢力を失つて、現在の不安が習慣的な行動に向つて意志を決定する、この行動はこの事によつて、次の機会に於て勝利を占めるためのより鞏固な足場を得る、しかも彼は同時に、もうこういうことはしない、自分がこれ等のより大なる善の獲得に反して行動するのはこれが最後である、と秘かに自ら誓うのではある。そしてかようにして彼は、かの不幸なる不平家の「私はより善きものを見、それを可となす、されど悪しきものに従う」(Ovidius, *Memorphoses*, VII, 20【変身物語】)という状態にあるのである。真理と認められ、絶えざる経験によつて証明されるこの文はこの方法によつて容易く理解され、恐らく他の如何なる方法によつても理解されないであろう。

三六 何故なれば不安の除去が幸福への第一歩であるから——もし我々が経験が事実上かくも明らかにする事の理由を探ね、何故不安のみが意志に作用し、意志の選択を決定するかを吟味するならば、我々は次の事を見出すであろう、即ち、我々が何等かの不安のもとにある間は我々は自ら幸福であるとか、幸福の途上にあるとか悟ることは出来ないが故に、次の行動に対する我々の意志の選択を当然決定するものは、我々が何等かの苦痛をとどめて居る限りは、常に、幸福への最初の必要なる一步として、苦痛

を除くことである。

〔三七〕もう一つの理由は次の事である、即ち不安のみが現存し、そして現存しないものがその無い処に於て作用するというのは事物の性質に反することであるから。現存しない善が、思索によつて、心にしみ込むようにされ、そして現存するようにされるといふことが言われ得るであろう。その觀念は成る程心の中に在るであらうし、其処に現存するものと考えられるであらう、然し乍ら或る不安が我々の欲望を起し、そしてその欲望の不安が意志を決定するに際して優越を占めるまでは、何物も、我々の感じてゐる不安の除去と釣合うことの出来る或る現存する善としては、心の中に無いであらう。その時までは、心の中にある如何なる善の觀念も、ただ他の諸觀念と同様に其処に在り、單なる不活動的な思索の対象であつて、意志に作用もしないし、また我々を活動に就かしめもしないのである。

〔三八〕もし意志が、考察する際に悟性にとつてより大にまたはより小に見えるが如き善の見え方によつて決定されたとしたならば、私は、如何にして一体、意志が、一度提出され可能であると考えられた天の無限の永遠の喜び joys of heaven から解放されることが出来るか、を知らない。然し事實はそうではない、といふことは経験に於て明らかである、何となれば限りなく最大の明白なる善が、つまらない事を追求する我々の欲望の相つづく不安を満足するために、屢々等閑にされるからである。

【三九 略 Desire accompanies all uneasiness.】

四〇 最も緊急なる不安が自然に意志を決定する——然し我々は、種々雑多の不安に取り囲まれ、色々な欲望に惑わされるこの世界の中に居るのであるから、次の研究はひとりでに、それ等の中の何れが、

次の行動への意志を決定するのに上位 *precedency* を占めるか、という事となるであろう。そしてこれに対する答は、通常、これ等の中で最も緊急なるものでその時除去され得ると判断されるものである、ということである。非常に大きな不安も、直すことが出来ないかと判断される場合には、意志を動かさない、これ等の不安は、この場合には、我々をして努力せしめない。然しこれ等のものを別にすれば、我々がその時感ずる最も重要で緊急な不安が、通常、我々の生活を作り上げている有意的行動 *voluntary actions* の系列に於て相次いで意志を決定するところのものである。

四一 すべての人は幸福 *happiness* を望む——もしも更に、欲望 *desire* を動かすものは何であるか、と問われるならば、私は、幸福、そして幸福のみである、と答える。幸福と不幸 *misery* は二つの極端の名前であり、その最後の極限を我々は知らない。然しこの両者の若干の程度に就いては我々は非常に明瞭な印象を持つている、これを簡単にするために、私は快樂 *pleasure* 及び苦痛 *pain* という名のもとに包括しよう、肉体と同様に精神の快樂及び苦痛が在るから。或いは、本当を言えば、それはすべて心の快樂及び苦痛である、或るものは心の中で思考から起り、他のものは世の中で運動の或る様態から起るのであるが。

〔四二〕我々の中に快樂を生じ勝ちなものは我々が善 *good* と呼ぶものであり、我々の中に苦痛を生じ勝ちなものを我々は悪 *evil* と呼ぶ、このことはそれ等が我々の中に快樂及び苦痛を生じ勝ちであるということ以外の如何なる理由によるでもない、我々の幸福及び不幸はこういう事なのである。更に、或る程度の快樂を生じ勝ちなものはそれ自身善であり、或る程度の苦痛を生じ勝ちなものは悪ではあるが、

## 第二卷 觀念に就いて

しかもそれがその種のより大なるものと競争するようになる時は我々はそれをかようには呼ばないということが屢々起る。それ故にもし我々が、我々の善及び惡と呼ぶものを、正當に評價しようとするならば、我々はこの區別は大いに比較的のものであるのを知るであらう。何となればあらゆるより大なる程度の快樂と同様に、あらゆるより小なる程度の苦痛の原因は善の性質を持ち、またこの逆の事も言われるからである。

四三 如何なる善が望まれ、如何なるものが望まれぬか——これが善及び惡と呼ばれるものであり、そしてすべての善は一般に欲望の本来の目的ではあるが、しかもすべての善は、たとえ知覺され、善であると認められても、必ずしもあらゆる個々の人の欲望を動かすのではなく、ただ其の中でその人の幸福の必要なる部分をなすものと見做される部分、またはそれだけの量のみがこの事を為すのである。或る人をして彼の満足を肉慾の楽しみに置かしめ、他の人をして知識の喜びに置かしめよ、その時彼等の各々は他の者が追求する事の中に大なる快樂の在ることを認めざるを得ないが、両者の何れも他の者の喜びを彼の幸福の一部分とはしないから、彼等の欲望は動かされることなく、各々は他の者が享樂するところの事なしに満足し、そしてそれ故に彼の意志はその事の追求に向つて決定されないものである。

【四四 略 Why the greatest good is not alms desired.】

【四五 略 Why not being desired, it moves not the will.】

【四六 略 Due consideration raises desire.】

四七 或る欲望を停止する力は考察の道を開く——我々の中には常に誘惑し、意志を決定しようとし

ている非常に多くの不安があるのであるから、私が言つたように、最も大きく最も緊急なものが次の行動への意志を決定するということは自然である、そしてまた大抵はそうであるが、何時でもそうではない。何となれば心は大抵の場合、経験上明らかであるが如く、其の諸々の欲望の或るものを遂行し満足せしめることを停止する力を持つて居り、かようにすべての欲望についても相ついでこの事がなされるのであるから、心は自由にこれ等の欲望の対象を考察し、これ等をすべての方面に於て吟味し、また他の欲望との軽重を比較することが出来るのである。ここに人間の自由が在る、この自由を正當に用いるために、我々が意志の決定を早急にし、然るべき吟味をなさずに余りにも早く行為に従事するような場合に、我々が、我々の生活上の行為及び我々の幸福への努力に於て陥るすべての多様な間違い、過失、落度が生ずるのである。これが私にはすべての自由の根源であると思われる、この事の中に、自由意志、free will と呼ばれる（私は、自由意志は正當ではないと思うが）事は在ると思われる。というのは意志が行動に向つて決定され、そして（この決定に続く）行動がなされる前に、或る行動がこの様に停止される間に、我々は、我々が為さんとしつゝある事の善惡を吟味し、考察し、そして判断する機会を持つ、そして然るべき吟味によつて我々が判断したとき、我々は我々の義務を果したのであり、我々が我々の幸福の追求に際して為し得るまたは為すべきすべてのことを為したのである。そして正當なる吟味の最後の結果に従つて欲求し、意志し、そして行動することは我々の性質 nature の欠陥ではなく完成である。

四八 我々自身の判断によつて決定されることは、自由 Liberty に対する何等の制限でもない——この事は決して自由の制限または減少であるどころではなく、正しくその改良及び利益である、それは我々

の自由の減縮ではなく、その目的と效用である、そして我々は、かような決定から遠ざかれば遠ざかる程、不幸と奴隸的狀態により近づくのである。もしも我々が、或る行動の善惡を判断する我々自身の心の最後の結果以外の何物かによつて決定されたならば、我々は自由ではない。

〔四九〕もし我々が、我々の上に在つて完全な幸福を享受するところの高等なる存在者を見上げるならば、我々が、彼等は彼等が善を選択する際に我々よりもつとつかり決つてゐる、と判断するのは尤もなことであろう、そしてしかも我々には、彼等が我々よりも幸福でないとか、自由でないとか考える理由は少しもないのである。そしてもしも我々のような貧弱な有限の創造物にとつて、無限の叡智と善が何を為し得るかを明言することが、ふさわしいことであるならば、我々は、神自身も善でないものを選ぶことは出来ない、全能者の自由も彼が最善のものによつて決定されることを妨げない、と言つてもよいであろうと私は思うのである。

〔五〇〕もしも理性の指導から脱出し、我々をしてより悪いことを選びまたは行わぬようにせしめる吟味と判断との拘束を欠くことが、自由であり、真の自由であるならば、狂人と愚者のみが自由人である。

【五一 略 The necessity of pursuing true happiness, the foundation of liberty】

五二 次の事が、知的存在者が真の幸福に向つて絶えず努力し、これを着実に追求する場合に彼等の自由、liberty が廻轉する軸 turns on となる蝶番 hinge である、それは即ち、個々の場合に於て、彼等が自分の前方を見て、その時提出されまたは欲求されたその特殊なものが彼等の主要な目的への道程に在るかどうか、また彼等の最大の善であるところのものの事実上の一部分をなすかどうかを知る迄は、彼等は

この追求を停止、suspendすることが出来るという事である。この事は、私にはそう思われるのであるが、有限の知的存在者の大なる特権である。

〔五三〕 また如何なる人にも、自分は自分の感情を支配することが出来ないとか、または感情がほとばしり出て、行動を起さしめるのを妨げることが出来ない、と言わしむる勿れ、何となれば彼が王公や偉い人の前で為し得る事を、彼は為そうとすれば独りで、即ち神の面前で為すことが出来るからである。

【五四―七一 略】

七二 「私がこの章を閉ぢる前に、もし我々が、我々の思考をして、働きに關するいま少しく精確な觀察を為さしめるならば、それは恐らく我々の目的に適うであろうし、また我々に力に就いてのより明晰な概念を与える助となるであろう。私は前に、我々はただ二種類の働き action 即ち、運動 motion 及び思考 thinking の觀念イデアしか持たない、ということを書いた。これ等は、實際、働きと呼ばれまた働きに数えられるけれども、しかも嚴密に考察すると、常に完全にそうではないことが分るであろう。何となれば、もし私が間違つていなければ、これ等兩種のものの中には、然るべき考察によると能動よりはむしろ受動である rather passions than actions ことが分るような例がある、従つてかような例はその限りに於て単に主体の中の受動的な力の結果に過ぎない、しかもこれ等の主体はこれ等の受動的な力のために作用者 agents と考えられる。というのはこれ等の場合に於ては運動または思考を為す実体は印象を受け、これによつて実体は全く外部からその働きに入らしめられ、それ故に單に自分の持つてゐるところのかような印象を或る外的作用者から受ける能力によつてのみ行動するのである、そしてかような力は本来能

動的な力ではなくしてその主体に在る単なる受動的な能力である。時には実体または作用者はそれ自身の力によつて自ら働きに這入る、そしてこれが本当は能動的な力である。実体が有し、実体をして何等かの結果を生ぜしめるところの如何なる様態も働きと呼ばれる、例えば或る固形的実体は運動によつて他の実体の感知せられ得る觀念に作用しまたはこれを変える、そしてそれ故にこの運動の様態を我々は働きと呼ぶ。しかも尚かの固形的実体に在るこの運動は、正當に考察するとき、もしその実体がそれを或る外的作用者からのみ受けるならば、受動に過ぎない。それ故に運動という能動的な力は、それ自身の中に、または静止している場合の他の実体の中に運動を始めることの出来ないような如何なる実体にも無いのである。かくして同様に思考に於ても、或る外的 external 実体の作用 operation からの觀念または思考を受ける力 a power to receive ideas or thoughts は考える力 a power of thinking と呼ばれる、然しこれは受動的な力または能力に過ぎないのである。然し乍ら自分勝手に見えない諸々の觀念を目前に持つて来て、それ等の中で自分の適當と思うものを比較することが出来るといふ事は能動的な力である。この反省は文法と普通の言語の構造が我々を陥れ易いところの力及び行動に関する間違ひから我々を防ぐにいくらか役立つであろう、何故なれば文法家の能動的と呼ぶ動詞によつて意味せられることは必ずしも能動を意味しない、例えば「私は月または星を見る」、或いは「私は太陽の熱を感じる」、という命題は能動的な動詞によつて表現されているけれども、私の為す行動でそれによつて私がこれ等の実体に作用するような如何なるものをも意味するのではなくして、光、円さ、及び熱の觀念を受け取る reception ことを意味するのである、この場合私は能動的ではなく単に受動的であつて、私の眼または体のその位置に於ては、



それ等のものを受けることを避け得ないのである。然し私が自分の眼を他の方に転じ、または自分の体を太陽の光の外に移すときは、私は本来の意味で能動的である、何故なれば自分の勝手で、私自身の中の力によつて、私は自らその運動に這入るからである。かくの如き行動は能動的な力の産物である。』\*

\* 括弧内の部分は第四版に於て附加されたものである。本章、第二及び第四節参照。

七三 かくして私は、短い草稿の中に、すべての他の觀念が其処から派生し、それ等から作られるところの諸々の根源的觀念、original ideas を一とわたり觀察した。これ等の觀念はもし私が哲學者として考察し、そしてそれ等は如何なる原因に依つてゐるか、またそれ等は何から出来てゐるかを吟味しようとするならば、それ等はすべて次の如き極少數の第一次的な根源的な觀念、即ち、延長、固性、可動性、(mobility)、即ち動かされる力、(これ等は我々が感覺によつて物体から受けるものである)、及び感知力、(perceptivity)、即ち知覚及び思考の力、動性、(motivity)、即ち運動する力(これ等は反省によつて我々が我々の心から受けるものである)に帰することが出来ると私は信ずる。私は、曖昧な語を用いることによつて誤解される危険を避けるためにこれ等の二つの新語を用いる許しを乞う。これ等に対してもし我々が、この兩種類即ち感覺によるもの及び反省によるものの両者に属するところの存在、existence、持續、數、を附加すれば、恐らく我々は其の他のものの依存するところのすべての根源的觀念を持つことになる。何となれば思うに、色、音、味、香、及び我々の持つすべての他の觀念は、もし我々が、これ等の様々な感覺を我々の中に生ずるように微細な物体の色々に変つた延長及び運動を知覚するに充分鋭敏な能力を持つていさえたならば、今挙げた諸觀念によつて説明せられるからである。然し乍ら私の

目下の目的はただ、心が事物から受けるように神が準備した諸々の觀念<sup>イデア</sup>が現象によつて心が事物に就いて持つところの知識を研究し、また如何にして心がこの知識を得るかを研究することであつて、これ等の觀念<sup>イデア</sup>及び現象の原因またはその生じ方を研究することではないのであるから、私は、この論文の計画に反して、物体及び其の部分<sup>\*\*\*</sup>がそれ等の感覺的性質を我々の中に生ずるための諸物体の特有な構成及び其の部分の形狀を哲學的に研究しようとは努めないであらう。私はこれ以上はこの論究に這入らないであらう、何となれば私の目的にとつては、金またはサフランは我々の中に黃の觀念<sup>イデア</sup>を生じ、雪またはミルクは白の觀念<sup>イデア</sup>を生ずる力を持つてゐるということを認めるだけで充分である、これ等の觀念<sup>イデア</sup>を我々はただ我々の視覚によつてのみ持つことが出来るのであつて、これ等の物体の部分の組織、またはこれ等の物体から跳ね返つて我々の中にその特別な感覺を生ずるところの微粒子の特別な形態または運動を吟味しなくてもよいのである、尤も、我々が我々の心の中の單なる觀念<sup>イデア</sup>より先に進んで、其の原因を研究しようとするときは、我々は如何なる感覺的对象の中にも、その対象の感知せられぬ諸部分の色々な大きさ、形態、數、組織、及び運動以外には、それが我々の中に色々な觀念<sup>イデア</sup>を生ずるための何物をも考えることは出来ないのである。

\* というのは自然哲學者即ち物理學者を言う。

\*\* perceptivity と motivity を指す。

\*\*\* 物理學的に、の意味である。

## 第二十二章 混合樣態に就いて

一 混合樣態 *Mixed modes* とは何か——前諸章に於て諸々の單純樣態を取り扱い、それ等が何であるか、如何にして我々はそれ等を得るかを示すために、それ等の中の最も著しいものの若干について様々な例を挙げたのであるから、我々は次には、我々が混合樣態と呼ぶようなものを考察すべきである、それは、我々が義務、酩酊、嘘、等という名辭によつて表示する複雜觀念である、これ等は色々な種類の單純觀念の様々な總合から成り立っているので、私は、これ等を、同一種類の單純觀念のみから成り立っている、より單純な樣態と區別するために、混合樣態と呼んだのである。これ等の混合樣態はまた、しっかりとした存在を持つ何等かの實在的存在者の特徴的な印しであると見做されるのでなく、心によつて結び付けられたばらばらの獨立な諸觀念と考えられるような單純觀念の總合であるから、この事によつてこれ等は諸々の實體の複雜觀念と區別されるのである。

二 心によつて作られる——心は、その諸々の單純觀念に關しては、全く受動的であり、それ等すべてを、感覺または反省がそれ等を提示するが如くに、事物の存在及び作用から受けるのであつて、どの一つの觀念をも造り出すことは出来ないものであるということは、經驗がこれを我々に示す。然しもし我々が、我々の今語りつつある、私が混合樣態と呼ぶところの諸觀念を、注意深く考察するならば、我々はそれ等の觀念の起原 *original* が全く異なることを見出すであらう。心はこれ等の幾つかの結合を作る際に屢々能動的な力を行使する、何となれば一度諸々の單純觀念を持つようになると、心はそれ等を様々

## 第二卷 觀念に就いて

な構成に組合わせて、色々な複雑觀念<sup>イデア</sup>を作ることが出来、それ等の觀念<sup>イデア</sup>が自然にそのように組合わされて存在するかどうかを吟味することはないのである。そしてそれ故に、これ等の觀念<sup>イデア</sup>は想念<sup>(notions)\*</sup>と呼ばれるのであると思う、恰もそれ等は其の起原及び不変の存在を、事物の実在の中によりは人間の思考の中に持つて居り、そしてかような觀念<sup>イデア</sup>を作るには心がそれ等の諸々の部分を組合わせ、そしてそれ等の部分<sup>イデア</sup>が何等かの実在的存在を持つて否かは吟味することなく、それ等が悟性の中で矛盾しなければ、それで充分であるかのように。然し私はこれ等の觀念<sup>イデア</sup>の幾つかは觀察から取り入れられ得るということ<sup>イデア</sup>を否定はしない。

\* 想念はロックの用いている意味ではすべて抽象的觀念<sup>イデア</sup>であり、抽象的觀念<sup>(abstract idea)</sup>、想念<sup>(notion)</sup>、概念<sup>(concept)</sup>はいずれも同じものである。本訳書に於ては notion なる語をそれぞれの場合の意味に従つて概念または觀念<sup>イデア</sup>或いは表象と訳して置いた所もある。

四 名前が諸々の混合様態の諸部分を一つの觀念<sup>イデア</sup>に結び付ける——あらゆる混合様態は多くの別々の單純觀念<sup>イデア</sup>から成り立つてゐるのであるから、混合様態は何処からその統一を得るか、また如何にしてかようなまさしく多数のものがたった一つの觀念<sup>イデア</sup>をなすようになるか、を研究することが合理的であると思われる、何故なればその結合は自然に於ては何時でも組合わされて存在するとは限らないからである。これに対して私は答える、それはその統一を、これ等の幾つかの單純觀念<sup>イデア</sup>を結合し、それ等をこれ等の部分から成り立つ一つの複雑觀念<sup>イデア</sup>として考察するところの心の働きから得ることが明らかである、そしてこの統一の印し、或いは一般にこの統一を完成するものと見做されるものは、その結合に与えられる

一つの名前である。何となれば人々が通常諸々の混合状態の別々の種類に関する彼等の勘定を定めるのはそれ等の名前によるのであつて、彼等は名前を持つてゐるかのような集合以外に、一つの複雑觀念<sup>イデア</sup>を成すための如何なる数の單純觀念<sup>イデア</sup>をも減多に認めたりまたは考察したりすることはない。かくして、老人を殺すことは事柄の性質上、自分の父親を殺すことと同様に、一つの複雑觀念<sup>イデア</sup>に統一されるに適して居るのであるが、しかも、後者を表示するための親殺しという名前があるが如くに、前者を精確に表す如何なる名前もないので、この事は一つの特種な複雑觀念<sup>イデア</sup>としては受取られないし、また若者或いは或る他の人を殺すこととは別個の種類の行動であるともなされないのである。

五 混合状態を作ることの原因——そしてもしも我々が、人々をして諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の幾つかの結合を別々の、そして謂わば、固定した状態となし、事物そのものの性質に於ては、これ等と同じ位に結合され別々の觀念<sup>イデア</sup>を作り勝ちな他の諸々の結合を等閑にさせるところのものは何であるかを知るために、今少しく研究を進めたならば、我々は、この事の理由は言語の目的であることを知るであらう、この目的は人々の思想を相互に出来るだけ速かに表示しまたは伝達することであるから、彼等は通常、彼等がその生活の仕方及び会話に於て屢々用いるような觀念<sup>イデア</sup>の集合を複雑状態 complex modes と為し、それに名前を付け、彼等がほんの稀にしか述べる機会のないその他の集合はバラバラのままにして、それ等を結び付ける名前を付けずに置くのである。

〔六〕この事が、あらゆる国語の中に他の国語の如何なる一つの単語によつても翻譯することの出来ないような多くの特殊な語が在るということが、如何にして有るか、を我々に示す。何となれば一つの

## 第二卷 觀念に就いて

民族の様々な流行、風俗、習慣は、別の民族がこれを作りまたは恐らく心を留めて見る機会が少しもなかったような様々な觀念<sup>イデア</sup>の結合を、その民族には親しみ深くまた必要なものとするので、日々の会話上の事柄に於ける長い迂曲語法を避けるために、諸々の名前が自然にこれ等の觀念<sup>イデア</sup>の結合に付けられるようになる。かくしてギリシヤ人の間の貝殻投票 (οπαρκισμός) 及びローマ人の間の人権剥奪 (proscriptio) は他の諸國語が嚴密にこれ等に相当する如何なる名辞をも持たない語であつた。

〔七〕そこでまた我々は、何故言語が絶えず新しい名辞を取り古い名辞を捨てて変化するかという理由を知ることが出来るであらう。この方法によつて如何に多くの相異なる觀念<sup>イデア</sup>が一つの短い音の中に包含されるか、またこれによつてどれだけ多くの我々の時間と呼吸が節約されるかは、誰でもただ、執行猶予とかまた控訴とかの意味するすべての觀念<sup>イデア</sup>を枚挙するだけの労を惜しむことなく、これ等の名辞の何れでもの代りにこれ等の意味を如何なる人にも理解させるために迂曲語法を用いようとするならば、この事を知るのであらう。

## 【八 略 Mixed modes where they exist.】

## 【九 略 How we get the ideas of mixed modes.】

一〇 運動、思考、及び力が最も様態化されている——すべての我々の單純觀念<sup>イデア</sup>の中で何れが最も多く様態化されていて、最も多くそれ等から出来ている名前を与えられた混合様態を持つているかは我々の觀察に値することである、そしてそれは次の三つである、即ち思考と運動（これ等は其の中にすべての働きを含むところの二つの觀念<sup>イデア</sup>である）、及びこれ等の働きの源であると考えられる力である。何と

なれば働きは人類の大きな仕事であり、すべての法則の關係する事柄のすべてであるから、思考及び運動の色々な仕方が注目せられ、それ等の觀念が觀察され、記憶に留められ、名前を賦与されるということとは何の不思議もない、これ等の事なしには善い法則は作られ得ないしまた悪行や無秩序を抑制することとは出来ない。

—— 多くの語は働きを表示するが如くに見えるが、結果を意味するに過ぎない——力はすべての働きの生ずる源であるから、これ等の力を含む諸々の実体は、それ等がこの力を実際に行使するときは原因と呼ばれる、そしてその際生ぜられる諸々の実体、またはその力の行使によつて或る主体の中に導入される諸々の單純觀念は結果と呼ばれる。新しい実体または觀念を生ずる活動(efficacy)は、その力を行使する実体に於ては働き(action)と呼ばれるが、その中で或る單純觀念が変えられまたは生ぜられる主体に於ては、それは受動(passion)と呼ばれる、この活動は様々であり、その結果は殆ど無限ではあるが、しかも思うに我々は、それを、知的作用者に於ては、思考及び意志の諸々の様式に他ならず、物的作用者に於ては、運動の諸々の變形に他ならぬ、と考えることが出来る。そしてそれ故に或る働きを表現するように思われる多くの語は、その働き即ち働き方については全く何事も表示せずして、単に、働きかけられる主体の或る状態または作用する原因と共に、結果を示すのみである、例えば、創造、壊滅、なる語はそれ等の中にこれ等の事柄を生ずる働きまたは仕方に就いては何の觀念をも含まずして、単にその原因及び為されることを含むのみである。また田舎の人が、寒さが水を凍らせる、と言う時、凍らせるという語は或る働きを意味すると思われるが、しかも実は結果を表示するに他ならない、即ち前に

は液状であつたその水が堅くなつて固結したということを意味するのであつて、その事を為す働きに関する如何なる觀念をも含んではいない\*。

\* ここに述べられているロックの思想を發展せしめると、バークレーの物質界に於ける因果關係の否定となり、更に進んでヒュームの因果關係の概念の否定に迄到る可能性がある。

【二二 略 Mixed modes made also of other ideas.】



## 第二十三章 実体に関する我々の複雑觀念に就いて

\* 本章はこの「悟性論」中最も重要な章の一つである。名目上の主題は諸種の特殊の実体の複雑觀念であるが、内容上は主として純粹の実体一般を取り扱っている。ロックがこの觀念に就いて論じている他の箇所は第一卷第四章第十八節（本書では第十九節）、第二卷第十二章第六節、第十三章第十七—二十節であり、更に実体に関する我々の知識に就いては第三卷第六章、第四卷第三、第四章等に論じている。ロックの実体論の困難は要するに、一方に於て彼は実体の觀念が感覺または反省から得られないことを認めているのに、他面に於て彼はこれを感じまたは反省による單純觀念として知り度いと希んでいることにあるのである。

一 実体 *substances* の觀念は如何にして作られるか——心は、私が明言したように、外物の中に見出される場合には、感覺によって齎らされ、或いはまた心そのものの作用に対する反省によって齎らされる非常に多数の單純觀念を具えているが、また心は、一定数のこれ等の單純觀念は常に相伴うものであることに気付く、これ等の單純觀念は恐らく一つの物に属するのであると考えられ、言葉は普通の理解力に適するようにされ、また速かに思想を伝えるために用いられるので、これ等は、かように一つの主体の中に統一され、一つの名前を以て呼ばれる、これを我々は、不注意のために、後には一つの單純觀念として語りまた考察し勝ちである、然し実はこれは多くの觀念が一緒に組合わさったものである、何故なれば、私が言ったように、我々は如何にしてこれ等の單純觀念がそれ等だけで存立し得るかを考えないで、これ等の觀念の存立する基となり、またこれ等の觀念を生ずるところの或る基体、*(substratum)* を仮定することに慣れる、それ故に我々はこれを実体 *(substance)* と呼ぶ。

## 第二卷 觀念に就いて

二 実体一般に関する我々の觀念——だからもし誰か或る人が自ら、純粹の実体一般に関する彼の觀念イデアに関して吟味しようとするならば、彼は自分がそれに関する何等の他の觀念イデアをも持っていないで、ただ何かは知らぬが我々の中に諸々の單純觀念イデアを生ずることの出来るような諸々の性質を支持するものを仮定しているだけであることを知るであろう、それ等の性質は通常偶有性 accidents と呼ばれる。もし或る人が、色または重さを持前として具えている things 主体 subjects は何であるかと問われたならば、その人は諸々の固形的な広がった部分であるという以外には何とも言い様がないであろう、またもし彼が、その固體性及び延長を持前として具えているものは何であるかと尋ねられたならば、その場合彼の狀況は前述のインディアンと大差ないであろう、そのインディアンは世界は大きな象によつて支えられているのだと言つて、その象が支えられているのは何だと問われた、これに對して彼は、大きな龜だと答えた、然し再びその背中の広い龜を支持するものは何であるかを知ることを追られて、それは何か彼の知らない或るものと答えたのである。そして斯くの如くここでも、我々が明晰、判明な觀念イデアを持たずに言葉を用いるすべての他の場合に於けるが如く、我々は子供のように語つて居るのである。子供等は彼等の知らない或るものが何であるかと問われると、容易く、それは何かだ、という申し分の無い答を与える、この答は、子供によつてでもまたは大人によつてでもかように用いられるときは、実はただ、彼等はそれが何だか知らないということ、及び彼等が知つてゐるふりをして語つてゐるものは、彼等が全く何等明確な觀念イデアを持つていないものであり、それ故に彼等はそれに就いては全く無智蒙昧であるということ、を表示するだけである。そこで我々が持つて居り、実体という一般的な名前を与えて居る觀念イデアは、我々

がその存在していることを見出し、何か支持するもの無しには存立し得ないと考えるところの諸性質の仮定上の未知の支持者に他ならぬのであるから、我々はその支持者を *substantia* と呼ぶ、この語は其の眞の意義に従えば、分り易い英語で下<sup>ニ</sup>に立つ<sup>（standing under）</sup>とか支<sup>え</sup>える<sup>（upholding）</sup>とかいうことである。

\* 第十三章、第二十節参照。【二〇節のアメリカ先住民ではなく、一九節のインドの哲学者を指す。この節の説明を讀んでから先の第一三章第一九節に戻つて初めて意味が通じる。】

三 実体の種類に就いて——実体一般の漠然たる相対的觀念<sup>イデア</sup>がかようにして作られると、我々は、経験及び人間の感覚の觀察によつて一緒に存在することを認められ、そしてそれ故にその実体の特殊な内の構造或いは未知の本質から生ずるものと考えられるような、單純觀念<sup>イデア</sup>の結合を集めることによつて、特殊な諸種の実体の觀念<sup>イデア</sup>を持つようになる。かくして我々は人、馬、金、水、等の觀念<sup>イデア</sup>を持つようになる、誰か或る人がこれ等の実体に関して、一緒に存在している若干の單純觀念<sup>イデア</sup>以上に、何か他の明晰な觀念<sup>イデア</sup>を持つているかどうかは、私はこれを各人自身の経験に訴える。相結合して鉄とか金剛石とかいう実体の眞の複雑觀念<sup>イデア</sup>をなすものは、それ等の実体の中に認められる普通の諸性質である、そして鍛冶師または寶石商は通常哲学者よりもこれ等の実体をよく知っている、哲学者はたとえ彼が如何なる実体の形式<sup>\*</sup>に就いて語ろうとも、これ等の実体に就いては、それ等の中に見出さるべき諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の集合によつて形成されるもの以外の如何なる他の觀念<sup>イデア</sup>をも持たないのである。唯我々は、我々の持つ実体の複雑觀念<sup>イデア</sup>は、それを作り上げているすべての單純觀念<sup>イデア</sup>の他に、常に、これ等の單純觀念<sup>イデア</sup>がそれに属し、それの中に其の存在の根拠を持つところの或るものの不明瞭な觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐるということ、に留意せねば

ならぬ。それ故に、我々が或る種の實體に就いて語るとき、我々は、それはしかじかの性質を持つてゐるものだ、と言う、例えば物体は、広がつていて、形があり、運動をすることの出来るものである、精神は考えることの出来るものである、というが如くである、そしてまた堅いこと、碎け易いこと、及び鉄を引き付ける力は磁石の中に見出さるべき性質である、と我々は言う。これ等及びこれと同様な言ひ方は、實體は常に、我々は何であるかは知らないが、延長、形態、固本性、運動、思考、或いはその他の知覚せられ得る觀念イデア以外の或るものである、と仮定されているということをそれとなく示すものである。

\* 實體の形式とはアリストテレスのアイドス【エイドス・形相】、即ち種の本質である。【というよりも質料を規定する形相のうち本質的な規定性を substantial forms と言ふらしい。】

四 實體一般に関する何等の明晰な觀念イデアもない——そこで我々が、馬、石、等の如き或る特殊な種類の實體に就いて語りまたは考えるとき、我々がそれ等の何れに就いて持つてゐる觀念イデアも、我々が馬とか石とか呼ばれる物の中に統一されているのを見出すのが常であるところの感覺的性質に関する幾つかの單純觀念イデアの複合または集合にすぎないのではあるが、しかも我々がこれ等のものが如何にしてそれ自身で、または一方が他方によつて存立するかを考えることが出来ないがために、我々はこれ等のものが或る共通の主体によつて存在し、また支えられてゐると仮定する、この支持者 a support を我々は實體イデアという名によつて指示する、我々が支持者と仮定するそのものに就いて我々が何等の明晰、判明な觀念イデアを持つていないことは確かなのであるが。

五 精神に関しても、物体に關すると同様に明晰な觀念がある——同じことが精神の作用、即ち、思考、推理、恐怖、等に関しても起る、これ等の作用を我々はそれ自身で存立するものと断定することもなくまた如何にしてそれ等が物体に属し、或いは物体によつて生ぜられるかを理解することもないので、我々はそれ等を、我々が精神と呼ぶ或る他の実体の働きと考え勝ちである、このことによつてしかも次のことが明らかである、即ち、我々の感覚を感じしめる多くの感覺的性質の存立する基になる或るものという以外には、我々は物質に關する他の何等の觀念または想念 *notion* をも持っていないので、考えること、知ること、疑うこと、及び動かす力、等が存立する基になる実体を仮定することによつて、我々は、物体に關して我々が持つと同様に明晰な、精神の実体の觀念を持つ、というのは前者は、（それが何であるかを知ることなしに）我々が外部から得る諸々の單純觀念の基体であると仮定せられ、後者は、（同様にそれが何であるかを知らずして）我々が自分自身の内に実験する諸々の作用の基体であると仮定せられるのである。そこで次のことは明らかである、即ち、有形的実体即ち物質の觀念 *the idea of corporeal substance in matter* は、精神的実体 *spiritual substance* 即ち精神 *spirit* の觀念と同様に、我々の思考力及び理解力からかけ離れたものである、そしてそれ故に、我々が物質の実体 *the substance of matter* に關して何等の明晰、判明な觀念を持つていないが故を以て、物体がないと断言することは、我々が精神の実体に關して何等の明晰、判明な觀念を持つていないが故に、精神はないと言ふのと同様に合理的だからといって、我々が精神の実体に関する何等の觀念をも持つていないことによつて、我々は、同様の理由によつて物体の存在を否定することが出来ないと同じように、精神の存在せぬことを断定することは出来ない

のである。

六 諸種の實體に就いて——それ故に實體一般の不可思議な抽象的な性質が何であろうとも、特殊な別々の種類の實體に関して我々の持つすべての觀念<sup>イデア</sup>は、諸觀念<sup>イデア</sup>の結合全体をそれ自身で存立せしめるようなそれ等の觀念<sup>イデア</sup>の結合の原因——これは知られてはいないのであるが——によつて共在する諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の様々な結合に他ならない。我々が特殊な諸々の實體を心に描くのはかような單純觀念<sup>イデア</sup>の結合によるので、他の何物によるのでもない。かようなのが、我々が實體の様々な種類に就いて我々の心の中に持つ觀念<sup>イデア</sup>である、そしてかくの如きものをのみ我々は、それ等の特定の名前によつて、他の人々に表示する、例えば、人、馬、太陽、水、鉄、の如きである、これ等の語を聞くと、その言語を理解する人は誰でも、彼がこれまでに通常その名称の下に相共に存在することを觀察しまたは想像したところの幾つかの單純觀念<sup>イデア</sup>の結合を彼の心の中に形成する、彼はこれ等すべてを、他の何物にも附着しないかの未知な共通の主体に依り、また謂わばそれに固着するものと假定する。しかも一方では次のことは明らかであり、また誰でも自分自身の思考を研究すれば分るであらう、即ちそれは、彼が一緒に結び付いて存するものと認めたところの諸々の性質または單純觀念<sup>イデア</sup>を、謂わば、支えるような基体を假定することによつて、或る實體に固着するものと彼が考える諸々の感覺的性質についてだけ彼が持つ實體の觀念<sup>イデア</sup>外には、彼は如何なる實體に關しても他の何等の觀念<sup>イデア</sup>をも持たない、ということである。かくして太陽の觀念<sup>イデア</sup>とは、きらきら光る、熱い、円味をおびた、一定の規則的運動を為す、我々から一定の距離にある、というようなそして恐らく幾つかの他の單純觀念<sup>イデア</sup>の集合以外の何であるか。

七 力は実体に関する我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>の大なる部分をなす——何となれば、或る特殊な種類の実体の中に存在する諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>を最も多く集めて結合した人がその実体の最も完全な觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐる、その結合される觀念<sup>イデア</sup>のうちにはその実体の能動的な力 active powers と受動的な力 passive capacities を数えることが出来る、これ等は單純觀念<sup>イデア</sup>ではないが、しかもこの問題に関しては、簡潔にするために、單純觀念<sup>イデア</sup>のうちに数えるのがまことに適當である。<sup>\*</sup> 例えば我々は直接に我々の感覚によつて火の中に其の熱と色を知覚する、これ等のものは、もし正當に考えるならば、これ等の觀念<sup>イデア</sup>を我々の中に生ずる火の力の他に他ならない、我々はまた我々の感覚によつて木炭の色ともろいことを知覚する、これによつて我々は木の色と堅さを変える火の中のいま一つの力を知る。火は、前者によつて直接に、後者によつて間接に、これ等の幾つかの力を我々に明らかにする、それ故に我々はこれ等の力を火の諸々の性質の一部であると見做し、そうしてそれ等を火という複雑觀念<sup>イデア</sup>の一部と為すのである。というのは我々が認めるすべてのこれ等の力はただ、それ等が作用を及ぼす主体の中の幾つかの感覺的性質を変えることに歸し、そうしてこれ等の主体をして我々に新しい感覺的觀念<sup>イデア</sup>を呈示せしめる、それ故に、これ等の力は、それ自身に於て考察すれば、実は複雑觀念<sup>イデア</sup>なのであるが、私はこれ等を諸種の実体の複雑觀念<sup>イデア</sup>を成す諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>のうちに数えたのである。

<sup>\*</sup> 第二十一章、第三節参照。

八 そして何故に——また我々は諸々の力が諸々の実体に関する我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>の一つの大なる部分を成すということを訝<sup>いぶか</sup>るべきではない、何故なればそれ等の実体の諸々の第二性質は、それ等の実体の

## 第二卷 觀念に就いて

大抵のものに於て、實體を相互に區別するのに主として役立ち、そして通常様々な種類の実体に関する複雑觀念の著しい部分を成すからである。というのは我々の感覚は、諸々の物体の事実上の構成及びそれ等の差別の基になる物体の微細なる諸部分 minute parts の大きき bulk、組織 texture、及び形状 figure を発見するのに、我々の助とならないので、我々は已むを得ず諸々の実体の觀念を我々の心の中に形成し、それ等を相互に區別するための特質的な符号と印しとしてそれ等の実体の第二性質を用いることに甘んずるのである。すべてのそれ等の第二性質は、前に示した【第8章第10節】ように、単なる力に他ならないのである。というのは阿片の催眠的及び鎮痛的效能も、その色及び味も、阿片をして我々の体のいろいろな部分にいろいろな作用を生ずるに適せしめるところのその諸々の第一性質に依つて居る單なる力に過ぎないのである。

九 三種の觀念が實體に関する我々の複雑觀念を成す——有形の実体に関する我々の複雑觀念を成す觀念は次の三種のものである。第一は、物 things の第一性質の觀念であつて、これ等の性質は我々の感覚によつて発見せられ、また我々が物を知覚しない時でさえも物の中に在るものである、これには諸物体の大きさ、形状、数、位置、及び其の諸部分の運動が属する、これ等のものは、我々がそれ等の物体に心を留めても留めないでも事実 matter 物体の中に在るのである。第二は、感知せられ得る第二性質で、これは第一性質に依存していて、實體が持つてゐるところの、我々の感覚によつて我々の中に様々の觀念を生ずる力に他ならない、これ等の觀念は、或るものがその原因の中に在るといふような具合に於てのみ、物そのものの中に在るのである。第三は、我々が或る實體に於て認めるところの、實體が前に生



じたのとは異なる観念イデアを我々の中に生ずるように実体を変えるような第一性質の変化を与えまたは受ける性質である、これ等は能動的及び受動的な力と呼ばれる、すべてのこれ等の力は、我々がそれ等に就いて何等かの知識または観念イデアを持つ限りは、ただ諸々の感知せられ得る観念イデアに帰着するのである。何となれば磁石が鉄の微細な分子の中に如何なる変化を生ずる力を持つていようと、もしも鉄の感知せられ得る運動がその力を表さなかつたならば、我々は磁石の持つ鉄に作用する如何なる力に就いても全く何等の観念イデアをも持たないであろう、そして私は、我々が日常取り扱う諸物体が相互に生ずる力を持つているところの無数の変化がある、ということを疑わない、我々はこの力がありそうだと決して思わない、何故なればそれは決して感知せられ得る結果に現れないからである\*。

# 事物の中に無いが主意。which ideas are not in the things themselves, otherwise than as anything is in its cause.

\* 第四卷、第六章「普遍的命題とその真理及び確実性に就いて」、第十一節参照。

一〇 力は実体に関する我々の複雑観念イデアの一大部分を成す——それ故に力はまさしく実体に関する我々の複雑観念イデアの一大部分を成す。金という自分の複雑観念イデアを吟味しようとする人は、それを形成する観念イデアの幾つかは力に過ぎないことを知るであろう、何故なれば火の中で融けるけれども無くなりしなないという力、王水の中で溶解するという力は、金の色及び重さと同様に金という我々の複雑観念イデアを形成するに必要な観念イデアである、この色及び重さも亦、よく考察すれば、別の力に他ならないのである。何となれば実を言えば、黄色は実際に金の中に在るのではなくて、然るべき光の中に置かれるとき、我々の眼によつて我々の中にその観念イデアを生ずるところの金の中の力である、そして太陽という我々の観念イデアから

我々が除外することの出来ない熱は、それが蠟に与える白色と同様に、実際に太陽の中に在るのではない。<sup>\*</sup>

\* 第八章、第二十三節参照。【本書では略。物体の三種の性質の一つとして構造變形力を上げている。】

この点に関するバークレーの論は、第一性質は所謂感知せられ得る性質と同一水準にある、何故なれば両者は共に或る力（彼はこれな神となす）の我々の中に与える結果であるから、というのである。従つて彼は物質的物体に於ては実体を否定する、物体は彼にとつては、常に一緒になつてゐる諸々の感覺的觀念<sup>イデア</sup>の集合に過ぎないからである。

一 諸物体の今の第二性質は、もし我々がそれ等の物体の微細なる諸部分 *minute parts* の第一性質を発見することが出来たならば、消失するであろう——もし我々が、諸物体の微細なる諸部分、及びその感知せられ得る諸性質の抛つてゐる實際の構成を識別するに充分鋭敏な感覺を持つていたならば、疑いもなくこれ等の感覺は我々の中に全く別な諸觀念<sup>イデア</sup>を生ずるであろうし、また今金の黄色であるものはその時には消えて、其の代りに我々は一定の大きさと形をした諸部分のすばらしい組織を見るであろう。この事は顕微鏡が明らかに我々に示す、何となれば我々の肉眼に対して或る色を生ずるものは、かくの如く我々の感覺の鋭敏さを増大することによつて、全く別のものであることを見出される、そしてかくの如く、謂わば、或る色のついた物体の微細なる諸部分の大きさの割合を変えろということが、その物体が前に生じたとは別の諸觀念<sup>イデア</sup>を生ずるのである。かくして砂または搗き砕いたガラスは、肉眼には不透明で白いが、顕微鏡の中では透明である。血液は肉眼にはすべて赤く見える、然しそのより小なる諸部分の見える良い顕微鏡によれば、透明な液の中を遊泳してゐる僅か少数の赤い小球が見えるだけであ

る、そしてこれ等の赤血球は、もしもそれ等を更に一千倍または一万倍に拡大することの出来る顕微鏡が見出されたならば、如何に見えるであろうかということは確かには分らない。

一二 我々の発見の能力は我々の状態に適している——我々及び我々の周囲のすべての物を造り出した無限にして賢明な神 Contriver は、我々の感覚、能力、及び器官を、生活の便宜と我々が此の世に於てなさねばならぬ仕事に適せしめたのである。我々は我々の感覚によつて事物を知りまた区別することが出来、また事物を吟味して我々の使用と人生の危急な場合に應ずる幾つかの方法に適用するに到ることが得るのである。事物のすばらしい工夫と驚くべき結果への我々の洞察は、事物の創造者の叡智、力、及び善に感謝しこれを称揚するに充分である。我々の現在の状態に適しているかくの如き知識は、これを獲得するに我々は能力を欠いてはいない。然し神は、我々に事物の完全な、明晰な、充分な知識を持たせるように目論んだとは思われない、これは恐らく如何なる有限の存在者の理解力をも越えることである。我々は、我々をして創造者を知らしめ、我々の義務を知らしめるに充分なるものを、創造物の中に発見する能力（鈍く弱いものではあるが）を具えている、また我々は生活の便宜を計る能力を充分に具えている、これ等のことがこの世に於ける我々の仕事である。然し乍らもしも我々の感覚が変えられて、ずっと敏くまた鋭くされたならば、事物の外見と外的組織は我々に対して全く別の外貌を呈するであろう、そしてこれは、我々の住む宇宙のこの部分に於ては、我々の存在または少なくとも幸福とは両立せぬであろう、と私は考え勝ちである。我々の身体が、空中の我々が通常呼吸している部分よりそんなに高くない部分に移されることに如何に耐え難いかを考察する人は、我々の棲家として定められたこの

地球に於て、全智の神が我々の諸器官とこれ等に影響すべき諸物体とを相互に適合せしめたということに満足すべき理由を見るであらう。もし我々の聴覚が現在よりも僅か一千倍だけ敏活であつたならば、絶えざる騒音が如何に我々をのぼせかえらせることであらう。そして我々は、最も静かな隠居に於ても、海戦の真ただ中に於けるよりも、より少ししか眠りまたは瞑想することが出来ないであらう。否、我々の感覚の中で最も有益なもの、即ち視覚が、もしも或る人に於て現在最も良い顕微鏡に依るよりも一千倍または十万倍鋭敏であつたならば、彼の現在の視覚の最小の対象よりも数百万倍小さい物がこの場合には彼の肉眼に見えるであらう、そこで彼は諸々の有形的物体の諸部分の組織と運動の発見に、より近づくであらうし、またこれ等の物体の多くのものに於ては恐らくそれ等の内部の構造の觀念を得るであらう、然しこの場合には彼は他の人々とは全く別の世界に居ることとなるであらう、何物も彼と他の人々には同一に見えないであらう、あらゆるものの視覚による觀念は異なるであらう。そこで私は、彼とその他の人々は視覚の対象に就いて語り、または色に就いて何か話を交えることが出来るかどうかを疑う、これ等のものの外見はかくも全く異なるのであるから。そして恐らくかように敏活で繊弱な視覚は明るい太陽の光、または戸外の光にさえも耐えないであらうし、また何か或るものの極小部分を、それも非常に近い距離に於て取り入れるに過ぎないであらう。そしてもしもかような顕微鏡的な眼\*（もしそう呼んでもよいならば）の助によつて或る人が物体の普通の構造組織以上に更にその秘密の構造と根本的な組織を見透すことが出来たとしても、もしもかくの如き鋭敏な視覚が彼を市場と取引所に導くに役立たなかつたならば、またもしも彼が自分の避けるべき物を適當の距離に於て見ることが出来ず、彼の關係

する物を、他の人々がなすが如くに、其の感覺的性質によつて區別することが出来なかつたならば、この変化によつて彼は何等大なる便宜を得ないであろう。時計の發条バネの微細なる分子の形態を見て、其の彈性運動は如何なる特殊の構造と衝動とに依るかを觀察するに充分鋭敏な視覺を持つている人があつたなら、その人は疑いもなく或る非常にすばらしいものを發見するであろう。然しもしもそういう風に出來た眼が針と文字盤の文字とを同時に見て、それによつて遠くから何時であるかを知ることが出来なかつたならば、そういう眼を持つ人は其の鋭敏さによつて大して利益を得ることは出来ないのである、この鋭敏さはその機械の諸部分のかくれた設計を發見するけれども、その人をしてその效用を失わしめる。

\* ポープ (Pope) はその人間論 (*Essay on Man*) に於て次の如く言っている。

何故人間は顯微鏡的な眼を持つていないのであろうか。それは、人間は蠅ではない、という明らかな理由のためである。

一三 靈體 *spirits* に就いての推測 *Conjecture*——そしてここに私は自分の突飛な推測を提出すること  
を許していただき度い、それは即ち、(もしも我々の哲学が説明することの出来ぬ事物の報告に何等かの信用が置かれるものなら) 我々には、諸々の靈體は自ら大きさ、形状、及び部分の構造を異にする体  
を取ることが出来ると想像すべきいくらかの理由があるのであるから、それ等の或るものが我々に対し  
て持つ一つの大きな優越は、彼等が自ら感覺または知覺の器官を彼等の現在の計画と彼等が考察しよう  
とする対象の事情に適するように形作ることが出来る、ということにあるのではないか、ということであ  
る。何となれば、或る人が (最初偶然にかけた) 眼鏡の助によつて知ることを覚えたと *has taught us*  
*conceive* 視覺の様々な程度のすべてを見ることが出来るように自分の眼、即ち一つの感官の構造を変え

る能力を持つていさえすれば、その人は知識に於て如何に多くすべての他の人々に優ることであろうか。自分の眼をすべての種類の対象に適せしめて、好きな時に動物の血液及びその他の体液中の微粒子の形状及び運動を見ること、恰も他の時に自分が動物そのものの形と運動を見るが如く明らかならしめることの出来る人は如何なる不可思議を発見するであろうか。然し乍ら現在の状態に於ける我々に取つては、我々が現在物体の中に認める感覺的性質の基になるところの物体の微細な部分の形状及び運動を発見するような仕組になつてゐる、変えることの出来ない器官は、恐らく何の利益にもならないであろう。疑いもなく神は我々の現在の状態に於て我々に最も良いように我々を作つたのである。神は、我々を取り囲み、我々が關係する周囲の物体の世界に我々を適せしめた、そして我々は、我々のもつ諸能力によつては事物の完全な知識に到達することは出来ないが、しかもこれ等の能力は、我々の大なる関心事である上述の諸々の目的に対しては、充分よく役立つのである。私は読者に対して、私が彼の前に、我々以上上の存在者に於ける知覚の方法に関するかくも途方も無い空想を提出したことの許しを乞う、然したとえそれが如何に突飛であろうとも、我々は天使等の知識に就いては、こんな風に何等かの方法で我々が自分自身の中に見出し認めるところのものに比例して考える以外に何事かを想像し得るや否やを私は疑うのである。そして我々は、神の無限の力と叡智は、我々の持つてゐるもの以外に外界の事物を知覚する無数の能力と方法とを持つ創造物を形造ることが出来るといふこと、を認めざるを得ないが、しかも我々の思考は我々の知覚の能力と方法以上には少しも到達することが出来ない、だから我々にとつては我々の推測をさえも、我々自身の感覺及び反省から受ける觀念イデアを越えて拡大することは不可能である。

少なくとも、天使が時には体 *bodies* を持つという想像は我々を驚かすにあたらない、何故なれば、大昔の非常に学識のある教父連の或るものは天使が体を持っている、と信じていたと思われるから、そして天使の状態と存在の仕方は我々に分らない、ということとは確かである。

一四 実体の複雑觀念——然し当面の問題、即ち実体に関して我々が持つ觀念、及び我々がこれ等の觀念を得る方法に立ち帰ろう。扱て、実体に関する我々の種の *specific* 觀念は、一つの物に統一されていると考えられる、一定数の単純觀念の集合に他ならないのである。実体に関するこれ等の觀念は通常単純な概念 *simple apprehensions* と呼ばれ、それ等の名前は単純な名辭と呼ばれるのではあるが、しかも事實上これ等は複雑で複合的である。かくして英国人がスワンという名によって意味する觀念は、白色、長い頸、赤い嘴、黒い脚、及び水かきのある足、そしてこれ等のすべては一定の大いさ *size* のもので、水の中で泳ぎ、また一定の種類の音を立てる能力を伴う、そして恐らく此の種の鳥を長く觀察した人にとっては、何れも結局は感知せられ得る単純觀念に帰するところの若干の他の性質も加わるであろうが、これ等のすべてが一つの共通の主体に統一されたものである。

一五 精神的 *spiritual* 実体の觀念は有形的 *bodily* 実体の觀念と同様に明瞭である——我々が物質的な感知せられ得る実体に関して持つ複雑觀念（これに就いては私はすぐ前に語った）の他に、我々が自身の中に日々實際經驗する我々自身の心の諸々の作用から受けた単純觀念によつて、我々は非物質的精神の複雑觀念を形成することが出来る。何となれば考えることという觀念と意志することという觀念、即ち物体を動かしまたは物体の運動を静止せしめる力の觀念を一緒にして、我々が何等明確な

觀念<sup>イデア</sup>を持つていない実体に結び付けることによつて、我々は非物質的精神の觀念<sup>イデア</sup>を持つ、そして密着している固形的部分 coherent solid parts の觀念<sup>イデア</sup>と動かされる力の觀念<sup>イデア</sup>を一緒にして、同様に我々が何等実体的な觀念<sup>イデア</sup>を持つていない実体に結び付けることによつて我々は物質 matter の觀念<sup>イデア</sup>を持つのである。これ等のうちの一方のものは他のものと同様に明晰、判明な觀念<sup>イデア</sup>である、考えること及び物体を動かすことの觀念<sup>イデア</sup>は、延長、固性、及び動かされることの觀念<sup>イデア</sup>と同様に明晰、判明な觀念<sup>イデア</sup>であるから。何となれば實體に関する我々の觀念<sup>イデア</sup>はこの両者に於て等しく不明瞭であり、或いは全く何でもない、それは我々が偶有性と呼ぶ觀念<sup>イデア</sup>を支持するところの何か分らぬ仮想物にすぎない。「我々の感覚は我々に物質的な物 material things 以外には何物も示さない、と我々が考え勝ちなのは反省の欠乏のためである。感覚のあらゆる働きは、よく考察すると、自然の物質的及び精神的の兩部分を等しく見せるものである。何となれば私は、見たり聞いたりなどすることによつて私の外に何か有形的な物、即ちその感覚の対象が在るということを知る一方、私は、自分の内に見たり聞いたりする何か精神的な者 being が在るということを更に確かに知るからである。この事は単なる無感覚の物質の働きではあり得ないし、或る非物質的な思考する存在なしには起り得ない、ということを私は確信せざるを得ない。」\*

\* 「」の中の部分は第四版に於て附け加えられたものである。

一六 抽象的實體の觀念<sup>イデア</sup>は無い——拡がつていて、形があり、色があるという、及びすべての他の感覺的性質の複雑觀念<sup>イデア</sup>（これが我々が物体<sup>i</sup>に就いて知つてゐるすべてであるが）によつて、我々は物体の

i , which is all that we know of it. の it は「實體」か「物体」か、解釈は分かれる。



実体という觀念から、恰も何も知らないかの如くに、遠ざかるのである、また我々が物質に就いて持っている自分で想像するすべての知識 acquaintance 及び親しみ、及び人々が自分で物体の中に認め、知ると確信する多くの性質にも拘らず、よく吟味して見ると恐らく、彼等は非物質的な精神に属する觀念に少しでも明瞭な、物体に属する本質的觀念 primary ideas を持つていないということが分るであらう。

一七 固形的部分の密着と衝撃が物体の本質的觀念である——精神に対して対照的に区別されるものとしての物体に特有な本質的觀念——我々の持つてゐる——は、固形的であり従つて引き離すことの出来る諸部分の密着、及び衝撃に依つて運動を伝える力である。この二つは、思うに、物体にとつては本来の特有の根源的觀念 original ideas である、何となれば形状は有限の延長の結果にすぎないから。

一八 思考と動力性 *mobility* が精神の本質的觀念である——精神に属しまた精神に特有の觀念——我々の持つてゐる——は、思考と意志、即ち思考によつて物体を運動せしめる力、及びその結果であるところの自由である。何となれば物体はその運動を衝撃によつてのみそれが会合う他の静止している物体に伝えることが出来るが、丁度そのように心は随意に物体を運動せしめ、またはこの事を控えるのである。存在、持続、及び可動性\* *mobility* は両者に共通である。

\* 本巻、第二十一章、第七十五節【七三節】に於ては、存在、持続、数、が両者に共通な觀念として挙げられている。可動性はここではじめて精神に就いて認められている。

一九 精神は運動することが出来る——私が可動性を精神に属せしめることが不思議であると考えらるべき理由は無い、何となれば私は、静止していると考えられる他の存在との距離の変化以外には運動

## 第二卷 觀念に就いて

の如何なる他の觀念をも持つていないし、また物体も精神もその在る場所以外では働くことが出来ないということ、及び精神は實際幾度か色々の場所で働くということを見出すので、私は場所の変化をすべての有限なる精神に帰せざるを得ない（というのは無限の精神に就いては私はここでは語らないのであるから）。何となれば私の肉体は勿論私の精神も實在的なもの a real being であるから、確かに物体そのものと同様に、如何なる他の物体または存在との距離をも変えることが出来る、そしてそれ故に運動が可能である。そしてもしも数学者が二点間の一定の距離またはその距離の変化を考察することが出来るならば、我々は確かに二つの精神の間の距離及びその距離の変化を考え、そして従つてそれ等の運動、相互の接近または隔離を考えることが出来る。

二〇 あらゆる人は自分自身の中に於て、自分の精神は、考え、意志し、また自分の体にそれが在る場所に於て働くことが出来るけれども、百哩隔たつた或る物体に、または百哩隔たつた場所に於て、働くことは出来ない、ということを知る。如何なる人も自分がロンドンに居る間に、自分の精神がオックスフォードに在る或る物体を考えまたは動かすことが出来ると想像することは出来ない、神は自分の肉体に結び付けられて、自分を運ぶ馬車または馬と同様に、オックスフォードとロンドンの間の旅程の全部にわたつて絶えず場所を変えらるゝということを知らざるを得ない、そして實際其の間ずっと運動してと言われ得ると思う、或いはもしも此の事が精神の運動に就いて充分明瞭な觀念を我々に与えると認められないならば、精神が死によつて肉体から引き離されるといふことならば充分であらう、何となれば精神が肉体から出て行く、または肉体を離れると考えて、しかも精神の運動の觀念を持たない、とい

うことは私には不可能であると思われるから。

二一 もし誰か或る人が、精神は場所を変えることが出来ない、何故なれば精神は場所に (E. loc.) 在るのではなくて何処かに (E. ubi)\* 在るから場所を持たないのだ、と言うとしても、そういう言い方は、現代の如くかような訳の分らぬ話し方をあまり称讃しようとせぬ、或いはそれによつて欺かれるに委せない時代に於ては、多くのの人にとつて大した力は無いであらう、と私は思う。然しもし誰かがその区別に何等かの意味があり、またそれが我々の現在の目的に適用し得ると考えるならば、私はその人にそれを明瞭な英語に訳して、次に、それから、非物質的精神は運動することが出来ない、ということを示す理由を引き出すことを希望するのである。成る程運動は神には帰せられない、それは神が非物質的精神であるからではなくて、無限の精神であるからである。

\* スコラ哲学では、精神が或る場所に存在するということはその場所を占める物体に対する精神の働きによつて定められ、その働きの連続（それによつて精神は色々の場所にあると言われる）が精神の運動である、と言われる。

二二 精神 *soul* 及び物体に関する觀念の比較——そこで非物質的精神 *immaterial spirit* に関する我々の複雑觀念と物体に関する我々の複雑觀念とを比較して、その一方に他方よりも何かより多くの不明瞭な点があるか、いずれが最も不明瞭であるかを見よう。物体に関する我々の觀念は、私の考えでは、衝擊によつて運動を伝えることの出来る広がりのある固形的実体である、そして非物質的精神としての靈 *spirit* に関する我々の觀念は、考え、そして意志または思考によつて物体の中に運動を引き起す力を持つ実体の觀念である。物質を考えることに没頭していて、心を甚しく感覚に従属せしめているので感覚を

越える如何なるものをも減多に反省しないような人々は、自分は思考するものを理解することも出来ない、と言ひ勝ちであるのを私は知っている、この事は恐らく真実である、けれども、彼等がよく考えて見ると、彼等は広がりのある物をも同様に理解することは出来ないのだ、と私は断定する。

二三 物質に於ける固形的部分の密着 cohesion は、精神に於ける思考と同様に理解することが困難である——もし或る人が、自分は自分の中の考えるものは何であるかを知らない、というならば、その人は、自分はその考えるものの実体は何であるかを知らない、ということの意味する、然し今も言う通り、彼は、かの固形的な物の実体は何であるかも、同様に知らないのである。更にもし彼が、自分是如何に考えるかを知らない、と言うならば私は、彼は如何に彼が広がつているか、如何にして物体の固形的な部分が結合または密着して延長をなすかも知らないのだ、と答える。何となれば空氣の分子 particles の圧力が、空氣の分子よりも粗くて空氣の微粒子 corpuscles よりも小さい気孔 pores を有する物質の多くの部分の密着を説明するけれども、空氣の重さまたは圧力は、空氣そのものの分子の密着を説明もしないし、またその原因ともなり得ない。またもしもエーテル、または何か空氣よりも緻密な物質が、他の物体は勿論空氣の分子の諸部分をも結合してしっかりと結び付けることが出来るとしても、しかもそれはそれ自身を結び付ける物となつて、その緻密物質の各々の最小部分を一緒にすることは出来ないのである。

〔二四〕だから恐らく、物体の延長に関して我々がたとえ如何に明瞭な觀念イデアを持つていると考えても——それは固形的部分の密着に他ならない——自分の心中でよく考察する人は、彼にとつては、精神が如何にして考えるか、に就いては、物体が如何にして広がつているか、に就いてと同じく明瞭な觀念イデアを

持つのが容易い、ということを出定する理由を持つてであらう。

二五 如何にして或る人が、大概の人が毎日觀察すると思つてゐることの中に、困難を見出すことが出来るか、を不思議に思うのは大抵の人にとつて普通のことであると私は認める。我々は物体の諸部分がしつかりとくつついてゐるのを見るではないか、と彼等は言わんとするであらう。これ程ありふれた事はないではないか。そしてこれに就いて如何なる疑いがあり得るであらうか。そして思考及び有意的運動に關しても同様ではないか、我々は毎瞬間それを我々自身の中に實際經驗するではないか、それ故に疑ふことは出来ないではないか。事實は明瞭である、私もそれは認める、然しもう少し嚴密に吟味し、如何にしてこれ等の事がなされるかを考察しようとする、其処で、思うに、我々は其の何れの場合にも當惑して、如何にして我々自身知覚しまたは動くかを理解し得ないと同様に、如何にして物体の部分が密着するかをも理解することが出来ないのである。

## 【二六 略】

【二七】何となれば我々の考えをい多少しく拡張するならば、物体の密着を説明するためにもつて来られるかの圧力は密着そのものと同様に理解し難い unintelligible。もし物質が有限であると考えられるならば（疑いもなくそう考えられるのであるが）、誰でもいいから自分の思索を宇宙の涯に迄及ぼして見よ、そのとき彼は其処に、この物質のかたまりを非常にぎつしりと圧し付けて、その圧力によつて鋼鉄がその堅さを持ち、ダイヤモンドの諸部分がその硬さと分解し難い性質を持つようになるところの、如何なる環、如何なる紐を念頭に浮べることが出来るであらうか。もし物質が有限であるならば、それ

はその末端 *extremes* を持つてゐるに違ひない、そしてそれがばらばらになることを妨げる何物かがそこに在るに違ひない。もし、この困難を避けるために、或る人が無限の物質という仮定の深みに飛び込むとするならば、その事によつて彼が、物体の密着ということを如何に明らかにするか、またそれを他のすべての仮定の中で最も不合理で理解し難い仮定に還元することによつて彼がそれを少しでもより理解し易くするかどうか、を彼をして考察せしめよ。それ程に物体の延長に関する我々の觀念（それは固形的部分の密着に他ならない）は、我々がその性質、原因、または様式を研究しようとする、思考の觀念に比して決してより明晰、判明ではないのである。

二八 衝擊または思考による運動の伝達はともに理解し難い——我々の持つてゐる物体に関するいま一つの觀念は、<sup>イデア</sup>衝擊による運動の伝達の力であり、我々の精神に関して我々の持つてゐるいま一つの觀念は、<sup>イデア</sup>思考によつて運動を引き起す、*exciting* 力である。一方は物体に関し、他方は我々の心に関するこれ等の觀念は我々の毎日の経験がこれを明らかに与えるのである、然しもしここに於ても亦我々が如何にしてこの事がなされるかを研究するならば、これも同じように我々には全く不明である。何となれば一方の物体に対して与えられると全く同量の運動が他方の物体から失われる、——これが最も普通の場合であるが——衝擊による運動の伝達に於ては、我々は一つの物体から他の物体への運動の移動という概念以外の如何なる概念をも持つことは出来ない、この事は、如何にして我々の心は我々の体を思考によつて動かしたまたは止めるかということ——この事が行われるのを我々はあらゆる瞬間に知る——と同様に不明であり不可解であると思う。實際觀察されまたは時々起ると信ぜられるところの衝擊による運動の

増加は更に一層理解することが困難である。日々の経験は我々に衝撃並びに思考の両者によつて生ぜられる運動の明らかな証明を与える、然しこれ等の運動が如何なる仕方によるかということは殆ど我々の理解の及ばぬ所である、我々は両方の場合に同じく途方に暮れるのである。それ故に、たとえ我々が運動、及び物体及び精神の何れからの運動の伝達を考察しても、精神に属する觀念<sup>イデア</sup>は少なくとも物体に属する觀念<sup>イデア</sup>と同様に明瞭である。そしてもし我々が能動的な動かす力或いは動力性——と呼んでもよいのであるが——を考察するならば、それは物体に於けるよりは精神に於て遙かにより明らかである、何故なれば相並んで静止して置かれてある二つの物体は、その一方の中にあるところの他方を動かす力<sup>イデア</sup>の觀念を、借りて来た運動による以外には決して我々に与えないであろう、これに反して心は、能動的な、物体を動かす力の觀念<sup>イデア</sup>を毎日我々に与える、それ故に能動的な力は精神<sup>spiritus</sup>の固有の属性で、受動的な力は物体の固有の属性ではなからうか、ということは我々の考察に値する\*。この事から、創造された靈体<sup>spiritus</sup>は物体から全く離れたものではない、ということが推測される、何故なればそれ等靈体は能動的であると共にまた受動的でもあるから。純粹の精神、即ち神のみが能動的である、純粹の物質のみが受動的である、能動的でもありまた受動的でもあるような存在者<sup>being</sup>は両方に関連するものと判断してよいであろう。然しそれはそうとして、我々は物体に属する觀念<sup>イデア</sup>と同じ位の数のまた同じ位明らかな、精神に属する觀念<sup>イデア</sup>を持つている、——これ等の各々<sup>each being</sup>の实体は等しく我々には知られていないのであるが——と私は思う。また精神に於ける思考の觀念<sup>イデア</sup>は物体に於ける延長の觀念<sup>イデア</sup>と同様に明らかであり、また我々が精神に帰するところの、思考による運動の伝達は、我々が物体に帰するところの、衝

## 第二卷 觀念に就いて

撃による伝達と同様に明白であると思う。我々の狭い理解力はこれ等の何れをも理解することは出来ないけれども、不斷の経験がこれ等兩者を我々に感ぜしめるのである\*。

\* 本卷第二十一章、第一——第四節参照。

\* \* 本節に於てロックは物体に対する精神の作用は衝撃による運動の伝達と全く同様に、神秘的なものではないと認めているが、それが不可解であるということが所謂偶因論の説を生じたわけである。

二九 結論——感覺 sensation は、我々に固形的な広がった実体があるということを確信せしめる、また反省は、考える実体があるということを確信せしめる、経験はかような存在者の存在することを我々に保証する、そしてその一方は衝撃によつて、他方は思考によつて、物体を動かす力を持っている、ということとは我々の疑うことの出来ないことである。経験は、今も言う通り、各瞬間にこの兩者の何れに就いても明瞭な觀念を我々に与える。然し乍ら夫々に相当する起原 proper sources から受け取られるが如きこれ等の觀念以外には、我々の能力は到達しない。もし我々が更にこれ等の実体の性質、原因、及び様式を研究しようとしても、我々は延長の性質を思考の性質より明らかに認識しないのである。もし我々がこれ等のものを少しでも更に説明しようとすれば、兩者とも其の容易さの程度は同じである、そして如何にして我々の知らない或る実体が思考によつて物体を運動せしめるかを理解することは、如何にして我々の知らない或る実体が衝撃によつて物体を運動せしめるかを理解すること以上に困難ではないのである。だから我々は、物体に属する觀念が如何なる点に存するか wherein the ideas belonging to body consist を発見することは、精神に属する觀念が如何なる点に存するかを発見することと同様に出来ない。



のである。それ故に私には、我々が感覚及び反省から受ける單純觀念イデアが恐らく我々の思考の限界である、と思われる。この限界以上にはたとえ如何なる努力をなそうとも、心は一步も進むことは出来ないし、またこれ等の觀念イデアの性質と隠れた原因を探ろう *primo* とする時も、心は何等の発見をもなし得ないのである。

三〇 物体の觀念イデアと精神の觀念イデアとの比較——そこで要するに、我々の持つ物体に関する觀念イデアと比較した、我々の持つ精神の觀念イデアは次の様なことになる、精神の実体は我々には未知である、そしてまた物体の実体も同様に我々には未知である。物体の二つの第一性質または特性、即ち固形的な密着した部分及び衝撃に就いては我々は明晰、判明な觀念イデアを持つている、また同じように我々は、精神の二つの第一性質または特性、即ち思考及び働く力 *a power of action*、というのは様々の思考または運動を始め或は止める力を知つて居り、これ等に就いて明晰、判明な觀念イデアを持つている。我々はまた物体に附着している様々な性質の觀念イデアを持つている、そしてそれ等に就いて明晰、判明な觀念イデアを持つている、これ等の性質は密着している固形的な諸部分の延長とその運動との色々な様態に他ならない。我々は同様に思考の様な様態、即ち、信ずること、疑うこと、志すこと、恐れること、望むこと等の觀念イデアを持つている、これ等のすべては思考の様な様態に他ならない。我々はまた意志の觀念イデア、及びその結果である物体を動かすこと、並びにまた物体と共に意志そのものをも動かすことの觀念イデアを持つ、何となれば前に示したように、精神は運動することが出来るからである。

三一 精神の概念はその中に、物体の概念より以上の困難を含まない——最後に、もしもこの非物質

的精神の概念が、恐らくその中に容易に説明し難い若干の困難を含んでいても、それ故に我々がかような精神の存在を否定しまたは疑うべき何等の理由もないことは、物体の概念が、我々の説明しまたは理解することの非常に難しい恐らくは不可能な若干の困難によつて煩わされるからといって、物体の存在を否定しまたは疑う理由がないのと同じことである。というのはもしも我々の精神の概念の中に、物体の概念の中に含まれるものよりも尚一層混乱した、または矛盾に近い何物かがあるならば、私は喜んでこれを例示したであろう、即ち或る有限なる延長の無限の可分割性は、我々がこれを認めようと否定しようと、説明することの出来ない、即ち我々が矛盾なく理解することの出来ない結果に我々を捲き込む、これは非物質的な認識する immaterial knowing 実体の概念から生じ得る如何なるものよりも、より大なる困難とより明らかな矛盾を含む結果である。

〔三二〕何となれば、思考が固体性から離れて独立して存在するということは、固体性が思考から離れて独立して存在するということと同様に矛盾ではない——この両者は相互に独立した單純觀念に他ならないから——のであるから、また我々は固体性に関すると同様に思考に關しても明晰、判明な觀念を持つていのであるから、私は何故我々は、思考を伴わない固形的なもの、即ち物質の存在することを認めると同様に、固体性を伴わない思考、即ち非物質的なものの存在することを認めてはいけないのか分らない、殊に如何にして思考が物質なしで存在するかを理解することは、如何にして物質が考えることが出来るかを理解することよりも少しもより困難ではないからである。然し乍らたとえこれ等の複雑觀念、即ち物体または非物質的精神の觀念の中で何れがより明瞭であるにしても次のことは明白である、

即ちこれ等の觀念<sup>イデア</sup>を作り上げてゐる單純觀念<sup>イデア</sup>は我々が感覺または反省から受けたものの以外のもではない、そしてこれは諸々の實體に関するすべての我々の他の觀念<sup>イデア</sup>、神そのものの觀念<sup>イデア</sup>に就いてさえも当てはまるのである。

三三 神の觀念<sup>イデア</sup>——何となればもし我々が無限の至上者（訳者注——神）に就いて我々の持つ觀念<sup>イデア</sup>を吟味するならば、我々はこの觀念<sup>イデア</sup>を同一の方法によつて得るということを知るのである、また神及び諸々の別個の精霊 *separate spirits* の両者に就いて我々の持つ複雑觀念<sup>イデア</sup>は我々が反省から受ける單純觀念<sup>イデア</sup>によつて成り立っているということを知るのである、例えば我々は我々が自分自身の中に實際經驗することから、存在及び持続の觀念<sup>イデア</sup>、知識及び力の觀念<sup>イデア</sup>、快樂及び幸福の觀念<sup>イデア</sup>、並びに我々が持つてゐる方が持つてゐないよりも良い幾つかの他の性質及び力の觀念<sup>イデア</sup>を得てゐるので、我々が、至上者に対して我々の作り得る最も適當な觀念<sup>イデア</sup>を形成しようとするとき、我々は上に挙げたような觀念<sup>イデア</sup>の一つ一つを無限性という我々の觀念<sup>イデア</sup>によつて拡大し、そしてそれ等を結合することによつて神という複雑觀念<sup>イデア</sup>を作るのである。何となれば心は、感覺及び反省から受けたその觀念<sup>イデア</sup>の幾つかを拡大するかような力を持つてゐるということは既に示されたからである。

### 【三四 略】

三五 存在、力、知識等の我々の觀念<sup>イデア</sup>と結合して我々が一番よく至上の存在を心に描き得るための複雑觀念<sup>イデア</sup>を作るものは無限性である。何となれば神はその本質に於ては單純であつて複合的ではないかも知れないが（このことを我々は確かにには知らない、小石や蠅や我々自身の實在的本質さえも知らないの

## 第二卷 觀念に就いて

であるから、私は、我々は神に就いては無限にして永遠な存在、知識、力、幸福、等の複雑觀念イデア以外には他の如何なる觀念イデアも持っていない、と言つてもよからうと思う。これ等のすべては別々の觀念イデアであり、その中の或るものは相対的なものであるから再び他のものから合成される、これ等はすべて、前述の如く、本来感覺及び反省から得られたものであるが、我々の有する神の觀念イデアまたは概念を作り上げることになるのである。

三六 精神 *spirits* に関する我々の複雑觀念イデアの中には感覺または反省から得られた觀念イデアだけしかない——更に進んで注意すべきことは、無限性を除いては、我々が神に歸する觀念イデアで同時に他の靈體 *spirits* に関する我々の複雑觀念イデアの一部分でないようなものは何もない、ということである。何故なれば物体以外の如何なるものに属する單純觀念イデアも、反省によつて我々が我々自身の心の作用から受ける觀念イデア以外には在り得ないのであるから、我々は靈體 *spirits* に対しても、其処から我々が受けるもの以外には何物をも歸することは出来ない、そして我々が諸々の靈體を考察する場合に *in our contemplation of spirits* それ等の間に立てることの出来るすべての差別は、ただ彼等の知識、力、持続、幸福、等の様々の範圍と程度にのみ在るのである。何となれば他の物に関する觀念イデアに於ては勿論、靈體に関する我々の觀念イデアに於ても、我々は我々が感覺及び反省から受ける觀念イデアに限られているのであるということとは、諸々の靈體に関する我々の觀念イデアに於て、これがたとえ如何に物体の觀念イデアよりも完全という点で進んでいようとも、否、無限の觀念イデアに迄も進んでいようとも、尚我々はそれ等の靈體が相互にその思考を現す仕方に関する如何なる觀念イデアをも持つことが出来ないということを見れば明白である、尤も我々よりも完全な知識と大なる幸福

を有する存在 beings である個々の霊体 separate spirits 【大槻訳は「身体と別の諸霊」】は、またその思考を伝えるのに、已むを得ず有形の符号と特殊の音とを使用し、従つてこれ等のものを自分等の用い得る最良にして最速のものとして最も一般に使用するところの我々よりは完全な方法をきつと持つてゐるに違ひない、とどうしても断定せねばならぬのではあるけれども。然し乍ら直接\* immediate の伝達に就いては我々自身の中に実際の経験が無いし、従つてそれに就いて全く何等の概念も無いので、我々は、言葉を用いない霊体達が如何にして速かに其の思考を伝え得るかに就いては、何の觀念をも持たない、況んや、身体を持たない霊体達が如何にして彼等自身の思考を支配し、意のままにそれを伝えまたは隠すことが出来るかに就いては、何の觀念をも持たないのである、我々は彼等がかような力を持つてゐるとどうしても仮定せざるを得ないのであるけれども。

\* 「直接」とは感覚から独立したという意味である。

三七 摘要——かくして我々は、すべての種類の实体に關して我々が如何なる種類の觀念を持つか、これ等の觀念は如何なる点に存するか、そして如何にして我々はそれ等を得るか、を見た。このことによつて次のことが明白であると私は思う。

第一に、様々の種類の实体に關するすべての我々の觀念は、諸々の單純觀念の集合に、これ等の觀念が所屬しましたその中に存立するところの或るものの仮定を伴つたものに他ならない、この仮定される或るものに就いては我々は全く何等の明晰、判明な觀念をも持つていないのではあるが。

第二に、かように一つの共通な基体 substratum の中に結合されて様々な種類の实体に關する我々の複

## 第二卷 觀念に就いて

雜觀念<sup>イデア</sup>を作り上げるところのすべての單純觀念<sup>イデア</sup>は、我々が感覺または反省から受けたようなものにならない。

第三に、実体に関する我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>を作り上げる單純觀念<sup>イデア</sup>の多くは、我々はこれを実証的な positive 性質と考え勝ちであるけれども、よく考察して見ると力に過ぎない、例えば我々の金という複雑觀念<sup>イデア</sup>を成している諸觀念<sup>イデア</sup>の大部分は、黄色、大なる重さ、展性、可溶性、王水に溶けること等がすべて一つの未知の基体の中に相結合されたものである、これ等すべての觀念<sup>イデア</sup>は他の諸実体に対する丁度それだけの数の關係に他ならない、そして金をただそれ自身だけで考察したのでは金の中に實際にあるのではない、尤もこれ等の觀念<sup>イデア</sup>は、金がそれによって様々の他の実体に色々に作用しまたは作用せられるところの、その内部構造の實在的な第一性質に依つてはいるのである。

【第二章 実体の集合的觀念に就いて 本 PDF では略】

【第三章 關係に就いて 本 PDF では略】

【第六章 原因と結果及びその他の關係に就いて 本 PDF では略】

【第七章 同一性及び差異性に就いて 本 PDF では略】

## 第二十八章 その他の關係に就いて

一 比較的——事物を相互に比較し、または關係づけるところの、前述の時間、場所、及び因果という諸々の機因の他に、私が前に言つたように、まだ無數の他の機因がある、それ等の若干を私は述べよう。私が最初に挙げようとするのは或る一つの單純觀念<sup>イデア</sup>であつて、それは部分または程度を持ち得るから、その屬する主体を、この單純觀念<sup>イデア</sup>に關して相互に比較する機因を与える、例えば、より白い、より甘い、より大きい、等しい、より以上、等がこれである。これ等は比較的と呼んでもよいであらう。

### 【二 略 Natural】

### 【三 略 Instituted】

四 道德的——いま一つの種類の關係がある、それは、行為を照し合せ、また判断するための法則に對して、人々の有意的行為が一致しまたは一致しないことである、これは道德的關係と呼ぶことが出来ると思う。

【五】善と惡は、既に示したように（卷二、二十章、二節、及び二十一章、四十二節）、快樂または苦痛、或いは我々に對して快樂または苦痛を生じ或いは齎らすものに他ならない。そこで、道德的に善であり惡であるということは、我々の有意的行為が或る法則<sup>モス</sup>に一致しまたは一致せぬことに過ぎない、この法則によつて立法者の意志と力によつて善または惡が我々に齎らされる、この善と惡、快樂または苦痛は、立法者の命令によつて、我々が法則を守りまたは破ることに伴うものであつて、我々が報酬

reward と処罰 punishment と呼ぶところのものである。

六 道德的規則——人々が一般に訴え、また彼等の行為の正邪を判断するための、これ等の道德的規則 *canons* または法則 *laws* には、三種類あると私には思われる、そしてこれには三つの相異なる強制、即ち報酬と処罰が伴う。何となれば人間の自由な行為に対して或る規則が定められていると仮定し、それと共に、彼の意志を決定するためにその規則に善惡の或る強制を結び付けないということは全く無益であろうから、我々は、法則を仮定する場合には何時でも、その法則に結び付いている或る報酬或いは処罰、その行為そのものの自然の所産と結果でない或る善惡をも亦仮定せねばならぬ。何となればかような行為は、自然の便宜または不都合であるから、法則なしでひとりで行われるからである。もし私が誤っていないければ、これが、本来法則と呼ばれるすべてのものの眞の性質である。

七 法則——人々が一般に彼等の行為を照し合せ、その正邪を判断するための法則は次の三つであると思われる、(一) 神の法則。(二) 民法。(三) 公衆の意見 *opinion* または評判 *reputation* の法則——もし私がそう呼んでもよいのであるならば\*。これ等の第一に対する行為の關係によつて、人々は彼等の行為が罪業であるか義務であるかを判断する、第二によつて、行為が犯罪であるか無罪であるかを、また第三によつて、行為が徳 *virtues* であるか不徳 *vices* であるかを判断する。

\* これは第一版では哲學的法則と呼ばれている(第十節の標題にこの名が保留されている)。ロックは第一版に於て、彼がかく名づけたのは「哲學者がそれを作るからではなくて、哲學者はその研究に最も多く従事しそれに就いて語るから」であると説明しているが、これはやや奇妙な理由である。



八 神の法則は罪と義務の標準である——第一に、神の法則、これによつて私は、人々に自然の光\*によつて告示されたものであつても、または啓示の声によつて告示されたものであつても、神が人々の行為に對して定めた法則を意味する。神が、人々がそれによつて身を処すべき法則を与えたということを否定する程粗野な人は誰もあるまいと私は思う。神はこの事を為す權利を持つて居る、我々は神の創造物である。神は我々の行為を最善のものに導くための善意と叡智とを持つて居る、そして神は来世に於ける、無限の重さと持續を持つ報酬と処罰によつてこの事を強制する力を持っている、何となれば如何なる人も我々を神の手から取り出すことは出来ないからである。これが道德的な正しさの唯一の眞の試金石である。

\* 理性のことである。第四卷、第十九章、第四節では理性は「自然の啓示」と呼ばれている。

九 民法は犯罪と無罪の標準である——第二には民法。何人もこの法則を看過する者はない、何故なればこの法則を強制する報酬と刑罰は手近に用意されて居り、またこの法則を作る力に相応しいからである、この力とは、国家 *commonwealth* の法律に従つて生活する人々の生命、自由、及び財産の保護をなし、服従しない者から生命、自由、または富を奪う力を有する国家の威力である。

一〇 哲学的法則は徳と不徳の標準である——第三には公衆の意見または評判の法則。徳と不徳は、それ自身の性質上正しい行為 *right* と不正な行為 *wrong* を表示するものと到る処に於て仮定せられまた伴つて仮定せられる名辭である、そして實際かように用いられる限りこれ等は上述の神の法則と一致する。然し乍らたとえ如何なることが主張されようとも次のことは明らかである、これ等の名辭、即ち徳と不

徳は、世界の様々な国民及び人間社会によつてこれが適用せられる個々の例に於て、つねに各々の国及び社会に於て評判の良い様なまたは悪い様な行為にのみ帰せられるのである。

〔一一〕これが徳と不徳の普通の標準であるということは、或る国では徳の中に数えられ、或いは少なくとも不徳には数えられないものが他の国では不徳として通用するけれども、しかもあらゆる処に於て、徳と称讃、不徳と非難、は相伴うものであるということを考察する人には誰にでも明らかになるであらう。徳はあらゆる処に於て、称讃の価値があると考えられるものである、そして公然の尊敬が与えられたもののみが徳と呼ばれるのである。

一二 その強制法は称揚と不信である——私が、人々が徳と不徳を判断するための法則を、法則を作るに充分な権威を持っていない私人達の承認に他ならない、と為す場合、私は自分自身の法則の概念を忘れたのである、と、もしも誰かが想うならば、称揚と不信は人々をして彼等の交わる人々の意見と規則に自分を適應するようにさせる強い動機ではないと考える人は、人類の性質と歴史にあまり精通していないと思われる、と言つてもよいと私は思う、その人は、人類の大部分は全くこの風習の法則のみによるのではないとしても、主としてこの法則によつて身を処するものであること、を見出すであらう。神の法則を破ることに伴う罰は、或る人々、否、恐らく大抵の人々は滅多に真面目にはこれを考えない、そして真面目に考える人々の中でも、多くの人々は法則を破り乍ら、未来の贖罪を思いかような違反を復旧しようという考えを抱く、そして国家の法則による刑罰に關しては、彼等は屢々無罪になる積りである。然し如何なる人も自分が所屬し、また氣に入られ度いと思う社会の風習と意見に違背する者は、

その非難と嫌惡の処罰を免れない。また自分の親しい仲間の人々に絶えず嫌われ咎められても平氣でいる程頑強で無感覺な人は万人の中に一人もない。多くの人は孤独を求めてこれを恵まれた、然し人間的な考えと感ぜを少しでも持つてゐる人は誰でも、自分の親しい人々や知り合ひの人々に絶えず嫌われ惡く言われて、社会に生活することは出来ない。これは人間が担うには余りにも重い負担である。

【一三 略 These three laws, the rules of moral good and evil.】

【一四 略 Morality is the relation of actions to these rules.】

【一五 略 wrong】

【一六 略 The denominations of actions often mislead us.】

【一七 略 Relations innumerable.】

【一八 略 All Relations terminate in simple Ideas】

【一九 略 We have ordinarily as clear (or clearer) a notion of the relation, as of its foundation.】

【二〇 略 The notion of the relation is the same, whether the rule and action to be compared is true or false.】

## 第二卷 觀念に就いて

## 第二十九章 明晰なる及び不明なる觀念、判明なる及び混乱せる觀念に就いて

一 諸觀念<sup>イデア</sup>の或るものは明晰、判明であり、他のものは不明で混乱している——既に我々の觀念<sup>イデア</sup>の起原 original を示し、その様々の種類を検分し、單純觀念<sup>イデア</sup>と複雜觀念<sup>イデア</sup>の相違を考察し、また如何にして複雜觀念<sup>イデア</sup>が様態、実体及び關係の觀念<sup>イデア</sup>に分たれるかを觀察したのであるから、恐らく私は充分長く觀念<sup>イデア</sup>の吟味に留つたと考えられるであらう。それにも拘らず私は、更に觀念<sup>イデア</sup>に関する他の二、三の考察を提示することを許していただかねばならぬ\*。

その第一は、或るものは明晰で、他のものは不明である、或るものは判明で、他のものは混乱【していると言ふことである。——以上底本で欠落している語。】

\* 第二卷の以下の部分は謂わば附けたりのようなものである。明晰、判明は勿論デカルトによつて認められた標準であるが、ロックは第四版の序に於て、この問題に於ける自分の意味を正しく理解してもらうために、明晰と判明の代りに明確な (determinate) 及び確定した (determined) という語を大抵の場合に用いた、と言つてゐる。

二 明晰 clear と不明 obscure は視覚によつて証明せられる——心の知覚は視覚に関する言葉によつて最も適当に説明せられるのであるから、我々は、視覚の対象に於て何を我々が明晰または不明と呼ぶかを反省することによつて、我々の觀念<sup>イデア</sup>の明晰<sup>イデア</sup>また不明<sup>イデア</sup>ということによつて何が意味せられるかを最も良く理解するであらう。光は眼に見える対象を我々に明らかにするものであるから、或る物が、その中に觀察せられ得る形状と色を詳細に我々に明らかにするに充分な光の中に置かれていないで、この形状と

色がより充分な光の中では判別せられ得るという場合に、この物を我々は不明と名付ける。同様に我々の諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の源である対象そのもの objects themselves が、秩序ある well-ordered 感覺または知覺に於て、それ等の觀念<sup>イデア</sup>を呈示または呈示することが出来た場合には、これ等の單純觀念<sup>イデア</sup>は明晰である。記憶がこれ等の觀念<sup>イデア</sup>をかような状態に保持し、それ等を心が考察する機会がある時は何時でも心に呈示する間は、それ等は明晰な觀念<sup>イデア</sup>である。それ等がその初めの精確さを少しく欠くかまたはその初めの新鮮さを多少失つて、謂わば、時と共に褪<sup>あ</sup>せまたは曇るだけ、それだけそれ等は不明である。複雑觀念<sup>イデア</sup>は單純觀念<sup>イデア</sup>から成り立っているものであるから、その構成に与かる諸觀念<sup>イデア</sup>が明晰であつて、或る複雑觀念<sup>イデア</sup>の構成要素である單純觀念<sup>イデア</sup>の数と順序が確定している場合は、その複雑觀念<sup>イデア</sup>は明晰である。

### 【三略】

四 判明 *Distinct* 及び混乱 *confused* とは何であるか——明晰な觀念<sup>イデア</sup>が、心が、良く整つた器官に対して当然与えるべき作用を及ぼす外界の対象から受けるが如き充分にして明白な知覺を心に与えるような觀念<sup>イデア</sup>であるように、判明な觀念<sup>イデア</sup>は心がすべての他の觀念<sup>イデア</sup>との相違を認めるような觀念<sup>イデア</sup>であり、混亂した觀念<sup>イデア</sup>は或る他のそれとは相異なるべきである觀念<sup>イデア</sup>と充分に區別せられ得ないような觀念<sup>イデア</sup>である。

五 抗議——もしも、或る他の相異なるべき觀念<sup>イデア</sup>と充分に區別せられ得ないような觀念<sup>イデア</sup>以外の如何なる觀念<sup>イデア</sup>も混亂したものでないとするならば、何処かに混亂した觀念<sup>イデア</sup>を見出すことは困難であらうと或る i 日本語として訳が順逆になつてゐる。より明るければ判別できるはずのものが、充分な光がない状態に置かれてゐるとや 'obscure' すなわち不明瞭という。

i i へのように "Clear" の意味に、対象自身との關係を入れてしまつては「認識」を論ずるのには使えない、と思われるが。

人は言うであらう。何となれば或る觀念が如何なるものであるにせよ、それは心がこれを知覚するようなもの以外の如何なるものでもあり得ない、そしてその知覚そのものがそれをすべての他の觀念と區別し、これ等の他のものは、前者と異なるものと知覚されることなしには、他のものであること、即ち前者と異なることは出来ない。それ故に如何なる觀念も、我々がそれをそれ自身と區別しようとする限りは、或る他のそれとは相異なるべき觀念と區別せられぬことはあり得ない、何となればそれはすべての他の觀念と明らかに相異なるからである。

六 諸觀念の混乱は彼等の名前に關するものである——この困難を除いて、觀念が何時でも負わせられ得る混乱を作るものは何であるかを我々が正しく理解するのを助けるために、我々は、別々の名前のもとに列せられる事物は區別せられるに充分相異なると考えられていること、それ故に各々の種類はその固有の名前によつて印し付けられ、如何なる機会にも別々に論ぜられ得るものであること、を考察せねばならない。さて人間の持つあらゆる觀念は明らかに有りの俚のものであつて、それ自身以外のすべての他の觀念と異なるものであるから、それを混乱せしめるのは、その觀念が、これを表現する名前とは別の名前と呼ばれてもよいようなものである場合である、何故なれば（これ等の二つの相異なる名前に從属すべき）事物を別個のものとなし、それ等の中の或るものはどちらかと言えよこれ等の名前の一方に、また或るものは他方に属するようにするところの相違が取り残されて居り、それ故にこれ等の相異なる名前によつて保持される筈であつた區別は全く失われているからである。

七 通常この混乱をひき起す欠陥は主として次のことであると思ふ。

第一に、或る複雑觀念<sup>イデア</sup>が余りに少数の単一な觀念<sup>イデア</sup>から成り立っている場合。即ちただ斑点のある獸という單純觀念<sup>イデア</sup>のみから出来ている或る觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐる人は、豹の混乱した觀念<sup>イデア</sup>しか持たない、何故なればこれによつてその觀念<sup>イデア</sup>は山猫、及び幾つかの他の斑点のある種類の動物と充分に區別されないからである。

八 第二に、或る觀念<sup>イデア</sup>を作り上げる個々のものはその数に於ては充分であるけれども、それ等は非常に乱雑に混同しているので、その觀念<sup>イデア</sup>が、或る他の名前よりもそれに与えられている名前により多く属するかどうかは、容易く判別することが出来ない。

〔九〕第三の欠点は我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の一つが不確實で不明確である場合。即ち我々は、自分の國語の普通の言葉の精確な意義を知る迄はそれ等の普通の言葉を用いることを以て忍ばないで、自分が或る名辭または他の名辭を以て表す觀念<sup>イデア</sup>を、殆ど名辭を用いる毎に変えるような人々を見ることが出来る。

一〇 上述のことによつて我々は、事物の一定の符号であると考えられ、またその相違によつてそれ自身相異なる事物を表しこれ等の事物を相異なるものとして置くと考えられるものとしての如何に多くの名辭が、心がその諸觀念<sup>イデア</sup>をかような名辭に対して隠れた氣付かれない關係に置くことによつて、觀念<sup>イデア</sup>を判明なまたは混乱したものと呼ぶ機会を与えるかを認めることが出来る。相異なる事物の符号としての相異なる名辭に対する觀念<sup>イデア</sup>のかような關係に留意することなしには、混乱した觀念<sup>イデア</sup>とは何であるかと言ふことは困難であらう。

## 【一 略 Confusion concerns always two ideas】

第二十九章 明晰なる及び不明なる觀念、判明なる及び混乱せる觀念に就いて

## 第二卷 觀念に就いて

## 【二 略 Causes of confusion】

一三 複雑觀念<sup>イデア</sup>はその一部分が判明で、他の部分が混乱していることがあり得る——我々の複雑觀念は單純觀念<sup>イデア</sup>の集合によつて、それ故にまた多様の單純觀念<sup>イデア</sup>から成り立つてゐるから、従つてその一部分は非常に明晰、判明であり、他の部分は非常に不明で混亂していることがあり得る。千面体即ち一千箇の面のある物体のことを語る人に於て、數の觀念<sup>イデア</sup>は非常に判明であろうが、形状の概念は非常に混亂しているであろう、そこで彼は彼の複雑觀念<sup>イデア</sup>の千という數に依つてゐる部分に関しては語りまた証明することが出来るので、自分は千面体の判明な觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐると考え勝ちである、彼はその形状に關しては、上の事によつて千面体を九百九十九の面しか持つてゐない物体と區別するような精確な觀念<sup>イデア</sup>は何も持つてゐないことは明らかなのではあるけれども\*。

\* この場合ロックは概念という意味の觀念と心像という意味の觀念とを混同している。同様な混亂は無限の可分割性に関する彼の説に於ても認められる。(第十六節參照)

## 【二 略 This, if not heeded, causes confusion in our arguments.】

## 【二 略 Instance in eternity】

一六 物質の可分割性——物質に於ては、我々の或る感覺に対して起る最小のものより以上に小さい部分の大きさに就いては、我々は何等の明晰な觀念<sup>イデア</sup>をも持つてゐない、それ故に我々が物質の無限の可分割性に就いて語るとき、我々は分割と可分割性に関する明晰な觀念<sup>イデア</sup>を持ち、また分割によつて一つの全体から作られる諸部分に關する明晰な觀念<sup>イデア</sup>をも有するけれども、しかも我々はかように分割さるべき



諸分子即ち微小なる諸物体に關しては、それ以前の分割によつてそれ等が我々の感覺の或るものの知覺を遙かに越えるほど小さい大いさに迄縮小されている時は、非常に不明な混亂した觀念イデアしか持たないものである。それ故に我々は、一般にまたは抽象的に分割とは何であるかということ、及び全体と部分の關係に就いてのみ明晰、判明な觀念イデアを持つている、然し一定の進行に従つてかように無限に分割さるべき物体の大いさに就いては、我々は全く何等の明晰な觀念イデアも判明な觀念イデアも持たない、と私は思う。

## 第二卷 觀念に就いて

## 第三十章 實在的及び空想的觀念に就いて

\* 前章が觀念を「名辭との關係に於て」取り扱つたのに対して、本章及び次の二章は觀念をそれが表象すると考えられる「物との關係に於て」考察する。それ故にこれ等諸章は第四卷の議論と結論とを予想するもので、両者の間にはかなりの重複があるので、本訳では（プリングル・パティスン氏の版に従つて）それは出来るだけ省略することとした。

一 實在的觀念はその原型に一致する——我々が既に觀念に就いて述べたことの他に、更に觀念の取り入れられるものになる事物、或いは觀念が表象すると考えられる事物に關して、他の幾つかの考察が觀念に就いて為される、そしてこの点に於て我々は觀念を三重に區別することが出来ると私は思う。即ち

第一に、實在的 real であるか空想的 fantastical であるか。

第二に、適當 Adequate であるか不適當 inadequate であるか。

第三に、眞 True であるか誤 false であるか。

第一に、實在的觀念によつて、私は自然の中に基礎を持つようなもの、事物の實在的な本質及び存在と、即ち原型 archetypes と一致するようなものを意味する。自然の中に何の基礎も持っていないし、原型に対するが如く暗黙の裡にその觀念が關係づけられるところの實在的存在と少しも一致しないようなものを私は空想的または妄想的 chimerical と呼ぶ。もし我々が前に述べた様々な種類の觀念を吟味するならば、我々は次のことを見出すであらう。

二 第一に、我々の単純觀念<sup>イデア</sup>はすべて實在的であり、すべて實在の事物に一致する。それ等の觀念<sup>イデア</sup>が何れも實際に存在するものの像<sup>images</sup>であるとか表象<sup>representations</sup>であるとか言うのではない、物体の第一性質以外のすべてに於てはこの反対であることが既に証明せられた。然し乍ら白さと冷たさは、苦痛等と同様に雪の中に在るのではないけれども、しかも白さと冷たさ、苦痛等というこれ等の觀念<sup>イデア</sup>は、我々の中に於ては、造物主によつて我々の中にかような感覚を生ずるよう<sup>い</sup>に定められた外界の物にある力の結果なのであるから、それ等は我々の中の實在的觀念<sup>イデア</sup> *real ideas*であつて、それ等に依つて我々は、物自体の中に實在する諸性質を区別するのである。何となればこれ等の様々な現象は、我々の關係する事物を我々が知りまた区別し得るための印しとなるように定められて *being designed* いるのであるから、我々の諸觀念<sup>イデア</sup>も同様にその目的に役立ち、それ等が物自体の中の或るものの不變の結果に過ぎないにしてもまたは精確な像であるにしても、やはり同じ様に区別をなす性質として役立つ、何故なればこれ等の觀念<sup>イデア</sup>の實在性は、それ等が實在的存在の別々の構成と確かに符合するという点にあるからである。然しそれ等がこれ等の構成に対して、原因 *causes* または原型 *patterns* に対するが如く相應するかどうかは問題ではない、前者 *they* 【イデア】が常に後者 *them* 【實在物の構造】によつて生ぜられるというだけで充分である。

【三 略——Complex ideas are voluntary combinations】

i 原文は "the reality lying in that steady correspondence they have with the distinct constitutions of real beings." とあるので、「イデアの實在性」というより、實在性とは、イデアが實在物の構造に *steady* に対応する *こと*。

四 相互に矛盾しない觀念<sup>イデア</sup>から作られた混合様態は實在的である——第二に、【複雑イデアのうちで】混合様態と關係は、それ等が人々の心の中に於て有する實在性以外には何等の實在性をも持たないのであるから、これ等の種類の觀念<sup>イデア</sup>にとつてはそれ等を實在的にするために、何かそれ等に一致するものの存在することが可能であるようにそれ等が形成されるということ以外には何も必要なことは無いのである。これ等の觀念<sup>イデア</sup>は、それ自身原型 *archetypes* なのであるから、原型と異なることはあり得ない、それ故にまた誰かがそれ等の中に相容れない觀念<sup>イデア</sup>を混合しない限りは、妄想的でもあり得ない\*。

\* 實在的と空想的の區別は、実は、實在的存在との關係に於てのみ適用し得るものである。

五 諸々の実体の觀念<sup>イデア</sup>はそれ等が物の存在と一致する *agree with* ときは、實在的である——第三に、實體に關する我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>は、何れも我々の外に存在する物に關して作られて居り、また事實在るが儘の実体の表象 *representations* であることになっているのであるから、これ等の實體が、事實上結合されて居り、我々の外にある物の中に一緒に存在しているが如き諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の結合である以上には決して實在的ではない。これに反して、事實上決して結合されたことがなく、如何なる實體の中にも決して一緒に見出されたことのないような單純觀念<sup>イデア</sup>の集合から出来ていようなものは空想的である、例えば馬の首が人間の形をした体に結合したものから成り立つ理性的存在、或いはセントー<sup>\*\*</sup>の像として描かれている物の如きこれである。

\*\* Centaur —— 人面馬身の怪物。

### 第三十一章 適當なる及び不適當なる觀念に就いて

一 適當な觀念イデアとはその原型を完全に表示するような觀念イデアである——我々の實在的觀念イデアの中で、或るものは適當であり、他のものは不適當である。心が觀念イデアを受け取るところの、心が觀念イデアをして表さしめる積りの、また心が觀念イデアを關係せしめるところの原型 *archetypes* を完全に表象 *represent* するような觀念イデアを私は適當イデアであると言う。不適當イデアな觀念とはそれが關係する原型の部分的なまたは不完全な表象にしか過ぎないようなものである。この説明によつて次のことが明らかである。

\* 適當、不適當は英語の“adequate”, “inadequate”の訳である。これ等の語はここでは充全、不充全、或いは正確、不正確、等と訳すべきであるかも知れない（シュルツェ氏の独訳では“genau”, “ungenau”としている）が、前後の關係からその意味するところは明らかであるからここでは普通の訳語を用いた。

二 單純觀念イデアはすべて適當である——第一に、すべての我々の單純觀念イデアは適當である。何故なればこれ等は神によつて一定の感覺を我々の中に生ずるに適するように定められた物の中の或る力の結果に他ならないのであるから、これ等の觀念イデアはこれ等の力に相應し適合せざるを得ない、そして我々はこれ等の觀念イデアが實在の物に一致することを確信する。

三 樣態はすべて適當である——第二に、樣態に關する我々の複雑觀念イデアは、心が結合する單純觀念イデアを、何等かの實在の原型または何処かに存在する継続的な型 *standing patterns* に關係なしに、故意に集めたものであるから、適當な觀念イデアでありまたそうでない筈がない。何故なればそれ等は、實在的に存在してい

るものの複写の積りで拵こしらえられているのではなく、事物を類別しまた名付けるために心の作つた原型である筈なのであるから、何物をも欠くことはあり得ない、というのはそれ等の各々は、心がそれ等が持つべきであると考えた觀念イデアの結合を持ち、それに依つてまたそうあるべきであると考えられたように完全であるからである。かくして三つの角に於て出会う三つの辺を持つ図形の觀念イデアを持つことによつて、私は一つの完全な觀念イデアを持つ、この觀念を完全にするために私はその他に何物をも要求しないのである。然し實體に関する我々の觀念イデアに於てはそうではない。何となれば其処では、物を實際に存在するが俚に複写し、物のすべての性質が依つてゐる構造を我々自身に表象しようと望むので、我々は我々の觀念イデアが、我々の目指す完成に到達しないことを認める、我々は我々の觀念イデアがもし其の中に在つたならば我々が喜ぶであろうような或るものを、尚欠いてゐること、それ故にそれ等の觀念イデアはすべて不適当であるということを見出すのである。然し混合様態及び關係は、手本のない原型でありそれ故にそれ等自身以外には表象すべき何物をも持たないのであるから、適当でない筈がない。かようにして作られ、型として保存される觀念イデアは必然的に適当であるに違ひない、それ自身以外の何物にも關係してゐないし、また初めてこういう結合を作つた者（訳者注——神）の御考と思召以外の如何なる起原によつても作られないからである。

四 確定した名前に關して、様態は不適当であり得る——或る人の後から他の人が来て、話しているうちに前者から勇氣という語を學んで、或る觀念イデアを作り、これにその勇氣という名前を与える、そしてこの觀念イデアは、初めの作者がこの名前を適用しそれを用いる時、彼が念頭に置くものとは異なる、という

ことがあり得る。そしてこの為に、混合様態に関する我々の觀念は如何なる他の觀念よりも最も間違ひ易いのである、然しこの事は正しく知ることよりは適当な話し方により多く關係していることである。

### 【五 略】

六 實在的本質 *real essences* に関係づけられるものとしての実体の觀念は適當ではない——第三に、実体に関して我々が如何なる觀念を持つかは、私は既にこれを示した【二卷第三章】。さてこれ等の觀念は、心の中で二重の關係を持つている。(一) 或る時はそれ等は各種の物の假定上の實在的本質【三卷第三章一五節参照】に關係している。(二) 或る時はそれ等は、實際に存在する物の中に発見し得る諸性質の觀念による心の中のこれ等の物の像 *pictures* と表象 *representations* であると考えられる。この両方面に於て、これ等の原物 *originals* と原型 *archetypes* の複写は不完全であり不適當である。

第一に、通常人々は諸実体の名前をして、物がこの種類またはあの種類のものであるための一定の實在的本質を持つと假定せられたものとしての諸物を表示せしめる、そして名辭は人々の心の中に在る觀念だけしか表示しないのであるから、彼等は従つて彼等の觀念をその原型としてのかような實在的本質に關係づけねばならない。人々殊に世界のこの地方で教えられる學問の中で教育されたような人々が、各個体が、そのそれぞれの種類の中で、これと一致しまたこれに与かるようにされるところの諸実体の一定の種別の本質<sup>\*</sup>を假定するということは少しも証明を必要としないことであつて、もし誰かがこういうことを假定しなかつたならば、不思議に思われるであらう。しかももしもあなたがこれ等の實在の本質 *real essences* は何であるかと尋ねるならば、人々がこれを知らず、これ等の本質を識別していな

## 第二卷 觀念に就いて

い men are ignorant, and know them not. 【人々が無智で、知らない】ことは明らかである。これによつて、彼等が心の中に持つてゐる觀念は、未知の原型としての as to archetypes 【原型に、として】實在的本質に關係づけられてゐるのであるから、適當であるところではないに違ひなく、それ故に少しもそれ等の本質の表象であるとは考えられ得ない、ということになるのである。我々の持つ實體に關する複雑觀念は、既に示した【二卷三章第一節】ように、常に一緒に存在するものと觀察されまたは假定される諸々の單純觀念の一定の集合である。然しかような複雑觀念は如何なる實體の實在の本質でもあり得ない、何となればもしそうであるならば、我々がその物体の中に見出す諸性質は、その複雑觀念に依存し、それから引き出し得ることになるであらうし、またこれ等の性質とその複雑觀念の必然的な結合が知られることになるであらう、例えば三角形のすべての性質は、一つの空間を囲む三つの線という複雑觀念に依つて居り、またそれ等が発見せられ得る限りこの觀念から引き出し得るが如くに。然し乍ら諸實體に關する我々の複雑觀念の中には、これ等の實體の中に見出さるべきすべての他の性質が依存するような諸觀念が含まれてゐないことは明らかである。人々が鉄に關して持つ普通の觀念は、一定の色、重さ、及び堅さを持つた物体 body である、そして彼等が鉄に屬してゐると見做す一つの性質は展性である。然し乍らこの性質はこの複雑觀念と或いはその如何なる部分とも何等の必然的結合をも持つてゐない、そして展性はその色、重さ、及び堅さに依ると考える理由がないのは、その色またはその重さがその展性に依つてゐると考える理由がないのと全く同様である。しかも、我々はこれ等の實在的本質に就いて何事も知らないので、人々が物の諸々の種類はかような本質に帰因するものとなすのは最も普通のことである。大抵



の人々は、私が指にはめている指輪を成している特殊の物質分子はそれが金であるための、また私が其の中に見出すところの諸性質を生ぜしめる基である實在的本質を持つている、と進んで仮定する。金の持つすべての性質を生ずるこの本質は、私がこれを討究し探索する時、私はそれを発見することが出来ないことを明らかに知る、精々私は、それは物体に他ならないのであるから、これ等の性質の基づくその實在的本質或いは内的構造は、その固形的諸部分の形状、大きさ、及び結合以外のものではあり得ない、と推定し得るのみであつて、これ等の何れに就いても私は何等判然たる知覚を持つていないのであるから、その本質に関する何等の觀念をも持つことは出来ない。もし或る人が、これ等の性質の基づく實在的本質及び内的構造は、その固形的諸部分の形状、大きさ、及び配列または結合ではなくて、その特殊の形式と呼ばれる或る他のものである、と言うならば、私は前よりも更にその實在的本質に就いて何の觀念をも持たないことになる、何となれば私は、上述の諸性質を生ずる部分の特殊の形状、大きさ、または結合に就いては觀念を持つていないけれども、固形的部分の形状、大きさ、及び状態一般に就いては私は觀念を持つてゐるからである。然し乍らその物体の固形的部分の形状、大きさ、及び状態以外の或るものがその本質、即ち實體の形式と呼ばれる或るものである、と人から言われるならば、これに就いては、私は全く何の觀念をも持つて居らず、ただ形式という音 the sound form の觀念を持つのみであることを自ら認める、この音の觀念は、その實在的本質または構造の觀念とは誠に相距ること遠いものである。

\* スコラ哲学の「實體の形式」(substantial forms)を指す。

## 【七略】

八 実体の諸性質の集合としての、実体の觀念イデアはすべて不適當である——第二に、諸実体の區別を与える未知の實在的本質というかの無用の假定を無視して、世界の中に存在する諸実体を、それ等の中に共在するのが見出されるところの感覺的諸性質の觀念イデアを結合することによつて、複写しようと努める人々は、自分是如何なる實在的な種別の本質があるかを知らないと考える人々よりはそれ等の実体の像に遙かに近づくのではあるが、しかも彼等は彼等が斯くの如くして心の中に写し取ろうとする諸実体の完全に適當な觀念イデアには到達しないし、またこれ等の複写はその原型の中に見出さるべきすべてのものを精確にまた充分に複写もしないのである。何故なれば我々が実体の複雑觀念イデアを作る材料になる実体の性質と力は非常に多くまた色々であるから、如何なる人の複雑觀念イデアもそれ等のすべてを含まない。我々の抽象的な実体の概念がその中に、物自体の中に統一されてゐるすべての單純觀念イデアを含まないということとは明らかである、というのは人々は如何なる実体に関する彼等の複雑觀念イデアの中にも、その実態の中に存在することを實際彼等が知つてゐるすべての單純觀念イデアを減多に入れないからである。何故なればそれ等の実体の種の名前の意義を出来るだけ明瞭にまた出来るだけ煩わしくないものにしようと努めるので、彼等は実体の種類に関する彼等の種別的觀念イデアを大抵はそれ等の実体中に見出さるべき單純觀念イデアの二、三によつて作る、然しこれ等の單純觀念イデアは取り入れられてその特殊な觀念イデアを作るべき本来の優越または權利を、取り残される他の單純觀念イデア以上に少しも持つてゐるのではないから、これ等の両方面に於て、我々の実体の觀念イデアは不完全であり不適當であることが明らかである。我々が我々の実体の複雑觀念イデア

を作る材料になる単純觀念イデアは何れも（唯或る種some sortsの形状と大きさのみは除いて）力であり、この力は他の実体に対する関係であるから、我々が、或る一つの物体がその中にあるすべての力を様々な仕方でも適用することによって、他の実体に如何なる変化を与えるに適しているか、また他の実体から如何なる変化を受けるに適しているかを試みるまでは、我々はその物体の中にあるすべての力を知つて居るとは決して確信することは出来ない、このことを或る一つの物体に就いて試みることは不可能であり、況んやすべての物体に就いては不可能であるから、我々が或る実体のすべての性質の集合から出来てゐるその実体の適当な觀念イデアを持つなどということは不可能である。<sup>\*\*\*</sup>

\* 或る種とは物体であり精神的実体ではない。【simple ideas に対して言っているだけで、figure・bulkを持つのは物体であるはずだ、コメントの意味が不明。】

\*\* 第四卷、第六章【普遍的命題とその真理及び確実性に就いて】、第十一節参照。

## 【九 略】

## 【二〇 略】

一一 実体の諸性質の集合としての、実体の觀念イデアはすべて不適当である——それ故に実体に関するすべての我々の複雑觀念イデアは不完全であり不適当である。この事は諸々の数学的図形に於ても亦、もし我々がそれ等に関する我々の複雑觀念イデアを、他の図形に関してその諸性質を集めることによってのみ得たとするならば同様であろう。我々の楕円形の觀念イデアは、もし我々がそれに就いてその二、三の性質以外に何等の他の觀念イデアを持つていなかったならば、如何に不確実で不完全なことであろうか。これに反して、我々

## 第二卷 觀念に就いて

の明瞭な觀念イデアの中にその図形の全本質を持つてゐるならば、我々はそれからその諸性質を發見し、そして証明によつて如何にしてこれ等の性質がこの図形から生じまたそれと不可分離であるかを知るのである。

一二 單純觀念イデアは模型ektipoであり、そして適當である——かくして心は三種の抽象的觀念イデアまたは名目上の本質\*を持つ。

第一は、單純觀念イデアで、これは模型または複写copysであるが、しかも確かに適當である。何故なればそれは我々の心の中に或る感覺を生ずる物の中の力のみを表す筈であつて、その感覺は、生ぜられる場合には、その力の結果でしかあり得ないからである。

\* 名目上の本質 (nominal essence) という語はこゝに注解なしに出て來てゐるが、これに就いては第三卷、第三章、第十五節及び同第六八章等参照。

一三 実体の觀念イデアは模型であり、そして不適當である——第二に、実体の複雑觀念イデアも亦模型であり、複写であるが、これは完全なものでなく、適當でない。或る実体に対するすべての他の実体のすべての作用を吟味したのでもなく、またその実体が他の諸実体から受け、または他の諸実体の中に生ずるすべての変化を見出したのでもないから、心はその実体のすべての能動的及び受動的能力の精確な適當な集合を持つことは出来ない、これが我々の持つ種類の実体に関する複雑觀念イデアである。そして結局、もし我々が我々の複雑觀念イデアの中に、或る実体のすべての第二性質または力の精確な集合を持つことが出来たとしても、また實際に持ったにしても、なおそれに依つて我々はその物の本質イデアの觀念を持たないであらう。

何となれば我々の認め得る力または性質はその実体の實在的本質ではなく、それに依り、それから出て来るものなのであるから、これ等の性質のたとえ如何なる集合もその物の實在的本質ではあり得ない。これによつて我々の実体の觀念<sup>イデア</sup>は適當ではなく、心の積りとは異なるものであるということが明らかである。その上に、人は実体一般に関する何等の觀念<sup>イデア</sup>をも持つていないし、また実体そのものが何であるかも知らない。

一四 様態及び關係の觀念<sup>イデア</sup>は原型であつて、適當ならざるを得ない——第三に、様態と關係の複雑觀念<sup>イデア</sup>は原物 originals であり原型 archetypes である。これ等の觀念<sup>イデア</sup>は心そのものが接合する諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の集合であり、その各々は心が含まべきであると考えるものの正しくすべてを含むような集合であるから、それは諸々の存在し得る様態の原型であり本質である、そしてそれ故に、實際存在するときこれ等の複雑觀念<sup>イデア</sup>と厳密に一致するような様態にのみ宛てがわれ、またかような様態にのみ屬する。それ故に様態と關係の觀念<sup>イデア</sup>は適當ならざるを得ないのである。

第三十二章 真なる及び誤れる觀念イデアに就いて

一 眞実と誤謬は本来命題に属する——眞実と誤謬は、本来の語法に於ては、命題にのみ歸せられるのではあるが、しかも觀念イデアも屢々眞であるとか誤っていると名づけられる、尤も私はやはりその決定の基礎となる或る隠れたまたは暗黙の命題があると思うのである。何となれば我々の觀念イデアは我々の心の中の単なる現象または知覚に他ならないのであるから、本来、簡単にそれ自身に於て眞であるとか誤っていると云われ得ないのは、或るものの単独の名前が眞であるとか誤っていると云われ得ないのと同様である。

## 【一 略 Metaphysical truth contains a tacit proposition】

## 【三 略 No idea, as an appearance in the mind, true or false.】

四 如何なるものに關係する *referred to any thing* 觀念イデアも眞または誤であり得る——心がその觀念の何れかをその外の何物か *anything extraneous* と關係づけるときは何時でも、これ等の觀念イデアは眞または誤と呼ばれ得る。何故なれば心はかように關係づけるときにはこれ等の觀念イデアのその物に対する一致を暗に仮定するからである、この仮定が眞または誤であることが示されるに従つて、その觀念イデアそのものも眞または誤と名づけられるようになるのである。このことが起る最も普通の場合は次の如き場合である。

【五】第一に、心がその有する或る觀念イデアが、同一の共通の名前で呼ばれる他の人々の心の中にある觀念と一致すると仮定する場合、例えば心が、正義、節制、宗教に関するその觀念イデアが、他の人々がこれ

等の名前を与えるところのものと同一であると考えまたは判断する場合。第二に、心がそれ自身の中に持つ或る觀念が或る實在的存在と一致すると仮定する場合。かくして人間及びセントーに関する二つの觀念は、實在的実体の觀念であると仮定せられる場合には一方は真であり他は誤である。第三に、心がその諸觀念の何れかを、或るもののすべての性質の基であるそのものの實在的構造と本質に関係づける場合、そしてそれ故に実体に関する我々の觀念のすべてではないとしても、大部分は誤である。

六 かような関係の原因——これ等の仮定を心はそれ自身の諸觀念に関して暗になすことが非常にあり勝ちである。けれども吟味して見ると、我々は、この事は主として——全くそればかりではないとしても——心の抽象的複雑觀念に關してであることを知るであろう。何となれば心の自然の傾向は知識に向つて居るのであり、心はもしも個々の事物によつて進み個物にのみ留つたならばその進歩は非常に遅くその仕事は限りがないであろうということを見出すが故に、知識に向うその道を短くして、各々の知識をより包括的にするために、知識をより容易く拡大する基礎として、心の為す最初のことは、事物を束に結び合わせ、これによつて心がどの事物から得る如何なる知識をも確信を以てその種のすべてのものに拡張し、かくして心の大なる仕事、即ち知識に於て大股に進むということである。これが、私が他の場所<sup>\*</sup>に於て示したが如く、我々が事物を名前の付いた包括的な觀念のもとに、ジェネラとスピシーズ、即ち種と類に集める理由である。

\* 第三卷、第三章【一般的名辭に就いて】、尚この他に第三卷、第一章【言葉又は言語一般に就いて】、第三節参照。

〔七〕心が考察かまたは談話の何れかに於て用いることが出来ると考える或る觀念を得た時に、心の

## 第二卷 觀念に就いて

為す最初のことは、その概念を抽象し、それからそれに名前を与え、かくしてその名前が常に印してあるような或る種の事物の本質を含むものとして、それを心の貯蔵所即ち記憶の中に保存することである。

〔八〕然しこの抽象觀念<sup>イデア</sup>は存在する物と、それに与えられる名前との間にある心の中の或るものであるから、我々の知識の正しいということ、及び我々の話が適當でありまたはよく解るということはともに我々の觀念<sup>イデア</sup>に存することである。

〔九〕そこで第一に、今も言う通り、我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の真理が、他の人々が持ちそして通常同一の名前によつて示す諸觀念<sup>イデア</sup>とそれ等の觀念<sup>イデア</sup>が一致することによつて判断されるときはそれ等のうちの何れでも誤であり得る。

【一〇 略 Ideas of mixed modes most liable to be false in this sense】

【一一 略 Or at least to be thought false.】

【一二 略 And why.】

〔一三〕第二に、事物の實在的存在に関する我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の真理と誤謬に就いて言えば、この實在的存在がそれ等の觀念<sup>イデア</sup>の標準となされるときは、それ等の事物のうちのどれも誤と名付けられることは出ず、ただ諸実体に関する我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>のみがかく言われ得るのである。

【一四 略 First, simple ideas in this sense not false, and why.】

【一五 略 Though one man's idea of blue should be different from another's.】

【一六 略 First, simple ideas in this sense not false, and why ?】



【一七 略 Secondly, modes notfalse】

【一八 略 Thirdly, ideas of substances when false】

【一九 略 Truth and falsehood always supposes affirmation or negation.】

【二〇 略 Ideas in themselves neither true norfalse.】

【二一 略 But arefalse,first, when judged agreeable to another man's idea without being so.】

【二二 略 Secondly\ when judged to agree to real existence, when they do not.】

【二三 略 Thirdly, whenjudged adequate without being so.】

【二四 略 Fourthly, whenjudgedto represent the real essence.】

【二五 略 Ideas, when false.】

二六 正または不正と呼んだ方がより適當である——全体として考えると、我々の諸觀念<sup>イデア</sup>はそれ等の名前の本来の意義に関してか、または事物の實在性に関して心によつて考察されるときは、それ等がその關係づけられる原型に一致するかまたは一致しないかに従つて、正しい或いは不正な觀念<sup>イデア</sup>と呼ぶのが非常に適當であると私は思う。然しもしも誰かそれ等の觀念<sup>イデア</sup>をどちらかといへば真または誤と呼びたい人があるならば、自分が一番良いと考える名前で事物を呼ぶことは誰にでも許されている自由であるから、その人はこの自由を行使するがよい、然し正当な語法に於ては、真実または誤謬<sup>イデア</sup>ということは、それ等の觀念<sup>イデア</sup>が何等かの仕方<sup>イデア</sup>で、事實上或る心の中の命題を含んでいる場合以外には、殆どそれ等に適合しないであろうと私は思う。

## 第二卷 觀念に就いて

第三十三章 觀念イデアの聯合イデアに就いて

\* 本章は第四版に於てはじめて現れたものであり、ロックはここで聯想を「觀念イデアの不正な結合」の説明として取り扱っている。

一 大抵の人には何か不合理なことがある——他人の意見、推理、及び行動の中に何か自分にとって奇妙に思われ、またそれ自身實際法外なことを認めないような人は殆どない。この種の最小の欠陥も、もしも自分自分の欠陥と少しでも異なりさえすれば、あらゆる人はこれに他人のうちに見付けるに充分慧眼であり、そして理性に訴えて遠慮なく非難するであらう、彼は自分自身の主張と行為のうちに、自分が決して気付かず、またそれを信ずることが、もしあつたとしても、非常に困難であるような、遙かにより大なる不合理を犯しているのではあるが。

【一 略 Not wholly from self-love.】

【三 略 Not from education.】

【四 略 A degree of madness】

五 觀念イデアの不正な結合から生ずる——我々の觀念イデアの或るものは相互に自然の対応と結合を持つていて、こういう觀念イデアを探つて、それ等をその固有の本質に基づく結合と対応に結び付けることは我々の理性の任務と長所である。この他に、いま一つ全く機会または習慣による觀念イデアの結合がある、そのものとしては少しも同類でない諸觀念イデアが、或る人々の心のうちに於ては引き離すことが非常に困難であるよう

に結合されるようになる、それ等の觀念イデアは常に一緒になつていて、何時でもその一方が悟性に現れるや否やその仲間が一緒に現れる、かように結合されるのが二つ以上の觀念イデアであるならば、常に不可分離なその全体が同時に現れるのである。

六 この結合は如何にして作られるか——自然に結び付いていない觀念イデアのこの強い結合は、心がそれ自身のうちに於て故意にまたは偶然に作るものである、そこで相異なる人々に於ては、彼等の相異なる性向、教育、興味、等に従つて非常に相異なるものとなる、習慣\*は、意志の決定の癖と、肉体の運動の癖を決めると同じく、悟性の思考の癖を定める、これ等すべては生氣(animal spirits)の運動の連鎖に他ならないのであつて、この生氣は一度動き始めると、その慣れた同一の足なみをつづけ、この足なみは屢々踏むことによつて、滑かな途となり、この途を運動することは容易く謂わば自然になるものと思われのである。かくの如くして觀念イデアが心の中に生ぜられるのであるという考えを我々が理解し得る限りは、或いはもしそうでないとしても、この事は、諸觀念イデアが一度その軌道に這入るときは習慣的な系列をなして相互に続くことを説明するに役立ち得ること、それが肉体のかような運動を説明するに役立つと同様である。或る節ふしに慣れた音楽家は、その節が彼の頭の中でただ一度だけ始められると、その節の様々な調子の觀念イデアが、彼の不注意な思考が何処か他所をさまよっているにも拘らず、何の心遣いも注意もなしに、彼の指が彼の始めた節を演奏するためにオルガンの鍵盤の上を規則正しく動くと同様に、秩序正しく彼の悟性のうちに相続くのを見出すであろう。彼の指の規則的に踊ることの原因と同様に、これ等の觀念イデアの自然の原因が彼の生氣の運動であるかどうかは私は決定しようとはしまい、たとえ如何にこの例

## 第二卷 觀念に就いて

によつてそれが事實であるように思われようとも。然しこの事は知的な習慣と觀念<sup>イデア</sup>の結合を理解するために少しは我々の助となるであらう。

\* ヒュームは「習慣は人間生活の偉大なる指導者である。経験によるすべての推理は習慣の結果であつて、推理力の結果ではない。」と言つてゐる。(Enquiry, section 5, part I)

七 若干の嫌惡がその結果生ずる——大抵の人々の心のうちに習慣によつて作られる觀念<sup>イデア</sup>のかような聯合があるということは、自分自身または他の人々を充分に考察した人は誰でもこれを疑わないであらうと私は思う。人々のうちに認められる同情と嫌惡で、恰も自然のものであるかの如くに強く働き、規則的な結果を生じ、それ故に自然であると呼ばれるものの多くはこの事に歸せられる、これ等の同情と嫌惡は最初は、初めの印象が強かつたためかまたは後になつて抑制しなかつたために、その後その人の心の中で常に相伴うように、恰もただ一つの觀念<sup>イデア</sup>であるかの如くに、結合された二つの觀念<sup>イデア</sup>の偶然的結合以外の何等の起原をも持つていなかったのであるが。私は大抵の嫌惡と言ひ、すべての嫌惡とは言わない、何となれば若干のものは本当に自然であり、我々の根源的な構造によつて居り、我々に生れ付きのものだからである。

八 私は、目下の議論にとつて、自然の嫌惡と習いおぼえた嫌惡とを嚴密に區別することが何か非常に必要であるがために、このことを述べるのではなくして、他の目的のためにこのことに心を留めるのである、即ち子供を持つてゐる人々または子供の教育の面倒を見る人々に若い人々の心の中に於ける觀念<sup>イデア</sup>の不当な結合を忠実に觀察し、またこれに注意深く防止することは為し甲斐のあることと考えるで

あろう。

〔九〕我々の心の中に於ける、それ自身ばらばらの相互に独立な觀念<sup>イデア</sup>の間違つた結合は、我々の自然の並びに道德的行動、情慾、推理、及び概念そのものに於て我々を誤らせる非常に大きな力のあるものであるから、これ以上注意に値するものは恐らく一つもない。

〔一〇〕鬼や魔物の觀念<sup>イデア</sup>は実は光に対すると同じく暗とも何も關係はない、しかも愚かな女中をしてこれ等の觀念<sup>イデア</sup>を子供の心に植ゑ付け、これ等を一緒に心と呼び起すようにせしめさえすれば、恐らくその子供は彼が生きている限りこれ等の觀念<sup>イデア</sup>を決して引き離すことが出来ないであらう。

一一 或る人が他の人から著しい危害を受けると、彼はその人とその行為のことを繰り返し繰り返して、心の中でこれを強くまた多く思い出して考えることによつて、これ等二つの觀念<sup>イデア</sup>を結合するのでそれを殆ど一つのものにしてしまふ、彼がその人のことを考えるときには必ずそれと共に彼の受けた苦痛と不快が彼の心の中に這入つて来る、だから彼は殆どこの両者を区別しないで前者に対して後者に対すると同じだけの嫌悪を感じるのである。かくして憎悪は屢々つまらない殆ど悪気のない誘因から生ずる、そして世の中に喧嘩が弘まり続けられるのである。

〔一一〕或る人が或る場所で苦痛または病氣に苦んだ、彼は彼の友人がこんな部屋で死ぬのを見た。これ等は自然に於ては相互に何の關係もないのであるけれども、しかもその場所の觀念<sup>イデア</sup>が彼の心に起る時は、それは苦痛と心痛の觀念<sup>イデア</sup>を伴う、彼は両者を心の中で混同して、前者と同様に後者に耐えることが出来ないのである。

一三 何故に時は理性の治し得ない心の混乱を治すか——この結合が決定するとき、そしてそれが続く間は、我々を助け、我々をその結果から救うことは理性の力の及ばぬことである。觀念は我々の心の中にある時はその性質と境遇に従つて働くものである、そしてここに我々は、何故時は、理性が、そうするのが正しくまた正しいと認められても、統御することの出来ないような若干の病を治すかという原因を見るのである。母親の眼の日々の喜びであり彼女の魂の楽しみであつた子供の死は、彼女の心から彼女の生活のすべての慰安を引裂くのである。この場合理性の慰めを用いても、拷問台の上にいる人に安樂を説くのと同じことである。時が、その楽しみとその喪失の感じを、それを用いないことによつて、彼女の記憶に帰つて来る子供の觀念から引き離す迄は、すべての説明はたとえ如何に合理的であろうとも無益である、それ故にこれ等の觀念の間の結合が決して分解されない或る人々は、彼等の生活を悲しみのうちに送り、不治の歎きを彼等の墓場に迄持つて行くのである。

【二四 略 Further instances of the effect of the association of ideas】

一五 多くの子供等は彼等が学校で耐え忍んだ苦痛を、そのために自分が懲らしめられた彼等の書物に帰して、書物が彼等の嫌いなものとなる程迄にこれ等の觀念を結合する、そして彼等はその後一生の間決して書物の研究及び使用と和解しない、かくしてもしこんなことがなければ、彼等は読書を彼等の生活の大なる楽しみとしたであろうのに、彼等にとつてそれは苦痛となるのである。まことに好都合な部屋であるのにその中では或る人々は勉強が出来ないような部屋がある、またこれ程奇麗で手頃な型の器はないのに彼等はそれから飲むことが出来ないようなものがある、そしてこのことはこれ等のものに

結び付けられそれをいやなものにする若干の偶然の観念イデアの為である。或る人が、或る一定の人が現れたはその人と一緒にいると、その人は他の点では彼に優つてはいないのであるが、かつて或る場合にその人が優勢を占めたがために、権威と隔りの観念イデアがその人の観念イデアに伴うということを認めたことのない者はないであろう、そしてかくの如く屈服した人はこれ等の観念イデアを引き離すことは出来ないのである。

一六 この種の例は到る処に非常に沢山あるので、私がもう一つ付け加えるのは、それはただこの例が面白く奇妙であるがためのみである。それはダンスを習つてしかもそれを非常に完全に覚えた或る若い紳士に関することであり、彼が習つた部屋の中には偶然一つの古いトランクが置いてあつた。この一つの目立つ世帯道具の観念イデアがすべての彼のダンスの廻転及び歩調と非常に混合したので、その部屋の中では彼は素精しく上手に踊ることが出来たものではあるが、しかもそれはそのトランクが其処に在る間だけであつたし、また他の如何なる場所に於ても、そのトランクかまたはそのような他のトランクがその部屋の然るべき位置にない限りはうまく踊ることが出来なかつた。もしこの話が正確なありの俚より以上に少しばかり喜劇的に仰々しく飾られていると疑われるならば、私は自分が数年前にこの事を今私が報告する様に、或る非常に真面目な人からその人自身の知つていることとして聞いたということを自ら保証するものである。そして恐らく詮索好きな人でこれを読んで、こういう性質の例でなくとも、これに似寄つた話か、または少なくともこの話を正当となすような話に出会はずな人は殆ど無いであらう。

一七 知的な癖に対するその影響——このようにして附く知的な癖と欠陥はあまり注意されないけれ

ども、少なからず頻繁で有力なものである。「存在」及び「物質」という觀念イデアを教育または屢々考えることによつて強く結合せしめるときは、この両者が心の中で尚結合している限りは、物質と離れた精神に就いて如何なる概念、如何なる推理があり得るであらうか。非常に幼少の頃から習慣によつて容姿と形状を神の觀念イデアに結合するときは、その心は神性に就いて如何に不合理なことを考え勝ちとなるであらうか。

一八 色々の派に於て認められる——若干のかような間違つた不自然な觀念イデアの結合が哲学及び宗教の色々な派の間の相容れない対立を確立していることが見出されるであらう、何となれば我々は、彼等の後継者の誰もが故意に自個マ【mind、自己】を瞞着し、明白な理性によつて提供せられる真理を態わざと拒絶するものとは想像することは出来ない。この場合利害關係が大きな働きをなすけれども、しかもそれは、誰も彼も一人残らず態と間違つたことを主張する程、その人々の社会全体もかくも普遍的に片意地にするような働きをなすとは考えられない、或る者は少なくともすべての人が為さんと主張すること、即ち真理の真面目な追求をなすものと認められねばならぬ、それ故に彼等の悟性をくらし、彼等が本当の真理として奉じていることの間違いを彼等をして知らしめない何物かがあるに違いない。かくの如く彼等の理性を捕え、真面目な人々を盲滅法に常識から外れさせるところのものは、吟味して見ると、我々の語りつつあるものであることが分るであらう、相互に何の類縁もない若干の独立した觀念イデアが、教育、習慣、及びそれ等を表す言葉が絶えず一団となつて鳴り響くことによつて、それ等が何時でも彼等の心の中で一緒に現れるように結合され、彼等はそれ等の觀念イデアを恰もそれがただ一つの觀念イデアであるかの如くに、



彼等の思考の中で分離することが出来ない、そしてそれ等の観念は恰も一つであるかの如く働くのである。この事が戯言に意味を、不合理なことに証明を与え、馬鹿げたことを道理に叶ったこととなす、そしてこれが世界の諸々の最も大なる間違いの基である、否、殆どすべての間違いの基であると言つてもよい、或いはもしそれがこれ程のことはなさぬとしても、少なくとも最も危険なことの一つである、何故なれば、このことが行われる限り人は物事を会得し吟味することを妨げられるからである。

一九 結論——かくの如くして我々の観念の起原、種類及び範圍の説明を、我々の知識のこれ等の道具（そう呼んでよいかどうか私は知らないが）、または材料に関する色々な他の考察と共に与えたので、初めに私の立案した方法は今や、私が直ちに進んで、悟性がそれ等を如何に用いるか、及び我々はそれ等によつて如何なる知識を得るか、を示すべきことを要求するであらう。これが、この問題に関する私の最初の目論見に於て私が為さねにならぬと考えたすべての事であつた、然しこの問題に更に近づいて見ると、私は、観念と言葉の間には非常に密接な連絡があり、我々の抽象的観念と一般的な言葉の間には非常に常住的の相互関係があるので、全く命題に存するところの我々の知識に就いて明晰、判明に語ることは、先ず言語の性質、使用、及び意義を考察することなしには不可能である、それ故にこれが次の巻の仕事でなければならぬ。

## 第三卷 言葉に就いて

## 第一章 言葉または言語一般に就いて Words or Language in general

一 人は有節音 *articulate sounds* を形成するに適している——神は、人間を社交的創造物と定めたので、人間が同類の者達と交際する傾向を持ちまたどうしてもそうせねばならぬようにしたばかりではなく、また社会の主な道具及び共通のきずとなるべき言語をも彼に与えた。それ故に人間の諸器官は生れつき、我々が言葉と呼ぶ有節音を形成するに適するように形作られている。然しこの事は言語を造り出すに充分ではなかった、何となれば鸚鵡<sup>おうむ</sup>及びその他の色々な鳥は充分明瞭に有節音を出すように教えられなければならない彼等は決して言語の能力はないからである。

二 それ等を觀念<sup>イデア</sup>の符号となすに適している——それ故に有節音の他に、更に人間がこれ等の音を内部の諸概念 *conceptions* の符号として用い、それ等を人間自身の心の中の諸觀念<sup>イデア</sup>に対する印したらしめることが出来、これによつてこれ等の觀念<sup>イデア</sup>が他の人々に知らせられ、人々の心の思考が或る人から他の人に伝えられ得ることが必要である。

三 一般的符号を作るに適している——然しこの事も亦言葉が持つべき效用を言葉に与えるには充分でなかった。何となればもしもあらゆる個物がそれを表示する別々の名前を必要としたならば、言葉の増殖はその使用を混乱に陥れたであろう。この不都合をなおすために、一般的名辞の使用によつて言語

は更に改善された、これによつて一つの語は個々の存在の多数を示すこととなつた。

#### 【四略】

五 言葉は結局感覺的觀念<sup>イデア</sup>を表示するようなものから派生せられる——もしも我々が、我々の言葉が普通の感覺的觀念<sup>イデア</sup>にどれ程多く依存しているか、また如何に感覺から全く離れた行動や概念 notions を表すために用いられる言葉が感覺にその起原を their rise from thence 持つて居り、そして明らかに感覺的な觀念<sup>イデア</sup>からもつと深遠な意義に移されて我々の感覺の認識圈内にない觀念<sup>イデア</sup>を表示するようになるか、ということに注意するならば、このことも亦すべての我々の概念と知識の起原 original に我々をいくらか近づけるであらう。例えば想像する (imagine)、理解する (apprehend)、了解する (comprehend)、固執する (adhere)、思考する (conceive)、注入する (instil)、嫌惡せしめる (disgust)、攪乱 (disturbance)、平穩 (tranquillity)、等はすべて感覺的な物の作用から取られ、そして一定の考え方<sup>イデア</sup>に適用せられる言葉である。精神 (spirit) はその最初の意義では息であり、天使は使者である、そしてもしも我々がこれ等の言葉をその源までたどることが出来たならば、すべての言語に於て、我々の感覺の圈内にない物を表示する名辭がそれ等の最初の起原を感覺的觀念<sup>イデア</sup>に持つていることを我々は見出すであらうということを私は疑わない。このようにして我々は、はじめてそれ等の言葉を用いた人の心を充たしたのは如何なる種類の概念であつたか、またそれは何処から出て来たものであるか、また如何に自然が、物の命名に於てさえも、知らず識らずのうちに人々にすべての彼等の知識の起原と原理を思いつかせたか、ということの或る種の推測をなすことが出来る。

六 分類——然し乍ら教授 instruction と知識に役立つものとしての言語の效用と力を更によく了解するためには次のことを考察するのが適當であろう。

第一に、言語の使用に於て、名辭が直接に適用せられるものは何であるか。

第二に、すべての名辭（固有名は除いて）は一般的であり、それ故に特にこのまたはあの単一物を表示するのではなく、物 things の種類 sorts と等級 ranks を表示するのであるから、次には名辭を存立せしめる物の種 sorts と類 kinds、或いはもしラテン名の方を好むならば、スピシーズ species とジェネラ genera は何であるか、そしてそれ等が如何にして作られるようになるか、を考察することが必要であろう。これ等のことが充分研究される（そうなければならぬように）と、我々は言葉の正しい用法、言語の自然の便益と欠陥、及び言葉の意義の不明または不確實の不便を避けるために用いられるべき矯正法をより良く知るようになるであろう。

それ故に私はこれ等の考察を以下の諸章の問題としよう。

## 第二章 言葉の意義に就いて

一 言葉 Words の效用は觀念<sup>イデア</sup>の感覺的符号 sensible marks of ideas となることである、そしてその表示する觀念<sup>イデア</sup>がその本来の直接の意義 signification である。

(二) 人々が有するこれ等の符号の效用は彼等自身の記憶を助けるために彼等自身の思考を記録することか、或いは謂わば、彼等の觀念<sup>イデア</sup>を提出して bring out 他の人々の目の前に置くことの何れかであるから、原<sup>もと</sup> primary の直接の意義に於ける言葉は、それ等の言葉を用いる人の心の中の諸觀念<sup>イデア</sup>以外には、たとえこれ等の觀念<sup>イデア</sup>が、それ等の言葉が表すと考えられる物から如何に不完全にまたは不注意に引き出されようとも、何物をも表示しないのである。

## 【三略】

〔四〕然し乍ら言葉は、人々によって用いられるときは、話者の心の中にある觀念<sup>イデア</sup>以外には本来、直接には何物をも意味し得ないのではあるが、しかも人々はその思考に於て、それ等の言葉に二つの他のものへの暗黙の關係を与える。第一に、人々は彼等の言葉がまた自分等の交通する他の人々の心の中の觀念<sup>イデア</sup>の符号でもあると仮定 suppose する。

〔五〕第二に、人々は単に彼等自身の想像に就いて語るのではなく、事實在るが仮の事物に就いて語るものと思われ度いのであるから、それ故に彼等は屢々彼等の言葉が事物の實在性をも表示すると仮定 suppose するのである。

六 言葉に関しては更にまた次のことを考察すべきである。第一に、言葉は直接に人々の観念イデアの符号であり、そしてその為には人々が彼等の概念を伝え合う道具となるのであるから、一定の音とそれが表す観念イデアとの間には、絶えず用いることによって、聞かれた名辞が、一定の観念イデアを、拾もそれ等の観念イデアを生ずることの出来る対象そのものが感官に實際働きを及ぼしたときと殆ど同様に、容易く呼び起すというような結合があるようになる。

〔七〕第二に、言葉の本来の直接の意義は話者の心の中の観念イデアではあるが、しかも我々は最も幼少の頃から親しく使い慣れることによつて一定の有節音を非常に完全に覚えるようになり、それ等を容易く喋りまたいつでも思い出せるように記憶しているのであるけれども、それ等の音の意義を完全に吟味し確定しようと常に注意してはいないが故に、人々は彼等が注意深い考察に専念しようとするときでさえも、彼等の思考を事物よりは言葉により多く向けようとするということが屢々起るのである。否、言葉はその多くのものがそれ等の表示する観念イデアが知られる前に覚えられるが故に、子供等のみでなく或る大人の人々は多くの言葉を、鸚鵡が喋るのと全く同様に、ただ彼等がそれ等の言葉を覚え、それ等の音に慣れたがために語るのである。

### 第三章 一般的名辭に就いて

一 言葉は大部分一般的である——存在するすべての物は個々のものであるから、恐らく、物に適合せしめらるべき言葉も亦そうであるのが合理的であると考えられるであろう、私の言うのは言葉の意義に就いてである、然し我々は全くその反対であるのを見出す。すべての言語をなすところの言葉の全く大部分は一般的名辭である、これは等閑にした結果でもなしまたは偶然の結果でもなく、道理 *reason* と必要 *necessity* の結果である。

二 あらゆる個物に対して名前を持つことは不可能である——第一に、あらゆる個物が別々の固有の名前を持つなどということは不可能である。というのは言葉の意義と使用は、心がその諸觀念イデアとそれ等の符号として心の用いる音との間に作る關係に依つているのであるから、名前を物に適用するに際しては、心が諸々の物の別々の觀念イデアを有し、また各々の觀念イデアに属する固有の名前を、その觀念イデアにその名前を特に充てることと共に保持するということが必要である。然し我々の出会うすべての個物の別々の觀念イデアを形成しまた保持することは人間の能力の及ばぬことである、人々の見たあらゆる鳥と獸、感覺に働きを及ぼしたあらゆる木と植物は最も包括的 *capacious* な悟性の中にも含まれることは出来なかつた。若干の將軍が彼等の軍隊中の各々の兵士をその固有名で呼ぶことが出来たということがもしも驚くべき記憶力の例と見做されるならば、我々は、何故人々が、一群の中の各々の羊、または彼等の頭上を飛ぶ鳥に名前を与えようとする試みを決してしなかつたか、況んや彼等の途上に現れる植物の各々の葉または

砂粒を特有の名で呼ぼうと試みなかったか、という理由を容易く見出すであろう。

三 そして無用である——第二に、もしもこのことが可能であつたとしても、しかもそれは無用であろう、何故なればそれは言語の主要な目的に役立たないであろうから。人々は、彼等の思考を伝え合うのに役立たぬような個物の名前を徒らに積み重ねることになるであろう。人々が名前を覚え、そしてそれを他人との話に用いるのはただそれが理解されんがためである、このことは、私が言語の器官organs of speechによつて作る音が使用または承認によつて、これを聞く他の人の心の中に、私がその音を発するとき心の中でそれを当てはめる觀念イデアを、呼び起す場合にのみ為されるのである。このことは諸々の個物に適用せられる名前によつては為され得ない、何故なればそれ等に就いては私だけが心の中に觀念イデアを持つてゐるので、それ等の物の名前は、丁度私の目に留つたそれ等すべての個物を知らない他の人には意義があり得ないし、また理解せられ得ないであろう。

四 第三に、更にこの事をも為し得べきことと仮定しても（私はそうではないと思うのであるが）、しかもあらゆる個物に対する別々の名前は知識の進歩に対して何等の大きな效用をも持たぬであろう、知識は個物に基づいてはいるが一般的見解によつて拡大される、これに対しては、一般的名辞のもとに類に歸せられた物が本来助けとなるのである。それ故に人々は大概これ等の類別された物に止つた、しかもその方が都合のよい場合にも個物を固有名によつて区別することが出来ないというのではない、それ故に彼等の最も關係の深い彼等自身の種に於ては、そこでは個々の人のことを述べる機会が屢々あることでもあり、彼等は固有名を用いるのである。



五 如何なる物が固有名を有するか——人の他にまた、国、都市、河、山、及び他の同様に區別された場所も通常固有の名前を持つようになった、そしてそれは同一の理由によるのである、何故なればそれ等のものは人々が特に目を留め、そして他人と彼等が話をする際に、謂わば、その人々の前に供する機会を屢々持つものだからである。そしてもし我々に個々の人々のことを述べる機会と同じ位に屢々個々の馬のことを述べる機会があつたとするならば、前者に對する名前と同様に周知の名前が後者に對してあることになつたであらう、そしてビュセファラスはアレキサンダーと同じ位に用いられる言葉となつたであらうということを私は疑わない。

\* Bucephalus——アレキサンドル大王の乗用馬。

六 如何にして一般的な言葉は作られるか——次に考察せらるべきことは、如何にして一般的な言葉が作られるようになるかということである。というのは存在するすべての物 *all things* は個物 *particulars* のみであるから、我々は如何にして一般的名辭 *general terms* を得るか、或いは我々は一般的名辭が表示すると考えられるような一般的性質 *natures* を何処に見出すであらうか。言葉は一般的觀念の符号となされることによつて一般的となる、そして觀念は、それから時間及び場所の状況 *circumstances* を取り去り *separating from*、またその觀念にこのまたはあの特殊の存在 *particular existence* の規定を与えるような如何なる他の觀念をもそれから取り去ることによつて一般的となる。このような抽象の仕方によつて諸觀念は一つ以上の個物を代表することを得るようにされる、これ等の個物の各々はその中にその抽象的觀念との一致を含んでいたので、（我々がそう呼ぶように）その種に属するのである\*。

## 第三卷 言葉に就いて

\* 抽象は第二巻、第十一章、第九節に於ても同様に定義されている。

七 然しこのことをいまま少しく明瞭に推論するためには、我々の概念と名辞をその初めからたどり、我々は何なる段階によって進むか、また如何なる足跡を以て我々は最も幼少の頃から我々の観念<sup>イデア</sup>を拡張するか、を観察することは、恐らく間違つたことではないであらう。子供の話相手になる人の観念<sup>イデア</sup>は、その人自身と同様に個別的なものであるということ程明白なことはない。子守と母親の観念<sup>イデア</sup>は子供等の心の中に充分に形成される、そして其処にあるそれ等の人の絵の如くにこれ等の個人のみを表象する、そしてその子供の用いるネーや及びママという名前はこれ等の人に限定される。後になつて、時が経ちまたより広くものを知るようになった為に、形及び色々な他の性質の若干の共通の一致によつて、自分の父、母、及び自分が慣れた人々に似ている非常に多くの他の物が世界には在るということの子供等が認めるようになった時、彼等はこれ等の多くの個物が与かることを彼等が知るところの一つの観念<sup>イデア</sup>を形成する、この観念<sup>イデア</sup>に彼等は他の名前と共に、例えば人間<sup>イデア</sup>という名前を与える。かくして子供等は一般的な名辞と一般的な観念<sup>イデア</sup>を持つようになるのである。その際彼等は何も新しい物を作るのではなく、ただ彼等がピーターとジェイムズ、メアリーとジェーン、に就いて持つていた複雑観念<sup>イデア</sup>から各々に固有なものを除去してそれ等のすべてに共通なもののみを保留するだけのことである。

八 人間という一般的な名辞と観念<sup>イデア</sup>に到達すると同一の方法によつて彼等は容易く更に一般的な名辞と概念に進む。何となれば彼等の人間という観念<sup>イデア</sup>と異なりそれ故にその名前のもとに包含され得ない多くの物がしかも人間と一致する一定の諸性質を持つているのを認めるとき、それ等の性質のみを保留し

てそれ等を一つの觀念に統一することによつて、彼等は再びいま一つの更に一般的な觀念を得る、これに名前を与えることによつて彼等は更に広い外延を有する名辞を作る、この新しい觀念は、何か新しいものを附け加えることによつてではなく、ただ前の様に、人間という名前によつて意味せられる形と若干の他の性質を除去し、ただ動物という名前のもとに含まれる、生命、感覚、及び自発的運動を伴う身体のみを保留することによつて作られるのである。

九 一般的性質は抽象的觀念に他ならない——諸々の一般的な性質または概念が、最初個々の存在から取られた、より複雑な觀念のかように抽象的で部分的な觀念以外の何物かであると考える人は、何処にそれ等を見出すべきかに当惑するのではないかと思う。というのは誰か或る人をして反省せしめ、それからその人の人間という觀念はピーター及びポールという觀念と較べて、或は彼の馬という觀念はビュセファラスという觀念と較べて、各々の個体に特有な或るものを除去することと、幾つかの個々の存在に関する個々の複雑觀念のうちそれ等の存在が一致するのが見出されるものだけを保留するということと以外に、何処が異なるか告げしめよ。類と種のこの神秘のすべてはスコラ学派の中では非常な騒ぎを起し、また正当にも彼等以外の人には殆ど顧慮されていらないことであるが、これは多かれ少なかれ包括的な抽象的諸觀念に名前が結合された annexed ものに他ならないのである。これ等のすべてに於ては、常に必ず、どれでもより一般的な名辞は、その中に含まれる contained under it 觀念の何れかの一部に過ぎないような觀念を表示するのである。

一〇 何故に定義に於ては通常類が用いられるか——この事が、何故我々は、言葉の意義を言明する

## 第三卷 言葉に就いて

ことに他ならぬ言葉の定義に於て、類即ち定義さるべきものを含む最も近い一般的な言葉を用いるかという理由を我々に示すであらう。これは必然的に起ることではなくして、最も近い一般的な言葉即ち類が代表する色々な単純観念<sup>イデア</sup>を列挙する労を省くがためにのみ、或いは恐らく時にはそうすることの出来ないのを恥ぢるために起ることである。

—— 一般と普遍は悟性の創造物である—— 上述のことによつて、一般と普遍は物の實在的存在に属するのではなく、悟性が自分の用いるために作つた発明品であり創造物であつて、言葉にしろまたは観念<sup>イデア</sup>にしろ符号にのみ関するのである。さきに述べた如く言葉は一般的観念<sup>イデア</sup>の符号として用いられたときには一般的である、そしてそれ故に多くの個物に対して無差別に適用せられる、そして観念<sup>イデア</sup>は多くの個物 particular things の代表者 representatives として立てられたときには一般的である、然し、物そのものはいずれも個別的な存在をなして居り、意義から言へば一般的であるような言葉と観念<sup>イデア</sup>でさえもそうであつて、普遍性はいかなる物自体に属するのではない。<sup>\*</sup> それ故に我々が個別的なものを捨てるときそこに残る一般的なものは、我々自身の形成する創造物に過ぎない、その一般的性質は、悟性が一般的なものに与えるところの多くの個別的なものを意味しまたは表示する能力に他ならないのであるから。というの一般的なものの意義は人間の心によつてそれに附加される關係に他ならないからである。

<sup>\*</sup> 観念<sup>イデア</sup>は「その存在に於ては個別的で」ある。即ち、個々の心の歴史の各瞬間の心的事実或いは事件としてはそうである。ロックは彼が心的状態としての観念<sup>イデア</sup>を推理と知識に於ける心の対象として語るとき根本的な混同な来している（第四卷、第十七章、第八節参照）。観念<sup>イデア</sup>が知識に於て働きをなすのは明らかに論理的な意味または符号としてののみで

あり、意味としては觀念イデアは普遍である。

一二 抽象的觀念イデアは類と種の本質である——それ故に次に考察すべきことは、一般的な言葉が持つのは如何なる種類の意義であるかということである。というのは一般的な言葉は単に一つの個物を意味しない、何となればもしそうならばそれは一般的名辞ではなく固有名であろう、このことが明らかであると同じく他面に於てはそれが複数を意味しないことも明白である、何となればもしそうならば人と人々とは同一のものを意味することになるであろう、そして（文法家の言う）数の区別は余計のこととなるであろう。そこで一般的な言葉の表示 *signify* するものは諸々の物 *things* の一つの種 *sort* である、そして各々の一般的な言葉は心の中の一つの抽象的觀念イデアの符号となることによつてこの事をなす、この觀念に對して諸々の存在する物が一致 *agree* することが見出されるので、それ等はその名のもとに列せられる *be ranked under* ようになる、或いはこれと全く同じことであるが、その種に属することとなるのである。これによつて種の本質、或いは（もしもラテン語の方が喜ばれるならば）物のスピスイーズはこれ等の抽象的觀念イデアに他ならないことが明白である。

一三 それ等は悟性の細工 *Workmanship* であるが、その基礎は物の類似に *Similitude* ある——私はこゝで自然が諸物を造り出す際にそれ等の幾つかを相似たものと為すということを忘れていると思われたくない、況んや否定するものと思われたくない、殊に動物の諸種族、及び種子によつて繁殖するすべての物に於てこれ程明らかなことはない。しかも尚我々は次のように言つてよい、と私は思う、即ち諸物を名前のもとに分類することは悟性の細工であつて、悟性は、それ等の物の間に認められる類似から抽象

的な一般的觀念<sup>イデア</sup>を作り、それ等の一般的觀念<sup>イデア</sup>を、型 patterns または形式 forms (というのはその意味に於て形式という言葉は非常に適当な意義を持つてゐるから) としてそれに結び付けられた名前と共に、心の中に定立する機会を捉えるのである。この一般的觀念<sup>イデア</sup>に対して、諸々の存在する個物は一致するところが見出されるので、それ等の物はその種に属するものとなり、その名称を持ち、またはその組に入れられることになるのである。何となれば我々が、これは人である、あれは馬である、これは正義、あれは残酷、と言うとき、我々は、事物を、我々がこれ等の名前をその符号としたところの抽象的觀念<sup>イデア</sup>に一致するものとして、色々な種別名の下に列する以外に何を為すであらうか。また定立され名前によって印しづけられたこれ等の種の本質は、心の中のこれ等の抽象的觀念<sup>イデア</sup>以外の何であるか、これ等の概念は、謂わば、存在する諸々の個物とそれ等が従属する名前との間の絆である。<sup>\*</sup> そしてそれ故に仮想せられた、実体の実在的本質は、もしも我々の抽象的觀念<sup>イデア</sup>と異なるならば、我々が諸々の物を編入する *rank things into* 種の本質ではあり得ない。というのは私は、馬または鉛に於て、それ等の何れかを別の種に属するものとなすことなしに、起り得る変化は如何なるものであるかまたは起り得ない変化は如何なるものであるか、を訊ねる。物の種を我々の抽象的觀念<sup>イデア</sup>によつて決定する場合には、このことを決定するのは容易である。然しもしも或る人がこの際仮想された実在的本質に準ずるならばその人は当惑するであらうと私は思う、そして彼は、何時或る物がまさしく馬または鉛の種に属するものでなくなるか、を決して知り得ないであらう。

\* 抽象的觀念<sup>イデア</sup>即ち概念——ロックスの「名目上の本質」はここでは一般的な名前と区別せられている。それは個物とそ

の名前との間の絆或いは媒介である。言葉と觀念<sup>イデア</sup>はともに符号である（第十一節）。言葉は一般的觀念<sup>イデア</sup>の符号として用いられるときは一般的であり、一般的觀念<sup>イデア</sup>は多くの個物の代表者として立てられる限り符号である。

一四 各々の別個の抽象的觀念<sup>イデア</sup>は別個の本質である *a distinct essence* —— また少なくとも複雑觀念<sup>イデア</sup>は、相異なる人に於ては、單純觀念<sup>イデア</sup>の相異なる集合であり、それ故に或る人にとつては貪慾であるところのものが別の人にとつてはそうではないということを考察する人は誰でも、私がこれ等の本質または抽象的觀念<sup>イデア</sup>（それは名前の標準 *measures* であり、種の限界である）は悟性の細工であると言ふのを、不思議に思わないであらう。否、人々が物自体からその抽象的觀念<sup>イデア</sup>を受け取ると思われる諸実体に於ても彼等は常に一致してはいない、我々に最も親しみ深くまた我々が最もよく熟知している種に於てすら決してそうではない、何となれば女から生れる胎児が人間であるかどうかということが一度ならず疑われて、それは養われそして洗礼を施さるべきものか否かということが議論された程である、かようなことは、もしも人間という名前の属する抽象的觀念<sup>イデア</sup>または本質が自然の作つたものであつて、悟性が一緒にした諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の不確実で雑多な集合を抽象しそれに名前を附けたものでなかつたならば、起り得なかつたであらう。であるから本当はあらゆる別個の抽象的觀念<sup>イデア</sup>は別個の本質である、そしてかような別個の諸觀念<sup>イデア</sup>を表示する名前は本質的に相異なる *essentially different* 諸物の名前である。例えば羊が山羊と異なるが如くに円は本質的に卵形と異なる、そして水が土と異なるが如くに雨は本質的に雪と異なる、一方の本質である抽象的觀念<sup>イデア</sup>は他方のものに伝えられることは不可能であるからである。かくの如く或る部分が相互に異なり、二つの別の名前を附けられている如何なる二つの抽象的觀念<sup>イデア</sup>も、世界中で最も相

隔たりまたは相反する觀念イデアと同様に、本質的に相異なる二つの別の種——或いはスピスイーズと言つてもよい——を構成するのである。

一五 実在的 *real* 及び名目的 *nominal* 本質——然し物の本質は或る人々によつては（理由のないことではないが）全く未知であると考へられているのであるから、本質イデアという言葉の幾つかの意義を考察することは不適當のことではないであらう。

第一に、本質は或るものをそのものとなす所のそのものの存在 *the being* 【在り方】であると考え *be taken for* うとが出来る、それ故に物の発見せられ得る諸性質の依つて居るところの實在的内的 *real internal* な、しかも実体の中に於ては一般に知られない物 *things* の構成 *constitution* を物の本質と呼ぶことが出来る。これが、この言葉の形成によつて明らかであるように、その本来の原もとの意義である、*essentia* はその原エッセンティアの字義に於てに、本来存在 *being* を意味するのであるから。そして我々が個物の本質に就いて何も名を与えずにこれを語るときには、この言葉はやはりこの意味を以て用いられる。

第二に、スコラ学派の學問と論争が多く類と種に就いて行われたので、本質という言葉は殆んどその初めの意義を失つた、そしてこの言葉は、物の實在的構成にではなく、殆ど全く類と種の人為的構成に適用せられた。成る程通常、物の類の實在的構成が仮定される、そして一緒に存在する諸々の單純觀念イデアの集合の由るべき或る實在的構成があるに違ひないということは疑いがない。然し諸々の物は、それ等が、我々が名前を結び付けた一定の抽象的觀念イデアに一致するに従つてのみ、それ等の名前のもとに類または種に分けられることは明白であるから、各々の類または種の本質は類的 (*general*) または種的 (*sortal*)



——もしも私が *genus* から *general* と言うように *sort* からこのように呼ぶことが出来るならば）な名前の表示する抽象的觀念に他ならぬことになるのである。そして我々はこれが本質という言葉がその最もありふれた用法に於て意味するところであるのを見出すであろう。これ等の二様の本質の一方を**実在的**、他方を**名目的**、本質と名付けることは不適當ではなからうと私は思う。

【二六 略 *Constant connexion between the name and nominal essence*】

一七 種はその**実在的本質**によつて区別されるという仮定は無用である——諸々の物質的实体 *corporeal substances*（これ等のみを述べるならば）の**実在的本質**に關しては、もし私が間違つていないとすれば、二つの意見がある。一つの意見は、本質という言葉を自分が何だか知らないものに対して用いて、このような一定数の本質を假定し、それ等に従つてすべての自然物は作られ、またそれ等の物のまきしくどもこれもそれぞれ等の本質に与かり、そしてこの種またはあの種となると考えるような人々の意見である。いま一つのより合理的な意見は、すべての自然物は、それ等の感知せられ得ない諸部分の**実在的**ではあるが未知の構成を持つているものと見做し、このものから、我々が諸物を共通の名称のもとに類別する機会を得るに従つて、それ等の物を相互に区別するに役立つところの感覺的諸性質が出て来るとなす人々の意見である。この二つの意見のうち、これ等の本質を、存在するすべての自然物がその中に入れられまた一様に分有する *partake* というの形 *forms* または型 *moulds* \* であると假定する前者は、私の考えに依れば、自然物の知識を甚しく混乱せしめた。動物のすべての種に於て屢々怪物が出来、また人間の出産に於て屢々取換子や他の不思議な子供が出来ることはこの假定と一致することの不可能な困

難を伴う、何故なればまさしく同一の實在的本質に与かる二つの物が相異なる性質を持つなどということは、円という同一の實在的本質に与かる二つの図形が相異なる性質を持つというのと全く同様に不可能なことであるからである。然しこれに反対する他の如何なる理由もなかったとしても、知ることの出来ない諸々の本質を仮定し、それにも拘らずそれ等の本質を物の種を区別するものとなすことは我々の知識の如何なる部分に対しても全く無用で役立たぬことであるから、その事だけで我々をしてこの仮定を捨てしめ、我々の知識の届く範囲に這入つて来るような物の種即ちスピーズの本質を以て満足するに到らしめるに充分であろう、かような本質は、真面目に考察するときは、私が述べたように、我々によつて別々の一般的な名前を結び付けられた抽象的複雑觀念<sup>イデア</sup>以外の何物でもないことが分るのである。

\* これが「実体の形式」といわれるものである（第二巻、第二十三章、第三節、第三十一章、第六節参照）。

\*\* 俗論に言う妖魔によつて美児と取換えられた醜児。【changlings 加藤訳では省略された第二巻第21章50節でも登場し、この後にも取り上げられている。】

一八 實在的及び名目的本質は單純觀念<sup>イデア</sup>と様態に於ては同一であり、实体に於ては相異なる——かくの如く諸々の本質を名目的なものと實在的なものに区別してから、我々は更に、單純觀念<sup>イデア</sup>と様態の諸種に於てはこの兩本質は常に同一であるが、諸々の实体に於ては常に全く相異なるということを認めることが出来る。即ち三つの線の間の空間を含む図形は、三角形の名目的本質であると共に實在的本質である、何となればそれはその一般的な名前が結び付けられる抽象的觀念<sup>イデア</sup>であるばかりではなく、物そのものの本質<sup>エッセンス</sup>または存在、即ち三角形のすべての性質がそれから生じまたすべてそれに不可分離に結び付

けられている基礎であるからである。然し私の指にはまつている指輪を成す物質の小片に関しては、事情は遙かに違って、これ等二つの本質は明らかに相異なるのである。何となれば、その中に見出される色、重さ、可溶性、耐火性等のすべての性質は、その感知せられ得ぬ諸部分の實在的構成に依つていのであるが、この構成を我々は知らず、またそれに就いては何等特殊の觀念イデアを持つて居らぬからその符号である何の名前をも持つていない。しかもそれを金となし、それにその名前を持つ権利を与えるのはその色、重さ、可溶性、耐火性等であるが故に、これ等がその名目的本質である、何故なれば金という名前が結び付けられている抽象的複雑觀念イデアと一致した諸性質を持たぬ如何なるものも金とは呼ばれ得ないからである。然し本質のこの区別は特に実体に属するものであるから、我々が実体の名前を考察するようになるとき、更に詳細にこれを取扱う機会があるであろう\*。

\* 第六章「実体の名前に就いて」参照。

一九 本質は産出することも破壊することも出来ない *ingenerable and incorruptible*——我々が今迄語つていたような、名前を持つた抽象的觀念イデアが本質であるということとは、更に、本質に関して人々の語ること、即ち本質はすべて産出することも破壊することも出来ないということ、によって明らかであろう、この事は物と共に始まりまた滅びるところの物の實在的構成に関しては真実ではあり得ない。即ち今日草であつたものが明日は羊の肉であり、二、三日後には人間の一部分となる、これ及びこれに似たすべての変化に於て、これ等の物の實在的本質即ちこれ等色々の物の諸性質が基づいている構成は破壊され、それ等の物と共に滅びることは明白である。然し乍ら、諸々の本質は心の中に定立されて名前を結び付けら

れた觀念イデアと考えられるのであるから、それ等は、個々の実体がたとえ如何なる変異を受けようとも、常に依然として同一であると考えられる。というのは、アレキサンダーとピュセファラスに何事が起ろうとも、人間及び馬という名前が結び付けられる觀念イデアは、それにも拘らず依然として同一であると考えられる、かくしてこれ等の種に属する個体の何れかに或いはすべてに如何なる変化が起つても、これ等の種の本質はそっくりその尽破壊されずに保存されるのである。この様にして或る種の本質は、その種の一つの個体すらも存在することなしに無事に完全に留る。というのは今世界中何処にも存在する円が無かつたとしても（恐らく精確に描かれたその図形は何処にも存在しないのであるが）、その名前に結び付けられた觀念イデアはその俦のものであることをやめないであろう、またその觀念イデアは、我々の出会う個々の図形の何れが円という名前に對する權利を持つか、または持たぬかを決定し、そしてそれ等の何れが、その本質を持つことによつて、その種に属するものであつたかを示すための型となることをもやめない。そして自然界には、一角獣のような獣も、また女人魚のような魚もいなかったし、いたこともないとしても、なお女人魚という觀念イデアは人間という觀念イデアと同様に理解せられる、そして一角獣という觀念イデアは馬という觀念イデアと同様に確實で動搖なくまた永久的である。上述のことによつて、本質不易の説は本質が抽象的觀念イデアに過ぎないことを証明することが明白である。

二〇 要約——結論として私の言い度いことは要するに次のことである、即ち類イデアと種イデア、及びそれ等の本質のすべての偉大なる仕事は以下のことに他ならぬこととなる、即ち人々は抽象的諸觀念イデアを作り、それ等を彼等の心の中に設定し、それ等に名前を結び付け、かようにすることによつて、もしも彼等の言

葉と思考が個物にのみ限られていたならば、徐々にしか進歩せぬであろうところの彼等の知識を、より容易くより速かに改良し伝達するために、事物を、謂わば、束にして考察しまた談ずることが出来るようになるということである。

第四章 單純觀念<sup>イデア</sup>の名前に就いて

一 單純觀念<sup>イデア</sup>、様態、及び実体の名前は各々或る特有なものを持つ——すべての言葉は、私が示したように、直接には話者の心のうちの觀念<sup>イデア</sup>以外には何物をも意味しないのではあるが、しかし更によく調べて見ると、諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>、混合様態（この中に私は諸々の關係をも含む）、及び自然の実体の名前は、それぞれこれ等各々の部類に特有で他の部類とは異なる或るものを持っている。例えば、

二 第一に、單純觀念<sup>イデア</sup>及び実体の名前は実在的存在を示す *intimate real existence*——第一に、單純觀念<sup>イデア</sup>及び実体の名前は、それ等が直接に表示 *signify* する心の中の抽象的諸觀念<sup>イデア</sup>と共に、それ等の觀念<sup>イデア</sup>のはじめの原型 *original pattern* を引出すもとなつた或る実在的存在をも亦示す *intimate* 【暗示する】のである。然るに混合様態の名前は心の中に在る觀念<sup>イデア</sup>で終つて、我々が次章に於て更に詳細に見るであらうように、それ以上には少しも思考を導かないのである。

三 第二に、單純觀念<sup>イデア</sup>と様態の名前は常に実在的及び名目的の両本質を表示する *signify*——第二に、單純觀念<sup>イデア</sup>と様態の名前は常にそれ等の種の実在的並びに名目的本質を表示する。然るに自然の諸実体の名前は、我々が特に実体の名前を取り扱う章に於て示すであらうように、単にこれ等の種の名目的本質を示す以外に何物かを表示することは、もしあつたとしても、稀である。

四 第三に、單純觀念<sup>イデア</sup>の名前は定義することが出来ない——單純觀念<sup>イデア</sup>の名前は定義することが不可能であるが、すべての複雑觀念<sup>イデア</sup>に於てはそれが可能である。

【五 略 If all names were definable, it would be a Process in infinitum.】

【六 略 What a Definition is.】

【七 略 Simple Ideas, why undefinable.】

八 我々の諸觀念イデアとそれ等の名前に於けるこの相異を認めないことが、スコラ学派に於けるかの著しい徒事あてふを生じたのである、これは彼等がこれ等の單純觀念イデアの二、三のものに就いて我々に与える定義に於て容易に認めることが出来る。

【九 略】

〔二〇〕 光は眼底に活潑に當る多数の小球であると我々に言う人々はスコラ学派の人々よりも分り易く語るのであるが、しかもこれ等の言葉は、これ程よく理解される言葉はないのであるが、これは光という言葉が表示する觀念イデアを、それを前に理解していない人に知らしめないであろうことは、或る人がその人に、光は妖精達が若干の人々の額に対して彼等が他の人々の所を通り過ぎる間に一日中ラケットで打ちつけるテニスのボールの集まりであると言う場合と同様である。何となればこの事に關するこの説明を許すとしても、光の原因の觀念イデアが、たとえ我々が如何に精確なその觀念イデアを持つていようと、我々の中のかくも特殊の知覚である光そのものの觀念イデアを我々に与えないであろうことは、一片の鋭い鋼の形状と運動の觀念イデアが、それが我々のうちに生じ得る苦痛の觀念イデアを我々に与えないであろうのと同様である。というのは或る感覚の原因とその感覚そのものは、一つの感官のすべての單純觀念イデアに於て、二つの觀念イデアであり、如何なる二つの觀念イデアもこれ程違ふことは出来ぬ程、御互いに相異なり相隔たつた觀念イデアであ

る。

一 単純觀念<sup>イデア</sup>は、対象そのものが各々の種に指定された固有の入口によって心に与えるところの印象によつてのみ得られる。もしも諸々の単純觀念<sup>イデア</sup>がこのようにして受け取られないならば、それ等の觀念<sup>イデア</sup>の名前のどれかを説明しまたは定義するために用いられる世界中のすべての言葉は、我々のうちにそれ等が表示する觀念<sup>イデア</sup>を生ずることは決して出来ないであろう。このように考えない人は、何等かの言葉が彼にパイナップルの味を与え、彼をしてかの有名な美味しい果実の風味の眞の觀念<sup>イデア</sup>を持たしめることが出来るかどうか、試して見るがよい。彼の味覚にとつて未知ではない感覺的对象によつて刻み付けられた或る味の觀念<sup>イデア</sup>を彼が既に記憶の中に持つていて、その味とパイナップルの味とが似ていると人が彼に言う限りは、彼は彼の心の中のその似たものに近づくということ出来るであろう。然しこれは定義によつてその觀念<sup>イデア</sup>を与えることではなく、我々の心のうちに他の諸々の単純觀念<sup>イデア</sup>をそれ等の知られた名前によつて呼び起すことである、これ等の觀念<sup>イデア</sup>はやはり、その果実そのものの眞の味とは非常に異なるであろう。光と色、及びすべての他の単純觀念<sup>イデア</sup>に於ても同じことである。それ故に、或る言葉の表示する単純觀念<sup>イデア</sup>を、その固有の入口によつて、以前に心に受け入れたことのない人は、その言葉の意義を、如何なる定義の法則に従つて結合された如何なる他の言葉または音によつても、知るに到ることは出来ないのである。唯一の方法は彼の諸々の感官に固有の対象を働かしめそして彼のうちに彼が既に名前を覚えてゐる觀念<sup>イデア</sup>を造り出すことである。或る勉強好きな盲人で、目に見える対象に就いてひどく頭を悩まし、彼が屢々出会う光と色の名前を理解するために彼の書物と友達の説明を利用した人が、或る日自



分は今や緋あかとは何を意味するかが解ると自慢した。これに對して彼の友人が緋あかとは何かと尋ねると、その盲人は、それは喇叭の音のようなものと答えた。如何なるその他の單純觀念イデアの名前でも、定義またはそれを説明するために用いられる他の言葉によつてのみそれを理解しようと望む人は、それに就いて丁度この様な理解を持つであらう。

一二 複雑觀念イデアに於ては事情は全く別である、これは多くの單純觀念イデアから成り立つてゐるのであるから、以前には決して心の中になかつた複雑觀念イデアを其処に刻み付け、そしてその名前を理解せられるようにすることは、もしも定義の名辭のどの一つでもが説明を受ける人がそれ迄に決して考えたことのないような如何なる單純觀念イデアをも表示しないとすれば、その複合を成す幾つかの觀念イデアを教示する言葉の爲し得ることである。

### 【二三 略】

【二四 略】 The names of complex ideas “when to be made intelligible by words.”

【二五 略】 Fourthly, Names of simple Ideas of less doubtful.]

【二六 略】 Simple Ideas have few Ascents in linea praedicamentali.]

一七 單純狀態イデアの名前は單純觀念イデアの名前と殆ど同じことである。

## 第三卷 言葉に就いて

## 第五章 混合様態及び関係の名前に就いて

一 「混合様態」は、他の一般的な名辞の如くに、抽象的觀念<sup>イデア</sup>を表示する。

二 それ等の表示する觀念<sup>イデア</sup>は悟性によって作られる。

三 任意 *arbitrarily* に原型 *patterns* なしに作られる。

【四 略 How this is done.】

五 觀念<sup>イデア</sup>が屢々存在に先立つという点で明らかに任意である——流神罪または姦淫という觀念<sup>イデア</sup>は人々の心の中に形成せられ、また名前を与えられ、かようにしてこの種の混合様態はそのどちらも未だ犯されない前に構成せられ得たということ、またそれ等が悟性の中にだけしか存在していなかった時にも、今やあまりにも屢々現実<sup>イデア</sup>に存在するようになった時と同様に、論議と推理の対象となり、またそれ等に就いて同じように確実な真理が発見せられ得たということを誰が疑うことが出来るであろうか。

\* そこでロックは「道徳」は数学の如く証明の可能な抽象的な科学であると考え（第四卷第三章第十八節参照【本PDFでは略、関連は第一卷三章四節、第四卷四章七節でも】）【この脚注に対応する\*は見当たらないが、「推理の対象」であろう。】

【六 略 Instances: Murder, Incest, Stabbing】

【七 略 But still subservient to the End of Language】

【八 略 Whereof the intranslatable Words of divers Languages are a Proof.】

## 【九 略 This shows Species to be made for Communication.】

一〇 混合樣態に於ては結合を繋ぎ、それを一つの種となすのは名前である——というのはこれ等の複雑觀念<sup>イデア</sup>のばらばらの部分の間の結合は心によつて作られるのであるから、何等特殊の基礎を自然界に持たないこの結合は、もしも何か、謂わば、それを團結せしめ、諸部分がばらばらになるのを防ぐものがなかつたならば、再び無くなるであらう。それ故に集合を作るものは心ではあるけれども、それをしっかりと結び付けるところの、謂わば、結び目となるのはその名前である。凱旋式<sup>\*</sup>という言葉は何と恐しく多様な相異なる觀念<sup>イデア</sup>を結合してそれを一つの種として我々に伝えることか。もしもこの名前が作られたことがなかつたり或いは全く失われてしまつたとしても、疑いもなく、その儀式に於て何が起つたかという記述は為され得たであらう、然し乍らこれ等の相異なる部分を一つの複雑觀念<sup>イデア</sup>に統一して結合するものは、思うに、まさしくそれに結び付けられる言葉である、この言葉なしにはその様々な部分は、一回だけしか演ぜられたことがないために一つの名称のもとに一つの複雑觀念<sup>イデア</sup>に統一されたことのない如何なる他の見世物とも同様に、一つの物をなすとは考えられないであらう。

\* triumphus——古代ローマに於ける出征將軍のローマへの凱旋式。

## 【二 略】

〔一二〕我々が正義 justice または感謝 gratitude に就いて語るとき、我々は、何か存在する物で我々が心に描く conceive であらうものの如何なる表象 imagination frame to ををも想像 gratitude するのではなくして、我々の思考はこれ等の徳の抽象的觀念<sup>イデア</sup>に終つて、我々が馬または鉄について語る時の如くにそれ以上には及

ばない、馬や鉄の種の觀念<sup>イデア</sup>は我々はこれを単に心の中にあるものとして考えるのではなく、これ等の觀念<sup>イデア</sup>の原型 original Patterns を与える物自体の中にあるものとして考える。然るに混合様態、少なくともその最も重大な部分である道德的な事に於ては、我々は原型を心の中のものと考え、個々の事を名前のものとに區別するためには我々はこれ等の原型に訴えるのである。そこで私は、これ等の混合様態の種の本質は、特有の權利によつて悟性に属するものとして、より特別な名前によつて概念<sup>ノチオン</sup> notions と呼ばれることになるのであると思う。

【二三 略 Their being made by the Understanding without Patterns, shows the Reason why they are so compounded】

【二四 略 Names of mixed Modes stand away for their real Essences】

一五 何故に混合様態の名前は通常その觀念<sup>イデア</sup>より前に得られるか——この事はまた、何故に諸々の混合様態の名前は大抵、それ等が表示する觀念<sup>イデア</sup>が完全に知られる前に、得られるかという理由を我々に示すことが出来る。何故なればこれ等のうち名前を持つ種のみが注意されるから、またこれ等の種或いは寧ろその本質は心によつて任意に作られた抽象的な複雑觀念<sup>イデア</sup>であるから、これ等の複雑觀念<sup>イデア</sup>を形成しようとする前に名前を知ることが、必要ではないとしても、便宜である。私は、諸々の言語の初に於ては觀念<sup>イデア</sup>を、それに名前を与える前に、持つことが必要であつたということを認める、また今でも人が新しい複雑觀念<sup>イデア</sup>を作つて、それに新しい名前を与えることによつて、新しい語を作る場合にもそうである。然しこれは出来上つた言語に関することではない、既成の言語に於ては、子供等は混合様態の觀念<sup>イデア</sup>を持つ前にその名前を覚えるというのが普通の方法ではないであらうか。千人のうちで一体どの一人が名誉

及び野心という抽象的觀念イデアを、その名前を聞く前に、形成するであろうか。單純觀念イデアと実体に於ては事情が違ふことを私は認める、それ等は自然界に實在的な存在と結合を持つてゐる觀念イデアであるから、觀念または名前は、その場合に從つて、いずれかが他方の前に得られる。

一六 私がこの問題をかくも詳細に取り扱つた理由——ここで私が混合様態に關して述べたことは、極めて少しの相違を以て關係にも亦適用することが出来る、このことはあらゆる人が自分で認めるであろうから、私はこれを絮說じよせつする勞を取らずに置くことが出来るであろう、殊に私がここにこの第三卷に於て言葉に關して言つたことは、恐らく若干の人々によつてこんなつまらない問題の要求するよりはあまりに多いと思われるであろうから。私はそれをもつと狭い範圍に約めることが出来ることを認める、然し私は、私には新しくまた少しく側道にそれていると思われる議論（確かにそれは私が書き始めたときには私は私は考えなかつた議論である）に好んで読者を留めたのである。本質に關して如何なる騒ぎが為されるか、また言葉の不注意な混乱した使用と適用によつて如何に多く、すべての種類の知識、論議、及び談話が煩わされ妨げられるかを考察するときは、恐らくこの問題を完全に明らかにすることは為す価値があると考えられるであろう。人々は、もし彼等が流行の音を越えて見、あらゆる点で彼等の武装になつて居り、またそれを以て彼等が非常な自信を以て打つて掛かるところの言葉に、如何なる觀念イデアが含まれているかまたは含まれていないかを觀察しようとさえするならば、彼等がそれで以て頭が一杯で威丈高になつてゐる意見に、如何に少ししか道理と真理が混じていないか、或いは全く混じていないのを、屢々知るであろう。もしもこの問題を敷衍することによつて、私が、人々をして彼等自身の言語の

使用を反省せしめることが出来、また他の人々にも屢々あることであるから、彼等にとつても亦、非常に良い是認された言葉を、時々非常に不確実な意義を以て、極めて僅かな意義を以て、或いは全く無意味に話しまたは書くことがあり得るのではないかと疑う理由を彼等に与えることが出来るならば、私は真理、平和、及び学問に対して幾らかの奉仕を為したのだと信ずる。

## 第六章 実体の名前に就いて

一 実体の普通の名前は種を表示する——実体の普通の名前 common names は、他の一般的名辭と同様に、種 *genus* を表示する、これはそれ等の名前が、幾つかの個々の実体がその点で一致したまたは一致し得るかも知れないような複雑觀念<sup>イデア</sup>の符号となされ、これによつてそれ等の実体は一つの共通の觀念のうちに含まれ、一つの名前によつて表示されるということに他ならない。私は一致しまたは一致し得るかも知れないと言う、何となれば世界中に存在している太陽は一つしかないけれども、その觀念は抽象<sup>イデア</sup>されたものであるから、もつと多くの実体（もしも幾つかあるならば）がそれと一致し得るかも知れない、それは、恰も星と同じように多くの太陽があるかの如くに、やはり一つの種である。

二 各々の種の本質は抽象的觀念<sup>イデア</sup>である——各々の種即ちスピスイーズをその特別な種類となし他のものから区別するものは我々がその本質と呼ぶもので、これは名前を結び付けられる抽象的觀念<sup>イデア</sup>に他ならない、それ故にその觀念<sup>イデア</sup>のうちに含まれるあらゆるものはその種にとつて本質的である。このものは、我々の知っている自然の諸実体のすべての本質であり、またこれによつて我々はそれ等の実体を種に区別するのではあるが、しかも私はこれを名目的本質<sup>イデア</sup>という特有の名前で呼んで、それをこの名目的本質及びその種のすべての性質 *properties* の基づく実体の実在的構成と区別する、それ故にこの構成は、既に言つたように、実在的本質と呼んでもよい、例えば金の名目的本質は金という語の表示する複雑觀念<sup>イデア</sup>である、例えばそれは黄色の、一定の重さのある、展性の、可溶性の、耐火性の物体である。けれども

その實在的本質は、金のこれ等の性質及びすべての他の特性が基づくところのその物体の感知せられ得ない諸部分の構成である。この両者はともに本質と呼ばれるけれども如何に相異なるものであるかは明白である\*。

\* 第三章 第十五——第十九節参照。

三 名目的及び實在的本質は相異なる——何となれば恐らく、一定の形をした物体に結び付けられた、感覚と理性を伴うところの有意的運動 *voluntary motion* が、私及び他の人々が人間という名前を附ける複雑觀念<sup>イデア</sup>であり、それ故にそのように呼ばれる程の名目的本質ではあろうが、しかもその複雑觀念<sup>イデア</sup>が、その種に属するどれかの個体のうちに見出されるすべての作用の實在的本質であり源泉である、とは誰も言わないであろう。我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>の要素をなすすべての性質の基礎は何かこれとは全く異なるものである、そしてもしも人間の運動、感覚、及び推理の能力、並びにその他の力を生ずる源でありまた人間のかくも規則正しい形の基である人間の構成に関して、恐らく諸天使が持つて居り、また人間の創造者は確かに持つてゐるような知識を我々が持つていたならば、我々は人間の本質に関して、今この種に関する定義のうちに含まれるもの（たとえ如何なる定義であらうとも）とは全く別の觀念<sup>イデア</sup>を持つてであらう、そして如何なる一個の人間に関する我々の觀念<sup>イデア</sup>も、現在の觀念<sup>イデア</sup>と遙かに相異なるのは、恰もストラスブルグ\*の有名な時計の内部のすべての発条と歯車及びその他の装置を知っている人の觀念<sup>イデア</sup>が、ただ針の運動を見、時計の打つのを聞き、僅かにその外観の幾らかを観察する、見惚れている田舎者がそれに就いて持つ觀念<sup>イデア</sup>と異なるのと同様である。



\* ストラスブルグの大伽藍は十三及び十四世紀に建てられた立派なゴシック建築で、その高い塔と時計を以て有名である。

四 個体にとつては何等本質的なものはない——本質は、この語の普通の用法に於ては、種に關係するということ、及び個々の存在に於てはそれ等の存在が種に分けられるというより以上には本質は考察されない、ということとは次のことから明白である、即ち我々がそれによつて個体を分類し、それ等を共通の名前のもとに分けるところの抽象的觀念を取り去りさえすれば、そのときすぐにそれ等の個体のどれかにとつて本質的な如何なるものの考えも消えてしまう、我々は前者なしには後者の何等の概念をも持たない、このことが明らかに両者の關係を示す。私にとつては私のあるが俚にあることが必要である、神と自然が私をどのように作つた、然し私の持つてゐるもので私にとつて本質的なものは何もないのである。事故または病氣は私の色または形を非常に変えることが出来る、熱または墜落は私の理性または記憶を、或いは両方とも失わしめることが出来る、そして卒中は感覺をも悟性をも、否生命をもなくしてしまふことが出来る。私の形をしていて私の能力に比べてより多数のより優れた、或いはより少数のより劣つた能力を持つ他の創造物が造られ得る、また他の人々は私のとは非常に異なる形と身体のうち理性と感覺を持つことが出来る。これ等の性質のうちのどの一つも、心がそれを物の或る種即ちスピーズに属するものとなすまでは、或る人にとつても他の人にとつても、或いはたとえ如何なる個人にとつても本質的ではない、然し心がそう考えるときは直ちに、その種の抽象的觀念に従つて或るものが本質的であることが分る。誰でも自分自身の思考を吟味して見れば、彼が何か本質的なものを仮定し

またはこれについて語るや否や、或る種の考察または或る一般的な名前によつて表示される複雑觀念<sup>イデア</sup>が彼の心の中に這入つて来るのを見出すであらう、そしてこの性質またはあの性質が本質的であると言われるのはこれに関係してである。それ故にもしも、私または或る他の有形的個体によつて理性を持つことが本質的であるかどうかと問われるならば、私は否と答える、これは私がものを書いてある白い物にとつてその中に言葉を持つということが本質的でないのと同様である。然しもしもその個体が人間という種に数えらるべきもので、人間という名前を与えらるべきものであるならば、そのとき理性は、それが人間という名前の表示する複雑觀念<sup>イデア</sup>の一部であると仮定すれば、そのものにとつて本質的である、これはもしも私が私の書いているこの物に論文という名前を与え、その種に属せしめるならば、それにとつては言葉を含むということが本質的であるのと同様である。それ故に本質的であると本質的でないとはただ我々の抽象的觀念<sup>イデア</sup>とそれに附けられた名前にのみ関係する、これは要するに次のことに他ならない、即ち、或る一般的名辞の表示する抽象的觀念<sup>イデア</sup>のうちに含まれる諸性質を持つていない如何なる個物もその種のもとに列せられまたはその名前で呼ばれることは出来ない、何故なればその抽象的觀念<sup>イデア</sup>こそまさしくその種の本質であるからである。

五 そこでもしも物体の觀念<sup>イデア</sup>が、或る人々\*に於ては、単に延長または空間であるならば、固體性は物体にとつては本質的ではない、もしも他の人々が彼等が物体という名前を与える觀念<sup>イデア</sup>を固體性及び延長であるとなすならば、そのとき固體性は物体にとつて本質的である。もしも鉄の持つすべての他の性質は持つているが磁石に従う性質を欠いているような一片の物質が見出されたならば、それが何か本質

的なものを欠いているかどうかと問う人があるであろうか。實際存在している或るものがそれにとって本質的な何物かを欠いているかどうかと問うのは不合理なことであろう。またこの事が本質的或いは種別的 *specific* な相違をなすや否やと尋ねることも出来ないであろう、何故なれば我々は本質的なものまたは種別的なものに対しては、我々の抽象的觀念以外の如何なる標準をも持たないからである。そして一般的觀念及び名辞を参照することなしに、自然界の種別的相違を語るのは、理解し難き語り方である。すべてのかような型と標準を全く棄てて、個々の物をただその物として考察するならば、それ等の物にとってはそのすべての性質は同じように本質的であることが分るであろう、そして各々の個体のうちのあらゆるものはそれにとって本質的であり、或いは寧ろ全く何物も本質的ではないと言ってもよいであろう。何となれば磁石に従うことは鉄にとつて本質的であるかどうかと問うことは合理的ではあるうが、しかも思うに、このことが私がそれを以て自分のペンを切る特殊の一片の物質にとつて本質的であるかどうかを、それを鉄という名前のもとに、或いは一定の種に属するものとして考察することなしに、問うことは甚しく不当であり無意義である。

\* デカルト及びデカルト学派の人々を指す。

六 成る程私は屢々、諸実体に於いて、その名目的本質と私が呼ぶところのそれ等の実体の抽象的觀念とは異なる實在的本質を述べた。この實在的本質によつて私は、名目的本質のうちに結合され、常にそれと共に存在する co-exist ことが見出されるところのすべての性質 *properties* の基礎 *foundation* である或るものの實在的構成 *real constitution*、即ちあらゆる物がその外にある何物にも何の關係もなく、そ

れ自身のうちに持つている特殊の構成を意味するのである。然し本質は、この意味に於てさへも、或る種 *sort* に関係し、或る種 *species* を仮定する、何となれば本質は諸性質 *properties* の基づく實在的構成であるから、それは必然的に物の種を仮定する、諸性質は種にのみ属するのであつて個体には属しないから。例えば金の名目的本質は、展性と可溶性のあるかくも特有な色と重さのある物体であると仮定すれば、實在的本質は、これ等の性質とその結合が基づくところの物質の諸部分の構成であり、またその王水に溶ける性質、及びその複雑觀念<sup>イデア</sup>に伴うその他の諸性質の基礎である。諸々の本質と特性があるが、それ等はすべて、不変であると考えられている種または一般的抽象的觀念<sup>イデア</sup>の仮定に依つていのである、然し乍らこれ等の性質の何れかが本質的でありまたは引き離すことが出来ないように結び付けられている如何なる一片の個体的本質もない。本質的なものはその物がこのまたはあの種に属するための条件としてそれに属するのであるが、それが或る抽象的觀念<sup>イデア</sup>の名前のもとに列せられるという考察を棄てるならば、そのときはそれにとつて必然的な何物もなく、それから引き離すことの出来ぬ何物もないのである。実体の實在的本質に関しては、たしかに我々はそれが何であるかを正確に知らずに、ただその存在 *being* を仮定する、然しこれ等の實在的本質 *them* をやはり種 *species* と結合するものは、名目的本質であり、前者 *they* は後者の仮想的な基礎 *foundation* と原因である<sup>i</sup>。

七 名目的本質が種の限界を定める *bounds* —— 次に考察すべきことは、実体の種即ちスピスイーズの

i but that which annexes them still to the species is the nominal essence, of which they are the supposed foundation and cause. them・they の取り方で、実体 *them* を種と結合する名目的本質、実体 *they* は名目的本質の基礎、とも読めるのではないか。

別が決定されるのはこれ等の本質のうち何れによるかということ、そしてそれは名目的本質によることが明白である、ということである。何となれば種の印しである名前が表示するのは名目的本質のみであるからである。

### 【八略】

九 實在的本質ではない、我々はそれを知らない——また實際我々は諸物をそれ等の實在の本質によつて、部わけし分類し、従つて名付ける（それが分類の結果である）ことは出来ない、何故なれば我々は實在の本質を知らないから、我々の諸能力は、諸々の実体の知識と区別に向つて、我々がそれ等の中に認める感覺的觀念の集合より先には我々を導かない、この集合は我々が出来得るだけ留意した精確に作つても、しかもこれ等の性質の生ずる源である真の内的構成と相距ること、前述の如く、有名なストラスブルグの時計の外面的形状と運動のみを見る田舎者の觀念がその内部の装置と相距るよりも更に遠いのである。どんなにつまらない植物や動物でも最も広い悟性を混乱せしめる。我々のまわりの物を使い慣れることは、我々の驚異を取り去るけれども、それは我々の無智を治しはしない。我々が自分の踏んでいる石や自分の毎日取り扱っている鉄を吟味して見る段になると、我々は直ちに、我々がそれ等のものの作りを知らず、また我々がそれ等のうちに相異なる諸性質を見出すことの理由を示すことが出来ないのを知るのである。明らかに、それ等のものの性質の基づく内的構成は我々には未知である。何となればそれ等のものの中で我々が念頭に浮べることの出来る最も粗雑で明白な性質に留らんとするならば、鉛とアンチモニーを鎔解性あるものとなし、木と石をとけ難くするところの諸部分の組織、即ち

實在的本質は何であろうか。何が鉛と鉄に展性を与え、アンチモニーと石にこれを与えないのであろうか。

一〇 実体の形式でもない、それを我々はあまり知らない——それ故に、実体の様々な種はそれ等の特殊な内的な実体の形式を持つていうこと、及び諸実体をそれ等の真の種と類に區別するものはこれ等の形式であるということをお教えられた人々は、実体の諸形式、即ち全く理解し難い、我々が或る不明なまたは混乱した一般的概念すらも殆ど持つていないような或るものへの無益な研究に彼等の心に向けることによつて、更に遠く正しい道から離れたのである。

一一 名目的本質がそれによつて我々が種を區別するものであるということは、更に靈体 *spirits* によつて明らかである——我々は相異なる諸種の天使があると聞かされるが、しかも我々はそれ等の天使の明確なる種別的觀念を如何にして形成するかを知らない、それは一種以上の靈体の存在は不可能であるという考のためではなくして、我々自身から、即ち思考、喜び及び我々の身体の諸部分の運動に於ける我々自身の心の活動から引き出された少数の觀念以外には、かような存在に適用し得る單純觀念を持たない（またそれ以上に形成することも出来ない）から、我々は我々の觀念に於ては様々な種の靈体を相互に區別するには、我々が自分自身のうちに見出す作用と力をより高いまたはより低い程度に於てそれ等のものに属せしめるより他仕方がないのである。

一二 それ等には恐らく無数の種がある——諸種の感覺的な物が、我々の知っているまたそれ等のうちに認められる諸性質によつて相互に區別せられると同じ位に、我々が何の觀念をも持たぬ別個の諸性

質によつて相互に分離せられ區別せられるところの多種の靈体があるであろうということは考えられないことでもなく、また理性に背くことでもない。我々の下にある感覚的及び物質的なものの種よりもより多くの種の知的創造物が我々の上にあるということとは、私にとつては、すべての目に見える物体界に於ては全く空所または間隙が認められないということによつて、ありそうなことと思われる。すべて我々から全く下のものに於ては、緩やかな段階によつて、そして各々のへだたりに於て相互に極めて僅かしき違わない諸物の継続的な系列によつて降下して行くのである。翼を持った魚があり、それは空中界に於ては珍しいものではなく、また水中に住む若干の鳥で、その血は魚の如く冷く、その肉は魚の肉と非常に味が似ているので、几帳面な人々にも精進日にその肉が許されるようなものがある。鳥類と獸類の両方に非常に近くて両者の中間にある動物がある、両棲類は陸上動物と水中動物とを繋ぐ、海豹は陸及び海に棲む、海豚は温い血液と豚の内臓とを持つている、人魚や海の精に就いて確信を以て言い伝えられる事については言う迄もない。人間と呼ばれる幾つかの動物と同じ位の知識と理性を持つているように思われる若干の動物がある、動物界と植物界は非常に密接に結びつけられているので、もしも一方の最も下等なものと他方の最も高等なものを取るならば、それ等の間には殆ど何等大なる相違は認められないであろう。かくの如くして最も下等な最も有機的でない物質の部分に達するまで、我々は、到る処に於て、様々の種は御互いに繋がつて居り、殆ど感知せられ得ぬ程度に於てのみ相異なることを見出すであろう。そして我々が神の無限の力と叡智を考へるとき、宇宙の壯麗なる調和と造物主の偉大な設計と無限の善意にとつては、創造物の諸々の種が徐々に我々から下の方に降下して行くのを我々が

見るが如く、また緩やかな段階によつてそれ等が神の無限の完全に向つて我々から上の方に上昇して行くということが、相応しいことであると考えるべき理由が我々にはあるのである、もしもこれがありそうなことであるならば、そのとき我々は我々の上には、下にあるよりも遙かにより多く創造物の種があると確信すべき理由がある、何故なれば我々は完全の程度に於て、我々が、存在の最も低い状態、そして無に最も近づいているものから隔たつてゐるよりも遙かに遠く神の無限の存在から離れてゐるからである。それにも拘らずすべてのこれ等の別々の種に就いては、上に述べた理由によつて、我々は何等明瞭判明な觀念イデアを持つていないのである。

【一三 略 The Nominal Essence that of the Species, as conceived by us, proved from Water and Ice】

一四 一定数の實在的本質を仮定することの困難——一定の明確な物の本質または形式があつて、それによつてすべての存在している個体は本性上諸々の種に区別されるのであるという普通の仮定に従つて実体的存在を諸々の種に区別するためには次のことが必要である、

一五 第一に、自然は、諸々の物を生産する場合に、常にそれ等の物が、生産せらるべきすべての物の型 *modes* となるべき一定の規則立つて *regulated* 確定した本質を享ける *partake* ように設計するものであると確信すること。このことは、普通提言される有りの俣の意味に於ては、我々がこれに対して充分同意し得るためには、更によく説明する必要があるであらう。

一六 第二、自然は常に、それが物を生産する場合に設計する本質に到達 *attains* するかどうかを知ることが必要であらう。様々の種類の動物に於て認められた変則で畸形の出産は常に我々にこれ等二つ【第



一と第二」のこの一方または両方を疑う理由を与えるであらう。

一七 第三に、我々が怪物 *monsters* と呼ぶところのものは、種という語のスコラ哲学の概念によれば實際明確なる種であるかどうかが決定さるべきである、何故なれば存在するものは何物でもその特殊の構成を持つてゐることは確かである、しかもこれ等の奇怪な産物の若干は、彼等の起原であり、彼等がその由来上所屬すると思われるところの種の本質の結果でありこれに附随するものと仮定せられる諸性質を、殆ど或いは全く持つていないということを我々は見出すからである。

【二八 略 Our nominal essences of substances, not perfect collections of properties. — Fourthly】

【二九 略 Fifthly】

二〇 これ等すべてのことによつて我々が諸々の実体を名前によつて區別することは少しも彼等の實在的本質に基づいてゐるのではないということ、また我々は内的な本質的相違によつて彼等を嚴密に種に分類し決定することを要求することも出来ないということ、が明らかである。

【二一】我々はただ吟味することによつて存在している諸物のうちに結び合はれてゐることを我々が見出すような多数の單純觀念<sup>イデア</sup>を集め、そしてそれから一つの複雜觀念<sup>イデア</sup>を作ることが出来るだけである。或る物の本質は、我々にとっては、その名前によつて包含せられまた印し付けられる全複雜觀念<sup>イデア</sup>である、そして諸々の实体に於ては、それ等を形成する幾つかの明確な單純觀念<sup>イデア</sup>の他に、实体という、不明瞭な觀念<sup>イデア</sup>、即ちそれ等の觀念<sup>イデア</sup>の結合の未知の支持と原因という觀念<sup>イデア</sup>が常にその一部を成してゐる。

【一二 略 Our abstract ideas are to us the measures of species ; instance in that of man.】

## 第三卷 言葉に就いて

【二三 略 Species not distinguished by generation.】

【二四 略 Not by substantial forms.】

二五 種の本質は心によつて作られる。

二六 それ故に非常に不定であり不確定である。

【二七 略】

二八 然し乍ら諸実体の名目的本質は心によつて作られるが、しかもそれ等は混合様態の本質程勝手に作られはしない。心は、その諸々の実体に関する複雑觀念<sup>イデア</sup>を作る際には、自然に於て結合していると考えられないようなものは一つも一緒にしない。人々は若干の性質が常に結合されて一緒に存在しているのを認めると、この点に於て自然を模倣した、そしてかように結合された諸觀念<sup>イデア</sup>から彼等の実体の複雑觀念<sup>イデア</sup>を作った。何となれば人々は彼等の好きな如何なる複雑觀念<sup>イデア</sup>をも作ることが出来、またそれ等に彼等の附けたい如何なる名前でも与えることが出来るけれども、しかも彼等が実際に存在している物に就いて語るとき人に理解してもらおうとするならば、彼等は、或る程度に於て、彼等の觀念<sup>イデア</sup>を自分の語らんとする物に一致せしめねばならない。然らずんば人々の言語はバベルの言語の如くなるであらう、そしてあらゆる人の言葉は、自分自身にのみ理解せられるものであるから、もしもそれ等の言葉が表示する諸觀念<sup>イデア</sup>が或る点から見て実際に存在するような諸々の実体の普通の外観と組立に相応しないならば、もはや会話と生活上の普通の事柄には役立たないであらう。

\* 太古バビロン人が天に昇るために高い塔を建築せんとしたが、塔の漸く高くなるに及び塔上と塔下と言語が通ぜず、

囂々として大混乱を生じ計画は失敗に帰したと伝えられる。

二九 人間の心は、その実体に関する複雑觀念<sup>イデア</sup>を作る際に、實際に一緒に存在しないか或いは一緒に存在すると考えられないような如何なるものをも決して一緒にはいしない、だから心は本当にその結合を自然から借りて来るのではあるが、しかも心が結合する觀念<sup>イデア</sup>の数はその複雑觀念<sup>イデア</sup>を作る人の色々な程度の注意、勤勉、または想像力に依るのである。人々は一般に少数の感覺的な明白な性質を以て満足する、そして常にはなくとも屢々、彼等が取り上げる性質と同様に實質的にしっかりと結びついてゐる諸性質を取り残すのである。感知せられ得る実体には二つの種類がある。一つは種<sup>たね</sup>によつて繁殖する有機的の実体である、そしてこれ等に於ては形が我々にとつて主要なる性質であり、種を決定する最も特質的な部分である。何となれば若干の人々は理性的動物、animal rationaleという彼等の定義を賞美するようではあるけれども、もしも言語と理性を具えてはいるが普通の人間の形を享有していない或る創造物が見出されたならば、たとえ如何に確かにそれが理性的動物であつたとしても、それは殆ど人間としては通用しない hardly pass であろうと私は信ずる。そしてもしもペイラム<sup>\*</sup>の驢馬が或る時その主人と語つた如く理性的に、その生きてゐる間ずっと語つたとしても、如何なる人も彼を人間の名に値すると考えたであろうか、或いは彼が自分自身と同一の種であることを許したであろうかどうかを私は疑う。我々の最も目を留めまた最も導かれるものは植物と動物に於ては形であるが如くに、種<sup>たね</sup>によつて繁殖しない大抵の他の物体に於てはその色である。それ故に我々が金の色を見出す場合には、我々是我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>のうちに含まれるすべての性質も亦其処に在るものと想像し勝ちである、そして我々は通常これ等の二つ

の最も明白な性質、即ち形と色を、様々な種の大なる推定の根拠となる観念<sup>イデア</sup>と考えるので、良い絵に向つては、ただ画筆によつて目に示される色々な形と色のみによつて、我々は容易くこれはライオンであり、あれはバラである、これは金色の、そしてあれは銀色の大盃であると言うのである。

\* \* Balam — 旧訳全書にあるヘブライの予言者。

【三〇 略 Which yet serve for common converse】

【三一 略 Essences of species under the same name, very different.】

三二 我々の観念<sup>イデア</sup>は一般的であればある程不完全でありまた部分的である——もしも最も下等な種 lowest species または個体の最初の分類 first sorting の名目的本質をなすところの単純観念の数がそれ等の観念を色々に寄せ集める人の心に依るならば、論理学の先生達が類と呼ぶところの更に包括的な種類に於てはこの依存関係は更に大いに明白である。これ等は故意に不完全になつてゐる観念である、そして物そのもののうちに見出さるべき諸性質のうちの幾つかが態<sup>むぎ</sup>と類的観念<sup>イデア</sup>から除かれてゐることが一見して明らかである。それ故に類と種のこの全問題に於て、類または更に包括的なものは、種の中にあるものの部分的概念にすぎないのであり、種は各個体の中に見出さるべきものの部分的観念<sup>イデア</sup>にすぎないのである。それ故にもしも或る人が、人間、馬、動物、植物、等が自然によつて作られた実在的本質によつて区別せられると考えるならば、その人は自然がこれ等の実在的本質に就いて大變氣前がよいと考えねばならぬ、自然は身体に対して一つの本質を、動物に対していま一つを、馬に対して更に一つを作り、そしてすべてのこれ等の本質を鷹揚<sup>おうよう</sup>にビューセファラスに与えたからである。

【三三】略 This all accommodated to the end of the Speech.】

【三四】略 Instance in cassaries[Cassowaries].】

三五 人間が種 *sorts* を決定する。

三六 自然は類似 *similitudes* を作る——そこで要するにこういう訳になる、即ち自然は多くの感覺的性質に於て實際相互に一致し、そして恐らくその内的組織と構成に於ても亦相一致するような多くの個物を作る、然しそれ等の物を種に区別するのはこの實在的本質ではない、それ等の物のうちに結合されているのが見出される諸性質を契機とし、またこの点に於て幾つかの個体が屢々一致することを認めて、包括的な符号の便宜のためにそれ等の物を名付けるために種に分けるのは人々である、この符号のもとに於ては諸々の個物は、それ等がこのまたはあの抽象的觀念に一致するに従つて、旗のもとに配列せられるが如く、分類せられるようになる、それ故にこれは青の、あれは赤の聯隊に属し、これは人で、あれは狒々<sup>ひび</sup>であるということになる、そしてこの点に類と種のすべての仕事があるのだと私は思う。

【三七】私は、自然は個々の存在を絶えず産出する際に、これ等を常に新しくまた変つたものにはしないで、相互に非常によく似た同質の物となすことを否定はしない、けれどもそれにも拘らず、人々が物を分類するための種の限界は人々によって作られるということは真実であると思う、何故なれば色々な名前によって区別せられる種の本質は、既に証明したように、人間の作るものであつて、その素<sup>もと</sup>である物の内的性質には減多に相応しないからである。

【三八〜四六】略】

四七 「例えば次の如く假定して見よう」即ちアダムが始めて「金」\*という名前を以て表示したものは堅く、輝いて居る、黄色の、そして非常に重い物体に他ならなかった、と。人間の詮索好きな心は、これ等の謂わば表面的な性質の知識を以て満足せず、アダムをしてこの物質を更に吟味せしめる。そこで彼はその内部に何を見出すことが出来るかを知るためにそれを火打石で打ち叩く、彼はそれが打つとへこむけれども容易に断片に分れないのを知る、彼はそれが折れずに曲がることを知る。今や展性が彼の前の観念<sup>イデア</sup>に附け加えられ、「金」という名前の表示する種の本質の一部を成すことになるのではなからうか。更にためして見ると可溶性と耐火性が発見せられる。これ等の性質も亦、その他のどの性質の場合とも同一の理由で、その複雑観念<sup>イデア</sup>の中に入れらるべきではないであらうか。もしそうでなければ、或る性質よりも他の性質を認める如何なる理由が示されるであらうか。もしもこれ等の性質が取り上げらるべきであるならば、そのときはそれ以上の如何なる試みによつてもこの物質のうちに発見せられるすべての他の性質は、同一の理由によつて、その名前の表示する複雑観念<sup>イデア</sup>の要素の一部をなすべきであり、それ故にその名前によつて印し付けられる種の本質であるべきである。これ等の性質は無限にあるが故に、この原型によつてこの様にして作られた観念<sup>イデア</sup>が常に不完全であることは明らかである。

\* 原書には "zohar" (アダムがその子の一人が初めて山から金の塊を持つて来たときにこれを "zohar" と名付けたとある) となつて居るが、本訳ではこの事に関する不要の説明を省略し、しかもこの引例が理解せられるように、プリングル・パティスン氏の版に従つて "gold" (金) として置いた。

四八 人々の観念<sup>イデア</sup>は不完全でありそれ故に色々である——然しこれがすべてではない、次のことも亦

起るであろう、即ち諸々の実体の名前は色々の意義を持つている（實際に持つているように）のみならず、色々の人によつて用いられるときはまた色々の意義を持つものと仮定せられる、このことは大いに言語の使用を妨げる。何となればもしも或る人によつて或る物質のうちに発見せられるあらゆる特殊の性質が、その物質に与えられる普通の名前の表示する複雑觀念<sup>イデア</sup>の欠くべからざる一部を成すものと仮定したならば、どうしても人々は、同一の語が相異なる人々に於ては相異なる物を表示すると仮定せねばならぬことになる、何故なれば彼等は、色々な人が、同一の名辞を持つ実体のうちに、他の人々が少しも知らない様々な性質を発見したであろうということ、を疑うことは出来ないからである。

四九 それ故に諸々の実体の種 *species* を固定するために、實在的本質が仮定せられる——そこでこのことを避けるために、人々はあらゆる種に属する實在的本質を假定し、これ等の性質はすべてこれから生ずるものとなし、彼等の種の名前を以てこれを表示せしめようとしたのである。然し乍ら彼等は実体のうちのこの實在的本質に関しては何等の觀念<sup>イデア</sup>をも持つて居らず、また彼等の言葉は彼等の持つてゐる觀念<sup>イデア</sup>以外の何物をも表示しないのであるから、この試みによつて為されることは、實在的本質が何であるかを知ることなしに、ただその名前または音をその實在的本質を持つ物の代りにその場折に置くだけのことである、そしてこれが、人々が諸々の物の種に就いて、それ等が自然によつて作られそして實在的本質によつて區別せられるという考えを以つて語る時に、彼等の為すことなのである。

【五〇 略 Which supposition is of no use.】

【五一 略 Conclusion.】

## 第三卷 言葉に就いて

## 〔第七章 無変化語に就いて〕



## 第八章 抽象的及び具体的名辞 concrete terms に就いて

一 抽象的名辞は相互に述語となることが出来ない、それは何故であるか——各々の抽象的觀念<sup>イデア</sup>は別々のものであり、それ故にどの二つを取つても一方は決して他方ではあり得ないのであるから、心はその直覺的知識によつて、それ等の相違を知覚するであらう、それ故に命題のうちに於ては如何なる二つの完全な觀念<sup>イデア</sup>も決して一方が他方を断定する be affirmed ことは出来ない。このことを我々は、如何なる二つの抽象的な語または抽象的觀念<sup>イデア</sup>の名前も、その一方が他方を断定することを許さないところの言語の普通の方法に於て見るのである。何となれば人間が動物であり、或いは理性的であり、或いは白いということがたとえ如何に確かであつても、しかもあらゆる人は、人間性は動物性である、或いは合理性である、或いは白さである、というような命題を始めて聞いたときその不正 falshood を認める、そしてこのことはどの最もよく認められている公理とも同様に明白である。そこですべての我々の断定は具体的なものにのみ関係する、それは一つの抽象的觀念<sup>イデア</sup>が他の抽象的觀念<sup>イデア</sup>であることを断定するのではなく、一つの抽象的觀念<sup>イデア</sup>が他の抽象的觀念<sup>イデア</sup>に結び付けられていることを断定するのである。例えば人間は白い、ということとは人間の本質を持つているものがその中に白さの本質をも持つてゐる、ということの意味するのである。

二 抽象的名辞は我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の相違を示す——この名前の区別がまた我々に我々の觀念<sup>イデア</sup>の相違を示す、何となればもし我々が諸々の觀念<sup>イデア</sup>を観察するならば、我々は、我々の單純觀念<sup>イデア</sup>はすべて具体的な名

前と共に抽象的な名前を持つていることを見出すであろうから、そしてこれ等のうちの後者は（文法家の言葉で言えば）名詞であり、前者は形容詞である、例えば白さと白い、甘さと甘い<sup>イデア</sup>の如く。同様なことがまた、例えば正義と正しい、平等と平等なる、の如く我々の様態及び関係に関する觀念<sup>イデア</sup>に於てもあてはまるのである。然し我々の実体の觀念<sup>イデア</sup>に関しては、我々は極めて少数の抽象的な名前を持つたか、或いは全く持たないのである。何となれば、スコラ学派の人々は動物性<sup>アニマルリス</sup>、人間性<sup>フマニタス</sup>、有形性<sup>コルポレイタス</sup>、及びその他若干を導入したが、しかもそれ等は諸々の実体の名前の無限の数とは決して釣合っていない、そして彼等は決してこれ等の実体の名前に対して抽象的な名前を作り出す程馬鹿らしいことはしなかつた。このことは私にとつては少なくとも、すべての人類が諸々の実体の實在的本質に関して何等の觀念<sup>イデア</sup>をも持つていないという彼等の告白を暗に示すものであると思われる、何故なれば彼等はかような諸觀念<sup>イデア</sup>に対する名前を持つていないからである。もしも自分がかようなものを知らないという彼等の意識が、彼等をしてかくも無益な試みをなすことを止めなかつたならば、彼等は疑いもなくかような名前を作ろうとしたであらう。それ故に彼等は、金を石と、また金属を木と区別するに充分な觀念<sup>イデア</sup>を持つていたにも拘らず、なお彼等はほんのびくびくし乍らも敢て *yet they but timorously* 金性<sup>イデア</sup>（aurietas）と石性<sup>イデア</sup>（saxietas）、金属性<sup>イデア</sup>（metallietas）とか木材性<sup>イデア</sup>（ligneitas）の如き、或いはそれ等に似た名辞を作つて見たのである。そして確かに、動物性、と人間性及びそのような語を初めて作り出してこれを導入したのは、実体の形式の学説と、誤つて自分の知らぬことも知つていと主張する人々の確信とに他ならぬのである。しかもこれ等の語は彼等自身の学派以外には殆ど及ばなかつたし、また賢明な人々の間に於ては決して流通するよう

にはなり得なかつたのである。

〔本巻の残余の諸章、第九、十、十一章（言葉の欠点に就いて、言葉の濫用に就いて、前述の欠点及濫用の矯正法に就いて）は、この論文の他の何処にも出て来ない哲学上重要なことのみを含むものであるから、ここにはこれを省略する。〕

## 第四卷 知識と蓋然性に就いて<sup>i</sup>

### 第一章 知識一般に就いて

一 我々の知識 *knowledge* は我々の觀念<sup>イデア</sup>に関する *conversant* ものである——心はそのすべての思考と推理に於て、心のみが考察 *contemplate* しまは考察することの出来るそれ自身の諸觀念<sup>イデア</sup>以外には如何なる他の直接の対象をも持たないのであるから、我々の知識はただこれ等の觀念<sup>イデア</sup>にのみ関するものであることは明白である。

二 知識は二つの觀念<sup>イデア</sup>の一致 *Agreement* または不一致 *Disagreement* の知覚 *perception* である——それ故に知識は、私にとつては、我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の或るものの結合 *the connexion* と一致、または不一致と背反 *repugnancy* の知覚に他ならないと思われる。この点にのみ知識は存する。この知覚があるところには必ず知識がある、そしてそれがない場合には、たとえ我々が空想し *fancy*、推測し *guess*、または信じよう *believe* とし、我々は常に知識には達しないのである。<sup>\*</sup> 何となれば我々が白は黒ではないということを知るとき、これ等の二つの觀念<sup>イデア</sup>は一致しないということを知覚する以外に我々は何をなすであらうか。我々が、三角形の三つの角は二直角に等しいという証明の最高の確実性を獲得するとき、二直角に等しいということは三角形の三つの角と必然的に一致しまた不可分離であるということを知覚する以上に

<sup>i</sup> 表題に "*knowledge and probability*" を取っているが、大槻・八太訳では "*knowledge and opinion*"

我々は何をなすであろうか。

\* この場合には知識は直覚的または論証的確実性のみを意味している。ここに知覚 (perception) というのは、勿論現代の心理学に言う知覚ではなく了解という位の意味である。

三 この一致は四様である——然し乍らこの一致または不一致は如何なる点に存するかをいま少しく明確に理解するために我々はそのすべてを次の四種類に帰することが出来ると思う、(一) 同一または差異 Identity or diversity。(二) 関係 Relation。(三) 共在 Co-existence \* または必然的結合 necessary connection。(四) 実在的存在 real existence。

\* 共在とはロックの説明によれば、何等の必然的な結合を認めることの出来ない場合の事実上の並在である。

四 第一に、同一または差異 Diversity に就いて——一致または不一致の第一の種類、即ち同一または差異に就いて言えば、それは、心が兎に角或る感じ sentiments または観念<sup>イデア</sup>を持つとき、その諸観念<sup>イデア</sup>を知覚するところの心の最初の働きであり、心がそれ等の観念<sup>イデア</sup>を知覚する限りその各々が何であるかを知り、それによってまたそれ等の相違を知覚し、一つの観念<sup>イデア</sup>が他の観念<sup>イデア</sup>でないということを知るところの心の最初の働きである。これは全く絶対的に必要なことであつて、この働きなしには如何なる知識も、如何なる推理も、如何なる想像も、総じて如何なる明確な思考もあり得ない。これによつて心は明らかにまた間違ひなく、各々の観念<sup>イデア</sup>がそれ自身と一致し、そのものであるということ、またすべての別個の distinct 観念<sup>イデア</sup>は一致しない、というのは一つの観念<sup>イデア</sup>は他の観念<sup>イデア</sup>ではないということ、を知覚する、そして心はこのことを苦心も骨折も、または推論をもなさずして、一見してその知覚と区別の自然の力によつ

てなすのである。そして熟練家達 *men of art* 【論理学者】は、このことを考えて見る機会のあり得るすべての場合に容易く適用せられ得るように、これを、在るものは在る、及び、同一の物にとつては同時に存在した存在せぬことは不可能である、という一般的法則 *general rules* に帰したけれども、しかもこの能力は個々の観念に就いて最初に行使されるということは確かである。如何なる人も彼が白いまた円いと呼ぶ観念がまさしくその観念であつて、それは彼が赤いまたは四角いと呼ぶ他の観念ではないということを、彼がその観念を彼の心の中に持つや否や間違ひなく知るのである。また世界中の如何なる公理 *maxim* または命題も、彼が前にそして如何なるかのような一般的法則もなしに知つたよりもより明らかにまたはより確かにこの事を彼に知らしめない。それ故にこれが、心がその観念のうちに知覚する第一の一致または不一致である、心はこれを常に一見して知覚するのであつて、もしもこれに就いて何等かの疑いが起るようなことがあれば、それは常に名辭に就いてであつて観念そのものに就いてではないことが分るのである、その名辭の同一と差異は常に観念そのものと同じように直ぐにまた明らかに知覚されるであらうし、またそうでないことは決してあり得ない\*。

\* 第二卷、第二十九章、第六——第十節参照。

五 第二に、關係 *Relative*——心がその諸観念のどれか或るもののうちに知覚する一致または不一致の次の種類は關係的と呼ぶことが出来ると思う、そしてこれは如何なる種類の観念であらうとも、実体であらうと、様態 *modes* であらうと、その他如何なるものであらうとも、或る二つの観念の間の關係の知覚に他ならないのである。何となればすべての別個の *distinct* 観念は何時でも、同一でないことが知

られそれ故に一般に universally また常に constantly 相互に否定せられるに違いないのであるから、もしも我々が我々の諸觀念<sup>イデア</sup>の間に何等の關係をも知覚することが出来ず、また心がそれ等の觀念<sup>イデア</sup>を比較する場合に取る色々な方法によつて、それ等相互の一致または不一致を見出すことも出来なかつたならば、何等かの実証的 positive 知識を得る余地は全くあり得ないであらう。

六 第三に、共在に就いて——我々の觀念<sup>イデア</sup>のうちに見出される一致または不一致で、心がそれに就いて知覚を働かせる第三の種類は、同一主体のうちに於ける共在または非共在である、そして、これは特に諸々の実体に属する。<sup>\*</sup>そこで我々が金に關してそれは火に耐える that it is fixed 【固形性を持つ】と明言するとき、この真理に關する我々の知識は、耐火性 fixedness、即ち火の中で燃えないでいる力は、金という語によつて表示される我々の複雑觀念<sup>イデア</sup>を成すところのかの特別な種類の黄色さ、重さ、可塑性、展性、及び王水に溶ける性質に常に伴い結び付いている觀念<sup>イデア</sup>であるということに他ならぬのである。

\* 共在はロックにとつては同一実体に於ける諸性質の共在を意味するが、実際上は普通因果と言われる連続をも含む。

七 第四に、實在的存在に就いて——第四のそして最後の種類は、現実の實在的存在 actual real existence が或る觀念<sup>イデア</sup>に一致する<sup>\*</sup>ということである。一致または不一致のこれ等の四つの種類の中に、我々が持つている或いは持ち得るすべての知識は含まれていると私は思う、何となれば我々の諸觀念<sup>イデア</sup>のうちの何れかに關して我々のなし得るすべての研究、それ等の觀念<sup>イデア</sup>のうちの何れかに關して我々が知るまたは断言し得るすべてのことは、それが或る他のものと同一であるまたは同一でないということ、それは或る他の觀念<sup>イデア</sup>と同一主体のうちに常に共在するまたはしないということ、それは或る他の觀念<sup>イデア</sup>に対し

てこのまたはあの関係を持つているということ、或いはそれは心の外 without the mind に実在的存在 *real existence* を持つてゐるということ<sup>\*\*\*</sup>であるからである。かくして「青は黄でない」は同一に関する。「二つの平行線の間にある相等しい底辺上の二つの三角形は等しい」は関係に関する。「鉄は磁石の影響を感ずる」は共在に関する。「神は存在する」は実在的存在に関する。同一と共在は実は *同一* 関係に他ならぬのではあるが、それ等は我々の觀念の一致または不一致の非常に特殊な仕方 *so peculiar ways* であるから、関係一般のもとにはなく、別の項目として考察されるに充分値するのである、何故なれば誰でもこの論文の数ヶ所に於て言われていることを思い返す人には容易く分るであらうように、それ等は肯定と否定の非常に異なる根拠であるからである。私は今や進んで我々の知識の色々な程度を吟味したのであるが、先ず知識<sup>イデア</sup>という語の色々な意義を考察することが必要である。

\* この関係は厳密に言えば決して觀念間の関係ではない。第四卷、第七章、第七節参照。

\*\* 非常に不正確な表現であるが、「觀念の關係する實在的對象があること」という意味に解すべきであらう。

八 現実的 *actual* 及び習慣的 *habitual* 知識——心が真理を所有するには色々な仕方があつて、その各々は知識と呼ばれる。

(一) 現実的知識がある、これは心がその諸觀念の或るものの一致または不一致に関して、或いはそれ等相互の間の關係に関して持つてゐる現在の考え *present view* である。

(二) 人は一度或る命題が彼の思考の前に置かれたのでその要素である觀念の一致または不一致を彼



が明らかに知覚したような命題を知っているとされる、そしてその命題はそのように彼の記憶のうちに宿るようになる、それが再び思い出されるに到る時は何時でも彼は疑いも躊躇もなくそれが正しいという考えを抱き、その真理を承認した確信するのである。これを我々は習慣的知識と呼ぶことが出来ると思う。何となれば我々の有限なる悟性は一時には一つの物に就いてだけしか明晰判明に考えることが出来ないものであるから、もしも人々は彼等が現実と考えて居ることより以上の何の知識も持っていないのであるならば、最も多くの知識を持った人もただ一つの真理しか知らないことになるであろう、それが彼が一時に考えることの出来るすべてであろうから。

九 習慣的知識に二通りある——習慣的知識のうちにも亦、通俗的に言えば、二つの程度がある——第一、一方は、諸々の觀念が心に思い浮べられるときは何時でも心がそれ等の觀念の間に關係を實際に知覚するような、記憶のうちに貯えられている真理に関するものである。そしてこれは我々が直覺的に知っている an intuitive knowledge ような真理の場合であつて、ここでは諸觀念そのものが、直接の考察 immediate view によつて、我々にそれ等相互の一致または不一致を明らかにするのである。

第二、他方は、かつて確信したことがあるので、心は証明なしにその確信の記憶を把持している、というような真理に関するものである。即ち三角形の三つの角は二直角に等しいという証明を自分がかつて知覚したことがあるということを確かに憶えている人は、彼がそれを知っていると確信している、何故なれば彼はそれが真理であることを疑うことが出来ないから。或る人が或る真理をはじめに知った時の i For と受ける直前の文が訳では省かれている。繰り返しのようなことであるので、意味は通る。

第四卷 知識と蓋然性に就いて

証明を忘れた場合にその真理を固執するとき、その人は実際に知つているというよりも寧ろ彼の記憶を信ずると考えられ得るし、また真理を保持するこの仕方は意見 *opinion* と知識との中間にある或るもの、即ち、単にそう思つてゐる——これは他人の証明 *testimony* に依つてゐるが故に——という以上の一種の確信のようなものである、と以前私には思われたのであるが、然るべき吟味によつて私はそれが完全な確実性に達せぬものではなく、事実上真の知識であることを見出すのである。この問題に於て我々の最初の思考を誤謬に導き勝ちであることは、諸觀念の一致または不一致は、この場合に於ては、最初の場合に於けるが如く、その命題の中の觀念の一致または不一致をはじめに知覚せしめたすべての中間の觀念を實際に檢分することによつて知覚されるのではなくて、その命題の中に含まれて居つてその確実であることを我々が憶えてゐる諸觀念の一致または不一致を示すところの他の中間の諸觀念による、ということである。例えば、「三角形の三つの角は二直角に等しい」という命題に於て、かつてこの真理の証明を見、そして明らかに知覚したことのある人は、その証明が彼の心を離れて仕舞つてそれ故に現在では實際に見られていず、決して思い出され得ない時にも、これが真であることを知る、然し彼はそれを、前に知つたのとは別の方法で知るのである。その命題の中で結び付けられてゐる二つの觀念の一致が知覚されるのであるが、それは最初にその知覚を生じた觀念とは別の觀念の介在によるのである。彼は自分がかつて「三角形の三つの角は二直角に等しい」というこの命題の真理を確信したということをお憶へてゐる、即ち、知つてゐる（何となれば記憶はある過去の知識の復活に他ならないから）のである。同じ不変な物の間の同じ關係の不変性が、今や彼に、三角形の三つの角が一度二直角に等しかつたなら

ば、それは常に二直角に等しいものであるということを示すところの觀念イデアなのである。そこで彼は、与えられた場合に於て一度真であつたことは何時でも真である、即ち一度一致した觀念イデアは何時でも一致するということ、従つて一度彼が真であると知つたことは、彼が自分が一度それを知つたということを憶えている限りは、彼は常に真であることを知るということを確信するに到るのである。数学に於ける特殊の証明が一般的知識を与えるのはこの根拠によるのである。そこでもしも同じ觀念イデアは永久に同じ性質と關係を持つものであるということの知覚が知識の充分な根拠でなかつたならば、数学に於ける一般的命題に関する何等の知識もあり得ないであろう、何となれば如何なる数学の証明も特殊的なものに違いないであろうし、或る人が一つの三角形または円に關して或る命題を証明したとき、彼の知識はその特殊な円形マ【diagram 図形】マ以上には達しないであろうから。<sup>\*.\*</sup>もしも彼がその知識を更に拡張しようとするならば、いま二つの同様な三角形に於ても真であるということを知り得るためには、いま一つの例に於て彼の証明を新たにせねばならぬ、そして以下同様である。この方法によつては我々は決して如何なる一般的命題の知識にも到達することは出来ないであろう。思うに、如何なる人も、ニュートン氏は彼が今任意の時に彼の本の中で読む或る命題が真であるということを確認に知つていることを否定することは出来ない、初めに彼をしてそれが真であることを発見せしめた中間にある諸觀念イデアのあの驚くべき連鎖を彼は今実際に視てゐるのではないけれども。かくの如き特殊なものの系列を保持することの出来るこのような記憶力は、その驚くべき諸觀念イデアの結合を発見し、知覚し、結び付けることその事が大抵の読者の理解力を越えているとき、全く人間の能力の及ばない beyond the reach ことと考えられるであろう。し

第四卷 知識と蓋然性に就いて

かも著者自身が、自分がかつてこれ等の觀念イデアの結合を見たことを憶えているときは、その命題の真であることを知っているのは、彼が或る人が他の人を突き刺すのを見たことを憶えているとき、前者が後者を傷けたことを知っていると同様に確実であることは明らかである。然し記憶は常に現実の知覚程明晰でなく、またすべての人々に於て時の経つにつれて多かれ少なかれ減退するものであるから、この事はその他の相違と共に、我々が次章に於て見るが如く、論証的知識は直覺的知識より遙かに不完全であることを示すものである。

\* これは第一版に於てロックが認めた考えである、彼は第四版に於て以下の如く考え直したのである。

\* この論は本巻、第四章、第六節に述べている所とやや矛盾するように思われる。

【第二章 我々の知識の程度に就いて 本EDFでは略】

【第三章 人間の知識の範囲に就いて 本PDFでは略】

## 第四章 我々の知識の實在性に就いて

\* 本章の内容は大部分すでに第二巻、第三十章【實在的及び空想的觀念に就いて】<sup>イデア</sup>及び第三巻、第六章【實體の名稱に就いて】に於て述べられている。

一 反対【論】、觀念から成り立つ知識はすべて幻想であり得るのみである——私は、読者が今、私はこれまでずっと空中樓閣を建てていたにすぎないと考え勝ちであり、また私に向つて、次のように言わんとする時分であろうということを疑わない。即ち「何のためにこんなに大騒ぎをしているのか、知識は我々自身の諸觀念の一致または不一致の知覚に過ぎないと君は言うけれども、それ等の觀念が何であるかということを知るか。もしもすべての知識はただ我々自身の諸觀念の一致または不一致の知覚にあるということが真であるならば、熱狂家の幻想と真面目な人の推理とは同じように確實であろう。物がどうであろうとそれは問題ではない、だから人が彼自身の諸々の想像の一致を観察し、それに従つて語りさえすれば、それはすべて真理であり確實な事なのだ。ハービはセントーではないということとは、この方法に従えば、四角は円ではないということと同じ位確實な知識であり同じ位の真理である。」

「然し乍らこれ等すべての美しい、人々自身の想像の知識は事物の實在を探究する人にとつては何の役に立つであろうか。人々が何を空想しようとするそれは問題ではない、珍重すべきのはただ事物の知識である、この事のみが我々の推理に価値を与え、或る人の知識に対して、それが事実そのままの事物に関し、夢と空想に関するものではない、という他の人の知識に優る長所を与えるのである。」

第四卷 知識と蓋然性に就いて

\* happy——半人半禽の怪物。

二 答、觀念が物と一致する場合にはそうではない——これに対して私は次の如く答える、即ち、もしも我々の諸觀念イデアに関する我々の知識がそれ等の觀念イデアに終つて、何かそれ以上のものが意味されている處までは少しも到達しないならば、我々の最も真面目 serious な思考は、発狂している脳髓の夢想より以上に大して役に立たないであろう、そしてそれに基づいている真理は、夢の中で事物を明らかに見てそれを非常な確信を以て語る人の話より以上には少しも重要ではないであろう。然し私は結論をする前に、我々自身の觀念イデアの知識によつて確實性に到達するこの方法は、單なる想像よりは少しく先に到達するものであるということを明白にし度いと思う、そして我々が諸々の一般的真理に関して持つすべての確實性はこの事より他の何事によるでもないということが分るであろうと私は信ずる。

\* 觀念イデアが心の唯一の直接の対象ではあるが、ロックは我々の知識が觀念イデアに終る (terminate) ものとは考えていない。混合様態の場合を除いては、単に意味される或るものがあるのである。

三 心は諸々の物を直接に知るのではなく、心がそれ等の物に就いて持つ諸々の觀念イデアの介入 intervention によつて知るのであることは明白である。それ故に我々の知識は我々の觀念イデアと實在の物との間に一致がある限りに於てのみ實在的である。然しここで何を標準 criterion とするのであろうか。心はそれがそれ自身の諸觀念イデアだけしか知覚しないとときに、如何にしてそれ等の觀念イデアが諸々の物そのものと一致を知ることが出来るであらうか。この事は困難でなくはないとは思われるけれども、しかも私は我々が物と一致すると確信することの出来る二種類の觀念イデアがあると思うのである。

四 第一に、すべての單純觀念イデアがそうである——第一は諸々の單純觀念イデアである、既に示した【第2巻

第1章第25節】ように、心はこれ等の觀念イデアをどうしても自ら自身のうちに作ることは出来ないものであるから、それは必然的に心に自然な仕方で作る諸々の物の所産であるに違いない、そしてこれ等の物が心のうちに諸々の知覚を生じ、我々の創造者の叡智と意志とによつてこれ等の物がこれ等の知覚に対して定められ適應せしめられているに違いないのである。以上の事から次のようになる道理である、即ち、單純觀念イデアは我々の空想の作り物ではなくして、我々の外にあつて實際に我々に作用する物の自然的規則的な産物である、であるからそれは我々の目指す或いは我々の状態の要求するすべての一致を伴うのである、何となれば單純觀念イデアは物が我々のうちに生ずるに適しているような外見 appearances の下に於て、物を我々に示すのであつて、それによつて我々は個々の実体の種類を區別し、それ等の在る状態を判別し、それ等を我々の必要のために取り、我々の使用にそれ等を適用することが出来るのである。そして我々の單純觀念イデアと存在する物との間のこの一致 conformity は實在的知識にとつて充分である。

五 第二に、実体に関するもの以外のすべての複雑觀念イデア——すべての我々の複雑觀念イデアは、諸々の実体に関するものを除いては、心自身の作る原型 archetypes であつて、何物かの模写になるものでもなく、またそれ等の原物 originals として何物かの存在に係するものでもないものであるから、實在的知識に必要な如何なる一致をも欠くことはあり得ない。それ故に我々は、これ等の觀念イデアに関して我々の得るすべての知識は實在的であつて、諸々の物そのもの things themselves に到達するということをもどうしても確信せざるを得ない、何故なればこの種のすべての我々の思考、推理、及び談話に於ては、我々は物が我々の

觀念に一致する以上には物を考えないからである。それ故にこれ等の觀念に於ては我々は確實な疑のない實在性を得損うことはあり得ないのである。

六 この事から数学的知識の實在性が生ずる——我々が数学的真理に就いて持つ知識は確實であるばかりではなく實在的知識 real knowledge \*であつて、實質も意味も無い脳髓の空想の單なる空虚な幻ではないということが容易に認められるであらうということを私は疑わない、しかもよく考えて見ると我々はそれが我々自身の觀念に関するのみであるということを見出すであらう。数学者は矩形または円に属する真理と性質を、それ等が彼自身の心のうちに觀念としてあるものとしてのみ考察する。何となれば彼がその両者の何れもが、彼の生活に於て、数学的にというのは全く正確に存在するのを決して見出さないということがあり得るからである。しかも彼が円或いはその他の何等かの数学的図形に属する如何なる真理または性質に就いて持つところの知識も、それにも拘らず、存在している實在的な物に就いてさえも、真であり確實である、何故なれば實在的な物は、物が實際彼の心の中のこれ等の原型に一致する限りに於てのみ、かような命題に關係しまたそれによつて意味されるのであつて、それ以上に關係しないしまた意味されることにはなっていないのである。三角形の觀念に就いて、その三つの角が二直角に等しいということが真であるならば、それはまた三角形が實際に存在する場合に何処でも真である。厳密に彼の心の中の三角形に相應しない如何なる他の図形が存在しても、それは全くその命題には關係しない。それ故にかような觀念に関するすべての彼の知識が實在的知識であることは彼にとって確かである。



\* ロックがここに数学的知識の实在性と言っていることの意味は本文に於て明白であるが、これは寧ろ、この種の觀念に於ては实在性の問題は起らない、と言った方が正しい表現であらう。

七 そして道德的知識も——そしてこの事から道德的知識も数学と同様に實在的確實性を持ち得るといふことになる。

〔八〕円の求積法、円錐曲線学、或いはその他の如何なる数学の部分に関する数学者の議論も、これ等のどの図形の存在にも関係するものではなく、彼等の觀念に基づいては彼等の証明は世界に何等かの四角または円が存在しようとしなかつた同一である。これと同様に道德上の諸々の議論の真理と確實性は、人々の生活及びそれ等の議論が取扱う諸々の徳のこの世界に於ける存在とは無関係である。またシセロ【キケロ、106-13B.C.】の義務論は、彼の法則を嚴密に実行し、彼が我々に与えた有徳な人の典型であり、彼が書いた時觀念の中にのみ存在した型に相應しい行いをするような人がこの世の中に一人も無いからといって、そのためにより眞実でなくはないのである。

【九】略 Nor will it be less true or certain, because Moral Ideas are of our own making and naming.]

【一〇】略 Misanaming disturbs not the certainty of the Knowledge.]

一一 実体の觀念の原型 archetypes は我々の外にある——第三に、いま一つの種類の複雑觀念があり、これは我々の外にある原型に関係しているから、原型と違ふことがあり得る、それ故にかような觀念に関する我々の知識は實在的になることの出来ないことがあり得る。諸々の実体に関する我々の觀念がこれであつて、これ等の觀念は自然の製作物から取られたものと考えられる單純觀念の集合から成り立つ

ているけれども、諸々の物そのものの中に結合されているを見出すことの出来る諸觀念イデアより多くの觀念イデア或いは違つた觀念イデアがこれ等の中に結合されていることによつて、自然の製作物と違つてゐることがあり得るのである。この事から実体の觀念イデアが嚴密に物そのものと一致することが出来ないことがあり得るし、また實際に屢々一致しないということが起るのである。

一二 それ等の觀念イデアが原型と一致する限り、それ等に関する我々の知識は實在的である。

一三 実体に関する我々の研究に於て我々は觀念イデアを考察せねばならぬ、そして我々の思考を名辞または名辞によつて限定せられると考えられる種に限つてはならぬ——もしも我々が、恰も知られてゐる名辞によつて既に規定せられ謂わば区切られてゐる物以外に如何なる種のものも無いかの如く、或いはあり得ないかの如くに、我々の思考及び抽象的觀念イデアを名辞に限らないならば、我々は恐らく我々が實際に物に就いて考えるよりも、もつと自由に、更に混乱することなく考えるであらう。もしも私が、少しも理性を現すことなしに四十年間生きていた取換子 *changalins* を人間と動物の間の或るものだと言つたならば、それは非常に危険な誤謬とは考えられないにしても、恐らく大胆な逆説と考えられるであらう。この偏見は全く、これ等の二つの名辞、即ち人間と動物が、両者の間に他の如何なる種も這入ることの出来ないように實在的本質によつて区切られた別個の種を表示するのである、という間違つた仮定に基づいてゐるのである。ところがもし我々が一定数のこれ等の本質があつてその中ですべての物が鑄型に入れられたようにして形作られるものであると想像しないならば、我々は、理性を持つてゐる驢馬の形の觀念イデアが、人間または動物の觀念イデアと異なり、両者の間にある或いは両者と別個の動物の種であるが如くに、

理性を持たない人間の形、運動、及び生命の觀念イデアは別個の觀念イデアであり、人間及び動物とは別種の物を成すことを見出すであらう。

一四 然し乍ら——若干の人々の表現の仕方を或る人が敢えて棄てる場合には何時でもその人々は、非常な熱心さを以てその結果どういふ結論になるかを展開して行つて宗教が脅かされることになるのを見ようとする——その熱心さを私は全く知らないのではないのであつて、上述の如き命題が如何なる名前を負わせられそうであるかを予期せぬことはないのである。そしてもしも取換子が人間と動物の間の或るものであるならば、あの世に於てそれはどうなるであらうか、ということが必ず問われるであらう。これに対して私は次の如く答える、それを知りまたは研究することは私の関心事ではない。取換子が立つても倒れるも彼等自身の主の問題である。彼等は信実ある造物主と寛大なる神の御手の中にあり、その神は彼の創造物を我々の狭い思考または意見に従つて処理するのでもなくまた我々の作り出した名辭と種に従つて創造物を区別するのでもないのである。そして我々の住むこの現世に就いて極く僅かしか知らない我々は、創造物がこの世界を離れるときに這入るであらうところの色々な状態を明確に定めることなしに甘んじてよいであらう。

〔二五〕我々の身体のこのまたはあの外觀的な特徴が永遠に持続するという希望を伴わぬのは、或る人の服の型が彼にその服が決して擦り切れないであらうと想像する合理的根拠を与えないのと同様である。

## 【二五 略】

## 第四卷 知識と蓋然性に就いて

【二六 略 Monsters】

【二七 略 Words and Species】

【二八 略 Recapitulation】

## 第五章 真理一般に就いて

一 真理とは何か——真理とは何か、ということとは長年の間研究せられたことであり、またそれはすべての人類が實際探究しまたはするような振りをすることであるから、真理が如何なる点に存するかを注意深く吟味し、心が如何にして真理を誤謬と区別するかを認める位に真理の性質を知ることが我々の為し甲斐のあることであるに違いない。

二 符号、即ち觀念<sup>イデア</sup>または言葉の正しい結合或いは分離——さて真理とは、その言葉の本来の意味に於ては、符号によつて指示される物が相互に一致しまたは一致しないに従つて、その符号を結合し joining、または分離すること separating を意味するに他ならない、と私には思われるのである。此處で意味する符号の結合または分離とは、我々が命題という別の名前で呼ぶことである。であるから真理は本来命題にのみ属する\*、これに二種、即ち心の mental 命題と言葉の verbal 命題とあること、通常用いられる二種の符号、即ち觀念<sup>イデア</sup>と言葉があるが如くである。

\* 第二巻、第三十二章【真なる及び誤れる觀念<sup>イデア</sup>に就いて】、第一節参照。

三 これによつて、心のまたは言葉の命題が生ずる——真理の明白な概念を作るためには、思考の真理と言葉の真理とを相互に明確に区別して考えることが非常に必要である、しかもこれ等を別々に取扱うことは非常に難しい。何故なれば心の命題を取扱う場合に言葉を用いることを避けることは出来ない、そうすれば心の命題に就いて与えられる例は直ちに単に心的ではなく言葉の命題となるからである。

四 心の命題は取扱うことが非常に難しい——心の命題と言葉の命題を別々に取扱うことを更に難しくすることは、すべてではなくとも大抵の人は、彼等の頭の中だけで考えまた推理するときに、少なくとも彼等の思索の問題が複雑觀念イデアを含んでいる場合には、觀念イデアの代りに言葉を用いるということである。我々が我々自身の思考の中に於て白または黒、甘いまたは苦い、三角形または円に就いて何等かの命題を作るとき、我々是我々の心の中に名辞を省みることなしに、觀念イデアそのものを形成することが出来る。また實際しばしばそうするのである。然し我々が、人間、硫酸、剛毅、というようなより複雑な觀念イデアを考察し、またはそれ等に就いて命題を作らんとする時は、我々は通常觀念イデアの代りに名辞を置く、何故なればこれ等の名辞の表示する觀念イデアは大抵不完全であり、混乱して居り、確定していないから、我々は名辞そのものを考えるのである、それは名辞はより明らかで、確實で、明確であり、純粹な觀念イデアよりも容易く我々の思考に現れるがためである。既に注意したように、諸々の実体に於ては、この事が我々の觀念イデアの不完全なために起る、我々は名辞を、我々がそれに就いて何の觀念イデアも持っていない實在の本質の代りとするからである。諸々の様態に於ては、この事はそれ等の形成に与かる單純觀念イデアの数の多いことによつて生ずるのである。

五 然し乍ら我々は真理の考察に帰ろう。我々は、今も言う通り、我々の作ることの出来る二種の命題を考察せねばならない。

第一に、心の命題、この中では我々の悟性のうちの諸觀念<sup>イデア</sup>は、言葉の使用によらずに、それ等の觀念の一致または不一致を知覚し或いは判断する心によって結び付けられ put together または引き離される separated。

第二に、言葉の命題、これは我々の觀念<sup>イデア</sup>の符号である言葉が肯定文または否定文に於て結び付けられ或いは引き離されたものである。それ故に命題は符号の結合 joining または分離 separating に存し、真理は、これ等の符号の表示する物<sup>\*</sup> the things which they stand for が一致しまたは一致しないに従つてこれ等の符号を結合 putting together または分離する<sup>†</sup>と separating に存する consists in のである。

\* 物(things)とあるがこれは「觀念<sup>イデア</sup>」とあるべきであらう。【二節で述べているように「things of the agree or disagree」と「signs of the putting together or separating する<sup>†</sup>」の後者が前者に according as する<sup>†</sup>とを、真理としてゐる。】

【六】諸々の觀念<sup>イデア</sup>或いはそれ等の表示する諸々の物が一致しまたは一致しないに従つてそれ等の觀念<sup>イデア</sup>が心の中で結び付けられまたは引き離されるときは、それは心の真理である、とすることが出来る。言葉の真理は、諸々の言葉の表示する諸々の觀念<sup>イデア</sup>が一致しまたは一致しないに従つてそれ等の言葉を相互に肯定しまたは否定することである、これにはまた二様あつて、全く言葉の上の詰らぬこと（これに就いては第八章に於て述べる）であるか、或いは事実の上の爲になる real and instructive こと——これは我々が既に述べた實在的知識の対象である——である。

#### 【七 略 Objection against verbal Truth, that thus it may all be chimerical】

i truth of words に於て is something more とある文が省かれている。"more"は直前の "mental truth" との比較の筈だから、言語的真理は心的真理以上である、との意があることになる。

第四卷 知識と蓋然性に就いて

【八略 Answered, Real Truth is about Ideas agreeing to things.】

【九略 Falsehood is the joining of names otherwise than their ideas agree.】

【一〇】然し乍ら言葉は真理と知識を伝える偉大なる通路と見做されているが故に、私は諸々の命題のうちに含まれる本当の真理 real truths の確実性は何処に存するか、また何処でそれを得ることが出来るかを更に詳細に研究しよう、そして如何なる種類の普遍的命題に於て、我々はその本当の真理または誤謬を確信することが出来るかを示すことに努めよう。

【一一略 Moral and Metaphysical Truth.】



## 第六章 普遍的命題とその真理及び確実性に就いて

\* 本章の内容は第十一節を除いては大部分既に前に述べられていることであるから、本訳に於てはプリングル・パティスン氏に従つて、その大体の組立を示すに留めた。

【一 略 Treating of Words necessary to Knowledge】

【二 略 General Truths hardly to be understood, but in verbal Propositions.】

【三 略 Certainly twofold—of Truth and of Knowledge.】

【四 略 No Proposition can be certainly known to be true, where the real Essence of each Species mentioned is not known.】

【五 略 This more particularly concerns Substances】

六 実体に関する少数の普遍的命題の真理しか知ることが出来ない。

七 何故なれば少数の場合だけしか觀念の共在を知ることは出来ないから——諸々の実体の種に我々が与えている名前の本来表示するところの複雑觀念は、我々が実体と呼ぶ或る未知の基体の中に共在することが既に認められた諸性質の集合である、然し如何なる他の諸性質がかなうな結合を以て必然的に共在するかは、我々がそれ等の自然の依存關係を見出すことの出来ない限りは、これを確實に知ることが出来ない、この依存關係は諸実体の第一性質に於てはほんの少しばかりたどることが出来るのみであり、そのすべての第二性質に於ては、すでに（第三章に於て【本エッセでは略】述べた次の如き理由によつて、我々は全く何等の結合をも発見することが出来ない、即ち（一）我々は各々の第二性質が特に依存して

居る実体の実際の内部の構造を知らないが故に。(二)もし我々がそれを知っていたとしても、それは(普遍的でない)実験的知識としてのみ我々に役立つのであつて、その一つの例より以上には確実性を以ては到達しない。何故なれば我々の悟性は、如何なる第二性質とどの第一性質のどのような変形との間にも如何なる考えられ得る結合をも発見することは出来ないからである。

【八略 Instance in gold】

九 私は金の如何なる性質に關してでも、誰か或る人が真であることを確実に知ることの出来る一つの一般的な断定があるならば喜んで御目にかかり度い。これに對して必ず直ちに次の抗議が提出されるであろう、即ち「すべての金は展ばすことが出来る」というのは一つの普遍的な確実な命題ではないかと。これに對して私は答える、もしも展性が金という言葉の表示する複雑觀念の一部であるならばそれは非常に確実な命題である。然しその時そこでは、その音が展性を含む一つの觀念を表示するということ以外には、金に就いて何事も断定されない、そしてそれは「セントーは四足である」と言うが如き種類の真理と確実性である。然し乍らもしも展性が金という名前の表示する種の本質の一部をなさないならば、「すべての金は展ばすことが出来る」というのは一つの確実な命題でないことは明らかである、何故なれば金という複雑觀念がそのどれでもあなたの好きなその他の性質の何れから出来上つてゐるにしても、展性がその複雑觀念に依つてゐることは明らかでないし、またその觀念の含むどの單純觀念からも展性は出て来ないからである。それは展性がこれ等の他の性質との間に持つてゐる結合(もしあるならば)は金の感知せられ得る諸部分の實在的構造の介在によつてのみあるものだからであり、この構

造を我々は知らないのであるから、我々がその結合を知るということは、我々がその結び付ける物を知らない限り、不可能である。

【一〇 略 As far as any such Co-existence can be known, so far Universal Propositions maybe certain. But this will go but a little way.】

——我々の実体に関する複雑観念<sup>イデア</sup>をなす諸性質は大抵外的な、かけ離れた、知覚されない原因に依る——もしも我々が、如何なる實在的構造が我々が諸々の実体のうちに見出す感覚的諸性質を生ずるかを知り、またこれ等の性質が如何にして其処から出て来るかを知るような風に、それ等の実体の観念<sup>イデア</sup>を持っていたならば、我々の心のうちにあるそれ等の実体の實在的本質に関する種別的な観念<sup>イデア</sup>によつて我々は、現在我々の感覚によつて知るよりもより確実にそれ等の実体の諸々の特性を見出し、またそれ等が如何なる性質を持ち或いは持たぬかを発見することが出来るであらう、そして金の特性を知るために、金が存在すること及び我々がそれに就いて実験をすることが必要でないのは、三角形の特性を知るために何か実質的に三角形が存在することが必要でないのと同様になるであらう、我々の心のうちの観念<sup>イデア</sup>が後者に対すると同様前者にも役立つこととなるであらう。然し乍ら我々は自然の秘密に立ち入ることなどは到底許されないものであるから、我々はその秘密の最初の入口に近づくことすら殆どないのである。何となれば我々是我々の前に現れる諸々の実体を、各々それ自身によつて存立する完全な物で、それ自身のうちにそのすべての性質を持ち、他の物からは独立な物と考える習わしであつて、そして我々は大体に於て、それ等の実体を取り囲んでいる目に見えない流動体 *medium* の作用を見逃すのが常である、

しかもそれ等の実体のうちに認められ、我々がそれ等の実体を知りまた名付けるための固有の区別の印しとなされるところの諸性質の大部分はこれ等の流動体の運動と作用に依っているのである。一片の金を何処か或る場所に遊離せしめ、すべての他の物質の到達範囲と影響から引き離すならば、それは直ちにそのすべての色と重さ、及び恐らく展性をも亦失うであろう、この展性は全く砕け易い性質に変わるのではないかと思う。然し乍らもしも諸々の無生物が彼等の現在の状態の非常に多くを彼等の外にある他の物体に負うて居つて、彼等を取り囲む物体が取り除かれるならば、彼等は我々が今見るような物でなくなるのであるならば、不断の連続を以て養分を与えられ、成長し、また葉、花、及び種子を生ずる植物に於ては尚更そうである。そしてもしも我々が諸々の動物の状態をいま少し親しく吟味するならば、彼等の生活、運動、及び彼等のうちに認められる最も著しい諸性質に就いて、彼等が全く、外的諸原因と彼等の一部を成していないところの他の物体の諸性質に依つていて、それ等のもの無しには彼等は一瞬间も存立し得ないことを見出すであろう、しかも、彼等の依存している諸々の物体は、殆ど注意されず、またこれ等の動物に就いて我々の形成する複雑觀念の如何なる部分をも成さないものである。生物の大部分からほんの一分間だけ空気を取り除くと、彼等は直ちに感覚、生命、及び運動を失う。呼吸の必要がこのことを我々に強制的に知らしめるのである。然し乍らこれ等の告ぐべき機械の発条が如何に多くのその外にありまた恐らく非常に遠くにある他の諸物体で普通人が認めもせず、また考えさえも及ばぬような物に依存していることであろうか、そして最も厳密な研究も決して発見することの出来ないような如何に多くのかような物体があることであろうか。宇宙の中のこの一点に住む者は、太陽からは何百万

哩<sup>マイル</sup>も離れてはいるけれども、太陽から来るまたは太陽によつて動かされる微粒子の適当に調節された運動に甚しく依存しているのであるから、もしもこの地球がその距離のほんの一小部分だけでもその現在の位置から移動せしめられて、その熱の起源から少しばかりより遠くまたはより近くに置かれるならば、地球上の動物の大部分が直ちに死ぬであらうということは先ず疑いがない、何故なれば我々は、この我々の小さい地球の或る部分の偶然の位置が彼等を曝すところの太陽の熱の過剰または不足によつて非常に屢々彼等が死滅するのを見出すからである。磁石に於いて認められる諸性質は必ずやその起源をその物体の限界を遙かに越えた処に持つてゐるに違ひない、また目に見えない諸原因によつて屢々様々の種類の動物に与えられる侵害、ただ赤道を越えるだけのことで、または——他の動物に於ては確かにそうなのであるが——隣の国へ移されることによつて、動物の或るものが（人が言う様に）確実に死ぬということは、彼等が何か関係があるとは滅多に考えられないところの様々な物体の共在と作用とが、彼等をして現在我々が見るが如き物たらしめ、我々がそれによつて彼等を知りまた区別するところの諸性質を保持するためには、絶対的に必要であるということを明白に示すのである。諸々の物が、それ等が持つと我々には思われる諸性質をそれ等自身のうちに含むのである、と我々が考えるならば、それは全く飛んでもないことであつて、我々は徒らに、我々が蠅や象に於て認める諸々の性質や力が依存しているところの構成を、それ等のものの体内に探し求めてことになるのである。これを正しく理解せんがためには恐らく我々は、単にこの我々の地球と大氣を越えるばかりではなく、太陽または我々の眼がこれ迄に発見した最も遠い星の先迄も見なければならぬ。何となればこの我々の地球の中の個々の実体の

存在と作用が、どれだけ我々の限界を全く越えている原因に依っているかということは、我々にはこれを決定することが不可能だからである。我々は此処に我々のまわりにある諸々の物の運動とどちらかと云えば粗雑なる作用の若干を見また知るのであるが、すべてのこれ等の不思議な機械を運動せしめ良い状態に置くところの流れが何処から来るか、また如何にしてそれが伝えられまた変えられるか、ということは我々の認識と理解とを越えている、そして宇宙のこの驚くべき構造の大きな諸々の部分と車輪——と言ってもよいと思うのであるが——は、それ等相互の影響と作用に於て恐らくはかように結合し依存しているのであろうから、もしも諸々の星または我々からは考えることも出来ぬ程遠くにある諸々の大なる物体のどれかが現在の如くに存在しまたは運行することをやめるならば、恐らくこの我々の棲家にある諸々の物は全く別の外貌を取り現にあるが如きものではなくなるであらう。諸々の物は、たとえそれ等自身に於て絶対的な物と思われても、自然の他の部分の従者であるに過ぎず、それ等の部分のために我々がそれ等の物に最もよく気づくのである、ということは確実である。それ等の物の認められる性質、活動、及び力はそれ等の外にある或るものによつてゐる、そして我々の知つてゐる自然の如何なる部分でも、その存在とその優れた特質をその隣の物に負うていない程完全無欠な物はない、そして我々は如何なる物体にある諸性質を完全に理解するのにも、我々の思考をその物の表面に限つてはいけなないのであつて、更にずっと先までを見なければならぬのである\*。

\* 本節に説く所は孤立した諸々の実体、即ちそれぞれ實在的本質を持つていてそれからすべての性質と力とが出て来るというような実体の觀念イデアを否定したもので、ここに言う相互關係という考え方は現代の觀念論者と新實在論者の間

の關係の内在性及び外在性に関する論争を思わせるものである。

一二 もしもこの通りであるならば、我々が実体イデアに関して非常に不完全な觀念イデアを持つてゐるということ、また実体の性質と作用が依存している實在的本質が我々に分らないということとは不思議ではない。我々は實際実体の中にある微小なる活動的な諸部分の大きさ、形状、及び組織すらも発見することが出来ない、況んや外部から諸々の物体によつて彼等の中にまたは彼等に対して与えられる色々な運動や衝撃で、我々が彼等に於て認める諸性質の最大にして最も著しい部分がこれに依り、彼等に関する我々の複雑觀念イデアがこれから形成されるようなものを見出すことは出来ないのである。この考察のみでいつかは彼等の實在的本質イデアの觀念イデアを持ち度いというすべての我々の希望を停止せしめるに充分である、しかし我々にこの觀念イデアが欠けてゐる限り、その代りに我々が用ゐる名目上の本質は、如何なる一般的知識、即ち實在的確實性を持ち得る普遍的命題をもほんの僅かしが我々に与えることは出来ないであらう。

一三 判断 *Judgment* はそれより先に到達するであらうが、それは知識ではない——それ故に諸々の実体に関して作られた一般的命題の極く少数のものに於てしか確實性を見出すことが出来なくても、我々はこれを不思議に思つてはならない、それ等の実体の性質と特性に関する我々の知識は、我々の感覚が到達して我々に教えるより以上には極めて稀にしか及ばないのである。恐らく詮索好きで注意を怠らない人々は判断\*の力によつて更に先迄見抜くであらう、そして注意深い觀察から得られた蓋然性とよく集められた暗示とを基にして屢々經驗が未だ彼等に示さなかつた事を間違ひなく当てるのである。然し乍らこれはやはり推測に他ならないのであり、ただ意見 *opinion* と言ふべきものであつて、知識に必要で

あるところの確実性を持つてはいないのである。何となればすべての一般的知識はただ我々自身の思考にのみあるのであつて、単に我々自身の抽象的諸觀念<sup>イデア</sup>の考察にのみ存するのである。我々がこれ等の觀念<sup>イデア</sup>の間に或る一致または不一致を知覚する場合には何時でも我々はそこに一般的知識を持つのである、そしてそれ等の觀念<sup>イデア</sup>の名前をそれに従つて命題の中に結び付けることによつて、我々は確実性を以て一般的真理を明言することが出来るのである。然し乍ら実体の抽象的觀念<sup>イデア</sup>は極く少数の他の觀念<sup>イデア</sup>としか結合しまたは矛盾することが見出されないものであるから、実体に関する普遍的命題の確実性は非常に狭く乏しいのである。

\* 判断 (judgement) という語をロックは特有の意義に用いて知識 (knowledge) と対照せしめていることを注意する必要がある。

【二四 略 What is requisite for our Knowledge of Substances.】

〔一五〕我々は、すべての人は時を置いて眠るということ、如何なる人も木や右で養うことは出来ないということ、すべての人は毒にんじんに中毒するものであるということ、を確実性を以て断言することは出来ない、何故なればこれ等の觀念<sup>イデア</sup>は人間に関する我々の名目上の本質、即ち人間という名辞の表示する抽象的觀念<sup>イデア</sup>と結合もしなければ矛盾もしないからである。これ等及びこれと何様な場合に於ては、我々は個々の主体に於ける試みに訴えねばならぬ、そしてこの試みはほんの一寸した範圍迄しか達することが出来ないのである。その他の場合に於ては我々は蓋然性を以て満足せねばならないのであつて、我々の人間という種の觀念<sup>イデア</sup>が、すべての人間の性質を統一しそれ等の性質を生ずる根本であるところの



實在的構成を含まない限りは、何等の一般的確実性を持つことも出来ないものである。我々の名目上の本質、或いはその或る部分との識別し得る關係を持つてゐるような少数の觀念<sup>イデア</sup>のみが、我々に普遍的命題を与えることが出来るのである。然し乍らかような觀念<sup>イデア</sup>は非常に少数でありまた非常に重要でないものであるから、我々は實體に関する我々の確実なる一般的知識は殆ど全く無いものと見做すのが正当であらう。

\* 第四卷第三章第十四節【本PDEでは略】及び第七章【公理に就いて】第五節にかような觀念<sup>イデア</sup>の例が挙げられている。

一六 命題の一般的確実性は何処に存するか——結論、たとえ如何なる種類のもので一般命題はその中に用いられている名辞が、そこに言い表されているが如くに、その一致または不一致を我々が見出すことの出来るような諸觀念<sup>イデア</sup>を表示する時にのみ確実性を持ち得るのである。そして我々は、諸々の名辞の表示する諸觀念<sup>イデア</sup>が、それ等の名辞が相互に肯定されまたは否定されるに従つて、一致または一致せぬことを我々が知覚するときのみ、これ等の命題の真偽を確實に知るのである。このことによつて、一般的確実性は常に我々の觀念<sup>イデア</sup>の中に於てのみ見出すことが出来る、ということが分るのである。我々がこれを我々の外の実験または觀察によつて何処かほかに求めようとするときは何時でも、我々の知識は個物以上には及ばない。我々に一般的知識<sup>イデア</sup>を与えることが出来るのは、ただ我々自身の抽象的觀念<sup>イデア</sup>の考察のみである。

## 第七章 公理 Maxims に就いて

\* 本章は第一巻の生得的觀念<sup>イデア</sup>または原理に対する攻撃と関聯して研究すべきである。ロックは本章及びその他の所に於て格率 (maxim) という語と公理 (axiom) という語を同様の意味に用いている場合が多い、かような場合には二つの語が並列されている所を除いて「maxim」も公理と訳した。「格率」は実践的原理のみを意味するように思われるからである。

一 公理は自明である——格<sup>レ</sup>律<sup>、</sup> maxims 及び公<sup>レ</sup>理<sup>、</sup> axioms という名前のもとに科学の原理として通用した一種の命題がある、そしてそれ等の命題は自<sup>レ</sup>明<sup>、</sup> self-evident であるがために、生得的であると考えられて居つて、しかも（私の知つている）如何なる人もかつてそれ等が明晰であることまたは有力であることの理由と根拠とを示そうと企てたことはないのである。然し乍らそれ等が自明である理由を研究して、自明であるということがそれ等にも特有のものであるかどうかを考えて見、なおまたそれ等がどこ迄我々その他の知識に影響しこれを支配するかを吟味するのは為し甲斐のあることであろう。

二 その自明性は何処に存するか——すでに示したように知識は諸<sup>イデア</sup>觀念の一致または不一致の知覚である、さてその一致または不一致が、他の何物の介在も助けもなしにそれ自身で直接に知覚される場合には、我々の知識は自明である。

三 自明性は一般に認められている公理 axioms に特有ではない——かようなわけであるから、次に我々はこの自明性が通常格率 maxims という名前で通用し、公理の品格を許されているような命題にの

み特有のものであるかどうかを考察しよう。そしてここに於て公理であることを許されていない幾つかの他の真理も、公理と同様にこの自明性を持つているということは明らかである。

四 第一に、同一と差異に関しては、すべての命題は一樣に自明である——何となれば同一、という一致または不一致の直接の知覚は、心が別個の諸觀念を持つていることに基づいてるのであるから、この事が我々に、我々が別個の觀念を持つと同じだけの数の自明な命題を与える。どんなものでも何か知識を持つている人は誰でも、その基礎として、色々な別個の觀念を持つている、そして心の諸觀念の一つをもそれ自身で知り、それを他の觀念と区別するということが心の最初の働きである（それなしでは心は決して如何なる知識をも持つことは出来ない）。それ故に「如何なるものも在るものは在る」及び「同一のものにとつて存在し、また存在しないことは不可能である」という二つの一般的命題にのみこの自明性は或る特有の権利によつて属するのではない。要するに、同一のものは同一のものであつて相異なるものではないということに他ならないこれ等二つの一般的公理は、これ等の一般的公理に於ては勿論、より個別的なる諸々の例に於ても知られる真理であり、それはまた、我々がこれ等の一般的公理に考え及ぶ前に個々の例に於て知られ、そのすべての力を個々の觀念にかかわる心の判別力から生ずるのである。これ等の一般的命題の何れに対する証明または反省の助けをも少しも借りることなしに、心は白の觀念は白の觀念であつて青の觀念ではないということ、及び白の觀念は、それが心の中にあるときはそこに在るのであつて無くはないということ、を非常に明らかに知覚し、非常に確実に知るので、これ等の公理の考察は心の知識の自明性と確実性も少しも増すものではない、これ程明らかでない

いのである。

五 第二に、共在に於ては我々は少数の自明な命題しか持つていない——共在、即ち二つの觀念のうちの一つが在ると仮定される主体のうちにいま一つの觀念も必然的に在らねばならぬ、というような二つの觀念の間の必然的な結合に就いて言うならば、このような一致または不一致に就いては、心はそれ等の、うちの極く少数に於てのみ直接の知覚を持つのである。それ故にこの種に於ては我々は極めて少しの直覺的知識しか持たないし、また自明であるところの非常に多くの命題を見出すことは出来ない、若干はあるのであるけれども、例えば或る場所の表面の内容に等しい場所を充たすという觀念 *the idea of filling a place equal to the contents of its superficies* は、我々の物体の觀念と結び付いているから、「二つの物体は同一の場所には在り得ない」というのは自明的な命題であると私は思う。

六 第三に、他の諸關係に於ては我々は持つことが出来る——様態の關係に就いては、数学者等はかの相等という一つの關係に関して多くの公理を形成した。「等しいものから等しいものを取れば残りは等しい」というが如きがこれである。この命題はこの種の他のものと共に、数学者等はこれ等を公理と認め、また疑なき真理ではあるが、誰でもこれ等の命題を考察する人は、これ等が、「一と一は二に等しい」、「もしあなたが一方の手の五指から二本を取り、また他方の手の五指から二本を取るならば残る数は等しい」というような命題よりも明らかな自明性を持つていることを見出さないのである、と私は思う。これ等及び非常に多くのその他のかような命題が数に於て見出され、それ等は最初に聞いただけで承認を強い、上のような数学的真理より以上の明晰さではなくとも、それと等しい明晰さを持つてい

るのである。

七 第四に、實在的存在に關しては我々は一つも持つていない——實在的存在 (real existence) に就いて言えば、それは我々自身の觀念及び至高の存在以外の如何なる我々の觀念とも何等の關係をも持つていないのであるから、我々はこれに就いてはすべての他のものの實在的存在に關して、論証的知識さえも持つていない、況んや自明的知識に於ておや、それ故これに關しては何等の公理もないのである。

八 これ等の公理は我々のその他の知識に大した影響を与えない——次にこれ等の一般に承認せられた公理が我々の知識のその他の部分に對して如何なる影響を持つかを考察しよう。すべての推理は予め知られたことと予め認められたことによるというスコラ学派に於て確立されている法則は、すべての他の知識の基礎をこれ等の公理のうちに置き、これ等を予め知られたことであると假定するように思われる、思うにこのことは次の二つの事を意味するのである。第一に、これ等の公理は心に最初に知られる真理であるということ。そして第二に、我々の知識のその他の部分はこれ等の公理に依つてということ。

九 何故なればそれ等は我々が最初に知つた真理ではない——第一に、それ等が心に最初に知られる真理ではないということは、我々が他の場所で示したように(第一卷、第二章)、經驗上明白である。その理由は非常に明らかである、即ち最初に心の中にある諸觀念から成立しているような自明的な真理が最初に知られるに違ひない、そして最初に心の中にある觀念は明らかに個物に關する諸觀念であり、それから徐々に悟性は幾つかの少数の一般的觀念に進むのである、この後者は普通の見慣れている感覺

の対象から受け取られて、一般的な名前を与えられて心の中に定着せしめられるのである。かくして個物の觀念が最初に受け取られ区別される、その次には、個物の次であるより一般的でないもの即ち種の觀念が来る。何となれば子供等や未だ練習の積んでいない心にとつては、抽象的な觀念は個別的な觀念程明白でもなく分りやすくもない。もしも抽象的な諸觀念が大人にとつて明白で分り易く思われるならば、それはただそれ等をいつも使い慣れることによつてそうなつたにすぎないのである。何となれば、我々が綿密に考えて見る時には、我々は、一般的諸觀念は心の作り物であり考案した物であつて、分りにくさを伴い、我々がそう考え勝ちである程容易くは出て来ないものであることを見出すであらう。例えば、三角形という一般的觀念を形成することは幾らかの骨折と熟練を要しはしないであらうか（これはしかも最も抽象的な、包括的な、また難しいものには属しない）、何となればそれは斜角でもなく直角でもなく、また等辺、等脚でもなく不等辺でもなくして、同時にこれ等の総てでなければならず、どの一つであつてもならないからである。事實上それは存在することの出来ない不完全な或るものであり、幾つかの相異なる矛盾した觀念の或る部分がその中で結び付いている觀念である。成る程心はこのように不完全な状態に於てはかような諸觀念を必要とし、また伝達の便宜と知識の拡大とのためにそれ等の觀念に到達しようと出来るだけ急ぐのである、而してこの二つの事に心は自然に甚しく傾いているのである。けれどもかような諸觀念は我々が不完全であることの印しではないかと考えるべき理由がある、少なくともこれは、最も抽象的で一般的な諸觀念は心が最初にまた最も容易く知るところの觀念ではないということを示すに充分である。

一〇 何故なれば我々の知識の他の部分はそれ等に依つていないから——第二に、既に述べたことから明らかに、これ等の称揚される公理はすべての我々の他の知識の原理と基礎ではないということになる。何となればもしもこれ等の公理と同じ位の自明性を持つてゐる非常に多くの真理があり、また我々がそれ等よりも前に知る非常に多くの真理があるならば、それ等が、我々がすべての他の原理を引き出すことになる原理であるということは不可能である。一と二は三に等しいということを知るのは、「全体はそのすべての部分を一緒にしたものと同じ」という公理、或いは何かかような公理の力によるものでなければ、不可能であろうか、多くの人は一と二は三に等しいということを、これを証明することの出来る上の公理または如何なる他の公理を聞いたことも考えたこともなしに知る、そして如何なる他の人が「全体はそのすべての部分に等しい」ということ或いは如何なる他の公理を知るのと同様に確実に知るのである、そしてすべては自明性という同一の理由によるのである。また全体はそのすべての部分に等しいということを知つた後でもその人は、一と二は三に等しいということを、前に彼が知つたよりもより良く或いはより確実に知るのではないのである。

一一 これ等の一般的公理は如何なる役に立つか——そこで我々は何と言ようか。これ等の一般的公理は何の役にも立たないのであらうか。「決してそうではない、恐らくこれ等の公理の効用は普通に考えられているようなものではないであらうけれども」。

(一)すでに述べたことからこれ等の公理はより一般的でない自明的な命題を証明または確証するには何の役にも立たないということは明白である。

(二) それ等が如何なる科学が建設された基礎でもなく、またなかったということは明らかである。諸科学及びそれ等が建設される基になっている諸々の公理に関する非常に多くの議論があつてスコラ哲学者等によつて弘められているのを私は知つてゐる、然し乍ら私は不幸にして未だかつて如何なるかような科学にも出会つたことがない、況んや「在るものは在る」及び「同一のものにとつて存在しまた存在しないことは不可能である」という二つの公理の上に建てられている如何なる科学にも決して出会つたことがない。これ等の一般的公理は神性の研究及び神学上の問題に於ても、他の諸科学に於けると同一の效用を持つのではないかどうかと私は尋ねる。それ等は此処に於ても争論する人々を沈黙せしめ、論争を止めさせるのに役立つのである。然し乍ら私は、そのために如何なる人も、キリスト教はこれ等の公理の上に建てられている、とか我々がキリスト教に就いて持つてゐる知識はこれ等の原理から引き出されるものであるとか、は言わないであらうと思う。

(三) それ等は科学の進歩或いは未知の真理の新たな発見に於て人々を助けて前進せしめるの役立たない。ニュートン氏は、彼のどんなに賞めても賞め足りない書物<sup>\*</sup>に於いて、幾つかの命題を証明した、それ等は前には世界に知られていなかった非常に多くの新しい真理であり、また数学的知識に於ける一層の進歩である、然し乍らこれ等の発見に於て彼を助けたのは「在るものは在る」とか「全体は部分より大きい」とか、これ等に似た一般的公理ではなかった。また彼がそれ等の証明の知識を得たのもこれ等の一般的公理によつてではなくして、彼の証明した命題の中に表されているが如き觀念<sup>イデア</sup>の一致または不一致を示すところの中間にある諸觀念<sup>イデア</sup>を見出すことによつてであつたのである。これは知識の拡大と



科学の進歩に於ける人間の悟性の偉大なる行使と改善である、その場合これ等及びそれと同様な称揚される公理の考察から如何なる助けをも決して受けるどころではないのである。このようにこれ等の命題を伝統的に崇拜して、公理の支持なしには知識は一步も進むことが出来ないと考える人々が、知識を得る方法とそれを伝える方法とを、或る科学を向上せしめる方法と他の人々にその科学をそれが進歩した所まで教える方法とを、区別しようとさえするならば、彼等は、これ等の一般的公理が、最初の発見者達が彼等のすばらしい建物をその上に建設した土台でもなかったし、また知識のそれ等の秘密の錠を外して開くところの鍵でもなかったということを知るであらう。尤も後になつて学校が設立せられて諸科学が他の人々の発見したことを教える教授連を持つようになった時には、彼等は屢々公理を用いた、即ち自明的である或いは真と認めらるべき若干の命題を設定して、それ等が彼等の学生等の心に疑うべからざる真理として植ゑ付けられると、教授等は時々、予め学生等に教え込まれ注意深く彼等の心に植ゑ付けられたそれ等の一般的公理程彼等の心に親しみ深くない個々の例に於ける真理を彼等に確信せしめるために、これ等の命題を用いたのである、これ等の個々の例は、よく考えて見ると、それを確証するために持つて来られた一般的公理よりも決して自明でなくはないのであるけれども。そして最初の発見者が一般的公理の助けなしに真理を見出したのはこれ等の個々の例に於てであつたのである、そして注意深くそれ等の例を考察する人は誰でもそうすることが出来るのである。

そこで我々は公理の効用に移ろう。

(一) 公理は、既に述べた如くに、諸科学が進歩した所までそれ等を教える普通の方法に於て役に立

つけけれども、諸科学を更に進歩せしめるのには殆ど或いは全く役に立たない。

(二) 公理は論争に於て、頑固な争論者を沈黙せしめて、その論戦をある結論に導くために役立つのである。その目的に対する公理の必要が次のような仕方で行じたのであるかどうかを研究することを許していただき度い。スコラ学派は論争を人々の能力の試金石であり、知識の標準であるとなして、論争を継続した人に勝利を宣告した、そして最後の言葉を述べたものが主張に於ては勝つて居らないとしても、論争には勝利を占めたと断定されたのである。然し乍らこの手段によつては恐らく熟練した議論家の間に於ては何等の決定もあり得ないが故に、論争が三段論法の無限の連続に走り出して行くことを出来るだけ防ぐために、大部分は成程自明である若干の一般的命題がスコラ学派に導き入れられた、これ等の命題はすべての人々が承認し同意するようなものであつたから、真理の一般的標準と見做され、(議論する人々が他の如何なる原理をも彼等の間に定めなかつた場合には) 原理として役立ち、それを越えることも出来ず、また何れの側からも撤回されてはならぬものとなつたのである。かくしてこれ等の公理は、人々が論争に於てその先に引込むことの出来ない「原理」という名前を得て、すべての知識の始まる根源であり源泉であり、また諸科学の建設される根柢であると誤つて考えられたのである。私の考えでは、アリストテレス学派の哲学を導き入れた学派の存在した場所——そこではこの哲学は世の中に争論の術より他は何物も教えることなしに、長年の間続いていたのであるが——を除いては、これ等の公理は何処でも諸科学の建設される土台であるとも、また知識の進歩に対する大なる助けであるとも考えられなかつたのである」<sup>\*\*\*</sup>

習慣が思考と推理の諸々の方法を我々の心に植ゑ付けて仕舞う迄は事情は全く別であるという考えに私は傾いている、また子供は彼の林檎の一部が取り去られるときには、そのことを、「全体はそのすべての部分に等しい」という一般の命題によるよりも、その特殊の例に於てよりよく知ること、またもしもこれ等のうちの何れかが他方によつて彼に確証される必要があるならば、特殊を一般によつて確証するよりも以上に、一般を特殊によつて彼の心に入れる必要があるということ、を私は考える傾きである。何となれば我々の知識は特殊なものに始まり、それから徐々に一般的なものに拡がつて行くからである、尤も後になつてからは心は全く反対の経路を取つて、その知識を出来るだけ諸々の一般的命題に纏めて、これ等の命題を思考にとつて親しみ深いものとなし、真理と誤謬の標準としてそれ等に頼ることに慣れて来るのではあるけれども。このようにこれ等の命題を他の諸々の命題の真理を見定める規則として屢々用いることによつて、やがてはより特殊なる諸々の命題は、その定理と明証とを、それ等が、談話と議論に於て非常に屢々主張せられまたは常に承認せられるところのより一般的なもの等の命題に一致することによつて、得るのであるということが考えられるようになる。そしてこのことが、非常に多くの自明的な命題のうちで何故最も一般的なもののみが公理という称号を持つようになったかということの理由である、と私は思うのである。

\* Principia Mathematica (1687)

\* \* \* □ 内のこの長い部分は第四版に於て挿入されたものである。

【一二略 Maxims, if care be not taken in the Use of Words, may prove Contradictions.】

第四卷 知識と蓋然性に就いて

【二三 略 Instance in Vacuum.】

【二四 略 But they prove not the Existence of things without us.】

【二五 略 Their application dangerous about complex ideas.】

【二六 略 Instance in man.】

【二七 略 Secondly,】

【二八 略 Thirdly,】

一九 直覺的知識は如何なる証明をも要求せずまた許容しない、しかもそのどの部分もそうである。直覺的知識が証明を必要としまたは許容すると考える人は、すべての知識と確実性の基礎を取り去るものである、そして「二は二に等しい」という命題を確信せしめ、承認せしめるのに何等かの証明を必要とするような人はまた「在るものは在る」ということを承認せしめるのにも証明を必要とするであろう\*。

\* ロックは第四版に於て批評家の非難に答えるために次の如き章句を第十四節に於て書き加えている。「私がこのことを述べたのは、これ等の公理は真理の偉大な守りとして称揚されるけれども人々が不注意不精確に言葉を用いる誤りから人々を守らない、ということを彼等に表示するためである。……私は、人々があまりにも早急に私を非難したように、これ等の公理は棄却さるべきものであると言つたり思つたりしたのでは決してないのである。私はそれ等が真理であり自明的真理であり、それ故に棄てることの出来ないのを認める。……しかも真理または知識を少しも害することなしに、私には、これ等の公理は非常に重きを置かれているように思われるがその效用はそれに相応するものでない、と考へてもよい道理がある、……。」

【二〇 略 Their use dangerous where our ideas are confused.】

## 第八章 内容のない命題に就いて

一 若干の命題は我々の知識を少しも増さない——前章に於て取扱つた公理が一般に考えられているように実在的知識にとつて役に立つかどうかは、人の考察するにまかせよう。確かに真ではあるけれども、我々の悟性を少しもより明らかにせず、我々の知識も少しも増さないような普遍的命題があるということは、確信を似て主張することが出来ると私は思うのである。それは次の如き命題である。

二 第一に、すべての全く同一を表す命題。これ等は明らかに一見してそのうちに何等の教える所をも含んでいないことが分る。何となれば我々が件の名辞をそれ自身に就いて断定するとき、それが単なる言葉であろうと、或いは何等かの明晰な実在的觀念<sup>イデア</sup>を含んでいようと、それは我々が前に確實に知つてゐるに違ひないこと以外には何事をも示さないのである。

〔三〕これは言葉を弄ぶ以外の何事であらうか。それは猿が彼の牡蠣を一方の手から他方の手へ移すのに似たことに過ぎない、そしてもしも猿が言葉を持つていたならば、疑いもなく「右手の中の牡蠣は主辞であり、左手の中の牡蠣は賓辞である」と言つたであらう、そして牡蠣に関する一つの自明的な命題、即ち、「牡蠣は牡蠣である」を作つたであらう。

〔同一を表す諸々の命題が自明であるからといって、それ等に対して非常な関心を示し、また恰もそれ等の中にすべての知識が含まれ、悟性はそれ等によつてのみすべての真理に導き入れられるかの如くに、それ等を賞め上げて、それ等が哲学にとつて非常に役に立つと考える若干の人々があるのを私は知

第四卷 知識と蓋然性に就いて

つてゐる。私はそれ等が真であり自明であるということ誰にも劣らず進んで認める。更に私は、私が前の章に於て示したように、すべての我々の知識の基礎は、同一の觀念が同一であることを知覚し、またそれをそれと異なる諸觀念と判別するところの我々の能力のうちにある、ということを知るのである。然し乍ら如何にしてこの事が、知識の進歩のために同一を表す命題を用いることを詰らないことであるという非難から擁護するかを私は知らない。我々を教えるのはこれとは非常に異なる何物かであつて、自分自身或いは他の人の心を未知の真理にまで拡張しようとする人は、中間の諸觀念を見出して、それから悟性が、問題になつてゐる觀念の一致または不一致を知ることが出来るような順序にそれ等中間の觀念を配列しなくてはならないのである。」\*

\* 「〔一〕内の部分は批評家の非難に答えるために第四版に於て附け加えられたものである。

四 第二に、いま一つの種類の内容のない命題は、複雑觀念の一部分が全体の名辭に就いて断定される場合、定義の一部が定義される語に就いて断定される場合である。類が種に就いて断定されてゐるようなすべての命題、或いはより包括的な名辭がより包括的でない名辭に就いて断定されてゐるようなすべての命題がこれである、何となれば「鉛は金属である」という命題は、鉛といふ名辭の表示する複雑觀念を知つてゐる人に対して、如何なる見聞を、如何なる知識をもたらずであらうか。

〔五〕定義される名辭に就いて定義の或る他の部分を断定すること、或いは「すべての金は鎔解し得べきものである」というが如く、複雑觀念全体の名前に就いて、その複雑觀念のうちの或る一つの單純觀念を肯定することは、同じように内容のないことである。何となれば可溶性は、金という音の表示す

る複雑觀念<sup>イデア</sup>の形成に与かる諸々の單純觀念<sup>イデア</sup>の一つであるから、一般に認められている意味に於て理解されている金という名前に就いてこの事を肯定するのは、音を弄ぶこと以外の何であり得るか。

〔六〕あらゆる人間は動物である、或いは生物である、ということとはこれ程確かなことは無い程確かな命題である、それはただ言葉の意義に關するのであつて私に次のことを知らせるだけだからである、即ち身体、感覚及び運動、或いは感覚と運動の能力は私が人間という語によつて常に理解した意味する觀念<sup>イデア</sup>のうちの三つのものであつて、これ等の觀念<sup>イデア</sup>が一緒に見出されない場合には人間という名前はその物に属しないということ。然し乍らたとえ如何なる物のうちに感覚、運動、理性、及び笑が統一されていたにしても、その物は實際に神の觀念<sup>イデア</sup>を持つていたし、また阿片によつて眠に陥つたであらうということを私に告げる人は、實際教える所のある命題を作つたのである、何故なれば「神の觀念<sup>イデア</sup>を持つてゐる」ということも亦「阿片によつて眠に陥る」ということも人間という言葉によつて意味される觀念<sup>イデア</sup>の中に含まれてはいないのであるから、我々はかような命題によつて単に人間という言葉が表示するより以上の或る事を教えられる、そしてそれ故にそのうちに含まれる知識は言葉の上だけ以上のことである。

七 或る人が何か命題を作る前に、その人は彼がその中で用いる名辞を理解していると考えられる、さもなければ彼は模倣によつて音を立て、彼が他人から学んだ一定の音を形成して鸚鵡のように語るのであつて、それ等の名辞を彼が自分の心の中に持つてゐる諸觀念<sup>イデア</sup>の符号として用いて、理性的存在として語るのでないのである。聴き手も亦それ等の名辞を話者がそれ等を話すが如くに理解するものと考

第四卷 知識と蓋然性に就いて

えられる。それ故に或る人が命題を作るとき、それがその中の名辞の一つが含ま以上のことを含まないような命題であるならば、その人は言葉を弄ぶものである、例えば「三角形は三つの辺を持つている」、或いは「サフランは黄色い」、というが如き命題がこれである。そしてこれは、或る人が、彼を理解しないと考えられ或いは理解しないと明言する人に向つて、自分の名辞を説明しようとする場合に限つて恕すべきことなのである。

八 そこで我々は二つの種類の命題の真理を完全な確実性を以て知ることが出来るのである。その一つは、確実性を持つてはいけるけれども、それは言葉の上の確実性であつて教える所のないような命題の真理である。そして第二に、我々は、或る物に就いて、その物の精確な複雑觀念の必然的な結果ではあるが、そのうちに含まれてはいない或る事を、断定するような命題に於いて、真理を知りそれ故に確実性に達することが出来る、それは「すべての三角形の外角はその内対角の何れよりも大である」というが如き命題であつて、この外角の何れかの内対角に対する関係は、三角形という名辞によつて表示される複雑觀念の如何なる部分をも成さないものであるから、これは實在的真理であつて、ためになる實在的知識を齎らすのである\*。

\* 本節に於てロックは分析判断とカントの所謂先驗的綜合判断と區別しているが、彼は決してこの區別を哲學上重要なものと認めては居らず、また常にこの區別を正しく適用してもいないのである。【分析判断と綜合判断の原形は与えていると言えるだろう。】

【九 略 General Propositions concerning Substances are often trifling.】



- 【一〇 略 And why.】
- 【一一 略 Thirdly, using Words variously is trifling with them.】
- 【一二 略 Marks of verbal Propositions.】
- 【一三 略 Secondly, A part of the Definition predicated of any Term.】

## 第九章 存在に関する我々の知識に就いて

一 一般的な確実な *General certain* 命題は存在には関しない——これまで我々はただ物の本質を考察したのであつて、この本質は抽象的觀念に過ぎず、また抽象的觀念に依つて個別的存在から我々の思考の中に移されるのであるから（或る觀念を、それが悟性の中に持つ存在以外の如何なる存在としても考察しないのが抽象作用に於ける心の本来の働きであるから）、それは我々に全く實在的存在に関する何等の知識をも与えない。そこで序に我々は、真理であるか誤謬であるか我々が確實に知ることの出来る普遍的命題が存在に關係しない、ということに氣づくことが出来る、更にまた、もしも一般的にされたならば確實でなくなるであらうようなすべての個別的 *particular* な肯定と否定のみが存在に関するということを知り得る、それ等はただ存在する物に於ける觀念の偶然的結合または分離を断言するのであつて、それ等の觀念はその抽象的な性質に於ては、我々の知る限りに於て何等必然的な結合または矛盾 *repugnancy* をなさぬからである。

二 存在に関する三様の知識——然し乍ら諸々の命題の性質及び断定の色々な仕方は他の場所\*更に詳細に考察することとして、今や物の存在に就いての我々の知識に関する研究に進み、我々が如何にしてその知識を得るかを考察しよう。そこで私は、我々は、我々自身、自身の存在に関する知識を直覺によつて、神の存在に関する知識を論証によつて、その他の物に関する知識を感覺によつて、得ると言うのである。

\* これによつて見ると、存在に関する我々の知識に就いての以下の諸章は第五—第八章の前に、また恐らく第三卷よ

りも前に書かれたもののように思われる。存在に関する我々の知識の三つの部門は第三章、第二十一節に言っている所と連絡している。

三 我々自身の存在に関する我々の知識は直覚的である——我々自身の存在に就いて言えば、我々はそれを非常に明らかにまた非常に確実に知覚するから、それは何か証明をする必要もなければまた証明することも出来ない。何となれば何物も我々にとって我々自身の存在程明白ではあり得ない。私は考える、私は推理する、私は快樂と苦痛を感じる、これ等のうちの何れかが私にとって私自身の存在より以上に明白であり得るであろうか。もしも私がすべての他のものを疑うとしても、その疑そのものが私をして私自身の存在を知覚せしめ、私にそれを疑うことを許さないであろう。何となればもし私が自分が苦痛を感じていることを知っているならば、私が私の感ずる苦痛の存在を確実に知覚すると同様に確実に私自身の存在を知覚していることは明白である、或いはもし私が自分が疑っていることを知っているならば、私は私が疑と呼ぶその思考を確実に知覚すると同様に、疑いつつあるそのものの存在を確実に知覚するからである。かくして経験は、我々が我々自身の存在に関する直覚的知識を持ち、我々が在る、ということの内的な間違いないき知覚を持つということを確信せしめる。感覚、推理、または思考のあらゆる働きに於て、我々は我々自身の存在を自ら意識している、そしてこの点に於て確実性の最高の程度に達することが出来るのである。

\* これはデカルトの考と同じである。第十章、第二節参照。

## 第四卷 知識と蓋然性に就いて

【第一〇章 神の存在に関する我々の知識に就いて 本 PDF では略】

【第一章 その他の物の存在に関する我々の知識に就いて 本 PDF では略】

## 第十二章 我々の知識の進歩に就いて

一 知識は公理から生ずるのではない——公理<sup>イ、\*</sup>がすべての知識の基礎であるということ、また諸科学は何れも一定の予め知られた事の上に建てられるということ、がこれ迄学者の間で普通一般に承認せられた意見であつたので、初めに一つまたは幾つかの一般的命題を設定して、その問題に就いて得らるべき知識を建設する基礎とすることが、スコラ学派の常道であつた。かように或る科学の基礎として設定されたこれ等の学説は、我々がそこから出発せねばならぬ初めとして原理 principles と呼ばれた。

\* 本章の初めの節に於てロックは第七章の問題に立ち歸つてゐる。

(二) 他の諸科学に於て恐らくこのやり方に機会を与えた一つの事は、それが数学に於て非常に成功したように思われたことである、と私は思う、この数学に於て人々は知識の非常な確実性に到達したことが認められたので、この科学は、すべての科学の中で最大の確実性、明晰さ、及び明証を含むものとして、*mathematica* 《マテマタ》及び *mathesis* 《マテシス》即ち学問または学ばれる事と呼ばれる特権を得たのである。

三 そつではなく明晰判明な觀念<sup>イデア</sup>の比較から生ずるのである——然し乍ら如何なる人ももしこの問題をよく考察するならば次のことを知るであらう（と私は思う）、即ちこれ等の科学に於て人々の到達した真実なる知識の大なる進歩と確実性は、これ等の原理の效力に依つたのでもなく、また初めに設定された二、三の一般的公理からそれ等の科学が受けた或る特殊の利益から生じたのでもなく、人々の思考

第四卷 知識と蓋然性に就いて

が關係していた明晰判明にして完全な諸觀念によつたのであり、またそれ等の觀念の中の或る二つが相等しいという關係またその一方が他方よりも大であるという關係が非常に明らかなので人々は直覺的知識を得、それによつて他の諸觀念の間にもその關係を発見する方法を得た事によつたのであり、しかもこの際これ等の公理の助を借りる事はなかつたのである。

【四 略 Dangerous to build upon precarious Principles.】

【五 略 To do so is no certain Way to Truth.】

【六 略 But to compare clear, complete Ideas, under steady Names.】

七 知識を進歩せしめる眞の方法は、我々の抽象的諸觀念を考察することによる——それ故に、もしも理性の忠告に従つて進まうとするならば我々は、我々の研究法を我々の吟味する觀念及び我々の求める真理の性質に適合せしめねばならない。一般的な確実な真理は、抽象的諸觀念の聯関と關係の中にのみその基礎を持つことが出来る。これ等の關係を見出すために、我々の思考を賢明に秩序正しく適用することが、真理と確実性とを以てそれ等の關係に就いて一般的な命題となすことの出来るすべてのことを見出す唯一の方法である。この場合我々が如何なる段階によつて進むべきかは数学者の諸学派に於て学ぶべきである、彼等は非常に明らかなやさしい初めから、しずかに段々と、推理の連續的なつながりによつて、一見したところでは人間の能力を越えているように思われる真理の発見と証明に進むのである。証明を見出す技術と、相互に当てはめることの出来ない諸々の量の等しいこと或いは等しくないことを論証的に示すところの中間にある諸觀念を選び出した順序に列べるために、彼等が作り出した驚

くべき方法が、彼等をかくも遠く迄連れて行き、かくも素晴らしきまた意外な発見を生じたところのものなのである。

【八 略 By which Morality also may be made clearer】

九 然し物体に関する知識は経験によつてのみ進歩せしめられる——實體に関する知識の探求に於ては、我々はかようなやり方に適して居る諸觀念<sup>イデア</sup>を欠いているので、全く別の方法に依らざるを得ない。我々は此処に於ては、(我々の抽象的諸觀念<sup>イデア</sup>が名目上の本質であると共に實在的本質でもあるような)他の場合に於けるが如く、我々の諸觀念<sup>イデア</sup>を熟考し、またそれ等の関係と相当とを考察することによつて、進むのではない。物の實在的本質の觀念<sup>イデア</sup>を欠いているために、我々は、我々自身の思考から、存在する儘の物そのものに赴かねばならない。経験<sup>イデア</sup>が此処に於ては、理性の教えることの出来ないことを、私に教えねばならない、そして如何なる他の諸性質が私の複雑觀念<sup>イデア</sup>の諸性質と共在しているかということをやつて見ることによつて始めて私は確實に知ることが出来るのである、例えば私が金と呼ぶところの黄色い、重い、鎔解する物体は展性があるかないか。然しこの経験(それが私の吟味するその特殊の物体に於てたとえどの方向に証明を与えても)は、私の試みたものの以外のすべての或いはどれか他の黄色い、重い、鎔解する物体に於てもそうであるということ私に保証しないのである。

一〇 これは我々に便宜を与えるが科学を与えることは出来ない——合理的な規則的な実験に慣れている人は、そういうことを知らない人よりも、諸物体の性質をより深く見、それ等物体の未だ知られていない性質をより正しく推測することが出来るであらうということを私は否定しない、けれども既に言

つたように、これは判断と意見に過ぎないのであって、知識と確実性ではない。我々の実体の知識を経験と歴史によってのみ獲得しまた進歩せしめるこの方法は——それがこの世の中で我々の置かれているこの中等の状態に於ける我々の弱い能力の到達し得るすべてなのであるが——私をして、自然哲学は科学と成すことが出来ないのではないかと思わせるのである。我々は、諸物体の種とその色々な性質に関しては、極く僅かの一般的知識にしか到達することが出来ない、と私は思う。我々は実験と経験的觀察を為すことは出来る、そしてそれから我々は安楽と健康の利益を引き出し、またそれによって人生のための便宜の貯えを増すことは出来る、然し私はこれ以上には我々の才能は到達しないのではないかと思うし、また私の考えでは我々の能力はこれ以上には進むことが出来ないのである。

\* 動物と天使の中間の状態。

\*\* 第四卷、第三章、第二十六節参照。【本PDFでは略】

—— 我々は道德的知識と自然の進歩に適している——これによって次の如き結論が得られることは明らかである、即ち我々の能力は、諸物体の内部の組織と實在的本質にまで透徹するには適していないが、しかも我々の義務と大なる関心との充分にして明瞭な発見に迄我々を導くに足る程明らかに我々に對して、神の存在と我々自身に関する知識とを示すのであるから、我々の持っている能力をそれが最も適している物に就いて用い、自然が我々に道を示していると思われる場合に自然の指示に従うのが、理性的存在としての我々に適わしいのであらう。何となれば我々の本来の仕事は我々の自然の能力に最も適して居り、我々の最大の関心、即ち我々の永遠の状態はどんなものかということに関する研究と、そ



ういふ種類の知識に在ると断定するのが合理的である。そこで私は、道德が人類一般の本来の学問と仕事であると断定してもよいと思うのである。

一二 然し仮説と間違つた原理とを警戒せねばならない——それ故に私は自然の研究を軽んじたり思い止まらせたりするものと考えられたくない。私は、自然の諸々の作品の考察が我々にそれ等の創造者を歎賞し、尊敬し、讚美する機会を与えるということ、そしてこの考察はもしも正当に指導されるならば、病院や養育院の設立者によつて樹てられた模範的慈善の永遠の功業よりも、人類にとつて役に立ち得るということを容易に認める。始めて印刷術を發明した人、羅針盤の使用を發見した人、キニーネの效能と正しい用法を公にした人は、大学や救貧院や病院を建てた人々よりも、知識の普及のために、有用な物品の供給と増加のために、より多くの貢獻をなし、より多くの人を死から救つたのである。私の言い度いことは、我々は余りに進んで意見または知識の期待を、それが得らるべきでない所で、或いはそれを与えないような方法によつて、懷きたがつてはならないということ、我々は疑わしい体系を完全な科学と考えたり、訳の分らない概念を科学的論証と考えたりしてはならないということだけである。物体の知識に於ては、我々は個々の実験から得ることの出来ることを拾ひ集めることに甘んぜねばならない、何故なれば我々は、それ等物体の實在的本質の發見によつて、一度に幾からげも全体として把束して、すべての種の本性と特性とを一緒に束にして理解することは出来ないからである。

一三 仮説の眞の用法——如何なる自然の現象を説明するのにも我々は、たとえ如何なるものでも蓋然的な仮説を用いてはいけないというのではない。仮説はもしもそれが良く作られたものであるならば、

第四卷 知識と蓋然性に就いて

少なくも記憶にとつて非常な助けとなり、また屢々我々を新しい発見に導くのである。私の言わんとする趣旨は次の如くである、即ち我々が諸々の個々の場合を非常によく吟味して、我々が仮説によつて説明しようとする事に於て多くの実験をなし、その仮説がすべての場合に於てはまるかどうか、我々が我々の諸原理によつてやり通せるかどうか、そしてそれ等の原理が、或る自然現象にはあてはまり之を説明するように思われるが、他の現象には矛盾するのではないか、ということを知る迄は、我々は如何なる仮説をも余りに早急に取り上げてはならない（常に物の原因を見透して抛り所とすべき原理を得ようとする心は、この事を非常に為し易い）。そして少なくとも我々は、諸々の原理の名前に騙されないように、また自然哲学の大概の仮説\*（殆どすべてと言つてもよい）がそうであるように、実は高々非常に疑わしい推測に過ぎない事を、疑なき真理と認めることによつて欺かれないように気をつけねばならない。

\* 仮説は重要な科学的方法の一つであるが、ニュートンは“Hypotheses non fingo”（余は仮説を作らず）と言ひ、仮説を「現象から推論されないもの」と定義した。この事から当時は仮説という語は悪い意味に用いられ、半ば形而上学的な思弁的なものを意味していたことが明らかである。

【一四 略 Clear and distinct Ideas with settled Names, and the finding of those intermediate ideas which show their Agreement or Disagreement, are the Ways to enlarge our Knowledge.】

【一五 略 Mathematics an instance of it.】

【第十三章 我々の知識に関する一層進んだ考察】【底本に於いて略】

## 第十四章 判断 JUDGMENT に就いて

一 我々の知識は限られているから、我々は何か他のものを要する——人間にとつて悟性の諸能力は、単に思索のためにのみでなく、また処世のためにも与えられているのであるから、もしも真の知識の確實性を持つもの以外に人間を導くものが何も無かつたならば、人間は大いに当惑するであらう。

二 それ故に神が若干の物を白昼の明るみに置いた如く、即ち比較的少数の物に限られてはいるが、恐らく、知的存在が何を為し得るかの試みとして、我々の中により良き状態への希望と努力とを刺戟するために、我々に若干の確實な知識を与えたように、また我々の関心事の大部分に於ては、神は我々に、この世で神が我々を置くことがその御意に叶つたところの中等の、見習の状態に適すると思われる蓋然性の黎明と言つてもよいようなものを与えたに過ぎないのである。

三 判断は知識の欠乏を補充する——明晰にして確實な知識が得られない場合にその欠乏を補うために神が人間に与えた能力は判断である、この能力によつて心は、証明の中に論証的な明証 demonstrative evidence を認めることなしに、諸觀念が一致するとか一致しないとか、或いはそれと同じことであるが、或る命題が真であるとか偽であるとか見做すのである。心は時には、論証的な証明と確實な知識が得られない場合に、必要のためにこの判断を行使する、また時には、論証的な確實な証明が得られる場合でさえも、怠惰、未熟、或いは急要のためにそうする。心のこの能力は、それが直接物に就いて行使される場合には判断と呼ばれ、言葉に述べられた真理に関する場合は極めて普通に同意 assent または不同意

dissent と呼ばれる、これが心がこの能力を用いる機会を持つ最も普通の仕方であるから、私は、我々の言葉の中で最も曖昧になり易くないものとしてこれ等の名辞のもとに、この能力を取扱おう。

四 判断は事物を知覚せずに、そうであると推定する *presuming* ことである——かくして心は真理と誤謬に関する二つの能力を持つてゐる。

第一に、知識、これによつて心は確實に知覚し、或る觀念<sup>イデア</sup>の一致または不一致を疑なく納得する。

第二に、判断、これは諸觀念<sup>イデア</sup>の確實な一致または不一致が知覚されないで、そうだろうと推定<sup>推定</sup>さるときに、<sup>\*</sup>というのはその語が意味するように、確實に分る前にそうであると見做されるときに、それ等の觀念<sup>イデア</sup>を心の中で結合し *unites*、或いは相互に分離する *separates* ことである。そしてもしも心が事実の通りに物を結合または分離するならば、それは正当な判断である。

\* その語とは「推定される」(*'presumed' to be so*) である。

## 第十五章 蓋然性に就いて

一 蓋然性 *Probability* は誤謬の恐れある証明による外見上の一致である——証明が、二つの觀念の一致または不一致を、相互に一定不変の明らかな結合をなしている一つ或いは更に多くの証拠の介在によつて示すことであるが如く、蓋然性は、一定不変の結合を持たないか或いは少なくとも持つてゐることが知覚されないが、しかも大抵は持つて居り或いは持つてゐると思われて、命題が真であり或いは偽であると判断するように——その反対であるとなすよりは——心を誘導するに充分な証拠の介在によるところのかような一致または不一致の外見に過ぎないのである。例えば、三角形の三つの角とそれが二直角に等しいということを示すために用いられる中間の諸角との間にある相等という確実な不変の關係を、或る人はこの事の証明に於て認める。然し乍ら証明を実際にやつて見る骨折をしたことのない人は、信ぜべき人である数学者が、「三角形の三つの角は二直角に等しい」と断言するのを聞いて、それに同意する、即ちそれを真理として受け取る。その場合彼の同意する根拠はその事の蓋然性である、彼がその事を認める根拠となる証明を与える人は、何事も自分の知識に反すること或いは知識以外のことは、特にこの種の事柄に於ては、断定するのが常ではないからである。

二 それは知識の欠乏を補うためである——すでに述べた如く我々の知識は非常に狭いものであるから、我々が考え、推理し、語るところの、否、行動の原理とするところの命題の多くは、それ等が真理であるということに就いて我々が疑いのない知識を持つことの出来ないようなものである、しかもそれ

等の或るものは確実性に非常に接近しているので、我々はそれ等に就いて全く何等の疑いをも持たずして、恰もそれ等が間違いなく証明せられて、それ等に関する我々の知識が完全で確実であるかの如くに、断乎としてそれ等に同意し、思い切つてその同意に従つて行動するのである。然しこの際確実性と証明のすぐ隣からずつと下つてありそうもないことまたあるまじきこと迄、否、不可能性の限界に到る迄の程度があり、また同意に就いても、充分な保証と確信からずつと下つて推測、疑い、不信に到る迄の色々の程度があるのであるから、私は今や（私の考えでは人智と確実性の限界を見出したから）次には蓋然性、及び同意 assent または信念 faith の色々な程度と根拠の考察に移らう。

三 それは我々が物 *things* が真であることを知る前に、真であると我々に思わせる *makes us presume* ことであるから——蓋然性は真であるらしいことである、蓋然性 (probability) なる字義そのものが、我々が妥当であるとなし或いは真であると認めるための論拠または証明を持つているような諸々の命題を示しているからである。心がこの種の命題に対して抱く気持は信念 *belief*、同意、または意見 *opinion* と呼ばれ、これは或る命題を、それが真であるという確実な知識なしに真であると認めることを我々に事実上説得するところの論拠或いは証明によつて、真であるとして承認しまたは許容することである。蓋然性と確実性 *certainly*、信念 *faith* と知識の間の相違は、知識のすべての部分には直覚がある、即ち各々の直接の観念 *イデア*、各々の階梯はその明白な確実な結合を持つているが、信念 *belief* に於てはそうでない、という点にあるのである。私をして信ぜしめるものは、私の信ずる *believe* ものの外にある或るものである、考察中の諸観念 *イデア* の一致または不一致と両面に於て明白に結び付いて居らず、従つてそれを明らかに示さ

ない或るものである。

四　そこで、蓋然性は我々の知識の欠陥を補うべきものであるから、その根拠は次の二つの事である。  
第一に、或る事の我々自身の知識、観察、及び経験との一致。

第二に、自分の観察と経験を保証する他の人々の証言。他の人々の証言に於ては次のことを考察すべきである。「一」その数。「二」その堅実さ。「三」証人の手練。「四」引用した書物からの証明である場合には、その著者の設計。「五」話の諸部分と諸項目の矛盾せざること。「六」反対の証言。

五　心はもしも合理的に進まうとするならば、或る命題を承認し或いは否認する前に、蓋然性のすべての根拠を吟味し、それ等の根拠が如何にして多かれ少なかれその命題に好都合であるか或いは不都合であるかを見なければならぬ、そして全体を然るべく考量して、より大なる蓋然性の根拠が一つの側に於て優勢であるか他の側に於て優勢であるかに応じて、より多く或いはより少なく断乎たる同意を以て、その命題を拒否し或いは承認せねばならぬ。例えばもしも私自身が或る人が氷の上を歩いているのを見るならば、それは蓋然性以上であり、それは知識である。然しもしも他の人が私に、彼が英国で、嚴冬のただ中に、寒さで堅くなつた氷の上を歩いているのを見た、と話すならば、この事は普通にみとめられる事件と非常によく一致しているので、私は、事柄そのものの性質によつて何か明らかな疑いがあるその事実の話に伴わない限りは、それを承認する傾向がある。然しもしも同じ事が、熱帯地方に生れて、かような事は以前に見たことも聞いたこともない人に話されたならば、その場合には蓋然性はすべて証言によつてゐる、そして話し手が数が多く、より信用に値し、真理の反対を語る興味を持たなければ、

それだけその事実は恐らく多かれ少なかれ信ぜられるのである。尤も何時でもこれと全く反対の経験を持ち、これに似た事を未だかつて聞いたことのない人に於ては、最もけがれ無き信用を持った証人の言も殆ど信ぜられることは出来ないであらう。このことがオランダの大使に対して起つたのである、その大使はシャムの王様を、王様がしきりに聞くことを望まれたオランダの特殊事情をお話してもてなしたのであるが、色々な話のうちに、彼の国では寒い時候のときは折々氷が非常に堅くなるので人々はその上を歩かし、また象が乗つたとしてもこれを支えるでしょう、というお話を申し上げた。これに対して王様はお答えになった、「これまで私はお前の話してくれた不思議な事どもを信じていた、何故なれば私はお前を真面目な正直な人間と思つていたから、然し今度はお前は嘘を言っているに違いない。」



## 第十六章 同意の程度に就いて

一 我々の同意は蓋然性の根拠によつて調整せられねばならぬ——蓋然性の根拠は我々は前章に於て述べた、それ等の根拠は我々の同意を支持する基礎であるが如く、またそれ等は我々の同意を調整する或いは調整すべき標準である。

二 これ等の根拠は常にありありと眼前に見ることは出来ない、そしてその時は我々は、我々がかつて或るかくの如き程度の同意に対する根拠を見たという記憶を以て満足せねばならぬ。

三 我々の以前の判断が正当になされなかつた場合の、この事の悪い結果——人々が過去の判断を固執し、以前に作られた結論に断乎として執着することが、屢々非常に頑固な誤謬と間違ひの原因となるということ、私は認めざるを得ない。然しその過失は、彼等が前に良く判断したことに対して記憶に頼るという点にあるのではなく、彼等が充分に吟味する前に判断したという点にあるのである。我々は、自分は多くの事柄に就いて正当な判断をなしたと考え、しかもそれがただその人が別の考え方をしたことがなかつたというだけの理由によるというような多くの（大多数とは言わないでも）人々を見出さないのであるか。ただ自分自身の意見を決して疑つたことがなく、決して吟味したことがなかつたためのみ、自分は正当に判断したと想像する多くの人々を見出さないのであるか。これは實際彼等は全く判断しなかつたが故に、彼等は正当に判断したのだと考えることである。しかもこれ等の人々がすべての人の中で自分の意見を最も頑強に固執する、何故なれば自分の信条を吟味することの最も少ない人々が、

一般に最も烈しく断乎としてそれを主張する人であるからである。我々が一度知った事を我々は確かにそうであると信ずる、そして我々は、我々の知識を覆えし、または疑わしいものとなすことの出来るような未だ見出されていない如何なる証拠もないということを確信することが出来る。然し蓋然性の問題に於ては、我々はその問題に何等かの仕方で関係しているすべての特殊なものを我々の前に持つているということ、またその蓋然性を反対の側に向け、現在我々に於て優位を占めているように思われるすべてのものに優ることの出来るような未だ見えないところの如何なる背後の明証もないということ、を我々はあらゆる場合に於て確信することは出来ないのである。しかも我々は自ら一つの側或いは他の側に決定することを強いられる。我々の処世と我々の大なる業務の処理とは遲滞することを許さない。

四 その正しい使用は、我々相互の寛大と忍耐である——それ故にすべての人ではなくても大部分の人々にとつては、多くの意見、*several opinions* を、それ等が真理であるという確実な疑うことの出来ない証拠なしに、持つということは不可避的なことであるから、私の考えでは、様々な意見を持ち乍ら平和を維持し、人道と友愛という共通の務を果たすことがすべての人にとつて適わしいことであろう。我々は充分に、お互いの無智を憐み、すべての優しい順当な知らせ方でそれを除くように努め、他の人々が彼等自身の意見を否認して我々自身の意見を承認しようとしなからといって、直ちに彼等を頑固で片意地であるとして、ひどい取扱いをしないようにせねばならぬ\*。

\* この考はロックの根本的な態度の一つを示している、同じ考は「寛容論」(*Letters on Toleration*)に現れている。

五 蓋然性は事実或いは思索の何れかに関する——然し乍ら同意の根拠とその幾つかの程度に帰るな

らば、我々は、我々が蓋然性に導かれて承認する命題には二つの種類があるということを注意せねばならない、即ち觀察せられるが故に人間が証明することの出来る或る個別的な存在、即ち普通に名付けられるところに依れば、事實に関するか、さもなければ、我々の感覺の発見することの出来ない所にあるので、如何なるかような証明も不可能なような事物に関するのである。

六 蓋然性の最初にして最高の程度は、すべての時代に於けるすべての人の一般的承認が、それが知られ得る限りに於て、同様な場合に於ける或る人の不変にして消滅することのない經驗と一致して、公正なる証人によつて証拠立てられている或る特殊な事實の真理を裏書するという場合である、諸物体のすべての一定している構成と性質、及び普通の自然の経過に於ける原因と結果の規則的な進行はこれに属する。これを我々は物そのものの本性による論拠と名づける。何となれば我々自身及び他の人々の絶えざる觀察によつて常に同じような状態であることが見出されたことを、我々が、堅実な規則的な原因が我々の知識の到達し得る範囲内に這入つて来なくても、そういう原因の結果であると断定するのは無理ではない。これ等の蓋然性は非常に確實性に近づいて来るので、それ等は最も明白な証明と同じ様に絶対的に我々の思考を支配し、同じ様に充分に我々の行動に影響する、そして我々は、我々の關係事項に於て、それ等と確實な知識の間に殆んど或いは全く區別をなさない。かように根拠を与えられた我々の信念 belief は保証、assurance に迄高まるのである。

七 第二に、蓋然性の次の程度は、私が、私自身の經驗とそれを述べるすべての他の人々の一致によつて、或るものが大抵しかじかであるということ、及びその一つの特例の例が多く疑うことの出来ない

い証人によつて証拠立てられるということ、を見出す場合である、例えば歴史は、すべての時代の人々に就いて、大抵の人々は公共の福利よりも寧ろ彼等の個人的な利益を欲するという説明を与え、また私自身の経験も、私がそれを觀察する機会を持った限りに於てこの事を裏書きするから、ティベリウスに就いて書いているすべての歴史家が、ティベリウスがそうであつたと言っているならば、それは非常にありそうな事である。そしてこの場合に於て我々の同意は、確信と呼ばれ得る程度に迄高まる充分な基礎を持つてゐるのである。

\* Tiberius — ローマ帝国第二代の皇帝。

八 第三に、我々に無関係に起ることに於ては、或る特殊な事実が疑ふことの出来ない証人達の符合する証言によつて証明せられる場合には、我々の同意はやはり避けることは出来ない。かくして、イタリアにはローマのような町があるということ、約千七百年前にその町にジュリアス・シーザーという人が住んでゐたということ、彼は將軍であつたということ、また彼はもう一人のポムпейという將軍と戦つて勝つたということ、これはその事の本性に於てはこれを認めさせる或いは認めさせない何物もないけれども、信用のある歴史家達がこれを語つてゐるのであり、これを否認する作家は一人も無いのであるから、人はこれを信じない訳にはいかない。

九 経験と証言が撞着する場合には、蓋然性の程度は無限に変わる——ここ迄は問題は頗る円滑に進む。かくの如き根拠による蓋然性は非常な明証を伴うので、それは自然に判断を決定して、論証が、我々がそれを知ろうとしても知らずにいようとしても、そうであると同じ程度に、我々に対して信ずるまたは

信じまいとする自由を残さないのである。困難は、証言が普通の経験と矛盾し、歴史と証人達の報告が、普通の自然の経過と、或いは相互に、撞着するときに起るのである。次のことだけが一般に言われる、即ち諸々の論拠と証拠は、賛成のものであつても反対のものであつても、あらゆる個々の事情を精細に考量する然るべき吟味によつて、如何なる人にとつても全体として、多かれ少なかれ何れかの側に傾いてゐるようにならう、それに應じてそれ等は心の中に我々が信念、belief、推量、conjecture、臆測、guess、疑念、doubt、躊躇、wavering、邪推、distrust、不信、disbelief 等と呼ぶところの色々な氣持を生ずるに適してゐるのである。

一〇 言い伝えられた証言は古くなればなる程その証明の力が弱まる——これは証言が用いられる事柄に於ける同意に關することである、これに就いては英國の法律に於て守られる規則に注意して見るのは不適當ではないと思う、それは記録の証明された写しは充分な証拠であるが、それ程充分に証明されたこともなく、また決してそれ程信ずることの出来ない証人によるところの写しの写しは法廷に於ては証拠として認められないということである。このやり方は、もしそれが正と不正の決定に於て許されるものならば、如何なる証言も、原の真理 the original truth から遠ざかる程証明の力が弱くなる、という考えを伴つてゐるのである。物そのものが現に存在することが、私が原の真理と呼ぶものである。或る信すべき人が、この真理を彼が知つてゐることを保証するのは充分な証拠である、然しいま一人の同様に信すべき人が、そのことを前者の報告によつて立証する場合にはその証言はより弱い、伝え聞いた証拠をまた伝え聞いた証拠を保証する更にもう一人の人は尚更尊重すべきでない。それ故に言い伝えられる

真理に於ては、隔たる毎に証拠の力は弱められる。私はこの事を注意する必要があると考えた、何故なれば私は若干の人々の間ではこれと全く反対のことが普通に実行されて、彼等は諸々の意見は古くなることによつて力を得るものと見做しているのを見出す、そして千年前に、最初の保証者と同時代の分別ある人にとつては決してありそうだと思われなかつたであろう事が、今では多くの人々がそれ以来その人から順々に言い伝えて来たというだけの理由で、すべての疑いを容れぬ程確実であると主張せられるからである。この根拠によつて最初に作られた時に明らかに誤つて居つたか或いは充分疑わしがつた諸々の命題が、蓋然性の逆の規則によつて、信憑すべき真理として通用するようになるのである。

一一 しかも歴史は非常に役に立つ——私はここで歴史の信用と效用を縮少するものと考えられたくない、歴史は多くの場合に於て我々の持つすべての光である、そして我々はそれからの確な明証を以て、我々の持つ有用なる真理の大部分を受け取るのである。然しこの真理そのものが、私に、如何なる蓋然性もその最初の原物より以上に高まることは出来ないと言ふことを強いる。ただ一人の証人のただ一つの証言以外の如何なる明証をも持たない事は、良くても、悪くても、或は可もなく不可もないものであつても、彼の唯一の証言によつて存続し或いは没落せねばならない、そして後になつて多くの他の人々によつて次々に引用されようとも、そのことによつて何等かの力を受け取るどころではなく、ただより弱くなるだけである。情熱、興味、不注意、意味の取り違い、及び無数の奇妙な理由や氣まぐれ等々人の心の行動の原理となるもの（これ等は見出すことは出来ない）は、或る人をして他の人の言葉や意味を間違つて引用せしめることがあり得る。作家達の引用文をほんの僅かししか吟味したことのない人は、

原典がない場合に、引用が如何に信ずるに足りないものであるか、従つて孫引きが如何に尚更頼ることが出来ないものであるか、を疑つて見る事が出来ない。或る時代に薄弱な根拠によつて断定された事は、その後屢々繰り返されることによつて将来の時代に於てより妥当なことになることは決して出来ない、ということとは確實である。

一二 感覚の発見することの出来ない物に於ては、類推が蓋然性の重要な規則である——これ迄我々が述べた蓋然性は、事実、及び觀察と証言が可能となうな物に関する場合だけであつた。いま一つ、物が我々の感覚の到達する範囲内に這入つて来ないので証言することは出来ないけれども、人々が色々な程度の同意の意見を懷くような種類の蓋然性がある。それは次の如きものである、(一) 靈体 spirits、天使、惡魔等の如き我々の外の有限なる非物質的なものの存在、性質、及び作用、或いはそれ自身小さいためにまたは我々から遠く離れているために、我々の感覚が氣づくことの出来ない物質的なものの存在、例えば諸々の遊星及び広犬なる宇宙のその他の棲家に、植物、動物、及び知的なる住者が存在するかどうか。(二) 自然の万物の大抵の部分に於ける作用の仕方に関しては、我々は諸々の感知せられ得る結果は見るけれども、それ等の原因は未知であつて、我々はそれ等の結果が生ぜられる方法と仕方を知覚しない。我々は、動物が産み出され、養われ、動くのを見る、また磁石が鉄を引き付け、蠟燭の諸部分が、次々に融けて焰になり、我々に光と熱とを与えるのを見る。これ等及び同様な諸々の結果を我々は見て知っているが、作用をする諸々の原因、とそれ等の結果の生ぜられる仕方は、我々はただ臆測し多分こうだろうと推量することが出来るだけである。類推、analogy がこれ等の事柄に於ては我々の持つ唯

一の助けである、そしてそれによつてのみ我々はすべての我々の蓋然性の根拠を引き出すのである。かくしてただ二つの物体を相互に烈しくこするだけのことが熱と非常に屢々火さえも生ずることを觀察するので、我々は、我々が熱及び火と呼ぶものは燃焼する物質の目に見えない微細な諸部分の烈しい動搖であると考える理由を持つ。同様に透明な諸物体の色々な屈折が我々の眼の中に様々な色の色々な現象を生ずるということ、また天鵞絨<sup>びろうと</sup>、波紋のある絹布等の如き様々な物体の表面の諸部分を色々な色々に並べて置くことが、同様な結果を生ずることを觀察するので、我々は、諸物体の色と光は恐らくそれ等の物体に於てはそれ等の微細な感知せられぬ諸部分の色々な排置と屈折に他ならぬのであらう、と考えるのである。かくして人間の觀察を受ける創造物のすべての部分に於て、我々が世の中に於て見るあの非常に多様なすべての物の間には、如何なる大なるまたは識別し得る間隙もなく、それ等は相互に段々に結合して居り、それ等の物は非常に密接に繋がっている、諸々の物の色々な等級に於てはそれ等の間の限界を見出すことは容易くないということが分るので、諸々の物はかような緩やかな段階によつて、完成の程度が高まつて行っているということを確信する理由を我々は持つのである\*。感覺的なものと理性的なものは何処で始まるか、また非感覺的なものと非理性的なものは何処で終るか、を言い定めるのは困難なことである、そしてどれが生物の最も下等な種であるか、どれが最初の無生物であるか、を精確に決定する程慧眼な人があるであろうか。我々の觀察し得る限りに於ては、正規の円錐体に於て量が増減するが如くに、諸々の物は縮小しまたは増大する、円錐体に於ては遠く隔たった直径の大きいさの間に明らかな差があるけれども、上のと下のがお互いに触れている場合にはその間の相違は殆ど識別する



ことが出来ない。若干の人々と若干の動物の間では相違は著しく大である、けれどももし我々が若干の人々と若干の動物の悟性及び諸々の能力を比較して見るならば、非常に僅かの相違しか見出さぬであろうから、人間のそれが動物のそれよりも明晰であるとかまたは広汎であるとか言うことは困難であろう。今も言う通り、人間以下の創造物の諸部分に於て、かような徐々にして緩やかな降下が認められるので、類推の法則によつて、我々と我々の観察を越えている物に於てもやはりそうであるということ、そして完成の程度に於て我々より幾段か優れて居るところの知的存在の幾つかの等級があつて、各々すぐ次のものから決してあまり隔たつてはいない緩やかな段階と相違によつて造物主の無限の完全に向つて上昇しているということ、も恐らくありそうなことと為されるであろう。

\* 第三卷、第六章、第十二節参照。

一三 反対の経験が証言を弱めない一つの場合——普通の経験と当り前の事物の経過とは、人々をして彼等の信念に対して提示される或る事を信用せしめ或いは拒否せしめるために、正当にも彼等の心に対して重大な影響を持つものではあるけれども、事実の異様であることが、それに就いて与えられる公正な証言に対する同意を弱めない場合が一つある。何となればかような超自然的な事件が、自然の経過を変える力を持つてゐる者の目指す目的にとつて適當である場合には、かような事情のもとに於ては、それ等の事件は普通の観察を越え或いはそれに反することが多ければ多いだけ、信を得るのにより良く適しているであろう。これが本当の奇蹟の場合であつて、これは、充分に証拠立てられると、それ自身信ぜられるばかりではなく、またかような確証を必要とする他の真理にも亦信用を与えるのである。

一四 単なる啓示の証言は最高の確實性である——我々がこれ迄に述べたものの他に、提言された事が普通の経験と事物の当り前の経過に一致してもしなくても、単なる証言によつて、最高度の我々の同意を要求するような一種の命題がある。その理由は、その証言が、欺くことも欺かれることもあり得ないようなもの、即ち神そのものによるものだからということである。これは疑いを越えた保証、異議を容れない明証を齎らすのである。これは啓示という特有の名前で呼ばれ、それに対する我々の同意は信仰と呼ばれる、これは我々の知識そのものと同様に絶対的に我々の心を決定し、同様に完全にすべての惑いを排除する、そして我々は、神からの何等かの啓示が真であるかどうかと疑うことが出来る位なら、我々自身の存在をも疑うことが出来るのである。それ故に信仰は牢固として確實な同意と保証の原理であつて、疑問または躊躇に対する如何なる種類の余地をも残さないものである。ただ我々は、それが神の啓示であるということ、及び我々がそれを正しく理解しているということを確かめねばならぬのである、然らずんば、もし我々が神の啓示でないものを信仰し確信するならば、我々は、熱狂的信仰のすべての法外な事と間違つた原理のすべての誤りに曝されるであらう。それ故にこれ等の場合に於ては、我々の同意が、或る事が啓示であるということの明証と、これこれが啓示の表現の意味であるということ、より以上に高いものであることは合理的にはあり得ない。もしもその事が啓示であるということの明証、またはこれこれがその本当の意味であるということが蓋然的な証拠にのみよつてゐるならば、我々の同意は、証拠の多少とも明らかな蓋然性から生ずるところの確信または不信より以上に高くに到達するとは出来ない。然し乍ら信仰及び、その他の確信の論拠に対して信仰の持つべき優越に就いては、私は

更に先へ行つて語ろう、\*  
そこでは私は普通、人がするように信仰を理性の反対に置いて取扱う、実は信仰は最高の理性に基づく同意に他ならないのであるけれども。

\* 第十八章。

## 第十七章 理性に就いて

一 理性という語の色々な意義——リーズン (reason) という語は英語では色々な意義を持つている、或る時はそれは真にして明晰な諸原理と考えられる、或る時はこれ等の原理からの明晰にして公正な推理と考えられる、また或る時は原因、殊に目的因と考えられる。然し乍ら私は此処では、それ等のすべてと違つた意義に於てそれを考察する、即ち人間の或る能力、即ちそれによつて人間が動物と区別せられると考えられ、またそれに於ては人間は明らかに遙かに動物に優つてゐる能力を表示するものとして考えよう。

\* 「理性」(reason) はロックに於ては一般に推理の能力を意味しているが、これは十八世紀を通じて普通の用法である。

二 理性の働きは如何なる点に存するか——もしも一般的知識が、既に示したように、我々自身の諸觀念の一致または不一致の知覚であり、我々の外のすべての物(神だけは除いて)の存在の知識が我々の感覚によつてのみ得られるのであるならば、外的感覚 outward sense と内的知覚 inward perception 以外の或る他の能力を行使するための如何なる余地があるであろうか。如何なる点に理性の必要があるであろうか。それは大いにある、我々の知識の増進と我々の同意の調整との二つのことにとって、何となれば理性は知識と意見の両方に關係があり、すべてのその他の我々の能力に対して必要であり助けとなる、否それ等の中の二つ即ち賢明、sagacity と推論、illation とを含んでいる。前者によつて理性は中間の諸觀念を見出し、後者によつて、連鎖の各々の環に如何なるつながりがあり、それによつて両端が如何

に結び付けられているかを発見するように、それ等の中間の諸觀念<sup>イデア</sup>を整理する、かくして、求められている真理を、謂わば、目の前に持つて来るのであつて、これが我々の推論<sup>\*</sup>或は推理 inference と呼ぶことであり、それは推理の過程の各段階に於ける諸觀念<sup>イデア</sup>の間にある結合の知覚に他ならない、これによつて心は、それが知識に到達する場合の論証に於けるが如く、或る二つの觀念<sup>イデア</sup>の確實な一致または不一致を見るに至るか、或いは意見に於けるが如く、心が承認を与え或いは差控えるところの二つの觀念<sup>イデア</sup>の蓋然的結合を知るに到る。感覺と直覺とはほんの僅かの所迄しか達しない。我々の知識の大部分は推理と中間の諸觀念<sup>イデア</sup>によつてゐる、そして我々が已むを得ず知識の代りに同意を置替へることに甘んじて、諸々の命題が真であることを確かめることなしに真であるとなす場合に於ては、我々はそれ等の命題の蓋然性の根拠を見出し、吟味し、比較する必要がある。これ等二つの場合に於て、媒介を見出して、一方に於ては確實性を、他方に於ては蓋然性を発見するために、それを正しく適用する能力が、我々の理性と呼ぶものである。

\* 「推論」は "inflation" の訳であるがこの語は現今では殆ど用いられない。

三 それ故に我々は理性に於て次の四つの段階を考察することが出来る、最初にして最高の段階は証拠 truths を発見し discovering 見出す finding out ことである、第二は、それ等の証拠を規則正しく整然と配列して、それ等の結合と力が明らかに容易く知覚されるように明晰な適当な順序に置くこと、第三は、それ等の結合を知覚すること、第四は、正しい断案を引き出すことである。これ等のいろいろな段階は如何なる数学的証明に於ても認められる、何故なれば、各々の部分の結合を知覚することは一つの事で

あり、証明はまた別の部分によつてなされるのであるから。断案がすべての部分に依つてゐることを知覚することは別の事である、証明を自ら明晰にきちんとやり遂げるということは更にまた別の事である、そして証明を作るための中間の諸観念<sup>イデア</sup>または諸々の証拠をはじめに見出して置くということはこれ等のすべてと違ふ或る事である。

四 三段論法は理性の主な道具ではない——理性に關して私が考察したいと思うことがもう一つある、それは、一般に考えられているように、三段論法は理性の固有の道具であり、この能力を行使する最も有用な方法であるか否か、ということである。私がこれを疑う理由は次の如くである、三段論法は前述の我々の理性の働きの中の一つだけに於てそれに役立つ、即ち、或る一つの場合に於て諸々の証拠の結合を示すに役立つだけである、しかもこの点に於ても決して非常に役立つのではない、何故なれば心は、かような結合が實際にある場合には、三段論法なしでも、同じように容易く、否恐らくより良く、それを知覚することが出来るからである。

もし我々が我々自身の心の働きを観察するならば、我々の思考を何等かの三段論法の規則に纏めることなしに、ただ証拠の結合を観察する時に我々は最も良く最も明らかに推理する、ということを見出すであろう。それ故に我々は、非常に明らかに正しく推理する人で如何にして三段論法を作るかを知らない者が沢山あることに氣づくことが出来る、そして私には如何なる人も腹の中で推理する時に三段論法を作るとは殆ど信んぜられない。成る程、美辞麗句の文彩に隠れたり、滑かな修飾文に巧妙に包まれてゐる誤謬を発見し、才智と美しい言葉の覆いの不合理を剥ぎ取つてそれをありの俤の不正の形に於て示

すために、三段論法が時々用いられる。〔然し三段論法はかような不精確な言い方の欠点または誤謬を、それを人為的な形式に入れることによって、三段論法の式と格を充分研究して、三つの命題が結び付けられる多くの仕方をよく吟味して、それ等の何れが確実に正しい断案に導き、そして何れが導かぬか、またそうなるのは如何なる根拠に依るか、を知っているような人々に対してのみ示すのである。もしも三段論法が唯一の固有の理性の道具であり知識の手段であると考えられねばならぬならば、アリストテレス以前には理性によつて何事かを知つた或いは知ることの出来た人は一人もないということ、また三段論法の発明以来この事をなす人は十万人の中に一人もないということ、になるであらう。

然し神は、人間をただ二本足の生物となし人間を理性的にすることはアリストテレスに任せるといふ程、人間に対して吝嗇ではなかつた。神は、人類に対してもつと鷹揚であつた。神は人間に、三段論法で推論する方法を教授せられること無しに推理することの出来る心を与えた。悟性はこれ等の規則によつて推理することを教えられていない、それはその諸觀念の適合または矛盾を知覚する生れつきの能力を持つて居り、如何なるかような錯雜した反復も無しに正しくそれ等の觀念を排置することが出来る。私は何とかしてアリストテレスをつまらない者にするためにこの事を言うのではない、私は彼を古代人の中で最も偉大な人の一人と見做している、その広い見解、思考の鋭さと深さ、及び判断の力に匹敵した者は稀である、そして彼は結論が正当に引き出されたことを示すことの出来る立論の形式をこのように発明した事そのことによつて、何事をも否定することを恥ぢなかつた人々\*に反対して、大きな功績を樹てたのである。そして私はすべての正しい推理は彼の三段論法の形式に帰することが出来るという

ことを異議なく認める。しかも少しも彼の値打を下げることなしに、私は、それ等の形式は真理を見出すことを欲している人々を真理に導くための唯一の推理の仕方でもなく、また最上の仕方でもないということを、正当に言い得ると思うのである。そして彼自身も或る形式が断定を与え他のものは与えないということとをそれ等の形式そのものによつてではなく、根本的な知識の方法、即ち、諸觀念<sup>イデア</sup>の明らかな一致によつて見出したことは明らかである。」田舎の貴婦人に、風は南西で、天気は曇りで雨が降りそうだと言へば、彼女は、熱のあつた後で、そんな日に薄著をして外出するのは彼女にとつては安全ではないということとを容易く理解するであらう、彼女は次のすべてのこと、即ち雲、雨、湿り、風ひき、ぶり返し、及び死の危険、の蓋然的聯関を、それ等を心を妨害し邪魔する幾つかの三段論法のあの人為的な厄介な束縛の中に一緒に縛り付けることなしに、明らかに見る、そして心は三段論法なしで一つの部分から他の部分へより早くより明らかに進むものである。そしてあらゆる人は数学的論証に於て、それによつて得られる知識は三段論法なしで最も簡単に最も明らかに到達せられる、ということとを認めるであらうと私は思うのである。

〔推理するということは、真であるとして設定された一つの命題によつていま一つの命題を真なるものとして引き出すことに他ならない、例えば「人々はある世に於て罰せられるであらう」というのが設定された命題であるとする、それから「そこで人々は自分自身を決定することが出来る」というのもう一つの命題が引き出される。そこで問題は、心がこの推理を正しくなしたか否かということである、もしも心が、中間の諸觀念<sup>イデア</sup>を見出し、それ等の結合を観察し、然るべき順序に置くことによつて、それを



なしたのであるならば、心は合理的に仕事をして正当な推理をなしたのである。もしも心がかような考  
 なしにそれをなしたのであるならば、心は有効に通用する推理をなしたというよりは寧ろ、それを適用  
 せしめんとする或いは適用するものと考えられるようにし度いという意向を示したのである。然し何れ  
 の場合に於ても、それ等の観念<sup>イデア</sup>を発見し、その結合を示したのは、三段論法ではない、何となればそれ  
 等の観念<sup>イデア</sup>が合理的に三段論法の中で用いられ得る前に、それ等は見出されねばならぬし、またその結合  
 があらゆる所に於て認められねばならぬ、或る観念<sup>イデア</sup>が、その観念<sup>イデア</sup>によつて一致することが示されるべき  
 二つの他の観念<sup>イデア</sup>と如何なる関聯を持つてゐるかを考察することなしに、三段論法に於て充分よく働き、  
 或る断案を証明するために媒名辞として盲滅法に取られ得るといふことを言う事が出来ない限りはそう  
 である。然し乍らこんな事は誰も言うまい、何故なれば両端の観念<sup>イデア</sup>が一致すると断定されるのは、中間  
 の観念<sup>イデア</sup>と両端のものが一致することが知覚されることによるのであつて、それ故に各々の中間の観念<sup>イデア</sup>は、  
 そのつながり全体の中で、それが中間に置かれる両側の二つと明らかな関聯を持つようなものでなけれ  
 ばならない。上に述べた例に於て心は、あの世に於ける人々の罰という観念<sup>イデア</sup>と罰する神という観念<sup>イデア</sup>の間に、  
 罰する神と罰の正当であることとの間に、罰の正当であることと罪との間に、罪と別の行いをする  
 力との間に、別の行いをする力と自由との間に、そして自由と自己決定との間に、存するところの関聯  
 を見るので、人々と自己決定との間の関聯を見るのである。

さて私は尋ねる、両端の結合は、五つか六つの紛糾した繰り返しとごたまぜに於けるよりも、この単  
 純な自然の排列に於て、より明らかに見られるのではないかと。何となれば相結合している諸観念<sup>イデア</sup>の

自然の順序が三段論法の順序を指示するに違いない、そして人は各々の中間の觀念イデアとそれが結び付ける觀念イデアとの間の関聯を、彼が理性を以てそれを三段論法の中で用いる前に、知るに違いない。そしてすべてのこれ等の三段論法が作られる時、論理学者である人もない人も推論の力、即ち両端の関聯を少しもより良く見ることはないであろう。

然らば三段論法は如何なる役に立つのであろうか。私は答える、それは主としてスコラ学派に於て役に立つ、そこでは人々は、明らかに實際一致する諸概念の一致を否定することを恥ぢることなく許されているのである、またスコラ学派の外に於ては、自分など自身にとつてさえも明らかである諸觀念イデアの結合を恥ぢることなく否定することを其処で学んだ人々にとつて役立つのである。然し乍ら真理を見出すことより他には目的を持たない率直な真理の探究者にとつては、推理の承認を強要するための如何なるかような形式の必要もない、推理の真理と合理性は諸觀念イデアの單純な明瞭な排列に於てより良く分るのである。そこでこういうことになる、人々は彼等自身の真理の探究に於て、確信を得るために決して三段論法を用いない、何故なれば彼等が諸觀念イデアを三段論法にあてはめることが出来る前に、彼等は中間の觀念イデアとその両側にあつてそれが向けられている二つの他の觀念イデアとの間の関聯を、それ等の一致を示すために知らなくてはならない、そして彼等がその事を知るときは、推理が宜しきを得ようと得なからうと彼等は知るのである、それ故にそれを決定するには三段論法は現れ方が余りにも遅いのである。

私はこれ迄の経験によつて、若干の人々は、彼等がこれ迄或る事に帰する習わしであつたすべての效用が認められないと、如何に容易く、私がこれをすっかり棄ててしまおうとしているのだ、という叫び

声を挙げるものであるかを知っている。然しかような不正にして根拠のない非難を防ぐために私は、私は知識を得るために悟性の助けとなる如何なるものをも取り去ろうとしているのではない、ということ、を彼等に告げる。そしてもしも三段論法に熟達し慣れている人々が、彼等が真理を発見するための推理にとつてそれが助けとなることを見出すならば、彼等はそれを用いるべきである、と私は思う。私の目指す所はただ、彼等はこれ等の形式にそれに属するより以上の事を帰すべきではない、ということだけである。若干の眼は物を明晰判明に見るためには眼鏡を必要とする、然し乍らそれだからと言って、眼鏡を用いる人々をして、如何なる人も眼鏡なしでは明らかにすることは出来ないと言わしめる勿れ<sup>\*\*\*</sup>】

\* 勿論ソフィストを指すのである。

\*\* 【二カ所ある（「」内の部分は第四版に於て附加されたのである、と底本に記されている。）】

【五 略 Helps little in demonstration, less in probability.】

六 三段論法は我々の知識の増進に役立たずしてそれを振りまわすに役立つ——然し三段論法が、人々に彼等の誤謬と間違いを確信せしめるために、我々を助ける（恐らくそう言われるであらうように）としても、（しかも私は三段論法の力によつて己むを得ず自分の意見を捨てた人があれば喜んで会いたいのだが）しかも尚三段論法は、その最高の完成の状態ではないとしても、確かにその最も困難な仕事であり、我々が最も多くその助けを要するところの役目に於て、我々の理性の役に立ち得ない、そしてその役目というのは証拠を見出すことと、新しい発見をなすことである。三段論法の諸々の規則は、相隔たっている諸觀念<sup>イデア</sup>の関聯を示すことの出来る中間の諸概念を心に与えるためには役に立たない。この

推理法は何等の新しい証拠を発見するものではなく、我々が既に持つてゐる古い証拠を整理し排列する技術である。ユークリッドの第一巻の四十七番目の命題（訳者注——所謂ピタゴラスの定理）は成る程真であるが、その発見は普通の論理学の如何なる法則によつてゐるのでもないと思ふ。人は先ず知つて、然る後に彼は三段論法的に証明することが出来るのである。であるから三段論法は知識の後に來るのであつて、その時我々は殆ど或いは全く三段論法を必要としないのである。そして我々の知識の貯えが増加し、かの諸々の有用な技術と科学が進歩するのは、主として遠く離れた諸觀念イデアの關聯を示すところの諸觀念イデアを見出すことによるのである。三段論法は、たかだか、我々の持つてゐる少しばかりの知識を振りまわす技術に過ぎないのであつて、何等それに附け加えるところはないのである。そしてもしも或る人が彼の理性を全くこういう風にばかり用いるとしたならば、彼の為すところは、地球の内部から幾らかの鉄を得て、それをすべて打ち延ばして劍となし、これをお互いに戦ひ打ち合うために自分の召使達の手に与える人のするところと大した違いはないであろう。そして私は、三段論法を振り翳かざすことにのみ理性のすべての力を用いようとする人は、未だ自然の奥深い処に隠されてゐる沢山の知識を殆ど発見することはないであろう、という考えに傾いて居る、そして私の考えるところでは、式と格の嚴密な規則による如何なるスコラ哲學的な手續よりも寧ろ、生れつきの素朴な理性の方が（以前にそれが爲したように）その知識の宝庫への道を開き、人類の共有の資産を増すことがあり易いのである。

七 他の助けが搜されるべきである——それにも拘らず私は、この非常に有益な部面に於て我々の理性を助けるために見出さるべき諸々の方法があることを疑わない、私は賢明なフーカー\*に鼓舞されてこ

のことを言うのであつてこの人は彼の「宗教的国家」の第一巻第六節に於て次の如く語っている、「もしも眞の技術と学問の正しい助けが附け加えられるならば、（私は明らかに認めねばならぬのであるが、博學な時代という名前を持つてゐる、世界のこの時代は、この助けを多く知りもせずまた一般に尊敬もしない）疑いもなく、それに慣れてゐる人々と現在あるが如き人々の間には、後者と愚人との間に於けると同じ位、判断の成熟という点で相違があるであらう。」私はここにこれ等の「技術の正しい助け」の何れかを見出したとか発見したとか主張するのではない、とこの深い思想を持った偉人は述べてゐる、然し乍ら三段論法と、彼の時代に於ても今日同様よく知られてゐた現今用いられてゐる論理学は、彼の意味するものの中のどの一つでもあり得ないということは明らかである。もしも恐らく正道を外れてはゐるが、確かに私にとつては全く新しい借物でない議論によつて、私が他の人々に、新しい諸意見を考案し、他人の規則と指図の中に奴隸のように閉ぢ籠る人々によつては殆ど見出されないのではないかと思われるところのこれ等の技術の正しい助けを自分自身の思考の中に求める機会を与えたことになるならば、私としてはそれで満足である。然し私は勇敢に次の如く言うことが出来る、即ちこの時代はあの強い判断の力と広い理解の力を持つ若干の人々に飾られてゐるので、もしも彼等がこの問題に彼等の思考を用いようとするならば、知識の進歩への新しい未発見の道を開くことが出来るであらう。<sup>\* \*</sup>

\* Richard Hooker(1553-1600) —— 英国の神学者、彼の著“*Ecclesiastical Polity*”のはじめの四巻は一五九四年に出版された。

\* \* この節は悟性論巻頭の「読者に贈る書」の中の言葉を思い出させるものである。

八 我々は個物に就いて推理する——私がこの問題を離れる前に、三段論法の規則の中の一つの明らかな間違いに注意することは適當である、それは即ち「如何なる三段論法の推理も、その中に少なくとも一つの一般的命題を含むものでなければ正しくそして断定的ではあり得ない」ということである。こう言えば恰も我々は個々の物に就いては推理をなし知識を持つことが出来ないかの如くである、ところが実はこの問題を正しく考察すると、すべての我々の推理と知識の直接の対象は個物に他ならない。あらゆる人の推理と知識は彼自身の心の中に存在する諸觀念<sup>イデア</sup>にのみ関するのであり、それ等の觀念<sup>イデア</sup>はどの一つを取つても、実は個々の存在である\*。そしてその他の諸物に関する我々の知識と推理は、それ等がこれ等の我々の個々の觀念<sup>イデア</sup>と一致する時にのみあるのである。であるから我々の個々の觀念<sup>イデア</sup>の一致または不一致の知覚が、すべての我々の知識の全部であり極限である。普遍性は我々の知識にとつては偶然に過ぎないのであつて、それはただ、知識の關係している個々の觀念<sup>イデア</sup>が、一つの個物が一致しまた表されるより以上のものである、ということに過ぎない。然し乍ら如何なる二つの觀念<sup>イデア</sup>の一致または不一致の知覚も、従つて我々の知識も、それ等の觀念<sup>イデア</sup>の孰れかが、或いは両方ともが、或いは孰れをとつても一つ以上の實在的な物を表すことが出来ようと出来なかつとうと、同じように明晰にして確實である。〔三

段論法を離れる前に、それに就いてもう一つの事を申出ることを許していただき度い、即ち、我々は正當な根拠によつて、三段論法が現今持つている形式はそれが持つべき合理的な形式であるかどうか、を研究してはいけなからうか。何となれば媒名辞は大名辞と小名辞を結び付けるものであるから、というのはその介在によつて問題になつてゐる二つの觀念<sup>イデア</sup>の一致または不一致を示すものであるから、も

しも媒名辞が両者の中間に置かれたならば、その位置はもつと自然になり、両端の一致または不一致をより明らかにより良く示すのではなからうか。これは次の例に於けるが如くに、命題を置き換えて、媒名辞を最初の命題の賓辞となし、第二の命題の主辞となすことによつて容易くなされ得るであろう。

すべての人は動物である、【小前提・「人」が小名辞、動物が媒名辞】

すべての動物は生きている、【大前提・「生きている」が大名辞】

故にすべての人は生きている。【結論】【教科書では通常、大前提・小前提の順に置かれる。】

\* この主張はバークレー、ヒュームを経てミルに至る英国哲学の伝統的な考え方である。然しこれは心理学的な意味に於てのみ言われ得ることで、概念或いは意味として觀念<sup>イデア</sup>を見るときは普遍的なものが認めらるべきことは勿論である。

\*\* □ 内の部分は第四版に於て附け加えられたものである。

【九 略 First, reason fails us for want of ideas】

【一〇 略 Secondly, because of obscure and imperfect ideas】

【一一 略 Thirdly, for want of intermediate ideas】

【一二 略 Fourthly, because of wrong principles】

【一三 略 Fifthly, because of doubtful terms】

一四 我々の知識の最高の程度は、推理を伴わずして、直覺的である——心の中にある諸觀念<sup>イデア</sup>の中の若干はそれ等自身直接相互に比較され得るような具合に其処に在る、そしてこれ等の觀念<sup>イデア</sup>に於ては心はそれ等が一致し或いは一致しないということを、心がそれ等を持っているということと同様に明らかに、知覚することが出来る。それ故にすでに言つたように、これを私は直覺的知識 intuitive knowledge と呼ぶ、

これはすべての疑いを越えて確實であり、如何なる証明をも必要とせねばまた持つことも出来ない、これは人間に可能なすべての確實性の最も高いものだからである。悟性に提示されるや否や誰でもそれに就いて何等の疑いも持たず、あらゆる人が（所謂単に同意するばかりではなく）真であることを知るようすすべての公理の明証はこれに存するのである。これ等の真理を発見し、またそれに同意するためには、推論の能力は少しも用いられず、推理は少しも必要ではなくして、それ等はより優れたより高級の明証によつて知られるのである。そしてもしも私が未知の事柄を推測しても差支えないならば、かような程度の知識を、天使達は今持つて居り、また正しい人々の完成された精神は、未来の状態に於て、現在では全く我々の了解から逃れているか、或は我々の先見の明なき理性が幾らか微かにちらりと見たので、我々が暗中摸索しているところの無数の物に就いて、これを持つてあろう、と私は考え勝ちである。

一五 その次は推理による論証である——然し乍ら我々はあちこちにこの明らかな光を少しばかり、即ち明らかな知識の幾らかの閃きを持つけれども、我々の諸観念の大部分は、我々がそれ等を直接に比較することによつてその一致または不一致を判別することの出来ないようなものである。そしてこれ等のすべてに於ては我々は推理することを必要とし、論議と推理によつて我々の発見をなさねばならない。

【一六 略 To supply the narrowness of this, we have nothing but judgment upon probable reasoning.】

【一七 略 Intuition, demonstration, judgment.】

【一八 略 Consequences of words, and consequences of ideas.】

【一九 略 Four sorts of arguments. First, ad verecundiam.】



【一〇 略 Secondly, ad ignorantiam.】

【一一 略 Thirdly, ad hominem.】

【一二 略 Fourthly, ad iudicium.】

二三 理性を越えるもの、理性に反するもの、及び理性に従うもの——理性に就いて前に述べたことによつて、我々は、諸々の物に就いて、理性に従うもの、理性を越えるもの、及び理性に反するものへの區別を推測することが出来るであらう。(一) 理性に従うのは次の如き命題である、即ちその真理を、我々は、我々が感覚及び反省から得る諸觀念<sup>イデア</sup>を吟味し追究することによつて、発見することが出来、そして自然の推理によつてそれが真であり或いは蓋然的であることを見出すような命題。(二) 理性を越えるのは、その真理或いは蓋然性を我々が理性によつてこれ等の源泉から引き出すことの出来ないような命題である。(三) 理性に反する<sup>、</sup>のは我々の明晰判明な諸觀念<sup>イデア</sup>と矛盾し或いは調和しないような命題である。かくして一つの神の存在は理性に従い、一つ以上の神の存在は理性に反し、死者の復活は理性を越えている。

二四 理性と信仰は反対ではない——理性<sup>、</sup>という語のいま一つの用法があつて、この用法に於てはそれは信仰と対立せしめられている、これはそれ自身に於て非常に不適当な言い方であるけれども、普通の用法がそれに非常な權威を与えたので、それに反対するのもまたそれを直そうと希むのも愚かなことであらう。ただ次のことを注意するのは間違ひではないであらうと思う、即ちたとえ信仰は理性と対立せしめられていても、信仰は心の確乎たる同意に他ならない、この同意は調整される——それが我々の

義務であるが——ならば、充分な理由に基づくことなしには何物に対しても与えられることは出来ない、それ故に理性に反することは出来ない。何も信ずる理由がないのに信ずる人は、自分自身の空想を愛するであらうけれども、彼の為すべきが如く真理を探究することもせず、また間違いと誤謬に陥らないために彼に与えられた識別力を彼が用いることを希むところの彼を造った神に対して然るべき従順さを示すこともしないのである。このことを自分の力の及ぶ限りなさない人は、時々真理に当ることはあつても、ただ偶然によつて正しくあるのである、そして私は、この偶然的幸運が彼のやり方の正規でないことの申訳となるかどうか、を知らない。次のことは少なくとも確実である、即ち彼は自分の陥る如何なる間違いに対しても責任を負わねばならない、これに対して神によつて与えられた光と能力を用いて、自分の持つてゐる助けと才能によつて真面目に真理を発見しようとする人は、理性的創造物として彼の義務を果たすことによつて、たとえ真理を見逃すことはあつても、その努力の報酬を失うことはないという満足を持つてであらう。何となれば、自分の同意を正しく支配し、与えるべき所にそれを与える人は、たとえ如何なる場合或いは事柄に於ても、理性が彼に指示する所に従つて信じたり、信じなかつたりするのである。このように振舞わない人は、彼自身の光に背いて、より明らかな明証とより大なる蓋然性を探し求めるということより他の如何なる目的のためにも彼に与えられたのではないところの諸々の能力を誤つて用いるのである。然し理性と信仰は或る人々によつて対立せしめられるから、我々は次章に於てはその点でこの両者を考察しよう。

## 第十八章 信仰と理性、及びそれらの別々の領域に就いて

一 それ等の境界を知ることが必要である——我々は何処迄は理性によつて、何処迄は信仰によつて導かれるべきであるか、ということが決定されるまでは、我々は宗教上の問題に於て徒らに論争をなし、お互いに確信せしめようと努めるであらう。

二 対比されるものとしての信仰と理性は何か——私はあらゆる宗派が、理性が彼等を助ける限りは、喜んでそれを用い、そして理性が彼等の期待に添わない場合には、それは信仰の問題であつて、理性を越えている、と叫ぶのを見出す。

それ故に此処では私は、信仰と対比されるものとしての理性を、心がその自然の能力、即ち感覚または反省を用いることによつて得た諸観念イデアによつてなされる推理によつて到達するところの諸々の命題或いは真理の確実性また蓋然性の発見と解釈する。

これに対して信仰は、かように理性の推理によつて作られるのではなく、或る特別な通知の方法によつて神から来るものとして、それを提示する人を信用して或る命題に同意することである。人々に真理を現すこの方法を我々は啓示イデアと呼ぶ。

三 言い伝えられた啓示によつては如何なる新しい單純観念イデアも伝えられない——そこで先ず最初に、神によつて靈感を与えられた如何なる人も、如何なる啓示によつても、他の人々に、彼等が前に感覚または反省から得なかつた如何なる新しい單純観念をも伝えることは出来ない、と私は言う。何となれば

たとえ如何なる印象を彼自身直接神の手から得ようとも、この啓示は、もしそれが新しい單純觀念イデアから成るものであるならば、言葉或いは如何なる他の符号によつても、他の人に伝えることは出来ない。かくして聖パウロが恍惚として第三天国に這入った時、たとえ如何なる事が彼に現され、如何なる新しい觀念イデアを彼の心が其処で受けたとしても、彼が他の人々に対して其の場所に就いて為し得るすべての描写は、其処には「目が見たこともないし、耳が聞いたこともないし、またその表象が人の心に這入ったこともない」ような諸々の物がある、ということだけである。そして神が或る人に対して、超自然的な方法で、例えば木星或いは土星に住んでいる一種の創造物（というのは其処にかようなものが在ることが可能であるということとは誰も否定することが出来ないから）で、六つの感覚を持つてゐるものを現して、その第六感によつてそれ等のものの心に伝えられる諸觀念イデアをその人の心に刻み付けたと仮定するならば、彼が言葉によつて他の人々の心の中にその第六感によつて刻み付けられた諸觀念イデアを生ずることの出来ないのは、我々の中の或る者が、他の四つの感覚は完全に持つてゐるが、第五番目の視覚を常に全く欠いてゐる或る人に、言葉の音によつて如何なる色の觀念イデアをも伝えることが出来ないのと同様である。それ故に、すべての我々の概念と知識の基礎であり唯一の材料である我々の諸々の單純觀念イデアを得るためには、我々は全く我々の理性——というのは我々の自然の諸能力を意味するのであるが——に依らねばならない、そして言い伝えられた啓示からは決してそれ等の單純觀念イデア、或いはその中の何れかを受けることは出来ないのである。

四 言い伝えられた啓示は、理性によつても亦知られる命題を我々に知らしめることが出来るが、理

性が与えるのと同一の確実性は伴わない——第二に、理性によつてそして我々が自然に得る諸觀念によつて我々が見出すことの出来るのと同一の諸々の真理が、啓示によつて発見せられまた伝えられ得る、と私は言う。そこで人々が彼等の能力を自然に用いることによつて彼等自身発見するに到ると同じように、神は啓示によつてユークリッドの中の如何なる命題の真理をも発見することが出来るであろう。この種のすべてのことに於ては啓示は殆ど必要でもなくまた役にも立たない、神が我々に、それ等の事の知識に到達するための自然にしてより確実な手段を与えたからである。何となれば、この啓示は最初神から来たのである、という我々の持つている知識は、我々が我々自身の諸觀念の一致または不一致の明晰判明な知覚から得る知識程決して確実ではあり得ないからである。同様のことが、我々の感覚によつて知ることの出来る事実にも当てはまる、例えば大洪水の物語はその起原を啓示から得ている書き物によつて我々に伝えられている、しかも思うに、如何なる人も自分は、それを見たノアと同様に確実にして明晰な知識を持つていたとは言わないであろうし、或いはまた彼がその時生きていてそれを見たならば、そのような知識を持ったであろうとも言わないであろう。

五 啓示は理性の明晰な明証に反して認められることは出来ない——我々をしてかような啓示を受けることを得しめる我々の諸能力の如何なる明証も、我々の直覺的知識の確実性と等しくはあつても、それを凌駕することは出来ないものであるから、我々は我々の明晰判明な知識の正反対である如何なるものをも、真理として受け取ることとはどうしても出来ない、例えば一つの物体という觀念と一つの場所という觀念は非常に明らかに一致し、心はそれ等の一致の非常に明白な知覚を持つので、我々は、同一の物

第四卷 知識と蓋然性に就いて

体が同時に二つの隔たつた場所にあるということを断定する命題に対しては、たとえそれが神の啓示の權威を主張しようとも、決して同意することは出来ない、何故なれば第一に、それを神に帰することに於て我々は自ら欺かないという明証、第二に、我々はそれを正しく理解するという明証は、同一の物体にとつては同時に二つの場所にあることは不可能である、ということをお我々に認識せしめるところの我々自身の直覺的知識の明証程大であることは決してあり得ないからである。それ故に如何なる命題も、もしもそれが我々の明晰な直覺的知識と矛盾するならば、神の啓示と認められること、或いはすべてかようなものに当然与えらるべき同意を得ること、は出来ない。何故なれば、このことはすべてのあらゆる知識、明証、及び同意の原理と基礎を覆えすことになるであらうから。

七 理性を超えているもの——然し第三に、我々が非常に不完全な概念しか持つて居らず、或は全く概念を持つていない多くの物があり、またその他の物で、その過去、現在、或いは未來の存在に就いて、我々の諸能力を自然に用いることによって、我々が全く何等の知識をも持つことの出来ないような物がある、これ等の物は、我々の自然の諸能力が発見することが出来ず、我々の理性を越えている物であるから、啓示される時には、本来の信仰上の問題である。かくして諸々の天使の一部が神に反逆して、そのために彼等の最初の幸福な状態を失つたということ、「死者が甦つて」\*再び生活するであらうということ、これ等及びこれに似たことは、理性の発見を越えているから、純粹に信仰上の問題であつて理性はこれとは直接何の關係もないのである。

\* 第三版までは“the bodies of men shall rise”としてあつたのを、“Stillingfleetとの論争の後”、“the dead shall rise”と変

えたのである。

〔八〕啓示は、神がそれを与えることを喜んだ場合には、理性の蓋然的な推測に勝るに違いない。しかも尚それが眞実啓示であるかどうかを、またそれを伝える言葉の意義を、判断することはやはり理性に属するのである。

【九 略 Revelation in Matters where Reason cannot judge, or but probably, ought to be hearkened to.】

一〇 信仰の領域はかような所迄到達し、しかもそれは少しも理性を侵しまたは妨げることなく、理性は、すべての知識の永遠の源泉から来る真理の新しい諸発見によつて、害され或いは煩わされることなく、助けられ改善せられるのである。何事も神の啓示したことは確かに真であつて、それに就いては疑いを容れることは出来ない。これが本来の信仰の対象である、然しそれが神の啓示であるかないかは理性がこれを判断しなければならぬ、理性は決して心がより明白でないことを採用するためにより大なる明証を拒否するのを許すことは出来ないし、また心が知識と確実性に反して蓋然性を受け容れるのを認めることも出来ない。如何なる言い伝えられた啓示もその原<sup>もと</sup>が神にあるということに就いては、我々がそれを受け取る言葉に於て、我々がそれを理解する意味に於て、理性の諸原理の証明程明晰で確度な如何なる明証をも持つことは出来ない。それ故に明晰で自明な理性の指示に反し、また矛盾する如何なることも、理性が何の關係するところもない信仰上の問題として、主張せられ或いは承認せられる権利を持たないのである。

一一 もしも信仰と理性の領域をこれ等の境界によつて區別して置かないと、宗教上の問題に於ては、

全く理性を容れる余地がなくなるであろう、そして世界の様々の宗教の中に見出される諸々の法外な意見と儀式は非難するに値しなくなるであろう。何となれば我々は、このように理性と対立して信仰を称揚することに、人類を支配しまた分割する殆どすべての宗教を満たしている馬鹿々々しい事どもを大部分帰することが出来る、と私は思う。というのは人々は、彼等は宗教の事柄に於ては、たとえ明らかに常識とすべての彼等の知識の原理そのものに矛盾していても、理性に相談してはならない、という考えを植ゑ付けられたので、彼等の空想と自然の迷信を恣にした、そしてそれ等によつて宗教に於ける非常に奇妙な意見と法外な習慣に導き入れられたので、思慮ある人は彼等の愚行に対して呆れて佇立し、彼等は偉大にして賢明な神の思召にかなうどころではないと判断する他はない、それで思慮ある人は、真面目で善良な人にとつては彼等は滑稽であり不快であると考えざるを得ないのである。そこで我々を最もよく動物から区別すべきであり、また理性的創造物として我々を最も特別に動物より高めるべきである宗教が、実際上は、人々がその中に於て屢々最も非理性的で、動物に較べてさへも馬鹿げて見えるところのものなのである。Credo quia impossibile est:「不可能なるが故に我信ず」ということは、善良な人に於ては熱心を表す奇抜な警句として通用し得るであろうが、人々が彼等の意見または宗教を選ぶためには非常に良くない規則であることが分るであろう。



## 第十九章 熱狂に就いて

\* 本章は第四版に於て附け加えられたのである。

一 真面目に真理の探究に取りかかろうとする人は、先ず第一に、真理の愛を以て彼の心を準備すべきである。何となれば真理を愛さない人は、それを得るために大した骨折をしないし、またそれを見失つても大して憂慮せぬものである。学界に於ては自ら真理を愛する者であると公言しない人は誰もない、そしてそうでないと思われて気を悪くしないような理性的創造物は一人もない。しかもこれ等すべての事にも拘らず、真理を真理のために愛する人は極めて少数であり、自らそうだと確信している人々の中でも非常に少ない、ということを我々は正當に言うことが出来る。如何にして或る人が自分が本當にかような者であるかどうかを知ることが出来るかは、研究に値する、そして思うにこのことについては次のような一つの間違ひのない印しがある、即ち、如何なる命題をも、それが基づく証明の保証するより以上に大なる確信を以ては、支持しない、ということである。如何なる人もこの同意の標準を越える人は明らかに、真理をそれに対する愛を以て受け容れるのではない、真理を真理のために愛するのではなくして、何か他の附随した目的のために愛するのである。何となれば或る命題が真であるという明証は（自明的なものを除いて）、人がそれに就いて持つところの証明のうちにのみあるのであるから、彼が、その明証の程度を越えてたとえ如何なる程度の同意をその命題に与えようと、すべての余分の確信は何か他の愛によるのであつて、真理の愛によるのではない。

## 【二略 A forwardness to dictate, from whence】

三 この機会に私は勝手乍ら同意の第三の根拠<sup>\*</sup>を考察しよう、それは、若干の人々に於ては、信仰または理性の孰れとも同じ權威を持つて居りまた同様に確信を以て頼り所となされる、私は熱狂、*enthusiasm*のことを意味するのであつて、これは理性を棄てて、理性なしに啓示を立てようとするのである。この事によつてそれは事實上理性と啓示をとみに棄てて、その代りに或る人自身の頭の中の根拠のない諸々の空想を置き換えて、それを思考並びに行爲の基礎と仮定するのである。

\* 他の二つの根拠は理性と啓示である。

四 理性は自然の啓示であつて、それによつて永遠の光の父でありすべての知識の源泉である神は、人類に、彼等の自然の能力の到達する範囲内に彼が置いたところの真理の部分<sup>\*</sup>を、伝えるのである。啓示は、神によつて直接伝えられる新しい一揃の諸発見によつて拡大された自然の理性であつて、理性はそれが真理であるということを、それ等の発見は神から来るのであるという立証と証明を与えることによつて、保証するのである。であるから啓示に道を譲るために理性を棄てる人は、両者の光を消すのである、そして恰も彼が或る人に、眼に見えない星の遠い光を望遠鏡によつてより良く受けるために、その人の眼をつぶすように説き伏せるのと殆ど同じ事をなすのである。

五 直接の啓示は、人々にとつて、彼等の意見を立て彼等の行爲を整えるために、嚴密な推理の退屈で何時でも旨く行くとは限らない仕事よりも、遙かに楽な道であるから、若干の人々が、啓示を受けたと称して、彼等は彼等の行爲と意見に於て天の特別な指導のもとにあると確信する傾きが非常に強く、

殊に彼等が普通の知識の方法と理性の原理によつては説明することの出来ないような行為と意見に於て  
 そうである。そこですべての時代に於いて、憂鬱症が帰依と混じったり、または自惚れのために自分は  
 他の人々に許されているより以上に神と親しく、その恩寵により以上に近づくことを許されているのだ、  
 という考えに迄思い上つてゐる人々が、神と直接に交つていて屢々神靈 Divine Spirit から伝達を受ける  
 のだという確信を以てよく自惚れてゐることがあるのを我々は見るのである。

六 彼等の心がかように用意される時は、如何なる根拠のない意見が強く彼等の空想に定着するよう  
 になつても、それは神の靈からの光明であつて、直ちに神の權威を持つたものである、そして彼等が自  
 分自身のうちにどんなに奇妙な行為に對してそれをなさんとする強い傾向を見出しても、その衝動は天  
 からの呼び声或いは命令であると断定され、従われねばならない、それは上からの委任であつて、それ  
 を執行することに於て彼等は誤ることはあり得ない。

〔七〕私はこれが本来の熱狂であると考え、それは、理性にもまた神の啓示にも基づいて居らず、  
 熱狂した自負心の強い頭脳の自惚から生じてゐるものではあるが、しかも一度それが足場を得る場合に  
 は、理性が啓示の孰れかよりも、或いは両者が一緒になつたよりも更に強力に、人々の確信と行為に對  
 して働くのである、何故なれば人々は彼等自身から受ける衝動には非常に進んで従うからである。

八 一度「人々が」このような直接の啓示、探究を伴わない光明、証明を伴わず調査を伴わない確実  
 性、の方法に陥ると、彼等をそれから抜け出させることは困難な問題である。理性は彼等に於ては失わ  
 れて居り、彼等はそれを越えてゐる、彼等は彼等の悟性の中に注ぎ込まれた光を見るのであつて、間違

うということとはあり得ない、其処ではそれは、明るい太陽の光のように明らかで目に見え、それは現れるのであつて、それ自身の明証以外の如何なる証明をも必要としない、彼等は内から彼等を動かす神の手と、精霊の衝動を感じるのであつて、彼等の感ずることに於て間違ふことはあり得ないのである。

〔九〕これ等の人々はこういう風に言うのである、私は、自分が確信しているが故に、確信している、そして自分の信条は、ただ自分がそれを信ずることが強いが故に、正しいのである。というのは彼等の言うことから見たり感じたりすることの比喩を取り去つてしまえば、ただ上のようなことになる、しかもこれ等の比喩は彼等を非常に欺くので、それは彼等自身に於ける確実性と他の人々に対する論証として彼等に役立つのである。

一〇 然し乍ら彼等が非常に信頼するこの内部の光とこの感情を少しく真面目に吟味しよう、この場合の問題は、神がこの事を私に啓示する者であるということ、この印象は神の聖霊によつて私の心に与えられるということ、そしてそれ故に私はそれに従うべきであるということ、を私は如何にして知るか、ということである。もしも私がこの事を知らなければ、私の持つている確信がたとえ如何に大であろうとも、それは根拠のないものである、たとえ如何なる光明を持つていると私が主張しようとも、それは熱狂に過ぎない。然らば、如何なる根拠によつて彼等はそれが神からの啓示であると推定するかを吟味することは彼等の義務ではないであらうか。さもなければすべての彼等の確信は単なる推定である、そして彼等がかくも眩惑されているこの光は、彼等を絶えず次のように循環せしめる鬼火に他ならないのである、それは啓示である、何故なれば彼等はそれを確信するから、そして彼等はそれを信ずる、何故

なれば、それは啓示であるから。

【一 略 Enthusiasm fails of evidence, that the proposition is from God】

【二 略 Firmness of persuasion, no proof that any proposition is from God】

一三 心の中の光、真の光は何等かの命題の真理の明証以外の何物でもなくまたは何物でもあり得ない、そしてもしもそれが自明的な命題でないならば、心の持つ、或いは持ち得るすべての光は、それが承認せられる根拠となる証明の明晰さと妥当性から生ずるのである。悟性の中の如何なる他の光を語ることも、我々自身を暗黒の中に、或いは魔王の力の中に置くことであり、我々自身得心の上で、迷妄に身を委ね、虚偽を信ずることである。何となればもしも確信の強さが我々を導かねばならぬ光であるならば、私は尋ねるが、如何にして人は悪魔の惑わしと聖霊の靈感とを区別することが出来るであらうか。

一四 それ故にすべてのでたらめな迷妄と誤謬に身を委ねまいとする人は彼の内なる光という指導者を試験して見なければならぬ。神は或る人を預言者となす時その人の人間的形質を取り去りはしない。神は預言者が彼の諸々の靈感が神に起原を有するか否かを判断することが出来るように、すべての彼の能力をその自然の状態のままにして置く。神が心を超自然的な光で照らすとき、神は自然の光を消しはしない。もしも神が我々をして或る命題の真理に同意せしめようとするならば、神はその真理を自然の理性の普通の方法で明示するか、或いはさもなければ、それが、神の權威によつて神が我々をして同意せしめんとする真理であることを知らせて、理性の誤ることのあり得ない若干の印しによつてそれが神からのものであることを我々に確信せしめるのである。理性はあらゆる事に於て我々の最後の裁判者と

指導者でなければならぬ\*。私は、我々は理性に相談して、神によつて啓示された或る命題が、自然の諸原理によつて作り出されるかどうかを吟味せねばならず、もしもそれが出来なければ、その時はそれを拒否してもよい、ということを意味するのではない。然し我々は理性に相談せねばならぬ、そしてそれによつてそれが神からの啓示であるか否かを吟味せねばならぬ、そして理性がそれが神から啓示されたものであることを見出すならば、そのとき理性は、如何なる他の真理に対するのとも同様に、それに対して同意する旨言明して、それを神の教示の一つとなすのである。もしも我々の確信を判断するためのもので、我々の確信の強さより他に何物もないならば、我々の空想を全く熱狂せしめるあらゆる思いつきは靈感として通用するに違ひない。もしも理性が、確信そのものの外にある或る物によつてその真理を吟味してはならないのであるならば、靈感と迷妄、真理と虚偽は同一の標準を持つこととなり、区別されることが不可能になるであらう。

\* ロックは通常経験論者といわれるが、この言葉によつても明らかな通り彼は理性を最後の拠り所としている（このことは悟性論の諸所で見ることが出来る）のであつて、この意味で彼は合理論者であるということが出来る、而してこれは彼の時代の精神でもあつたのである。

〔一五〕かくして、神から啓示を受けた昔の聖人達は、それが神から来たものであるということを証明するために、あの彼等自身の心の中の確信の内なる光より他の或るものを持つていた、のを我々は知る。それ等の確信が神から来たものであるということに対して、彼等は彼等自身の確信にのみ頼るようになされていたのではなく、それ等の啓示の創造者を彼等に確信せしめる外的な印しを持つていたのであ

る。

一六 私は上に言つた事に於て、神は、何等の附随する特別な印しも無しに聖靈の直接の影響と補助によつて、時々確實な諸々の真理を理會するために、人々の心の蒙を啓くことが出来るしまた實際に啓き、或いは彼等を刺戟して良き行為をなさしめる、ということを決して否定するどころではない。然しかような場合に於ても亦、理性と聖書が、それが神からのものであるか否かを知るための間違ふことのない規範である。承認せられた真理が、書かれた神の言葉による啓示に一致する場合、或いは行為が正しい理性或いは聖典の教示に一致する場合は、それを神からのものと認めても我々は何等危険を冒しているのではないと確信してもよい、何故なれば恐らくそれは特別に我々の心に働く直接の神の啓示ではないであらうけれども、しかも我々には、それが神によつて我々に与えられた真理の啓示によつて保証されていることが確かだからである。

## 第二十章 不正の同意、即ち誤謬に就いて

一 誤謬の原因——知識は明らかな確実な真理に就いてのみ得られるのであるから、誤謬は我々の知識の過失ではなく、真でないものに同意を与える我々の判断 *judgment* の間違ひである。

然しもしも同意が事実らしい事に基づいて居り、もしも我々の同意の本来の対象と動機が蓋然性であつて、その蓋然性が前の諸章に於て述べた事であるならば、如何にして人々は蓋然性に対して彼等の同意を与えるようになるのであるか、という問いが起るであろう。何となれば諸々の意見の背馳はいち程ありふれたことはない、或る人は、他の人がただ疑わしいと思うだけであり、またもう一人の人が確乎として信じ断乎として固執することを、全く信じない、ということ程分り易いことはない。その理由は非常にいろいろではあるけれども、何れも次の四つに帰することが出来ると私は思う。(一) 証拠の欠けていること。(二) 証拠を用いる能力の欠けていること。(三) 証拠を用いる意志の欠けていること。(四) 蓋然性の不正な標準。

二 第一に、証拠の欠けていることによつて、私は何処にも現存しない、それ故に何処でも得られないような証拠の欠けていることだけを意味するのではなく、存在して居り、或いは得ることの出来る証拠の欠けていることをも意味するのである。かくして或る命題を証明するに与かつて力のある実験と観察をなす便宜或いは機会を持たず、また同様に他の人々の証言を研究し蒐集する便宜をも持たない人々は証拠を欠いている。労働に一身を捧げ、卑賤な状態の必要の奴隸となり、ただ生活の備えのために生



命を擦りへらしている人類の大部分はこの状態にあるのである。これ等の人々の知識を求め研究をなす機会とは通常彼等の財産と同じように乏しい、そして彼等のすべての時間と労役が彼等自身の腹がゴロゴロ鳴ったり彼等の子供等がわめき叫ぶのを鎮めるために費されるとき、彼等の悟性は極めて僅かしか学ぶところはないのである。一生骨の折れる仕事をしてみじめに働き続ける人が、狭い小路と汚い道路を市場の方へばかり絶えず往つたり来たり駆り立てられる駄馬がその国の地理に精通するより以上に、世界でなされる様々な事物を知るということは期待することが出来ない。であるから人類の大部分は、この世の中の自然の変えることの出来ない事物の状態と人事の構成によつて、不可避免的に、他の人々が抛り所となし諸々の意見を立てるのに必要である諸々の証拠に就いて、どうにもならぬ愚昧に陥らしめられるのである。

【三】（それにも拘らず）如何なる人も、彼の魂に就いて考え、宗教上の問題を知るための余暇を全く持たない程、生活の手段に仕えるためにすっかり手が塞つているということはない。もしも人々がこの事に対してより詰らない事柄に対すると同じ位に熱心であるならば、彼等の知識をこの点で増進するために節用せられる多くの閑暇を見出すことの出来ない程、生活上の必要事の奴隸となる人は無いであらう。

【四略 People hindered from inquiry.】

五 第二に、蓋然性に就いて自分の持つてゐる明証を用いる熟練を欠いている人々、一統きの推論を記憶していることも出来ず、また相反する証拠と証言書のどれが優れているかを精確に秤することも出来

ない人々は、あらゆる事情にそれぞれ然るべき許容を与えることによつて、容易く誤つて蓋然的でない提言に同意することになり得るのである。三段論法を一つしか用いない若干の人々、二つしか用いずそれ以上には進まぬ若干の人々がある、またそれ以上僅か一步だけしか進むことの出来ない人々もある。人々の知力のこの大なる相違は、それが特に思考に適應している肉体の諸器官の何等かの欠陥から生じようと、或いはこの能力が使用しないために鈍くて御し難いことによつていようと、或いは或る人々の考える如くに、人々の精神そのものの自然の相違によろうと、或いはこれ等の或るもの、或いはすべてが一緒になつてゐるのであらうとも、それはここでは吟味すべき問題ではない。ただ次のことだけは明白である、即ち人々の悟性、理會力、及び推理力には非常に大なる範圍にわたつて程度の相違があるので、我々は、人類を傷つけること無しに、この点に於て或る人々と他の人々の間には或る人々と或る動物の間に於けるよりも大なる隔りがある、と断定することが出来る。

六 第三に、証拠を欠いてゐるもう一つの種類の人々がある、証拠が彼等の到達し得ない所にあるがためでなく、彼等が証拠を用いようといひないが、為にそうなる人々である、彼等は充分な富と暇を持つて居り、才能やその他の彼等を助けるものを欠いてはいないけれども、それにもかかわらずその為に少しも利するところがないのである。熱烈な快樂の追求、或いは仕事の絶えざる労役は或る人々の思考を他の所に牽<sup>ひ</sup>きつける、一般的な懶惰<sup>らんだ</sup>と怠慢、或いは書物、勉強、及び瞑想に対する特別な嫌惡は他の人々を全く如何なる真面目な思考からも遠ざける。また或る人々は、公平な研究は、彼等の偏見、生活、及び計画に最も良く適してゐるような意見に賛成しないであらうということを恐れて、吟味もせず、好都

合であり流行していることを彼等が見出すところの事を人の言うが俚に信ずることを以て満足するのである。若干の人々は悪い知らせを齎すであろうと思われる手紙は読まうとしない、また多くの人々は彼等の業務が決して良い状態にないのではないかと心配すべき理由があるときは、彼等の勘定書を決算せずに置き、或いは彼等の財産に就いて考えることさえもしないで置く、ということをや我々は知っている。豊富な財産によつて悟性を進歩せしめるための閑暇を与えられている人々が、どうして怠惰な無智を以て甘んじていることが出来るのか、私には分らない、然し思うに彼等は彼等の精細に就いて下等な考えを持つていたのであつて、すべての彼等の収入を肉体の扶養に費して、知識の手段と助けを得るためには少しも用いない、彼等は何時でも外面上きちんとした立派な様子に見えるということには非常に注意を払つて、粗末な着物やつぎの当つた上衣を着ているのは惨めだと思つてあろうが、しかも彼等の心が、偶然が、或いは彼等の田舎の洋服屋（私は彼等の交つた人々の普通の意見のことを意味する）が、それに着せることを好んだような、粗末なつぎで出来た雑色の服と人から借りた襦袢ぼろを着て人中に立ち現れるのを甘んじて許すのである。

七 第四に、更に誤謬を犯す最後の種類の人々が残つてゐる。彼等は實在的な蓋然性が明らかであつて、明白に彼等の前に置かれてゐる場合でさえも、確信することを許さず、また明白な理由に従うこともせずして彼等の同意を中止 suspend し、<sup>\*</sup> 或いはそれをより蓋然的でない意見に与える。そして次の如き蓋然性の不正な標準を採用した人々はこの危険に曝されている、それは（一）それ自身確實にして明白でなくして疑わしく間違つて居るのに、原理として採用せられた諸々の命題。（二）諸々の一般に承認

せられた仮説。(三) 諸々の優勢な熱情、或いは性向。(四) 權威。である。

\* 所謂、Enoyri (判断中止) である。[25 版では *eneyri* の語も本文に並記されている。]

八 第一に、原理として採用せられた疑わしい命題。

九 子供等が彼等の両親、乳母、或いはその他の周囲の者達から諸々の命題（殊に宗教の問題に関する）を彼等の心の中に受け容れるということは極めてありふれたことである、それは、彼等の偏見もないし用心もしていない悟性の中に這入り込んで徐々に定着すると、終には（真であろうと偽であろうと同様に）決して再び引き出すことが出来ないように、長い間の習慣と教育によつて釘づけしたようになるのである。というのは人々は、彼等が成長した時彼等の諸々の意見を反省して見て、この種の意見が彼等の心の中で記憶そのものと同じ位に古いということを見出す時、それ等が幼少の頃注入せられたこともまた如何なる手段で彼等がそれを得たかということも気づかないので、彼等はそれを神聖なものとして尊敬し勝ちであり、それが流され、触れられ、或いは疑われるのを許さない、彼等はそれを直接神そのものによつて彼等の心の中に掲げられた *wim* \* と *thummin* であると見做し、真理と虚偽の偉大にして誤ることのない決定者であり、すべての種類の論争に於て彼等が訴えるべき裁判者であると考えるのである。

\* 旧約全書出埃及記第二十八章、第三十節に記されている物品。両者とも高僧の胸飾に附けたものというが、如何なる物であつたか不明。前者は肯定、後者は否定を意味するものとして占に用いたものであろうとも言われている。

一一 第二に、一般に承認せられた仮説——これ等の人の次には、悟性が型に入れられていて、丁度

一般に承認せられた仮説の大いさに従つて形成せられている人々がある。博学な教授にとつて、少なからぬ時と燈火を費してギリシャ及びラテンの堅い岩石から作り出されて、四十年間持続して居り、一般の伝統と尊い鬚によつて裏書きされている彼の權威が、忽ちにして或る駈け出しの小説家によつて覆えされるということはたまらないことであり、彼の緋の衣が赤面することではなからうか。彼が、自分が三十年前に自分の学生達に教えたことは皆誤謬と間違ひであつて、彼は彼等に難しい言葉と無智とを非常に高い代償で売つたのだ、ということを告白するようになされ得るということを誰か期待することが出来るであらうか。今も言う通り、如何なる蓋然性がかような場合に説得力を持つに充分であらうか。誰が一体、最も有力な議論によつて、自分がこれ迄の生涯の間ずっと困難な研究を以てそのために労作しつづけて來たすべての自分の古い意見と知識と學問に対する主張を直ちに脱ぎ棄てるように説得されて、赤裸々になつて更めて新しい概念を求めて出掛けて行くであらうか。風が旅人をして彼のマントから離れさせようとしても、旅人はそれを益々しつかりつかまえるだけであつたと同じように、すべての用いられ得る論拠は説得力が無いのである。

一二 第三に、優勢な熱情——人々の慾望及び有力な熱情と喰ひ違ふ蓋然性も同一の運命に出会うのである。貪慾な人の推理の天秤の皿にどんなに大なる蓋然性を掛けても、他方の皿に金錢を掛ければ、どちらの重さが優るかを予知することは容易である。世俗的な心の持主達は、泥の壁のように最も強い砲列に抵抗する、そして恐らく時々明晰な論拠の力が或る印象を与えるではあろうけれども、それにも拘らず彼等は確かりと立つていて、彼等を捕え或いは妨害するであらう敵なる真理を寄せ付けな

い。熱烈な恋に陥っている人に、お前は誑おどろされているのだと言って御覽なさい、彼の恋人の不実であるという証拠を沢山持つて行つて御覽なさい、十中の八、九は彼女の三つの親切な言葉がすべての彼等の証言を無効にするであろう。「我々の願望に適合することは容易く信ぜられる」ということは、思うに、あらゆる人が一度ならず経験したことである。

一五 然しこの事には或る結末がある、そして或る人が有りそうな事と有りそうもない事のすべての根拠を注意深く研究したとき、すべての個々の場合を公平に知るために彼の出来るだけのことをなし、両側に於ける総計を計算したとき、大抵の場合に彼は、全体としてどちら側に蓋然性があるかという知識に到達するであろう。諸々の証拠がその事を著しく蓋然的ならしめるようなものであつて、言葉の誤謬があるのではないかということ疑うべき充分な根拠も、また同じように妥当な証拠が未だ発見されずに他の側に隠れているのではないかということ疑うべき充分な根拠もない場合には、思うに、それ等の証拠を考量した人は、より大なる蓋然性の現れる側に同意を与えることを殆ど拒むことは出来ないであろう。その他のより明らかでない場合に於ては、同意を中止して、恐らくもしも自分の持つている証拠が自分の傾向または興味に適合する意見に好都合であるならば、それ等の証拠に甘んじ、かくしてそれ以上の詮索を止めるのは、各人の権内にあることである、と私は思う。然し或る人が、より小なる蓋然性が彼に示されている方の側に彼の同意を与えるなどということとは、私には、全く実行し難いことであり、同一の事が同時に有りそうでもありまた有りそうでもないと思ふのと同様にな不可能なことである、と思われるのである。

〔一六〕知識が知覚と同様に我々の任意になるものでないように、また同意 *assent* も知識と同様に我々の権内にはないものである、と私は思う。或る二つの觀念の一致が、直接にであらうと或いは理性の助けによつてであらうと、我々の心にとつて明らかであるときは、私がそれを知覚するのを拒むことが出来ず、それを知るのを避けることが出来ないのは、私が自分の目を向けて日光の中で眺める物を見ることを避けることが出来ないのと同様である、そして充分吟味して見て最も有りそうであるのを私が見出す事に対して、私は同意するのを拒むことは出来ない。然し乍ら我々は一致が一度知覚される場合には我々の知識を妨げることは出来ないし、蓋然性がそのすべての標準の然るべき考察によつて明らかに現れる場合に我々の同意を妨げることも出来ないけれども、なお我々は、我々の研究を中止し、如何なる真理の探究にも我々の能力を用いないことによつて、知識をも同意をも妨げることが出来るのである。

一七 第四に、權威——私が注意しようとする第四のそして最後の不正な蓋然性の標準で、その他のすべてを一緒にしたより以上に人々を無智または誤謬に陥れるものは、私が前章に於て述べたところのものである、私は、我々の友達或いは仲間、近所の人々或いは国の一般に承認せられている意見に我々の同意を委ねることを意味するのである。どんなに馬鹿々々しい意見でも人はこの根拠によつて受け容れることが出来る。どんな誤謬もそれを教えた先生のないものを挙げることは出来ない、そして誰にとつても、ついて行くべき他の人々の足跡がある場合には何時でも、もしも彼が正しい道を歩いていると考えるならば、這入つて行くべき邪道がないことはないであらう。

一八 然し乍ら世界中で誤謬と意見に就いて非常にやかましく言われているにも拘らず、私は人類に

対して、次の如く言うだけの公平な取扱いをせねばならない、即ち普通想像されている程、誤謬と不正な意見に陥っている人は多くはない。彼等が真理を会得していると私が考えるというのではなく、實際、彼等が大騒ぎをしている理説に就いて、彼等は全く何の考えも、何の意見も持っていないから私はそう言うのである。何となればもしも或る人が少しばかり問答して見るならば、世界中の大抵の宗派の熱心な信徒の大部分は、彼等がかくも熱中している問答に関して、彼等は何か自分自身の意見を持つていて、ということとその人は見出さないであろう、況んや彼は、彼等がその意見を、論拠の吟味と蓋然性の出現に基づいて立てたと考えるべき理由を持たないであろう。彼等は教育または興味が彼等を引き入れた派に執着することに決心している、そして其処で軍隊の兵卒のように、彼等の指揮者の指導に従つて、何のために闘つてゐるかをかつて吟味することなく、或いは知ることさえなしに、彼等の勇氣と熱情を示すのである。もしも或る人の生活が彼が宗教に対して何等真面目な尊敬を持つていないということを示すならば、如何なる理由のために我々は、彼が彼の教会の意見に就いて頭を悩ませ、このまたはあの説の根拠を吟味するために心を配ると考えるべきであるか。彼にとつては、彼の指導者等に従い、共通の主義を支持するために彼の手と舌を用意して、それによつてその社会に於いて彼に名譽、しやうぶん陸進、或いは保護を与えることの出来る人々に善く思われるようにすれば充分なのである。かくして我々は世界には事実にしくはない或いは間違つた意見が、實際存在しているよりも、より少ししかないのだと言うことは出来ないけれども、それ等の意見に實際に同意し、それを真理と間違える人の数は、人々が想像するよりは少ない、ということは確実である。



## 第二十一章 科学の分類に就いて

一 三つの種類——人間の悟性の範囲内に這入り得るすべての事は第一に、諸々の物のそれ自身に於てあるが俚の性質、それ等の関係、及びそれ等の働き方であるか、或いは第二に、人間自身が理性的な自由意志的行動者として、何等かの目的、殊に幸福を得るために為すべき事であるか、或いは第三に、これ等両者の一方または他方の知識を獲得し伝達するための方法と手段である、であるから科学は次の三種に分つのが適當であろう、と私は思う。

\* 科学という語はここでは広い意味に用いられている。本章で重要なのはこの分類の第三項のみである。

二 第一、フィズイカ (Physics) ——それ自身の本来の存在に於てあるが俚の諸々の物、それ等の構成、性質、及び作用に関する知識、これによつて私は物質と物体のみならず、亦体 bodies を持つていると共に固有の本性、構成、及び作用をも有する霊体 spirits をも意味するのである。これを、その語の少しばかりより広い意味に於て、私はフュズイケー (φυσική)、即ち自然哲学と呼ぶ。この学問の目的は全く思索的な真理である、何かかような真理を人間の心に与えることの出来るものは何でも、たとえそれが神そのものの、天使、霊体、物体、或いは数、及び形状、等の如きそれ等のものの属性の何れかであつても、この部門の中に這入るのである。

三 第二、プラクティカ (Practica) ——プラクティケー (Πρακτική)、即ち良いまた役に立つ物を得るために、我々自身の力と働きとを正しく適用する熟練。この項目の中で最も重要なのは倫理学、ethics

である、これは幸福に導く人間の行為の法則と標準及びそれを実行する手段を捜し出すことである。この学問の目的は単なる思索及び真理の知識ではなく、正義とそれに適する行為である。

四 第三、セメイオウティケー (Σημειωτική) —— 第三の部門はセメイオウティケー、即ち符号の学問と呼ばれる、符号の最も普通のもは言葉であるから、それは充分通常にロギケー (Λογική)、即ち論理学とも名づけられる、その仕事は心が物を理解し、或いはその知識を他の人に伝えるために用いる符号の性質を考察することである。何となれば心が考察する物は何れも、心自身以外には、悟性に浮かんでいないのであるから、心の考察する物の符号或いは像の如き何か他のものが心に思い浮べられることが必要である、そしてこれが觀念である。そして或る人の思想を形成する諸觀念の場面は他の人が直接見えるように表明せられ得ないし、また大して確實な貯蔵所ではない記憶の中より他に何処にも貯えられることは出来ないものであるから、それ故に我々の思考を我々自身用いるがために記録するためにも、また相互に伝達するためにも、我々の觀念の符号も亦必要である。人々が最も便利であることを見出し、それ故に一般に用いる符号は音節のある音である。そこで知識の偉大なる道具としての觀念と言葉の研究は、人間の知識をその全範囲にわたって見わたそうとする人の考察の決して輕視すべからざる部分となすのである。そして恐らく、もしもそれ等を明確に考量し適当に考察するならば、それ等は我々がこれ迄に知っているとは別種の論理と批評とを我々に与えるであらう。

五 これが知識の対象の最初の種類である——私にはこれが、我々の悟性の対象の自然でありまた最初にして最も一般的な分類であるように思われる。何となれば人は思考を次のこと以外の何事に就いて

も用いることは出来ない、即ち真理を発見するための物そのものの考察に就いてか、或いは彼自身の目的を成就するために彼自身の権内にあるもの、即ち彼自身の行動に就いてか、或はこれ等の一方及び他方に於て心が用いる符号及び心のより明晰な知識のためのそれ等の符号の正しい整理に就いてか、である。すべてこれ等の三者、即ちそれ自身に於いて知られ得る物、幸福の手段として我々に依っている行動、及び知識のための符号の正しき使用、はそれぞれ雲泥の差があるから、相互に区別せられる全く別な知的世界の三つの大なる領域である、と私には思われるのである。

底本：『人間悟性論』岩波書店刊：上巻昭和37年6月30日第14刷（第一刷昭和15年1月10日発行）下巻昭和38年1月10日第12刷（第一刷昭和15年3月26日発行）——穂社復刻版より

作成者：石井彰文

作成日：2016.6.2